宗教

○合本第三巻

（自第十三號
至第十八號）

D. S. L. DUPLICATE SOLD

宣言

宗教とは、人をして上帝を知覺せしめ、自ら神意と信ずる處に從ひ、生活の方法を決せしむる處の教訓なり。

此の雜誌宗教は、日本「ユニテリアン」弘道會に於て發行し。其の目的は純正なる宗教の智識を明にし、其の實踐を奬勵し、之れか改良進歩を計るに在り。元來「ユニテリアン」教は、宗教上の一運動にして、其の起原と歴史とに於ては基督教たり。然れとも宗教は、決して表題に掲けたる濶大抱容の名目に負き、一宗一派に偏するものに非らさるなり。

「ユニテリアン」教は、基督教の自由及び進歩的發達にして、吾人は之れをして普及倫理及び普及宗教と、異名同義たらしめんとの希望を有す。故に曰く世界の宗教は、千差萬別各其の形狀を異にすと雖も、均しく是れ圓滿なる一大宗教の一方面に過きされは「ユニテリアン」教徒は、誠實に上帝を尊崇し、宗教的智識と生活とを探究するの徒に向て同情を表し、交友たらん事を企望するものなり。

日本「ユニテリアン」教徒は、上帝の天父なる事、及び人類の同胞なる事を信し。此の雜誌を奉し、以て完全なる至眞と正道との本領を世界に擴張せんとす。

今「ユニテリアン」教の何者たるを一層明瞭にせんが爲め、左に該教徒基本の主義及び普通の信仰を記せん。

ユニテリアン教
基本の主義

一 基礎　ユ教は口碑の教權によらず、合理的大道、科學的眞理を以て基礎となす、

二 方法　ユ教は全く自由討究を以て方法となす、

三 目的　ユ教は個人的及び社會的たる人類の徳性を最も高尚に發達せしむるを以て目的となす、

ユニテリアン教徒
普通の信仰

一 ユ教徒は信ず、宗教は人類の上帝に關係する所以及び人類の義務（上帝の意志とも稱すべき義務）に關係する所以を自然に表明するものなり、

二 ユ教徒は信ず、基督教は其基本の教理に於て上帝を天父となし人類を同胞となすの宗教なり、

三 ユ教徒は信ず、上帝は永遠無窮の權力、智恵、慈悲にして物質界、精神界の源泉、教導及び整理者なり、

四 ユ教徒は信ず、人類は神造力の最も高大なる生産なり、人類は發達すべき智力と精神とを賦與せられ、宗教的及び道德的感情を有し、併せて上帝を知覺し、生命無窮の希望を有す、故に曰く人類は上帝の子なりと、

五 ユ教徒は信ず、舊新約全書は人類幾多の著書を蒐集せるものにして誤謬の存するあるも人類の宗教的性質を表明せる最良の書籍なり、

六 ユ教徒は信ず、基督は精神界の最大なる豫言者なり、宗教上の發達に於て人類を導きたる諸師の最高なるものなり、

七 ユ教徒は信ず、諸宗教は皆優劣の差あるべきも、其本源同一にして、其目的も實際同一なるを以て互に教友なり、

論林

米國ユ教同盟會の代表者を日本に派遣せし主意及び目的

日本派遣米國ユ教同盟會代表者　クレイ、マッコーレイ

米國ユニテリアン同盟會代表者を日本帝國に派遣せられたる主意及び目的は、過日來屢々演說により新聞紙に依りて之れを世に公けにせるを以て今又之れを反復するの必要なきが如しと雖も、今般更らに或る有志者よりの要求ありしに依り、[illegible]茲に之れを略言する事とはなりぬ。

本論に先ち須らく、吾人の奉ずるユニテリアン教は歷史上如何なる變遷を經て、以來如何なる特色を顯して[illegible]に至りしかを解釋する事は、本論の主旨を明かにするに當りて緊要なりと信ずれば左に其大略を述べん。

キリストなるイエスの出生後殆三世紀以來、殆んど一千有餘年間、歐羅巴諸州は全く羅馬教會の爲めに人心を支配せらる、是れ單に教法上の問題のみならず、哲學科學は勿論、政治上の問題に至るも一として羅馬教會の干渉を蒙らざるものはなかりき。若し之れが專制的命令に反對する時は[illegible]の刑罰を以て之れを遇する事あり[illegible]今を去る事大約四百年前、[illegible]の合理的思想の復活に伴ひ、一つ[illegible]を產出せられたり、而して此の[illegible]教會の專斷的教權に反抗し、彼の有名なるマルチン、ルーテルに依て其端を發かれ、其[illegible]羅巴全州に擴まり、終に反正派（プロテスタント）の[illegible]を以て各地に生ぜり。日本に所謂キリスト新教とは即ち是れにして、[illegible]の風潮と共に進み來り、終に[illegible]の神學說、即ち[illegible]を構成せず、而して其教[illegible]

論林

米國ユ教同盟會の代表者を日本に派遣せし主意及ひ目的

日本派遣米國ユ教同盟會代表者
クレイ、マッコーレイ

米國ユニテリアン同盟會代表者を日本帝國に派遣せられたる主意及び目的は、前年來屢々演説により新聞紙に依りて之れを世に公けにせるを以て今又之れを反復するの必要なきか如しと雖も、今般更らに或る有志者よりの要求ありしに依り、重複を厭はす茲に之れを略言する事とはなりぬ、

本論に先ち須らく、吾人の奉するユニテリアン教は歴史上如何なる變遷を追て發生し、以來如何なる新色を以てキリスト教國に一旗幟を飜へすに至りしかを解説するは、大に本論の主旨を明かにするに當りて緊要なりと信すれは左に其大略を述へん、

キリストなるイエスの出生後兩三世紀以來、殆んと一千有餘年間、歐羅巴諸州は全く羅馬（ローマ）教會の爲めに人心を支配せらる、是れ單に教法上の問題のみならす、哲學科學は勿論、政治上の問題に至るも一として羅馬教會の干渉を蒙らざるものはなかりき、萬一之れか專斷的命令に反對する時は理非を論せす容赦なく苛酷の刑罰を以て之れを遇する事あるは通例なりし、然るに今を去る事大約四百年前、歐洲に在りて人類の合理的思想の復活に伴ひ、一つの宗教的新運動を產出せられたり、而して此の運動は專ら羅馬教會の專斷的教權に反抗し、彼の有名なるマルチン、ルーテルに依て其端を發かれ、其餘波は延て歐羅巴全州に蔓り、終に反正派（プロテスタント）の總稱を以て各處に生長せり、日本に所謂キリスト新教とは即ち是れなり、爾來漸々世の風潮と共に進み來り、終に之れが表象なるカルヴヰンの神學説、即ち舊き長老教會の神學説を構成せり、而して其教法上の事

物に關したる説明は全く新舊兩約全書を以て道理の根據とし、之れに依て信仰ヶ條敎會政治等を編成し以て人生行路の標準となせり、

斯くの如く人心に一旦、文明合理の新空氣を注入するや、哲學科學の新説續々として世に現れ、學理の應用に依て發明に發明を重ね以て益々日進の幸運を補益せられ、隨て宗敎界の新思想も漸々其脈搏を進め來り、彼のプロテスタント即ち反正の精神に則り、彼の日新なる哲學科學の開導に依り、自由合理の新思想を以て更らに宗敎界に新運動を始めたり、是れ實に第十七世紀に起り第十八世紀に逮んて公然之れを社會に發表するに至りしなり、

キリスト敎國に在て斯くの如く、自然に歴然たる三大敎派を産生せり、則ち三大敎派とは、第一、羅馬（ローマ）及び希臘加抵力（グリーキカトリック）即ち舊敎派にして、其宗敎的信仰及び生活の標準は全く敎會及び之れに附帶せる敎法師の會議に在り、換言せは敎法上の權威は全く羅馬法王（ポープ）の意中に在りて何人も其命を是非するを許さゝるものなり、第二、反正派（プロテスタント）又一に新敎諸派と云ふ、其の信仰の標準及び敎權上の制裁は、全く之れを聖典（バイブル）と稱ふる書冊の上に置き、以て社會の宗敎的行爲を支配するものなり、第三、自由派又合理派と稱ふるものにして、宗敎的信仰及び生活の標準とする處は、專ら人界の道理を以てし、譬ひ敎會又は法王の命令或は聖典の口碑、明文たりとも、一箇人各自の道理心に訴へ、萬一其中に適當の理由を見ざる時は之を放擲して顧みざるものなり、

勿論舊敎會は敎會に敎權を與へ、其命令的敎訓を以て信仰及び生活の標準となし、或は新敎會の聖典を以て完全無缺の眞法と定め、以て宗敎的信仰と生活との基礎となすも、其初めは之れを道理に訴へ其然るへき理由を見し上に於て確定したるものなりと雖も、過去の歴史に徵して之れを見るも亦、敎會の命令、聖典の戒法も往々無道暗愚に陷り、時と場合とに依て之れを充分取捨するに非れば、其專制的命令を以て、其幼稚の戒法を以て、今日成長せる自由思想に適應し、發達せる人生に實行し難き處少からざるなり、故に必要の上

に於て茲に復古教、即ち人界の道理心を以て之れを準據とせる、合理派の出つるの止むを得ざるに至れるなり、

是れ等三者は斯く其色彩を異にせりと雖も、亦等しくキリスト教と稱する一大宗教的運動にして、共にキリスト教の本質實躰たる正義、純華、潔白、なる人生を此の世界に産生せん事を計畫するものなれば、只だ此の三様の區別あるは此の大目的を達せんとするに當て使用する方法の差異あるものにして、宗教的本躰に斯く差異あるにあらさるなり、故に吾人は常に此れ等の三者を區別し、又之れ等三者を比較するに當りて、甲者は乙者より多數の人心を支配せるか故に甲者を以て秀逸なりとせす、隨て乙者は丙者より人物少く出つるを以て丙者は乙者に超絶せりと論するを欲せさるなり、單に甲乙丙の方法は其の何れを使用せは誤謬に陷り易くして、其の何れを撰へは誤謬を免かれ、至眞を得るに易きやを、彼の道理心に訴へ其判斷を促かすに過きさるなり、

上文已に略説せし如くユニテリアン教は哲學、科學の自由なる思想、即ち道理心を以て標準とし、以て宗教的信仰及ひ生活を開導奬勵するに在り、是れユニテリアン教の特色にして業に已に日本人心に滿足を與へ、隔意なく歡迎せられたる所以なり、

扨て、本論に溯て、米國ユニテリアン同盟會は如何なる主意、如何なる目的を以て此帝國に其代表者を派遣せられたるかを開陳せんに、今日より六七年前、或る日本高貴の紳士（讀者にして已に其の何人たるを知れる仁もあらん）達が米國ユニテリアン同盟會に勸告して曰く「卿等何故に我が日本帝國に其代表者を送り、我が國民の當時解譯に迷ふ所の宗教問題の解譯を助けざる、余輩は切りに之れを望む云々」と、此の懇切なる勸告は、米國ユニテリアン教徒の心中を刺戟する少々に非ずして、終に去る明治廿年十二月初めて此の帝國に一代表者を派遣するに至りたり、茲に於て余は讀者に向て特に注意を乞はんとするは他なし、ユニテリアン教徒は決して他のキリスト教徒の如く、自己の教會

物に關したる説明は全く新舊兩約全書を以て道理の根據とし、之れに依て信仰ヶ條敎會政治等を編成し以て人生行路の標準となせり、

斯くの如く人心に一旦、文明合理の新空氣を注入するや、哲學科學の新説續々として世に現れ、學理の應用に依て發明に發明を重ね以て益々日進の幸運を補益せられ、隨て宗敎界の新思想も漸々其脈搏を進め來り、彼のプロテスタント即ち反正の精神に則り、彼の日新なる哲學科學の開導に依り、自由合理の新思想を以て更らに宗敎界に新運動を始めたり、是れ實に第十七世紀に起り第十八世紀に逮んで公然之れを社會に發表するに至りしなり、

キリスト敎國に在て斯くの如く、自然に歴然たる三大敎派を産生せり、則ち三大敎派とは、第一、羅馬(ローマ)及び希臘加抵力(グリーキカトリック)即ち舊敎派にして、其宗敎的信仰及び生活の標準は全く敎會及び之れに附帶せる敎法師の會議に在り、換言せば敎法上の權威は全く羅馬法王(ポープ)の意中に在りて何人も其命を是非するを許さゝるものなり、第二、反正派(プロテスタント)又一に新敎諸派と云ふ、其の信仰の標準及び敎權上の制裁は、全く之れを聖典(バイブル)と稱ふる書冊の上に置き、以て社會の宗敎的行爲を支配するものなり、第三、自由派又合理派と稱ふるものにして、宗敎的信仰及び生活の標準とする處は、專ら人界の道理を以てし、譬ひ敎會又は法王の命令或は聖典の口碑、明文たりとも、一箇人各自の道理心に訴へ、萬一其中に適當の理由を見ざる時は之を放擲して顧みざるものなり、

勿論舊敎會は敎會に敎權を與へ、其命令的敎訓を以て信仰及び生活の標準となし、或は新敎會の聖典を以て完全無缺の眞法と定め、以て宗敎的信仰と生活との基礎となすも、其初めは之れを道理に訴へ其然るへき理由を見し上に於て確定したるものなりと雖も、過去の歴史に徵して之れを見るも亦、敎會の命令、聖典の戒法も往々無道暗愚に陷り、時と場合とに依て之れを充分取捨するに非れば、其專制的命令を以て、其幼稚の戒法を以て、今日成長せる自由思想に適應し、發達せる人生に實行し難き處少からざるなり、故に必要の上

に於て玆に復古敎、即ち人界の道理心を以て之れを準據とせる、合理派の出つるの止むを得ざるに至れるなり、

是れ等三者は斯く其色彩を異にせりと雖も、亦等しくキリスト敎と稱する一大宗敎的運動にして、共にキリスト敎の本質實躰たる正義、純華、潔白、なる人生を此の世界に產生せん事を計畫するものなれば、只だ此の三樣の區別あるは此の大目的を達せんとするに當て使用する方法の差異あるものにして、宗敎的本躰に斯く差異あるにあらさるなり、故に吾人は常に此れ等の三者を區別し、又之れ等三者を比較するに當りて、甲者は乙者より多數の人心を支配せるか故に甲者を以て秀逸なりとせす、隨て乙者は丙者より人物少く出つるを以て丙者は乙者に超絕せりと論するを欲せさるなり、單に甲乙丙の方法は其の何れを使用せは誤謬に陷り易くして、其の何れを撰へは誤謬を免かれ、至眞を得るに易きやを、彼の道理心に訴へ其判斷を促かすに過ぎさるなり、

上文已に略說せし如くユニテリアン敎は哲學、科學の自由なる思想、即ち道理心を以て標準とし、以て宗敎的信仰及ひ生活を開導奬勵するに在り、是れユニテリアン敎の特色にして業に已に日本人心に滿足を與へ、隔意なく歡迎せられたる所以なり、

扨て、本論に溯て、米國ユニテリアン同盟會は如何なる主意、如何なる目的を以て此帝國に其代表者を派遣せられたるかを開陳せんに、今日より六七年前、或る日本高貴の紳士（讀者にして已に其の何人たるを知れる仁もあらん）達が米國ユニテリアン同盟會に勸告して曰く「卿等何故に我が日本帝國に其代表者を送り、我が國民の當時解譯に迷ふ所の宗敎問題の解譯を助けざる、余輩は切りに之れを望む云々」と、此の懇切なる勸告は、米國ユニテリアン敎徒の心中を刺戟する少々に非ずして、終に去る明治廿年十二月初めて此の帝國に一代表者を派遣するに至りたり、玆に於て余は讀者に向て特に注意を乞はんとするは他なし、ユニテリアン敎徒は決して他のキリスト敎徒の如く、自己の敎會

以外の人々を以て之れを魔道を行する者とし、或は滅亡の弟子とし、諸君を以て地獄の亡者と見做し、キリストの十字架を以て諸君を消へざる地獄の烈火より救ひ出さんが爲めに來りしに非ずして吾人ユニテリアン敎徒は、人類即ち神の子女の在る處に大慈大悲の天父在りて何處にも其子女を開導するの方法を設けざるはなしと信ずるを以て、何處に至るも嫉妬の心を以て他敎を見る事なく、從來此の國に存在せる美風、宗敎的觀念及び生活を罵詈し破壞するが爲めに來りしに非すして、同感の情を以て諸君と協同し、共に社會の害毒、惡事、醜行を攻撃し、驅逐するに在るものなれは、隨て一宗派を代表し來り西洋出來合せの敎會を日本に再興せんとするに非れは、吾人は日本に敎法を輸入し來れりと云はんより、寧ろ宗敎的眞理を發見し之れを應用する處の一方法、即ち自由なる合理的討究法を輸入し來り、日本人をして將來此の方法に依り新たなる合理的日本宗敎を發生せしめ、以て將來日本帝國の安寧幸福を增進せしめんとするに在るものなり、

吾人は此の方法を輸入すると同時に此の自由なる討究法に依り得たる處の結果を陳述し、以て帝國人士の參考に供ふべし、さりとて取捨は全く諸君の道理心の指定に一任するものにして、若し之れか右に出つるの訓戒あらは吾人は謹で之れを學び之れを迎ふるに躊躇せさるなり、勿論ユニテリアン敎徒は各人多少神學上の議論を異にせるものありと雖も、之れと同時に神、キリスト、義務、運命、等宗敎的大綱に關しては、普通一般の信仰を有するものなり併し乍ら是れ決して普通キリスト敎會に有する信文の如く疑ふへからさる論すべからざる固定不變のものに非ざるや知るべし、只吾人が力の及ぶ限り其要を取り萃を摘みしものにしあれは、何時にても之れに勝るの信仰ありて吾人の道理心は許し以て眞理なりとする時は、感情を以て眞理を擁塞し之れを容るゝを防むものに非さるなり、故に吾人は諸君と共に此の信仰を修正し、或は開發するに協力せん事を務むべし、茲を以て之れを見れは余輩の此の國に來るは敎師たると同時に又生徒たるものなれは、

余は切りに諸君か從來の敎旨に就き敎導するあらん事を企望して止まさるなり、

上文聊か余輩の管見を吐露し、以て諸賢の明斷を仰きたりと雖も、萬一余輩の目的は單に智識上の事物にのみ止らは、恐くは九仭の功を一簣に空ふするに至るや必然なり、何となれは余輩の最大重要なる目的は日本帝國の人民をして單に智識上に止る事なく、高潔なる宗敎的生活を遂けしめんとするに在る者なれは、今若し此の形態ある世間に在て余輩の目的を只だ此の無形なる智識上、即ち思想の上にのみ止め置く時は、何の効もなくして朽ち果つべし、余輩の絶叫し以て宗敎的智識の開發を催かす所以のものは、之れに依て正統なる國民の感情を誘起し、此の感情をして終に國家を裨益する處の、高潔なる國民の生活を産出せしめんとするに在り、高潔なる品性は吾人の最終目的にして、是れ即ち宗敎の必要ある所以なり、

故に余輩の日本帝國に派遣せられたる主意は、將來日本人をして此の國固有の道に依り、眞正なる宗敎的生涯を完うせしめ、眞實、温厚、純粹、潔白にして義氣ある國民たらしめん事を企望するに外ならさるなり、

世に唯物宗ありや

井上圓了

從來宗敎といへば必ず靈魂の不滅を唱へ未來の賞罰未來の苦樂を說けるものにて其說たるやあらゆる宗旨の目的を同うする所なり、然るに世間には唯物主義を唱ふるものありて靈魂は肉躰と同生同滅のものにして肉躰を離れて別に靈魂なく肉躰の死する時は靈魂の消滅する時にして靈魂の消滅する時は即ち肉躰の死する時なり死後靈魂の止まりて地獄極樂の境界に彷徨する等のことある理なしと主張す、此說頗る淺薄にして純然たる學術的唯物論といふほどのものにもあらず且つ宗敎として現はれたるものにもあらざれど世間竊に此主義を信ずるもの少からざれば今假りに之を唯物宗と稱ふるも亦謂れなきに非るへし、然るに元來宗旨なるものは心を根本として立てたるものなれば徹頭徹尾靈魂

の不滅、未來の禍福は之を主張せざるべからず、然らば唯物宗は果して宗旨として成りたつこと能はざるか將た又強ち能はざるにもあらざるか其事たる學者の考究を要する所ならむ

今日宗敎の定義を普通に唱ふる所によるに無限絶對の本躰を根據として之れに歸向し或は依憑して以て安心立命を營むものとなすも若し其意味を一層廣く説き來りて苟も人の心に信する所ありて之れによりて安心立命することを得るものは皆宗敎なりと定むるときは唯物論も亦一種の宗敎とならざるべからず、然るに古來其説は學術上の一論として存して未た宗敎となりて世に現ぜざるは如何なる理由あるに由るや又古來唯物宗を立てんと試みたるものなきにあらざるも實際社會に勢力を占むること能はざりしは亦必ず道理の存することとならん

予は論理上唯物論の薄弱にして宗旨を開立するに足らざるを信ずるものなれども凡て事物は反對の刺戟によりて活動し進歩するものなれば幸に此の宗旨の起りたらむには久しく大平世界に長夜の夢をなせる宗敎家及び信徒の爲め一服の刺戟劑となりて却て奮起勇進の結果を見るを得べく又之れによりて從來世間に唱ふる淺薄なる唯物論を打破して更に高尚なる唯物論に接し得べく從て唯心論勃興して眞正なる宗敎をも見るに至るべければ此一種異風の宗旨の起らむ事は却て宗敎進歩の爲めに望むべきことなり

斯く論する時は人必ず予を評して好みて宗敎の敵を誘起するものなりと云はん予決して之を好むにあらずと雖も今日社會の人にして中等以上に位するものは大抵唯物主義を信ずるものにして中等以上の學識あるものに至りては倘更唯物論者なり其論者未だ敎會を組織し宗敎を開立するに至らざるも早晩其論の從來の宗敎に反對して戰旗を論塲に揚ぐる日あるは疑ふべからす然るときは宗敎家は如何して此敵に當らんや故に宗敎家は今より唯物宗の世に起りたるものと豫定して之に對する防禦策を講ぜざるべからず予案ずるに此敵は佛敎も耶蘇敎も共同して防禦せざるを得ざるものならん何

者靈魂不滅未來賞罰は兩教の共同して唱導する所なればなり然るに今日の宗教家か此大敵の世上に隱見して存するを知らず泰然として自ら安んずるは予か解すること能はざる所なり若し此點に注目して早く防禦の策を講せんと欲せば哲學上唯心哲學を講究せざるべからず世の宗教家たるもの其何宗何教たるを問はず宜く今より哲學の專攻に從事すべし

日本諸宗教の中和者たるべき者は其唯ゆにてりあん教なる歟

洪　榮　三

我帝國の四隅に割據し各門戶を建て牆屛を高うし內には羆貅百萬其爪牙を鋭き其軍備を整へ外には猛將勇士を派し隙の乘すべきあらば進んで敵の中堅を衝き一擧の下に大功を收めんとするものを何とかなす曰く基督教曰く佛教曰く神道曰く儒教是なり而して此四者は氷炭相容れず水火相投せざるの主義を有し決して調合和熟する事なかるべし然とも今便宜的に之を區別し基督教を以て外教若しくは西教となし佛教、神道、儒教を以て內教若しくは東教となし此東西兩教が維新以來日本帝國に反目聳肩しつゝある有樣を觀察するに實に寒心すべきものありて存ず東教徒は曰く外教は綠眼兒の宗教なり彼れ名を布教に藉りて人心を收め漸浸以て我國を略取せんとす印度の慘狀以て殷鑑となすに足れり曰く彼れ外教は倫常の敎なく君臣の義なく父子の親なく單に無形の上帝を奉じて無上の天父となし唯一の尊者となす此敎にして我帝國に流布せば亂臣賊子踵を接して起り不忠不孝の徒足を尋ねて來らん曰く彼れ基督教徒は祖先を侮蔑し嘗て禮拜供奉の典なく祖考追懷の儀なし然とも今日ある所以のものは實に祖考の致す所にあらずして何ぞや基督教の邪教たる所以實に此に存ず西洋人の人面獸心なる所以も亦た此に存ずと是に於て西教徒も亦た徐々に說をなして曰く明治現今の文明は十八世紀の文明にあらずや汝の斬髮、汝のフロック、コート、汝の頭腦、汝の政府、汝の憲法は其源流を何の地に汲みたる歟釋迦の生地なる印度に取りたる歟將

た孔子の祭地なる支那に取りたる歟否々十八世紀の文明は東洋人の文明にあらざるなり崇古人種の生産にあらざるなり十八世紀の文明は實に西洋人の文明なり、ありあん人種の製出なり、基督教徒の文明なり、汝知らずや基督教を信ずるの能力なき者は近世の文明を消化するの力なき者なり否汝自身の政府と憲法とを取りて貴むに足らずとなすものなり豈又た奇ならずや曰く汝保守の徒は人類と人類との間に存せる會社的秩序をのみ尊重して人類と上帝との間に存立せる關係を知らざるものなり汝等は封建時代の道德に感染し一身を以て傭主に奉ずる奴隷的根性をのみ尊重し上帝の前には萬民同等なる精靈的權利の存するあるを知らざるなり曰く汝の祖先崇拜は何の爲めなるぞ祖先の靈は皆陰府にありて審判の來るを待ち骸骨は腐ちて泥土となり知る所なきに非ずや汝の祈るは何の爲めなる歟汝を主宰して汝に禍福を與ふるの大能力あるものは唯一の上帝を外にして何人か之を能くする救主基督によりて上帝に請へ神見て以て正となさば之を賞し見て以て不正となさば之を罰せんのみと兩教徒の舌鋒遠く標的を脱し互に罵詈譏謗を極め甚しきは腕力に訴へ會堂に瓦石を投じ祈禱を妨け說教を害するもの連年多きを加ふ（今日に於て腕力に訴ふるものは東教徒常に攻擊者の位置に立ち西教徒防禦者の位置にあり故に非は之を東教徒に歸せざるを得ず）るもの、如し此の如くして巳まずんば兄弟終に牆に鬩ぎ外其侮りを防ぐ能はざるに至らん今に於て中和者の出づるありて儒教と佛教と相和合せし如く神道と佛教との相包合せし如く日本の四大教をして調整和同せしむるにあらずんば遂に東洋孤立の日本帝國を如何んせん三千年來皇統連綿たる大和民族の住所を如何せん而して此調整和同の大任に當るものはゆにてりあん教にあらずして何ぞ

夫れ天下の宗教各其形躰を異にし千差萬別なりと雖ども其原理と實用の點に於て決して異なる所あるなし何れの宗教か其原理に於て神人の關係を說かざらん何れの宗教か其實用の點に於て安心立命を教へざらん然り何れの宗教も以上二者の要素あらざるはなし然れ共神人の關係に至りては學理上之を正となす者其半に居り

不條理となす者亦た其半に居り未だ確然たる明解を與へ得ざるもの丶如し故に今日に於て宗教の是非善惡を决するは先づ實用の點に於てせざるべからず今此標準によりて日本在來の諸宗教特に基督教、佛教、神道、儒教、を判するに未だ其間だに甲乙あるを見ざるなり基督教の天國……佛教の極樂……儒教の聖域……神道の高天が原……悉く信者をして躰慾を捨て精神上の快樂を與ふるものたらざるはなく靈的永遠的快樂を與へ俗的私慾的快樂を賤しむるものたらざるはなし今之を世間蕩々たる物質主義俗界論者の私利を張り私慾を逞うする者に比せば彼我雲泥の差あるを發見すべし其然り然らば則ち今此四者をして其奉ずる所の主義により互に爪牙を磨き干戈を交へ無罪の信者をして大に心膽を勞し却つて安心立命の地を失はしむるに至りては余輩未だ其善なるを見ざるなり而して四者をして各其信ずる處に安んじ他人の信仰上に容喙する勿らしむるものは實に四者をして基督教の一派たるゆにてりあん教の主義を聞かしむるより善きはなしゆにてりあん教徒は曰く

ゆにてりあん教は基督教の自由及び進歩的發達にして普及倫理及び普及宗教と異名同義たらしめんとの希望を有す故に曰く世界の宗教は千差萬別各其形狀を異にすと雖ども均しく是れ圓滿なる一大宗教の一面に過ぎざるなりさればゆにてりあん教徒は誠實に上帝を尊崇し宗教的智識と生活とを探求するの徒に向て同情を表し交友たらん事を希望する者なり云々

又曰く

諸宗教は皆優劣の差あるべきも其本源同一にして其目的も同一なるを以て互に教友なりと

日本の四教徒をして虛心平氣ゆにてりあん教徒の說く所を聞かしめよ其寛容の德に於て其鋭利の論鋒に於て大に自他を益するものあるを發見すべし嗚呼宗教家の務むべきは宗教家の攻擊にある歟其以て敵となすべき所のものは自家の圈內に住する同盟人にある歟是れ右手を以て左手を擊つの類なり是れ所謂唇亡びて歯寒きの實をなし他の三教が其命脉を落すの時は全勝を制し

たる一教も亦た其運命を終るの時なり是れ日本帝國をして聖バーソロミウに於ける殺戮の野となさしむる所のものなり是れ日本の宗教信者をしてスペインに於ける宗教尋問の不幸を蒙むらしむるの段階に入らしむるものなり日本の四教徒よ天下の宗教は悉く圓滿なる一大宗教の一面なるを記臆せよ宗教の本源と目的とは實際同一にして互に教友なるを記臆せよ余は他日を期して宗教家の敵とすべきは宗教家にあらずして物質論者なるを論ぜんとす

教育家何ぞ宗教に冷淡なる。《其一》

戸城傳七郎

孔孟儒教の教權一たび其の勢力を失してより以來、本邦社會的道德の制裁は、其の嚴正復た昔日の如くなる能はず、人智日に益々譎詐に赴き、敦厚純樸の風漸く將に澌盡し去らんとす、孔子の謂はゆる兎れて而して恥なき者、陷々なる天下皆是なり。是の時に方り、吾人の賴て以て重きを爲す所の者は唯り教育と宗教とあるのみ。此の二者は道德社會の二大機關とも云ふべきものなれば。常に相依り相助けて以て風教維持の主動者たらざるべからざるは言を待たずして明かなり。然るに、現今の狀態にては、教育と宗教とは、互に相容れざるのみならず、動もすれば猜疑の眼を以て二者相疾視するの觀さへなきに非ず。殊に教育家の宗教を視る宛ら越人の秦人の肥瘠に於けるが如く、始より痛痒相知らざるが如きの狀あるは、事體甚だ奇なりと謂ふべし。蓋し現今小中學校の教員にして、宗教を信する者若くは未だ之を信ぜざるも世に宗教の必要あるを知れる者は、千百中什一を望むも得べからず、或は偶々宗教を信ずる者若くは其の必要を知れる者なきに非ざるも、能く自ら其の所感を公言し、少なくも宗教の感化を利用して道義恢復の一助たらしめんと企圖する者の如きは、寔に絕無匿有の有樣と云ふも誣言に非ざるなり。抑々人物養成の當局者たる教員其人にして、道德社會の一大機關たる宗教を視ること此の如く冷淡なるは、是れ豈事體の甚だ奇なるものに非ずや。余輩は薄

弱ながらも一個の信仰を有する者なり、又充分世に宗敎の必要なることを感じ居る者なり、是を以て、一たび敎育の得失に就きて念ふことある每に、先づ伴生するものは宗敎上の思想なりとす、而して二者の關係に就きて討究する所ある每に、未だ曾て此の奇異なる事體の原因如何に就きて熟考せずんばあらず。然れども、斯は未だ必ずしも深き原因ありて而して然るものには非ざるなり、

世人動もすれば則ち曰はく我が日本人は宗敎に冷淡なりと、又曰はく宗敎は無智矇昧の下等賤民には未だ全く其の用なきに非ざるも、中人以上の社會に至りては絕て其の用なきものなりと。是等の言たる、多くは世に謂はゆる無宗敎家を以て自ら稱する人々の口より出づる、冷評的套語とも云ふべきものなれども、而も現今の狀態は、實際其の言の如く、我が邦人の概して宗敎に冷淡なるは蔽ふべからざるの事實なり。又表面上の觀察を以てすれば、中人以上の社會には、謂はゆる儒敎主義の道德猶其の形式を存する者あるを以て、未だ甚だ宗敎的感化の必要を感ぜざるが如きの狀態なきに非ざるなり。是を以て、我が社會は概して宗敎を無用なりとし、從て又宗敎信者を輕しめ慢るの傾きあるは、已むを得ざる次第と謂ふべし。夫れ然り、此の如く宗敎及び其の信者の世に擯斥せらるゝ時代に在りては、眞かれ歹かれ社會の潮流に追隨し、唯後れんことを之れ恐るゝ人情の常として、自ら進んで宗敎に歸依するは、頗る難事たるに疑ひなし、獨り何ぞ敎育者をのみ怪しむに足らんや。

且又敎育社會に在りては、宗敎を忌避すること今日殆ど其の極に達したり。敎育には宗敎の臭味を帶ばしむべからずとは、蓋し現今敎育社會の輿論とも云ふべき有樣ならん。而して今何故に然るかを反問するに、宗敎には往々妄誕無稽の空想を説く者少からず、假令然らざるも、信仰は人々の自由に任すべきものなれば、未だ思慮分別の定らざる、嚴しく之を言へば推理思想の尚甚だ薄弱なる、兒童に宗敎的感化を與ふるは、一には其の確實なる思想の發達を妨げ、一には或一種の宗派

に就きて信仰を强ゆるの恐れなきに非ず、是の故に普通教育上には宗教を容る可からずと云ふ。

斯は必ずしも其の理由なきに非ざれば、余輩も亦强ちに如是の懸念を無用なりとは云はざるなり。然りと雖も、方今の狀况を察するに、我か教育社會に在りては、今や單に宗教を以て兒童教養上に有害なりとするのみならず、苟も直接に兒童教養の任に當る者は、大人と雖も亦宗教を信ず可からずと云ふものゝ如く、語を換へて之を云へば、學校教育上に關する宗教忌避說の勢力は、今や一層其の範圍を擴張して、遂に教員其人の一身に關する信教の自由をも、陰に壓伏し去らんとするの傾きあるは、少しく教育社會の狀况に通曉せる人々の夙に熟知せる所ならん。近く數十日前に發起せる熊本事件の如きは、事一地方に係り、其の關連する所僅々數人に止まるが如しと雖も、其の實は、教育社會全般に勢力ある、宗教忌避說に基ゐせる一事實たるは、余輩の猶豫なく斷言する所なり。世人の鋒を連ねて某縣知事の所置を是非する必しも理なきに非ずと雖も、余を以て之を觀れば、寧ろ直に其の中堅を衝くの勝れるに如かざるなり。何は兎もあれ、教育社會の狀况已に此の如くなる以上は、今日教員たる者にして宗教に歸依するは、よし之が爲め其の身を危うするまでに至らずとするも、目前利害の計算上既に得策に非ざるを知るべきなり。

是に由りて之を觀れば、我が社會の概して宗教を無用なりとし、動もすれば其の信者を擯斥せんとする社會一般の不信仰と、苟も一種の信仰を有する者は、教員たることを得ざるが如き、教育社會の輿論たる宗教忌避說の勢力とは、實に現今數萬の小中學校教員をして、宗教に冷談なる我が大和民族中にも、一層甚だしき宗教忌避者たるが如き狀貌を具へしめたる主要の原因なりと謂ふべし。勿論其他にも種々の緣由あるべしと雖も、以上二ッの者は、其の最も直接にして且最も有力のものたること、余輩の斷じて疑はざる所なり。讀者請ふ今の教員の宗教上の利害得失に就いて如何に冷談なるかを視よ。彼等は常に道德教育の進歩成効を圖るに

汲々として、或は學理上より、或は實驗上より、討論審議至らざる所なく、試みに敎育上の新聞雜誌を一閲すれば、毎號必ず道德敎育に關する論説の一編若くは數編に出會せざるはなし、其の職務に熱心なる、其の斯道恢復に鋭意なる、實に余輩の感嘆措く能はざる所なりと雖も、而も彼等は、其の熱心鋭意の一分を割き、討論審議の若干を分ちて、能く之を宗敎上の詮索に盡さんとするの意は、未だ毫末も有らざるなり。彼等は常に學校敎育と家庭敎育との一致并行せざるべからざるを唱道せり、而して不幸にも其の父兄の無智無學なるによりて、容易に其の希望の達し得べからざるを痛嘆して措かざるなり、然れども、此の無學なる父兄の腦裏に於て、如何に怜悧なる宗敎思想と如何に頑固なる信仰との磅礴せる者ありて、如何に其の子弟を感化しつゝあるかは、彼等一も之を問はざるなり。彼等の周圍には、巍然として佛敎殿堂の聳立せるあり、又場所によりては基督敎會の設置せられたるありて、日夕旁近の子女を會し敎化に從事すと雖も、是等外圍の事情の如何に學校事業に影響しつゝあるかは、彼等又一も之を問はざるなり。彼等は兒童をして宇宙の森羅萬象を觀察せしめ、其の種々無量なる物體、事實、若くは現象の間に伏匿し若くは表顯せる自然の法則を認識せしめ、或は彼等をして喜ばしめ、或は之をして樂ましめ、或は之をして喫驚百番せしむると雖も、さて其の法則の最大調和たる究竟原理の如何に吾人の運命を支配するか、吾人は宇宙萬有の間に如何なる位置を占めつゝあるか、吾人は之に對して如何に感謝の意を表せざるべからざるかは、彼等一も之を説明せざるなり。然かのみならず、彼等は口に仁義忠孝を説くと雖も、却て之を實行に責むることとなし、何となれば彼等は、孝道の第一義たる祖先禮拜の一事に就きてすら、其の兒女子に敎誨する所、常に怠慢を免れざればなり。夫れ已に愼終追遠の實行を責めず、將た何れの所にか忠孝の本義を説かん。之を要するに、事苟も宗敎的感化の性質を帶ぶるものは、彼等の爲すを屑しとせざる所、若くは全く等閑に附して顧みざる所たるなり。豈誠に

長大息の至りならずや

《未完》

述懐

虎堂學人

「浩々乎平沙無限、夐不見人河水縈帶、群山糾紛、黯兮慘悴、風悲日曛、蓬斷草枯、凜若霜晨、」是れ古へ李華が古戰場を吊ふの述懐に非ずや吾人は夙に此句を誦して身亦遙に古戰場を望むの感あるや久し嗚呼社會は一大新戰場なり一起一仆人智の能く測知すべからさるの間己れ取て以て茲に立脚の地歩を定む焉ぞ知らんや彼の浩々乎として平沙限りなきの感慨轉た亦吾人をして厭世行樂の間に彷徨せしむるに至らんとは

明治の當代之を比すれば歐洲十六七世紀の交と等しく漸く闇黑の草土を脫して將に開明の昭域に進まんとするの時期に屬す蓋し維新の改革たる彼の中古蒙昧の蠻族一轉して歐の今日を現出するに至りたるか如く幕制一たび亡びて天地亦其舊新を異にし世界の風潮は茲に方隅的觀念を退めて漸く宇宙的思想の發達を促かし其形而上たり形而下たるに論なく靡然として舊裝を改め國を全世界の焼點に置きて驅馳唯だ後れざらんことを是れ務むるに至りたるは亦天下大勢の然らしむる所と謂ふべき歟吾人は今茲に我國萬般の現象を臚列するの要なし兎に角吾人は社會の一員として生を此世に享く若し夫れ社會にして偶然に來り偶然に去り唯だ無機的離合に由りて吾人を此世に躑躅たらしむる者たらば吾人の進歩は決して眞の進歩に非さるべし吾人は一に身を社會の風潮に投し其趨赴する所に從て邯鄲夢の如くに一生を過さば則ち可なり亦何ぞ社會を率ゐて宇宙の大法に則らしめ眞理に從て吾人か理想的進歩を促すを須ゐんや嗚呼二十有餘來の新社會稱して長足の進歩となすもの吾人は聊か其物質的進歩なるを知る抑も人は唯たに衣とパンとを以て生活し得る者に非さるなり今夫れ人にして果して其生を南柯の夢中に彷徨せしめ物質的變化の支配のみに是れ從ふものたらしめん乎天下の事物豈に亦人生なるものより味氣無きものあらんや夫れ然り有機的發達は社會の常理、人亦有機的進化に伴

はざるを得ず所謂有機的進化とは何の謂ぞ請ふ暫く之を措け

抑も社會は何か爲めに作れる乎其搆成の目的疑もなく人類最終の責務を完うせんか爲めに外ならさるべし其搆成の進步吾人は假に之を社會の文明と云ふ今夫れ所謂社會の文明之を萬邦に通して現時を祖代に相比し來らば其步武の駸々たる固より呶々の辯を費すの要なし試に前世の人々をして其在世當時の腦裡を寫出せしめん乎誰か將た今日社會の現象を豫想せしものあらんや夫れ然り然りと雖今日の文明之を吾人の理想的文明と照較するあらんか吾人は恰も燭火の電燈に於けるが如きの感なくんばあらさるなり蓋し我邦維新以來孜々として開明の發達を促がせしは亦爭ふへからざるの事實たりと雖其師とする所は一に歐米大陸の先進國にありて存す彼の泰西の文化其基く所果して那邊にかある嗟呼是れ容易ならさるの一問題——科學者政理學者宗敎家各〻據て以て我田に引かんとするの爭源たり看よ彼の科學者揚乎〻として口を開けば則ち云はく火車輪船一たび發見せられて五洲の狀況爲に一變し光電の元理漸く利用せられて世界の形勢今や將に再變せんとす舍密術の精巧は以て造化の妙を奪ふに足り工機の緻密は以て鬼神の目を奪ふに至り電線蛛網の如く張り鐵軌走て長蛇の如く有無四方に通して益々列國競爭の劇しきを致す英は之に依て以て管下亦日沒を見さるに至らしめ米は建國其未た一世紀を過きざるに先ち富裕既に已に天下に冠たる者の如し所謂土一升に金一升とは實に科學の消長如何に係て存すと、政理學者は之を否なんで云はん夫れ人は生れながらにして天賦の自由を有す參政の權は是れ等しく各個の享有する所たり往古希臘の文化を輝かせし時に當てや四民稍や平等の趣きを致し自由の祥雲洽く全國に磅礴たりしか如し降て羅馬の全盛を終るの頃ひ政敎漸く混淆の端を啓き羅馬法王獨り萬般の實權を握りて能く王に王たるの觀を呈するに至り敎弊次第に之か滋曼を來し而來一方には敎制改革の大爭亂を惹起したると同時に他の一方に於ては抑壓暴戾、制御其宜しきを得さるよりして君民の軋轢盛に大

陸諸邦に行はれ米民の獨立は延て其波及を佛人の腦底に與へたるの結果泰西諸國の事物制度茲に一大段落を告くるに至り始めて歐米現時文化の基礎を立てしにあらすや社會の發達は自由の原動力を俟て始めて之を見るを得へし然り而て自由の原動力は是れ實に政理者經世家――ルーソー、ダントン、ヘンリー、フランクリンの徒の口頭筆端の刺激に由らずんは非ず嗟呼今日文明の依て來る所亦知るべきのみと宗教家――少くとも或一部の基教信徒は亦別に所懷を陳して云はん夫れ宇宙萬有は一として全智全能なる上帝の創造に出でさるはなし就中人類は神の精能を享け萬物の靈長となりて其光榮を揚輝すべきの務めあるものとす然れとも嗚呼此人類は古來皆擧つて罪惡の悲境に陷り宇宙は不幸にして將に悽慘たる虞淵に沈まんとす基督救生の途を啓て白日亦碧空に輝き猶太の靈氣は引て歐洲を席卷するに至る基督の教旨は血液の如し五洲孰れの處か之か感化を受けざらん荆棘を拓き蒙昧を導き蠻雨異風に沐櫛して洽く道を邦域に傳へ博愛の主義を立てゝ平和に事物の發達を促かし蠻野殺伐の原人社會を化して禮樂揖讓の社會を現出せしむるに至る是れ果して誰か功ぞ於戲世界の歷史――文明史は則ち基督の歷史なりと

文化の淵源其之を究むるの難き率ね夫れ此の如し蒙昧の世爪牙是れ事とするの時代は暫く之を措き人智の啓ける今日の如く究理の明なる今日の如くなるにも拘らず吾人は未だ吾人が生棲せる此天地は果して如何なる境遇より來り如何なる境遇に向て進行しつゝあるやを證知する能はさるなり古人句あり天地は萬物の逆旅光陰は百代の過客而して浮世は夢の如しと嗚呼無限の空間の内に居り無極の時間に遵行し無盡の物質を友として而して測知す可らざるの運動を爲す淡然たる泡の如く漠然たる夢の如き者是れ即ち人類なり曰く人類は萬物の靈なりと萬物の靈に居て自ら其原由を知らず獨り其終局を測らず周圍の實相其幽奧なるものに至りては則ち茫乎として唯た其の思議すべからさるを羨むのみニュートンは科學の泰斗其林檎の地上に落下する所以を考究し重力の一大元理を發見して以て近世理學の基

礎を築けりダーウヰンは學理の木鐸人類進化の跡を究め一世の問題に斷案を下して妄誕謬說を後に瞠若たらしめたりデカードは一代の賢哲「吾考ふ故に吾存す」との斬新なる一大說理を後世に傳へて轉た其の博蘊高識を仰羨せしむるものに似たり老莊は宇宙萬有を擧けて一切虛無の大道より來るとなし佛は眞如を藉り來りて巧に大乘小乘を說法す聖賢寔に此の如きのみ夫れ然り豈夫れ然らんや若し夫れ吾人をして試に僭越を措き敢て難きを聖賢に求めしめん乎重力引力は如何なる目的ありてか以て地上に存在する其他界を牽引するは果して何の爲めぞ人類の進化は亦疑ふ可らず然り其疑ふ可らさらしむるに至るは夫れ何の作用に由て然る乎吾れ考ふるは現實なりとせよ何を以てか吾が存在する所以を證知し得べしとなす乎虛無の大道本來空是れ皆な無神論の敎理とする所たりと雖今夫れ其所謂空たり虛無たるもの孰れも吾人か辨別識(ディフェレンス)と統一識(アグリーメント)との作用に依りて然々認むる所に非すや果して然らば是れ明に相對の力を俟て始めて知るべきのみ唯た夫れ相對たり之を以て吾人は未だ其絕對無限の虛無なり空なりと領解する能はさるを奈何せん論じて此に至れば吾人は到底宇宙の大法を發見して玆に立脚の地步を固むるか如きは抑も亦難中の難事に屬す嗚呼人知の足らざると此の如く人力の薄きと此の如くんば焉ぞ以て吾人か理想的文明の標準を立つるを得んや借問す億兆の人類何の爲めにか生活する其夙に起き夜はに寢ね孜々として終生求むる所は一に是れ浮雲の富貴名利の風潮は滔々として天下に氾濫すると日一日より急なるか如し一念玆に及んで吾人は轉た亦前途浩々乎として平沙限りなきの感慨なくんばあらさるなり吁厭世行樂の主義往々にして人の絕望に應ず豈亦偶然ならんや否な吾人は敢て之を以て未だ眞に宗敎——吾人か所謂宗敎の室に入らさるの罪に坐するもと歸納せん

蓋し世上幾多宗敎なるもの〻中其妄誕謬說にして世人の妄信する所となり其勢ひ靡然として人心を感化し權威赫々亦侵すへからさるの觀を呈するか如きは古來往々敎史の吾人に證する所たり抑も宗敎なるもの〻定義

解釋に至りては古來學者各其軌を一にせず或は語源的に或は歴史的に或は獨斷に依り各自の信する所を取て其の意義解釋を下すか如しカントは主觀的に宗敎を解して「凡て吾人の義務を神命として認知すると」となしドクトルマルテノーは「宇宙を支配し人間と道德的の關係を有する神的心意（デヴィン、マインド、エンド、ウイル）に對する信仰」を以て之か定義に充つ知るべし孰れにもせよ宗敎なるものは決して科學哲學と相撞着すべきの性を有するものに非さるを、思に古來宗敎の科學哲理と其所說恰も氷炭相容れさるか如きの狀を呈し互に鎬を削つて相爭ふの際、人智愈々啓き學說益々進み哲理の觀念漸く人心を支配するに及んでや固信敎派次第に其勢力を失ひ迷信妄想日を追うて之か減少を見るに至りたるは亦疑ふ可らさるの事實とす看るべし十六七世紀の降より歐洲列國の間斬新なる思想を抱て新に近世の哲理を創見せし學者頻々として頂背相望み或は惟心論を取て之か論據を定め或は惟心論に據て其說を敷演す論議百出往々異端邪說の誹りを受くる者亦少なからざりしと雖も大勢の歸着する所從來の固信宗派と其敎理に著るしき反對を生じ特にスピノザーの凡神論の如きは其基敎々理の根府に一大恐慌を與へたるや亦爭ふべきにあらず其他チンダル若くはスペンサーが徒の說く所吾人未だ深く其室を窺ふの識なしと雖兎に角其固信敎派と其所說の相容れさるとは其夙に吾人に示す所たり夫れ此の如く宗敎哲理の調和漸然相整はさるか如くにして而て進まん乎所謂川源一たび別れて千里の遠きを致すと等しく二者の懸隔日に其甚しきを見るに至るの極、有識の衆庶は終に全く宗敎を委棄して亦之を顧みる者なきに至らん抑も宗敎なる者は世の文野たり人の蠻開たるを問はず上下を通して等しく是れ形而上の支配者たるに外ならず社會の發達は共に促して其形躰の進化を要むと雖其基礎たる哲理の大本に至りては則ち一なり夫れ然り宗敎哲理の調和相整はさるか如きは是れ豈に各々其本性ならんや果して然らば其敎理の妄誕謬說にして能く哲理に合せさるものは之を捨て其哲理の疑はしきものは之を究め其粹を拔き其果を集めて玆に一大眞理の演繹を

なす、能ふべくんば是吾人か所謂宗教と謂ふべき歟今や顧みて我か形而上界の狀況を察するに教理宗派の分かるゝ一にして足らず其小別細分亦何ぞ限らん恰も歐洲十六七世紀の以降教學互に軋轢を釀して人心の趨向漸く多岐を生するに至りたるの時代を再演するものゝ如し若し夫れ適者生存なるもの果して其天則なる所以を失はさらん乎其形而上界に早晚一大淘汰を來すに至るや吾人の深く信して疑はさる所なり吾人は曩に人知の薄弱にして人力亦賴むに足らざるを歎せり然り其薄弱敢て賴むに足らさるの智力を有する人類は何に依てか以て社會を文明に導き以て吾人生存の目的を達するを得べきや危坐瞑考之を久うして稍や少しく悟る所あるに似たり吾人曾て之をスペンサーに聞く抑も人智の原性たる之か成立必ずや事物の相違を認知するの辨別識と其同一を領肯するの統一識との二者を要するか故に凡て皆相對の性を有せさるはなし夫れ然り今夫れ其絶對無限のものに至りては固と是れ相對以外に屬す是れ人知の認めて以て不可識的と爲す所以なりと宣に此の如し吾人は既に已に相對の力を假りて所謂無限絶對なるものゝ存するあるを知れり既に之を知る是れ倘ほ吾人は稱して絶對的絶對無限と謂ふべき乎今夫れ所謂絶對無限の性をして到底人知の絶對的に測知すべからさるものとせば絶望固より可なり厭世亦敢て不可なる勿かるべし然りと雖吾人は既に所謂絶對無限を相對的に認知するを得たり其所謂絶對無限とは何の謂ぞ吾人は之を稱して宇宙の大勢力となす之を相對的に認知するとは則ち如何吾人か其大勢力の大勢力たる所以を領解するに外ならじ果して然らば吾人か認めて以て不可識的となすもの是れ即ち吾人か其大勢力の支配を受くる所以の確證にあらざるなきを得ん哉吾人は敢て口碑的に固信教旨を奉するの要なかるべし何となれば是れ以て唯一大勢力の眞相を認知するに足らざればなり吾人は今や厭世行樂の間に彷徨するの愚を學ばさるべし他なし吾人は既に唯一大勢力の何たるを解し得べければなり論して茲に至らば吾人は即ち知る人知の及ふ所は則ち其性の相對なるにあり故に相對の力を

藉て其大勢力の大勢力たる所以を認知すれば則ち以て眞の所謂宗教を察するに足り之れを認知せざれば則ち徒に生を厭世行樂の間に絕望せしむるに過ぎざるなり今夫れ思考玆に至らず其勢力を解する曖昧なれば則ち流れて妄誕となり之を肯する臆斷に過くれば則ち動もすれば爲めに謬見に失ふ取捨の要は則ち玆にありて存す耿々たる明月雲霧を排して今や將に中天にあり嗟呼文明の進步し所謂有機的進化想ひて玆に至らば之を解する豈亦難しとせんや人智未だ啓けず文運未だ洽ねからざるの時にありては人は不知不識の間自然の趨勢に從うて其生を送る其孰れより來て孰れにか去らんとするの觀念に至りては茫乎として其了知する所にあらざるなり吾人は之を目して理想の未だ進化せざるものなりと謂ふ若し夫れ人にして旣に己れ立脚の地步を知り自他の關係如何に通し以て社會の一員たるの責務を完ふせば是れ豈に理想の進步發達せざるものと謂はすして可ならんや說き去り說き來りて吾人は將に斷定せん社會の開明文化は則ち其之を組成する各自個員が理想の高低如何に係て存すと陳套平凡此の如きの說三才の童子尙ほ且つ之を熟知す有識なる讀者諸君何ぞ吾人か言を俟て後始めて首肯せんや昔し劉晏、釋氏の要義を僧の道欽に問ふ欽、答ふるに諸惡莫作衆善奉行を以てす晏笑て曰く五尺の童子亦能く之を知る欽、應して曰く百歲の老人も之を行ひ得ざるは何ぞやと讀者諸君乞ふ此語を忘るゝ勿れ

我天國

坂下龜太郎

幽燈豆の如く、鬼氣人を襲ひ、鎌月蒼顏を照して、寒犬長鳴、轉た夜情の深きを覺ふ、獨坐凄峭、思ひ未來と永遠とに走れば、恰も是『抽刀斷水水更流、擧杯消愁々更愁。人生在世不稱意、明朝散髮弄扁舟』の憾あり。顧みて銅臭肉腥の境遇を憶へば、冷汗玉の如く、感慨泉の如し。或は『半夜燈前十年事。一時和雨上心頭』の情趣起り、或は『故鄉有母秋風淚。旅館無人暮雨魂』の哀思生ず。千緖萬端、有意無意の間に思うて、孤枕の病客に至り、南洋の逐臣に至り、函關の秋暮に

到り、田舍の父老に到り、憐れなる寡婦孤兒に至り、既に永眠せし我先君に至り、兄妹に至り、童時の嬉遊に至り、更に頭を擧けて前途を望み、顧みて現時の境遇に返り、一彈の指頭、瞬時の感觸。渺漫涯なきの蒼洋を凌き、簫颯伴ふなきの古戰塲に迷ひ、悲況より歡景を望み、涙裡より希望を認め、山を渉り、水を渉り、窮途より行樂を得、寥味より笑語を聞き、混濁より純粹に入り、妄念より無心に返り、高渾の氣斐然として室に滿ち、飄搖の念悠然として萬化に通す。噫迷へる耶、悟れる歟。痴たるか如く、醒めしか如く、快なるか如く、眠れるか如し、鬼爲か、神作か。抑も妄想か、吾何の故なるを知らす。暫くして意思收縮、凝りて氷塊の如し、水晶の如し、爛星の如し。敬虔、警發、身は是上帝の聖壇に近きたるを覺ふ。

斯思何の思ひぞ、斯恨何の恨ぞ。回憶すれば、吾が十三の春、先君に從て莊子を讀む。當時竊に思ふ。景と罔兩周と蝴蝶倏忽と渾沌の類、枚擧に遑あらす、不言の辨、不道の道、また有謂無謂無謂有謂の文字、毎句殆是なり。渠は實に狂士なりト、今や冥默熟思すれば、其言辭蕩汨變化して、日月に淩薄し、雲河を疏決し、雄豪宏肆にして、以て萬物の上に神行し、以て宇宙の表に心游す、渠常に比諭と短詩とを用ゐ、而して其寓言と警語との各々一種の機慧を有し、讀むものをして、恰然心解けしむ。嗟呼偉哉、這叟の擅場。渠は其情を情にし、其夢を夢にし、其思を思にし、其覺を覺にす。而して其言を言ひ、其心を指す、渠か聲音笑貌、端なく我面前に浮動し來る。抑も渠は人世の苦樂を達觀し、皇天の命旨に感應し、無しろ人をして、萬物の表に近つかしむるの無邪氣なるを欲す。其朴といひ、天眞といひ、物外といひ、是とするに因るといひ、光を葆むといふもの、亦斯意のみ、吾また渠か時世に矯激して、此肆まなる改革を擧ふの精神なりしや、否やを問ふに遑あらさる也。

噫。吾之を得たり、吾之を得たり。先きの夢なるか如く、痴なるか如く、快なるか如く、醒むるか如く、眠れるか如く、妄想の如く、靜思の如く、開ける峯巒の

後に、白雲の相疊まりて、『西出陽關無故人』の想ありしもの、吾遂に融然として之を解けり。此時偶哀思生せし也、此時吾偶情趣起りし也。然れとも當時吾何の故に起るを知らさる也。雲の無心にして岫を出るか如く、自然に、眞實に湧き來る也。憂思沖々たり、客愁綿々たり。然れとも至味津々として是中に存す。一滴の涙痕、樂園の甘露も啻ならす、是時に當てや、心先つ社會を離れ、人類を離れ、我を離れ、天然を離る。是三歲の小兒なり、大聖人の眞致なり。質樸の極といふ可なり、修練の到といふ可なり。吾心上帝と一機相通し、惟宇宙の間に繫れるのみ、此時此情、豈容易に其福音を談すべけんや。正に是れ『落葉滿空山、何處尋行跡』悠然として神遠し矣。吾人茲に到る、是無念無想に至るなり、吾人茲に到る、所謂天國に入る也、嗟呼吾人天國に入る也、

世間何者の僞君子ぞ、敢て叨りに、自然の趣味を解き、以て隱遁者に擬せんとする。渠等揚言して曰く、水の如き清空、花の如き故園、道通天地有形外。思入浮雲變態中。に進まば、是實に自然と同化したるなりト然れとも、かの青山綠水の知音をかりて、我精神を修養せんとするか如きは、未た靜中の妙味消息を知らさるの人也。古人が『胸中所得知多少、半是青松半白雲』といひしもの、是實に僞言のみ。又况んや天然と交涉するの煩あるに於てをや、豈如かんや、一室の內、幽玄靜默、意象極めて分明なるに。吾はいかに、東西の歷史が、僞君子を表白するの證據人なるかを知らすむはあらす。見よ。見よ。燕趙に奔り、南山に隱れ、酒に隱れ、詩に隱れ、楚に適き、吳に之き、猶ほ其送序に托して、萬斛の不平を灑き。時に襄陽に隱居して、二十四朝の歷史に、時ならぬ奇觀を呈し、或は令腸鐵面、世を嘲り、俗を罵り、人世の榮辱、毫も身累を爲すに足らすとせし勝海舟翁すら、猶ほ社會の輕薄汚怪を見ては、無限の哀涙に沈みて、三十一文字を寒吟し。西行法師の如きは、鎌倉殿より受けたる榮譽の銀猫を一擲して、天涯の雲水に放浪したる冷なる心根に似合はす、秋月に對して、端なく炎々たる情火を吹き起し、

文覺上人の如き、曾て戀情の奴隷となり、誤て我慕ひし佳人の頭を斬り、大に開悟したるに係はらす。猶ほかの冷かなる髑髏を擁して、源大頭公に謀反を慫慂せり。論して玆に至れば、かの小君子が、自から稱して、社會外に解脫逸擧するといふも、尙ほ纒綿哀情の得て脫すべからさるもの存するか如きを觀る。嗟呼渠等は遂に、寂寞に安眠する能はさるか、遮莫我は銀坐街頭臂を擁して眠らむ、日本橋々邊筆を探りて靜かに思はむ。憶ふむかし、アレキサンドルか東洋征伐の營中、枕頭只一篇のホーマー詩卷ありしとを。ゴルドン將軍、亞弗利加の大沙漠中に死を決して赴く時に於て、一卷の聖詩は、恒に彼か傍にありしとを。又思ふ、王國鼎峙の時、魏の曹孟德。東柴桑の境を視、西夏口の江を觀る、千百の將士、錦繡鐵劍、綺羅星の如き時に當り『月明星稀、烏鵲南飛』の詩を謠ひしとを。渠等勝敗の巷に立ち、生死の圏に奔る。苦痛多く、憂愁多く、實に心を煩はす多き時なり。渠等の腦髓別に幽靜の天地あり、渠等必しも天然を友とせすと雖も、心廣く、躰胖かに、氣平かに、情靜なればなり。豈にかの僞君子の如く、名を高踏勇退に寄せ、聲を青山綠水にかりて、己か不平の心を洗ひ、却て沈思靜情の心を擾す者の比ならんや。冥默幽玄、平かに神の聖旨を味ふ。悠然として神遠く、汪然として心平なり。車馬喇叭の巷、人畜塵途の街。必すしも避けさる也。九尺二間の陋屋必しも辭せさる也。吾人の靜思一度玆に至る、恰も明鏡の物を照らすか如し、一たび外界に接す、笑ふものと共に笑ふなり、哭するものと共に哭するなり、花片の翩々として舞ふか如く、流泉の涓々として咽ふか如し。本來の主我玆に復活し、本來の道心玆に躍動す。形骸の外精神のみ、精神の外形骸のみ、吾人玆に至る、復た何の僞善あらむ、復た何の邪正あらむ。天上の星、地下の水、先つ畵き、風雲月花我先つ捉ふ。而して心の煩を爲さゝる也。吾人の快樂玆に至て極る矣。吾人の快樂玆に至て極る。斯心以て神明に對すべし。斯心以て宇宙に麗らん。嗟呼是吾人か天國なり、吾人か天國なり。

孤憤（其一）

前川太郎

勳爵威德咸な金錢の權に冒され道義識才悉く銖利の奴に蹂られては人生の尊貴それ何れの處にか求めん、識者漸く學位に耻づるもの起り義士亦爵位を屑とせざるもの出でんとす、然れどもこれ砂中の金のみ、滔々たる凡庸の輩に至りては何をか知らんや、戀々虚譽に眩惑して更に他を顧みず驀進專念唯この空望に一生を賭せんとす、慾ふもの得ること稀なり、齷齪として力遂に及ばざるもの多し、玆に於て黄白に餘勢を藉り僅に名を爲して家門の榮を求む、三千金を投して正五位を得べく十八ヶ月にして博士たるを得べし、今の世の英傑多くはこの種の人、彼の鍛鐵の器ならざる理の當に然るにあらずや、慷慨の士危い哉といふ且ほ既に愚なり晩しといふべし、

德行の熾盛ならざる其由る處亦將に斯の如きか、蓋し人は局量客小、妬心炎々、容易に高德の譽を允さず善評の褒を苟もせず、細觀微察、一指の疵あれは寛假せず舊行の失を咎め瘡痍を挖き健全の君子を傷づけて尚ほ飽かず、焉んぞ彼の威德を供へんや、唯天を畏れて小心翼々、道に違はざらんを期して居常其獨を愼むもの、靈光自ら輝き吸化の力獨り備はる、この威德必竟王位に勝さり民を服すべく時を制すべし、こゝに於て超然として萬軍に崇ばる、豈尊爵の冠冕にあらずや、古來其全を告げたるもの顧ふに幾人ぞ、而して今や即ち然らず、酷吏に君子あり姦商に君子あり敢て肅愼謹直を須ひず貪婪、譎詐、淫樂の如きは措いて謎せず、唯救濟を爲すに當りて巧に喇叭を吹くもの、道德を説くに當りて漫りに忠孝を喋々するもの、一瞬にして君子と爲るを得、君子の稱を博するを得、然れども、見よや這般の君子の相貌、命宮に黒雲蟠ひき眼窩に汚濁往來し愁色蔓り淸氣缺く、凛たる威風何れにある温たる偉相何れにある、活氣枯槁して死せるが如く筋帶憔悴して餓鬼の如し、遇ま肥滿豐頰の士を相すれば鄙陋磅礴俗氣紛々唾棄尚ほ足らず、焦慮致富にあり名利にあり、故を以て書を著はすや必しも社會の爲にせず子

弟の利を圖らず、高議談論多くは避けて世難を怖る、毅然として自信の見を發らくもの無く又發らく克はず、金聲鏘々小判を擊つて招くとき僅に喃々の機を見るなり、私かに憂ふ、匍匐蠢々地に居て天を知らざるもの、天地跼蹐俯仰に堪へざるもの、皆以て君子と爲るを得ば、天地の黒闇々中に煙滅する盖し遠きにあらざるべしと、嗟呼薰蕕混亂の弊誠に窮まれりといふべし、瑾々たる珠玉瓦石と同なるに忍びんや、即ち眞君子の出でざるもの其半を思うて諸了々たり、

往日偶ま僧の客あり語げて云ふ、今や佛者の所謂逆惡世惡世界と成りぬ、之を俗解すれは天地顚倒し秩序紊亂し日月明を失ひ人心義を壞る、言語訣舌に犯され風俗壞亂して變ず、猶ほ行人履を頂きて冠を足に穿つの類の如しと、試に見よ、頑是なき少女が時の流行に走り履物の髮挿し頭に穿ちて得意なるものあらずや、血氣の少年が卑猥に心奪はれ書齋の懸額に娼婦の姿を置くものあらずや、高家の内君婢妾に辱められ夜叉の誹話に泣かざるものあらずや、螢雪の苦學徒に誇學（ペダント）の資を佐ふに止まり却て巧言惡行の媒を爲するものあらずや、才藻暢發の女性に妾の志願者起り高帽捻髯の學士に奴隷の痴漢出づるにあらずや、以て據證の確たるを知れと、予一領して云ふ、この奇怪の珍事固より見るべし然れども抑も鎖屑の小事に屬す、更に今世の君子英傑を拉し來りてこれか擧證と爲すに熟れぞ、

冥想一番浄几の下に拱く腕の痲痹を知らず遥に世態を察すれは孤り憤りに堪へざるもの多し、彼の傲然として一世を睨み天下の經綸我に在り社會の改良、策、斯の如しと腐腸を露はして轉々狂奔するもの彼れ果して何をか爲す、偺父を苦しめ寡婦を泣かしめ貧弱の身をして路頭に彷徨せしむるもの、其災原多くはこの處よりす、其罪業の遽に宥すべからざるもの山の如し、自稱正義の徒亦紙上に泣くを知りて未だ寸蛇の一をも殺さず、思ふにこの輩雷の如きか、聲のみ轟として響けども更に形の捉ふべきなし、兩々終に犬鬪に若かず、正義の務むる處其眞髓は善導にあり誅伐責罰其素ならんや、然るにこの輩何事をか爲す、漫りに他の奸をあ

ばきて酷評を究む而して之を以て揚々として筆誅すといふ、誅せられたるもの頑悪無道ならんには止むべし、若し欣ごろに善を求め過を知りて改むるに急なるあらんには何によりて其道を尋ねんや、人世悉く悪逆にあらず唯至善の善を知らざるが故に誤て失行に陷るもの亦た寡しとせず、其善後を導くに足るもの丶み獨り爾か云ふべきなり、日刊月刊の雜誌新聞其數幾百、論爭愈喧しうして時に蛙鳴を壓するに足る、而してこれが記者たるもの幾百幾千、中に就て人の師たるに合ふものを撰擇せば其寥々たる盖し同胞四千萬を驚殺せしむるに餘あらん、其道にあるもの猛省すべきなり、細かに考慮を須ふれは其孤憤に觸る丶もの大冊の以て未だ盡すに足らず纔に箇を以て終はらしめよ

傳記

故ホイチアー氏の傳

懐ひ來つて轉〻悄然たらざるを得ざる者あり、皇天后土何ぞ吾人を傷ましむるの酷しき耶、天を仰いて其の無情を訴へ、地に俯して其の輕薄を叫ぶ。嗚呼吾人は今より誰を師として事へん乎、誰を友として交らん乎、吾人の行路未だ甚だ遠し矣、然るに燈火は滅して暗黒に歸せんとす、吾人の前途甚だ危い哉、天に號びて天對えず地に哭して地聲なし、迷雲慘として天に哀み、秋風颯として林に叫ぶ……僅前數週の飛報は歐米に否世界に於ける宗教界、美術界、政治界の統領傑士の訃音を齎し來る前後數回なり。一は英文學界の統治者、テニソン氏にして、ウォーヅウォルス氏歿後直に英國王家の詩職に任ぜられて今年に至る四十六年、苟も世に英字を解する者は、氏が叙情的詩人として、亦其の自由にして至と高尙なる思想家なりしを知らざる者なきに至れり、今や天此の人を奪ひ去る。次は佛國に於ける自由思想の大家、レナン氏の逝去にして、氏は實に近世に於ける自由思想中興の泰斗、經典批評學の始祖にして、古風宗教家は氏を以て蛇蝎となし、異端として共に處るを潔しとせざりしが、其の一般學者社會、

就中自由神學幷に學理的宗敎社會の進歩を促せしと幾何なるを知らず。而して其の著書中「耶蘇一代記」「基督起原」の如きは以て氏を知るに足る可く、殊に氏は東洋文學に於て最も著名なりき。三は政治社會に於ける自由獨立の首唱者として吾人の記臆に存する、ジョージ、ウィリヤム、カーテス氏なり、氏は文學者中最も緻密家の名高く、政治家としては自主自由の勇將なり、特に氏は米國ユニテリアン協會の會長として、最も吾人に利益を與へたるの人なり。其の四は博士タムス、パーソン氏にして、氏は彼の有名なる伊國の詩人ダンテの最も高尚なる思想と、最も婉麗優美なる詩集とを、世界の英語國民に紹介せり。最後に讀者に報ぜんと欲する所の者は、吾人の最も愛惜する所の人にして、吾人は之を記せんと欲して先つ暗涙を催し、充分に性行を記し得たりとなす可らず、讀者請ふ之を諒せよ。そも其の人を誰とかなす、宗敎界に於ける自由の詩人、最も眞相を穿ち得たるの文學家ジョン、グリーンランド、ホイチアー氏是れなり、吾人は今氏の性行を左に記して其の美德を旌表せん。

今日大西洋の兩岸に生活する人民に向つて、爾の最も敬愛し最も貴重する所の詩人は誰ぞと問はゞ、異口同音にホイチアー氏なりと應ずるを聞かん。近世の詩人中氏の如く人民に愛と眞とを以て歡迎せられたる者は未だ之有らざるなり。氏の六十年に餘る生涯は神の眞實なる豫言者也、氏は其の身に危害の迫る時に於ても、氏のペンと紙と言とは決して自由、眞理、博愛及び基督樣生活に就て活動を中止せざりき。於是吾人は『苟も自由にして且つ智慮ある人類は、氏の名を名譽の上に記臆するならん』と云ふを憚らざるなり。

ホイチアー氏は紀元千八百〇七年、米國マッサチュセッツ州に生れ、其の生涯の多くは此の州に於てせり。而して氏の先君は、「クエッカー」派の一農民にして、氏が幼時の敎育は其の質朴なる家庭に於てし、氏の業務德行の如きは實に雙親の薰習に止まり、未だ今日に於ける詩名を轟かす可き境遇は夢にだも見ざる可し、唯僅少の文學を雙親より習得したるのみ、後齡十五にし

て始めて某羅甸學校に入りしも、或る事情の爲め、氏をして長く此の校に止まらしむる能はざりし、光陰は矢よりも早く爾來七星霜を經過し、氏が廿一歳の時よりして其の思想を公けにするの端を發けり、爾來氏の文學に其の身を委ねんとするの執念は、造次顛沛も心頭を去らざりし。後ニユーバリーポート自由新聞（フリープレス）に一詩を投じ、ウイリヤム、ロイド、ガーリソン氏（宗敎第八號を見よ）と相知を得、意氣相投ずる所、直に刎頸膠漆の交誼を結び、右携左提して大に國事に盡す所ありたり」氏は奴隷解放の自由問題に向つて畢生の力を盡し、敢て身命の危害は問ふ所に非らず、ローウエルの諷刺、ロングフェローの幸福の如きは、氏に於て潔しとせざる所也。是れ氏の國民に歡迎せらるゝ所以にして、唯氏は滿腔の熱血を吐て眞實を詠出せしなり。

ホイチアー氏の詩集中、其の多くは奴隷解放問題に於る熱血の吟咏して、其の涙痕の注ぐ所遂に合衆國民の迷夢を醒覺し、南方諸州に於ける四百萬有餘の奴隷を解放するの幸運を發かしめたり、頃日ゼームス、ラッシエル、ローウエル氏が、其の熱心なる愛と眞實（マコト）とを以てホイチアー氏を評して曰く、

常に合衆國の大事に處して、吾人に注意と熱心とを與へたる者は、ホイチアー其の人の聲なりき、實に氏の熾盛なる感情は、國內に閃きて奴隷所有者の心膽を寒からしめたり。而して氏の逸作は國民の熟睡を醒起せしめ、其の結果南北の激戰となり、彈丸雨飛、將に氏の頭上に降り掛らんとする時も、猶ほ氏は奴隷解放問題と善後策とに向てペンと紙とを措かず、常に絶叫して解禁を云ひ平和を唱ふ、氏の熱心は甚だ公平にして、正理の思想と愛と眞實の情は大に反對者の意を和ぐるに足れり。既にして砲聲收まり、劍電止み、戰（イクサ）は終りぬ、然れども其の餘烟は深く南北士人の胸中に印して、餘燼未だ去る可くも見えざりしが、氏の平和なる絶調、眞實なる妙詞とは、以て今日大平を謳歌するに至れり」ト

ホイチアー氏の神學思想は、所謂古風基督敎徒の以て異端となし、仇讐視する所なれども、氏は實に「クエッ

カー」派の信徒にして、其の眞理と善良なる口碑とには、他人よりも熱心なる信仰を捧げ、特に神の愛に基ける信仰は、普通「クエッカー」派の觀念を超絶して一層廣大なる意味に於てせり。氏の「アンドリュー、ライクマンの祈」「宣敎師の娘」「二人の敎師」「二人の天使」等の如きは、氏が神學意見を代表せしものにして、其の書の人口に膾炙したるは、以て氏を知るに足る可し。」

吾人は今日ホイチアー氏は果して宗敎上の異端なりしや否やは之を論ずるの要なし、唯氏の如き「クエッカー」派は、我がユニテリアン敎に近接したる者なりとするに躊躇せざるべし、故に氏が宗敎的詩作の二三節以外は、吾人の最も喜んで同意を表する所にして、以て氏が常に宗派以外に立ち公平潔白なる自由思想家なるを知る可きなり。

氏が一度口を開きて其の自由にして高尙なる思想を說かんとするや、敎會の何宗何派を問ふ者なく、常に滿場立錐の地を餘さず、而して場内は常に嚴肅と熱心と愛とを以て充滿せり、是れ氏が天上に輝く所の麗顏を拜し、今日亞米利加の平和と自由を致したるの聲を聞かんが爲めに群集せるものにして、氏の顏色と躰貌とは、實に平和と眞實との琴線なりし。氏が此の名譽は、將來其の逸作を見る時に、氏が說敎の記錄を讀む每に、尊敬の意と愛惜の情は、人々の胸間に浮ふ可きのみならず、「クエッカー」派の一大詩人として永く世に記臆せらるゝや知るへきなり。

博士エドウァード、イー、ヘール氏、ホイチアー氏の訃音を手にして浩嘆の聲を吾人に傳へて曰く、

ホイチアー氏の國家に盡せし精忠は、吾人今日太平鼓腹の世に處して、決して其の眞價を知る可らず、恐らくは彼れ自らも其初め斯かる大業を立てんとは豫想せざりしなる可し。氏が始めてガーリソンの自由新聞文苑中、氏の名を見し時の喜は、斯く詩人として尊重せられ、愛慕せられて永く芳名を世に傳へんとは、夢想だにも思はざりしならん。今日世の青年輩が、氏の傑作を見て以て之を尊とみ、之を重んずるは單に音調の優美絕妙なるが故に非ずして、感

情の眞相を穿つが故なり、未だ世は暗く人は狂せるの時に於て、其の剛毅にして眞實なる勇氣なかる可からざるを謳歌せし者にして、彼れは決して寧日の詩人に非らず、當時砲聲雷轟、劍電閃々として彼の書齋を襲ひし時の人也、然れども彼は此の修羅場に在りて常に詩想の餘裕あり。世の詩人は修飾を以て詩を作し、彼は熱血の濺ぐ所詩を作せり。世の詩人は推測を以て咏ぜり、氏は自ら人民の子にして直接に人民を咏ぜり、其の優劣果して如何ぞや、玆に至りて吾人は其の一言一句も苟もす可らざるを思はざる可らず。如此ホイチアー氏の殆んど七十年間の生涯は、天下の闇道を照して燈明臺となり、誘掖、奬勵等の懇篤なる忠言は、人民の胸中に羅針盤となれり。彼は世の壯者の爲めには、己の貴重なる時間を犧牲に供して顧みる所なく、甚だ懇篤に教訓し、若し其の一人だにも覺醒する事を得せしめなば、之を以て無上の快樂となせり。

吾人國民は氏の曾て亞米利加の國躰を維持し、奴隷主義を撲滅せんが爲めに、國民に數多の忠諫を與へしことを記臆せざる可らず』余曾て大學教授の職に在りし時、學生の讀書を奬勵せんが爲め、學生をして例年の祝日(米國)に適當したる詩歌を、英文學界の碩儒傑士の逸作中より撰擇せしめしに、其の多くは不思議にもホイチアー氏の謳歌なりけり、以つて氏が如何に人民に尊重愛慕せられしかを知るに足る可し、後余は米國に於ける自由思想派の詩人として、ホイチアー氏を擧ぐるを憚らざりし。然れども頃は未だ氏の生前にして、其の人の事業の終極を見ずして、直ちに其の人の品位を定むるは最も困難のことにして、しかも出來得べからざる事なり。然れども兎に角に余は氏を以て自由の詩人、平和の文學者として、亦米國の民政主義を捧持する間は、氏の芳名國躰と共に永存することは、決して疑はさる所なり。

今や斯く賞賛の聲を送らんとするに際し、氏の訃音は吾人の皷膜を裂けり、余は玆に至りて殆んど昏倒せり、余は之を聞いて殆んど狂亂せり、實に余は之を

以て米國人民の不幸となすのみならず、全世界の爲めに之を哀悼するなり、余は同時代に於ける朋友に向つて、昏倒と狂亂との境遇に居りながら、其の人の價値を定むるは、固より正當を失するの恐れありと雖とも、吾人は唯世の士君子の爲に一の注意を與ふるを憚らざるなり、＝苟も人として一大事業を企つるに際し、强て貴族的の方畧に於てせざるも、其成功を期するを得可き事之れなり、＝見よ顧みてホイチアー氏の事蹟を、氏は實に一農夫の子なり、氏は人民の子なり、國民の一人なり、而して氏は多くの艱難辛苦を嘗め尙ほ能く此の大名を成す、氏は決して他人の如く貴族的敎育を受けたるに非らず、他人の如く想像を以て詩文を修飾するに非らず、氏は國民一般の社會的感化の外、何物も受けざりし、氏は氏の眞實なる實驗を直に唱へ出せり、故に氏の聲は氏の聲に非らずして國民の叫びなり、氏は決して國民を蔑辱輕侮せず、之れ氏自身の地位なればなり。實に氏は國民を以て氏が勢力と名譽とを進むるの階級と思へり、之れ氏の特に愛惜せらるゝの所以なり。氏が逝去の後、國民擧つて氏を哀悼し尊敬する者は、決して氏が優美なる逸作と高妙なる絶調とを以ての故ならず、深遠なる英文學者の故ならず、唯氏は己の信ずる所を直に國民の感情に訴へ、高尙なる神子の思想を以て直に國民の理想に訴へ、言行必ず一致せしが故なり」

ト、當世の人若し氏の生涯を聞かば、以て自ら内に顧みる處なくんばあらざるなり。

叢談

○天命と本性

天命之謂↓性。命猶↓令也、性即理也。吾人生を此の世に享け、一日存すれば一日の業あり、百日存すれば百日の業あり、徒らに生存し、空しく死亡す可きに非ず。天意必ず可↓使↓爲、又不↓可↓使↓爲的經綸有り焉。是所謂天命にして、其の命に從順なる者は、能く眞理の靈

光に浴し、平和の歡聲を漏らし、樂世の皷腹を聽く。吾人の本性は皆能く天意に適ふ、若夫の俗眼者流は惡魔の襲ふ所となりて、自己の本性を發揮し能はざる者也。櫻花の爛熳たる、桃の夭々たる、山嶽の巍峩たる、黃鳥の喈々たる、美は則ち美なり、妙は則ち妙なりと雖とも、錦繡的の美なり、假面的の妙なり、天命を知り、本性に從ひて、造化の全能を解する者にあらざるよりは、宇宙の極美極妙を味ふ可からず。神を知り、天理の靈光を學ぶを得て、森羅萬象、美は愈〻美に、妙は愈〻妙に至る可きなり。

○本性と惡魔

誰か知らんや、黑雲朦朧として、中天爲めに雨を降らすの時、天は即ち昨日の天なるを。天は恒に天なり、豈昨日の天と今日の天とあらんや。然るに昨は一點の雲翳なく、而して今は則ち然らず、昨日の晴朗今何くにか有る、誠に怪訝に堪へざるなり。唯今は黑雲の遮蔽する所となりて、其の光明を失せしのみ。人に善惡賢愚の差ありと雖とも、本是同等同位、同じく天命を承順せるの人類也、唯其の一は淸冷潔白、正しく本性の發作を得たる者、其の一は黑雲闇憺、惡魔の爲めに本性の光明を奄蔽したる者也。

○宗敎可信而不可信

酒は可レ飮而不レ可レ飮也。其の適度に之を飮む、能く欝を散じ、憂を慰するに足ると雖とも、敗德汚行は是れ暴飮の弊也。茶は可レ喫而不レ可レ喫也。其の適度に之を喫する、能く氣を霽らし、心を爽にするに足ると雖とも、精神の昏亂は是れ過喫の弊に非ずや。凡そ其の度を失し、其の則を守らざるの弊、事々皆然り、僅に其の弊を見て之を擯斥せんとするに至りては、迷誤も亦極まれりと謂ふ可し矣。其の宗敎に於ける亦然り、宗敎は信仰に依て立つ、信仰は宗敎の一大要素なり。信仰は宗敎の最も重んず可き所なり、無信仰の宗敎は古より未だ之れあらさるなり。故に之を信ずる甚だ善矣、雖レ然、唯其れ或る信者の、耶蘇敎、佛敎、儒敎、若しくは回敎に於けるが如く、迷信固信に陷るに至りては、則ち不可なり。曰く、悉く敎を信せば則ち敎なきに如

かず。

○神の信仰は萬古不易なり

此の社會に於ける深き根底を有せざる流行、即ち科學哲學上を基礎として、正しく、麗はしき思想の上に建築せられたる、時様（ファッション）、衣服、方式、學説なるよりは、一往一來變遷極まりなきものなり、信仰個條の如きも時に隆盛を極むるあり、或は衰微するあり、教會、儀式の如きも一定不變なるものとは稱す可らず。唯單に吾人の目に觸れ、耳に聞ゆる所のものは一時のものなり、唯見られぬ所に於て永遠に存在するものを認むるなり。此の世に於て如何なる大威力、大勢力、大風潮を以てするも、決して影響す可らざる、星の如く清く、太陽の如く輝く所の人の信仰の存するものなり。時に或は雲霧の蔽ふ所となりて、其の眞想を認む可らずと雖とも、不動不變の靈光は、必ず吾人の信仰中に存する也。何ぞや、神、義務、靈魂不死に於ける人間の信仰是れなり。是等の信仰は、上幾千萬年の闇黒時代に於ても、下幾億萬年の後と雖とも、世の流行と共に影響を蒙る可きに非らず、時に或はヂュウス、ブラマ、ショウヴ、エホバ、孔子、釋伽として、其の稱を更ふると雖とも、實際は總て是等の名稱又は形式の下に、同じ存在者を崇拜するなり、人類が其の崇拜する所の存在者は、該の時代に於ける人智の至と高く、至と勝れたる推測とを以て定むる者なれば、人智の發達と共に具體的の存在者又は未開人の創造に基ける法則及び儀式に滿足せず、依て存し、依て歸する所の思想上、併て信仰上の或る第一原因、最高の起原に遡りて、其の存在者を索むるに至るは、是れ自然の理にして、吾人其の存在者即ち神に關するの信仰は、時様の如く變遷す可きものに非らず、萬古不易のものなり。唯時に其の目に見え、耳に聞ゆる世界に於て變遷隆潛を見るのみなり。

○神の存在及び性質

吾人が常に永遠の父と云ひ、萬有の勢力と云ふも、一の神と云ふに同じ、而して此の神の存在及び性質の大に研究す可きとは、今日哲學、神學及び科學上の一大

疑問なり、然るに世の所謂近眼者流の徒は、此の問題に甚だ冷淡にして、唯外見世界に碌々として、未だ依て立つ所の柱石を顧みず、是れ吾人の取らざる所なり」

苟も一個の倫理學者として世に立たんとする者は、世の有らゆる倫理説を酌量し、以て其の粹の粹たる所を取り、其の短を補ふの法によらざる可らず、殊にイエス山上の垂訓の如きは、倫理學者として最も知らざる可らざる所のものなり、其の倫理説を知らずして、倫理學者と稱する者は、未だ全く自己の職務を盡さゞる者にして、學徒としては或は恕す可しと雖とも、未だ學者として許す可きに非らざるなり、而してイエスが説きたる所の説は、之を約言すれば、人類は天父の心中に生活する者なりと云ふに外ならず、イエス常に此の方針を取りて、當時行はれたりし適種生存、弱肉强食の嚴格なる法律に向つて、慈悲、博愛等の平和説を注入したり、之れ神の命なればなりと。

神に愛及び眞理の存在するとは、疑ふ可らざるの事實なり、若し神にして愛及び眞理を有せざるものとせば、吾人は此の宇宙に於て愛及び眞理の存在を認む可らずと雖とも、宇宙は明かに吾人に之を示せり。吾人は神の心中に生活する者にして、吾人は即ち神の一勢力なり、佛者亦た吾人に告げて曰く、『心佛及衆生是三無差別』と、既に然らば宇宙に愛及び眞理の存在するは、則ち神に愛及び眞理の存するを證明するものに非らずして何ぞや、吾人が愛及び眞理の淸き働きは、則ち神の作用なり。故に吾人は倫理學者、哲學者として、神の存在及び性質を究めざる可らざるを知るなり。

神は宇宙に充滿する無始無終、宏大無限なる能力にして、宇宙は則ち其の表象なり、宇宙を離れて神なく、神を離れて宇宙なし、吾人の死は死にあらず、形の變化なり、萬物の消滅は消滅にあらず、外見上の變化なり、吾人の靈魂は神の無限なると共に無限なり、物質及び物質力は神の無終なると共に無終なり、故に物象を目的とする科學、物質を目的とする哲學、其の第一原因即ち神の存在及び性質を究めずして、末葉に抗泥するも、終に正鵠を得るに至らざらん。

第十八世紀に於ては物質不滅を發見し、第十九世紀に於ては物質力の不滅を知れり、第二十世紀に於ては人類の精神が不滅なることを信ずるに至らんとは、吾人の豫期する所なり。

宇宙に於ける光線の一小波動、浪の一小波瀾も、神の清冷なる作用以外に出づるを得ざるなり、如此、神は總ての物の中に在り、總ての物は神の清き作用(ハタラキ)の中に在りとせば、吾人も亦神の性を享有する者にして、吾人は天父の勢力より分賦せられたるものなり。昔時教父(開山)等がニヤク信條を創めたる時に、神は虚空より此世界を造成せることを云へり。然れども今日神は無始無終なるを信ずると共に兩立す可からざるの説にして、齒牙に掛くるに足らずと雖とも、クリストは造られしに非らず、神より生れたるものなりとは吾人の信ずる所なり、クリストも人類なり、吾人も人類なり、何ぞ彼は生れ、吾人は造られたるの理あらんや、再言せば、吾人も彼れも神の兒、キリストと吾人とは兄弟なり、唯彼は、能く天の賜物を適用して、人類の本分を盡したる者なり、神は此の世界を支配する爲めに、吾人人類に爲さねばならぬことと、爲す可らざることとの本分を與へたり、故に吾人は其の賜物を妄用せず、總ての物を能く利用して、而して宇宙を生ける神の宮殿とせよ!、先人イエス既に之を爲す、吾人爲し能はざるの理あらん耶。譬令ユニテリアン教の外見は、時に盛衰隆潜を見ると雖とも、其の主義は、永遠無窮に傳はりて、全世界を蔽ひ、誠なる、愛なる、正しき神が、總ての人類を化成するに至る迄は、吾がユニテリアン教徒の開拓を要す可き時也、進め々々、爾ユニテリアン教徒の主義と熱心とは、以て成効を期す可き也。

○「合理派」と合理主義

「合理派」は十八世紀に於ける獨逸文華の一形狀にして超自然的啓示論者と唯理的非啓示論者の中間に立つものなり、而して道理的倫理的方法によりて宗教を説明し自然的詩歌的の方法によりて聖書を解釋せり、されどもヘルデル、ヤコビ、フイヒテ等を經てシユライエルマッヘルの出るに及び遂に衰微せり、

思ふにユニテリアン教は「合理派」と同感の點少からざるべし、然れどもユニテリアン教は獨逸の一派なる合理派を再興せんとする者にあらざるは勿論、信仰、學說及び歷史的關係に於ても異る所あるなり、ユニテリアン教徒が常に唱ふる合理的宗教とは、合理主義若くは學理的の謂にして、決して「合理派」の謂ひにあらざるなり、世人動もすれば此の明白なる事實を混同し去らんとするものあり、爲めに茲に一言す、

○感情は盲目なり

曰く感情七分、道理三分、曰く道理七分、感情三分、何れか是何れか非、將た又た兩者共に偏せるか、吾人今茲に言はず、唯だ感情は盲目なり、之が教導、指示を受くる時は狂奔、頑迷の溝壑に落つるの憂ありと云ふを以て足れりとせん

○記臆せよ

基教徒曰くユニテリアン教は破壞的なり、若し夫れ「オルソドックス」の迷信を破壞する點より曰へば之れ或は然らん、佛教者曰くユニテリアン教は耶蘇教なり、若し夫れナザレのイエスと共に天父を信じ博愛を說く邊より曰へば之れ或は然らん、されども記臆せよ迷信を破壞するは眞理を建設せざるの謂ひにあらず、福音の粹を摘むは普通耶蘇教の謂にあらざるを。

○理想的と實際的との區別

古今東西に於て神學者宗教家の現出せしと少しとせざるなり、而して其の精神目的の在る所那邊なりやと問へば、皆な等しく眞理の考究實行に外ならずと、之れ所謂理想的方面より觀察したる所のものなり、然れども斯る同一の理想は果して能く實際に發表せられたりや、曰く否、近く之が例を基督教に取るも甲乙の教派を論ぜず其の目的とする所は皆な學理的、歷史的、福音の一燒點なるも、實際に現在せるものを視れば學理的唯一神教者もあり、教義的三一神教者もあり、絶對的原理說もあり、神人同形同情說もあり、儀式的禮拜者もあり、心靈的修養者もあるありて其の種類の多き程度の隔りたる實に驚くべし、之れ所謂實際的方面より觀察したる差別の點なり、已に差別の實あり此れに

相當せる相對的名稱の起るは當然の事なりとす、曰く自由派、曰く固執派、吾人は實に其の名の好當せるを喜ぶものなり、試に所謂固執派と自由派とを相比較して見よ、固執派は舊來の古說に固着し自由派は口碑教權の羈束を脫離せるにあらずや、彼を固執と呼び此を自由と云はずして將た何とか曰はん。

時事

○己を欺き人を欺く者　X　生

近時教育と宗教との關係に就て論ずる者頗る多く、殊に熊本縣に於ける外教信仰事件以來、教育家にして宗教を論じ、宗教家にして宗教を論ずる者日に多きを加へ、今や國內數百千種の新聞雜誌、其の社說に於て論說に於て、將た又雜報に於て、每號數頁若しくは數十頁の記事を見ざるとなきに至れり。吾人は其の國家の大事に處して、斯く迄世人の注目を惹起するに至りしを喜ぶ者なり、吾人は我國民の公事を議する斯く迄綴密に至りしを喜ぶ者なり、吾人は早く其の注目の結果として眞理の光明を望む者なり、吾人は速に其の審議の結果として公平の一致を待つ者なり。世人幸に吾人の希望と怡悅とを滿足せしめ得るや否。嗚呼危い哉、吾人の希望と怡悅とは、一夜の夢、醒めて恨やしや、誠に賴み少なになりにけり。見よ世の熱注する處狂奔に馳せ、大勢の趣く所雷同に歸す、今日或る部の論客が、宗教と教育との關係を論ずる者、狂奔に非らざるなき乎、彌次馬的の雷同に非らざるなき乎。心に一定の見識なく、腦に一點の思慮なく、唯彼の人は斯くなせり、故に吾も然かせざる可らず、某は斯く論せざりき、故に吾も亦斯くなす可らずと、己を瞞し人を瞞するの窺鼻息的論理を敷衍するの徒に非らざる乎。呵々

○某記者と感情　X　生

世上の事物斯く迄に併行を得ざる者哉、彼に長けたる丈け夫れ丈け此に拙なり、甲に盛なる丈け夫れ丈け乙に足らざるとは。古人をして中庸を論ぜしめたるも、亦偶然に非らざるなり。

世に其の人ありと知られたる某雜誌記者、記者は雜誌社會に顔を出したる最も古き丈け、最も世に知られたり、最も知られたる丈け、記者の一言一行は、社會の耳目を惹くに足る、嗚呼盛なる哉記者の名、嗚呼榮なる哉記者の身、記者幸に國家の爲に自愛せよ、卑屈、無氣力、便佞等の惡魔は、記者の身を襲はんとして記者を圍繞せり、記者遂に曲學阿世、窺鼻息的論客たらずんば幸なり。倒れぬ前の杖、記者大に用心せよ。

我等小僧竊に記者の性行を窺ふに、記者は實に己を愛し自國を愛する感情的人物なり、記者の情緒は最も熾盛なり、其の熾盛なる丈け夫れ丈け其の奴隷となりて、智上力の活動甚だ迂なるが如し、記者が國家を愛するは忠臣に似たりと雖とも、却て國家の爲めには有り難迷惑なり、其の感動の發作する所、己れ以外の事物の是非を識別するの能力に乏しく、頑固、攘夷等の偏僻心を涵養し、取長補缺の進歩心を杜絶し、國家の發達を妨害すると甚だ多し。記者の感情所謂守舊的觀念に訴へて國家に盡さんとするの情、之を鄙夫凡人に取りては、或は賞す可しと雖とも、苟も新聞雜誌の記者として、天下の耳目を以て自ら任ずる者、其の是非をも究めずして、彼れ外教なるが故に信す可らず、是れ自國のものなるが故に賛す可しと云ふに至りては、記者亦チョンマゲ先生たらざるを得る乎。記者常に耶蘇教を目して勅語の旨趣に反し、國躰相容れざる者となす、記者何に由て此の言を發するか、小僧素より耶蘇教徒に非らず、故に其の教理を知らざる者なれば、其の教理の是非を論せずと雖とも、猶ほ耶蘇教理は勅語の趣旨に反し、國躰相容れずと云ふの故を以て、教育社會より排斥し能はざるを知る、若し耶教にして勅語の旨趣に反し、國躰相容れざるものとせば、取りもなほさず、國家の安寧秩序を妨げ、臣民たるもの丶義務に背く者と云はざる可らず、然らば教育社會に於てのみならず、我邦國内に於て之れが布教を禁ぜざる可らず、然るに國憲之を認許し、國民之を公許し、記者自身も亦之を默許せり、然るを猶國躰を紊亂し、勅語の旨趣に反するとなし教育社會より排斥せんとする乎。記者

唯感情にのみ訴へ、守舊的觀念を以て、百年の長計を誤ると勿れ。終に望み記者の爲めに御注意申さん、記者にして若し耶教をして絕對的に關係せしめざらんと欲せば、我邦内より之を放逐するに如かず、其の之を放逐するには記者の如く、唯單に國躰相容れず、勅語の旨趣に反すると云ふに止めず、進んで耶蘇教理の何々は國躰の何々に反し、何々の信條は勅語の何々に反すると、一々精細に指摘する所あれ、然らば小僧も或は賛するとあらん、然らざれば小僧は偏せず黨せず中立の地位に立つ者なり。

○政治と宗教

苟も一部落をなし、一國家をなす、必ず之に伴ふ所の制裁即ち統治機關なかる可からず、英國は英國に伴ふ所の制裁あり、米國は米國に伴ふ所の統治機關あり、佛國は佛國、曼國は曼國、魯國は魯國、清國は清國、日本は日本の如く、其の國の文明の中華國たると、野蠻の邊土たるとを問はず、皆之に伴ふの統治機關あらざるはなし、此の制裁ありて始めて、吾人の安寧幸福を維持し能ふ者也。とは云へ、國家の統治機關即ち政治なるもの、元是れ肉躰に關する制裁、有形的の顯象を呈したる時に於て、始めて其の能を顯すも、未だ之を未發に制裁するの功を有せざる也。若し人類にして禽獸的の生活ならしめば或は可ならん、苟も人類的生活をなすものならば、其の内部に對する制裁、無形的の顯象に向ひて制裁を與ふるものなかる可からず、是れ宗教の由て起る所以なり。

今や一歩を進めて、肉躰と精神との關係を探るに、精神が、肉躰の影響を受くるは勿論なりと雖とも、肉躰が、精神の指揮に依て使役せらるゝが如き比に非ざる也。恰も主從の如く、一は發動的作用にして、一は受動的作用に屬するを以て、往々肉躰は精神の奴隷たるとあり。外部の肉躰を制裁する政治は、或る場合に於て、内部の精神を制裁する宗教の爲めに、動搖せらるると、吾人屢々之を觀る。彼の十六世紀に於ける和蘭獨立の如き、十七世紀に於ける英國革命の如き、十八世紀の佛國革命の如き、皆直接或は間接に宗教心の發

作に非ざるはなし、故に政治は或る場合に於て勢力薄弱なるとあるも、宗教は總ての場合に於て、強大の潜勢力を有すと斷案を下して可也。

○宗教と教育

基督教は宗教なり、佛教も宗教なり、回教も宗教なり、雖も然宗教は基督教に非らず、宗教は佛教にも非らず、回教にも非らず、唯佛耶回の如きは、宗教の一部たるを以て、基督教に缺點あるの故を以て、佛教の否理あるの故を以て、又回教の迷妄なるの故を以て、直ちに宗教全躰を攻撃せんとするは、偏頗の極と謂ふ可し。其の佛耶回の何れを問はず、幾分の缺點存するとは、識者の既に指摘する處、宗教家夫れ自身も亦大に悟る所ありて、今や科學哲學等を基礎とせるユニテリアン教の新運動を見るに至りしに非らずや、故に今後宗教を是非せんとする者は、一宗一派に偏するとなく、眞の宗教其のものゝ上に眼光を注げ。

目以て視、耳以て聽き、鼻以て嗅ぎ、口以て味ひ、皮膚以て觸れ、而して能く吾人の思想界を造る。視て以て模し、聽いて以て擬し、嗅いて以て似し、味ひて以て撰し、觸れて以て採し、而して能く吾人の風俗習慣を造る。其の一度造りたるの思想、風俗習慣は再び三度改む可きに非らず、其の改むべからざるの思想、風俗習慣は、如此皆五官を經て來る所のものなり。人世百年の基礎をなすものは、實に其の幼年に於ける教育に存す、而して其の幼時の教育を司る者は、學校教育よりは寧ろ社會自然の教育こそ偉大なる勢力を有する者也、何となれば吾人の五官に感觸する所の外界の物象は、學校内に於ける故意的の物象よりは、なほ多くの區域と、尚ほ多くの時とを有つものなればなり、故に社會の自然的環象は、人世の最高なる師傅なりと謂つ可し。故に社會の孔子的生活を視る所孔子を養ひ、釋尊的生活を視る所釋伽を成し、基督的生活を視る所基督を出し、馬哈德的生活を視る所馬哈德を生ず、其の他正成的は正成を出し、温公的は温公を出し、孔明的は孔明を出し、牛董的は牛董を出すを以て、吾人人類をして最も高尚に、最も完全に發達せしめんと欲せ

ば、學校教育の完全は素よりなりと雖とも、與に社會自然的環象をして孔子、釋伽、基督、馬哈德、正成、温公、牛董的ならしめざる可らず、是れ最も教育者の困難とする所なり。パー、ロック氏曰く、「社會ハ人類ノ學校ナリ、人間ハ單ニ社會ノ風潮ニ倣フ者ナリ」と而して其の社會の自然的環象を制裁するものは、有形上に向て政治ありと雖とも、風俗習慣の第一源泉は實に無形上に存するものにて、此の無形上の制裁を與ふるものは一に宗教の力に存すると、吾人の斷じて疑はざる所なり、ベン、ジヨンソンの言に「一國ノ力ハ宗教ニアリ」と、又ウエリントンの聲として、吾人に教へたるとあり、「宗教ニヨラザル教育ハ、伎倆アル惡魔ヲ造ルナリ」と吾人は此の二士人の言に服從する者なり、孔子も既に「君子ニ三ノ畏アリ」とて、天命を畏るゝを首位に置きしに非らずや、故に人類の無形上の制裁をなすには、必ず上帝を拜するの教ならざる可らざると明かなる可し。雖然吾人は宗教を以て、直に現今の學校道徳教育に代用す可しと云ふに非らず、唯道徳教育は宗教の賛助を經るに非らざれば、其の目的を貫徹し能はざるを云ふなり、請ふ世の士人、偏見に陷る勿れ、須らく正大なる眼光を放ちて、吾人と共に眞理の光澤に浴することを望む可き也。

〇信教自由の及ぶ所

信教自由問題の嘖々たると、今日より甚だしきは非らざる可し、耶蘇教の公開狀と云ひ、教育社會の中心なる、大日本教育會に於ける小學教育の本旨と、信教自由の權利との關係問題に於ける、事一宗一派に止まるが如しと雖とも、其の及ぶ所、帝國憲法の明文に涉り、臣民全躰の權利に關し、復た一宗一派の私事に非らざるなり、信教自由の問題たるや、決して今日の問題に止まらず、由て生ずる所の翌日の生活に關するなり、豈輕忽に附す可んや。然れども事政治に涉るに至りては、吾人の論じ能はざる所なれば、熊本縣知事の處置に於ける基督教問題に就き是非するを止め、吾人の能ふ丈けの範圍内に於て信教自由の及ぶ所を論じ、以て世の政論家、教育家、宗教家の參考に資せん。

世人の此の問題を論ずるに三あり、一は帝國憲法第二十八條よりして、其の敎理は國家の秩序を紊亂し、臣民たるの義務に背くや否に論及する者、一は單に明治二十三年十月に於ける敎育勅語の旨趣に反するや否を以て宗敎を排斥せんとし、一は小學敎則より學校敎員生徒は如何なる點まで信敎の自由を有するや否に論及する者にして、第一項は守舊的觀念に訴へて、基督敎を抗擊するに止まりて、未だ宗敎家として與に論ずるに足らざるなり、第二項は第一項と同じく、唯前者は政論家に屬し、後者は其の身敎育家として、單に外敎なるが故に排斥す可しと云ふの差あるのみ、第三項は即ち吾人の今より之を論ぜんと欲する所なり、世の君子少しく考ふる所あらば、之を決定するとの甚だ容易なるを信ずるなり。

抑も信敎の自由は我等臣民の與へられたる權利なり、如何なる大權力、大威力、大金力を以てするも、亦奪ふ可らざるの權利なり、故に其の敎員たると、生徒たるとを問はず、勅語の旨趣に戻らず、職務に對し之を妨げざる限りは、信敎の自由なるは、吾人の冗辯を要せざるなり、而して其の勅語の旨趣に反するや否は、一は國憲上に關し、一は敎理上に關する問題にして、吾人の陳ぶる所に非らざれども、敎員及び生徒たるの職務に對して背くや否は、敎育社會に於ける目下の信敎自由問題なり、嘗て敎育報知紙上、文部當局者の意見なりとて記したる其の中に曰く

(前畧) 道德敎育てふ事も、一に勅語の趣旨に本づき、本邦固有の道德を涵養するに在れば、普通敎育には、宗敎なしと斷言するも差支なし、故に佛敎なり、耶蘇敎なり、苟くも敎員たるものにして、其の敎旨を敎育に持ち込まんとし、若くは學校の內部に波及せしめんと企つるものあらば、是れ敎育其の物の本旨に反する上よりして、須らく相當の懲戒を加へざるを得ず云々、

是れ素より正當の言、其の敎育と宗敎との分立す可き事は、世論の既に是認する所、今日殊更に陳ぶるの要なきなり、唯今日吾人の以て大に講究す可き所は、如何なる點まで信敎自由の權利を有すかの疑問なり。余輩嘗て文部の有力家に聞く、(敎育報知記者の重んずる所に倣ふて)『宗敎と敎育とは素より分立す可きものなれども、絕對的に關係を有せざるに非らず、唯其の信敎の自由は、國民の權利なるが故に、殊に敎育を以て一に偏せしむるの不可を言ふなり、其の敎育なるもの

は、實に外界の風俗習慣に關するものなれば、其の風俗習慣を左右する最も直接なる宗教とは、全然分離す可きに非らす、唯今日に於ては、具躰的に學校事業に立ち入るを避く可きのみ、故に其の宗教にして國家の安寧秩序を妨げず、臣民たるの義務に背かざるの限りは、其の教員たると生徒たるとを問はず、學校事業以外に於て之を信ずるは自由なるのみならず、特に教育家たるものは、最良なる宗教を撰んで之を信じ、愚夫愚婦、田夫、野老を導びきて、大に其の風俗習慣を改造せざる可らず、然るに教育報知一派の徒は、彼の基督教は外教なるが故に信す可らず、外教信徒なるが故に教員生徒たるの資格を有せずと云ふも、畢竟之を守舊的觀念に訴へ、若しくは或る一部の基督教徒が爲せる行爲に向つて、抵抗するに止まるのみ、如何に基督教徒なりとて、國家なく皇室なしと云ふの宗教には非らざる可し、彼等の神と云ひ天帝と云ふも、皆佛教の眞如と云ひ、神教の天御中主神と云ふも、儒教の所謂天と云ひ天命と云ふも何ぞ異ならん、國家を愛し皇室を敬するも皆天帝の命なり。天帝を拜するが故に皇室に對して不敬なり、眞如法性を說くが故に帝王なきなりとは、三才の童兒も肯首せざる可し、啻に肯ぜざるのみならず、其の愚を嗤はざるものやある。教育報知一派の徒は、耶蘇教の何たる、宗教の如何なるものなるかを知らず、唯一二の固信迷信家の行爲を捕へ來りて、神なるものは宇宙の眞理以外に存するものとし、忠君、愛國、孝悌、信義、恭儉、博愛等の諸德は、神の光に非らずと考ふるが故なり、耶蘇教（其の他の宗教とても固信迷信ならざる限りは）の所謂天父なるものは、忠君、愛國、孝悌、信義、恭儉、博愛等の諸德及び吾人の推測す可らざる圓滿無量の眞理を有せるものなる可し。然らば神を敬すると云ふも、天父を拜すると云ふも、同じく帝王を重んじ、國家を愛する意なり』と、是れ文部全躰の意見として見る可きのみならず、苟も文明の空氣を呼吸し、少しく思慮ある者の否認せざる所、敢へて再び吾人の辯解を要せざる也。

○政治家と大政治家

奈何可レ利ニ我國家一との利國主義は、是れ果して政治家の要素なる乎、誠に然り、利國は政治家の最要職務にして、國家の爲めには、身を忘れ、妻子眷族を棄て丶之に赴くの覺悟なかる可からず、ペロピダス氏の所謂、私人は己の爲めに勞せざる可からす、然れども政治家は人の爲めに勞せざる可からず的の觀念なかる可から

ず、ホーマー氏曰く、國家の爲めに死するは、最大の幸榮なりと。再言せば、國の政治家たり、宰相たり、施治者たる者は、專ら其の我國の利益を謀り、其の言語、風俗、習慣、制度、歷史等、自國特有の事情に留心せざる可からず。果して然らば、日本の宰相は日本の宰相、英國の施治者は英國の施治者、米國の政治家は米國の政治家として、其の腦裏常に我れの觀念を有し、我國を偏愛し、他國を夷狄となし、利我國の政策を是れ講ずれば則ち足れりとなす乎、一般の政治家たるには則ち可ならん、普通の經綸家としては則ち可ならん、然れども未だ之を以て世の大政治家、眞の經綸家となす可らざるなり。凡そ大政治家、大經綸家を以て自ら任せんとする者は、利國政策の上、更に一步を進め、本國を愛すると共に公理を愛せざる可らず、天下の正理、宇宙の公道を愛して、國家を正理公道に向はしむるは、國家に盡す最後の善事なるを知り、之を其の政策に是認せざる可らざるなり。スペンサー氏曰く、新に正理を發見して、之を國民に授くるは、眞正の施治者なりと。國家は誠に貴重なりと雖とも、爲めに宇宙の正理公道を枉ぐ可らず、博愛、慈善、直實、潔白等、個人に於て貴重なるものは、亦國家の生活に於ても均しく貴重なるものなり。自己を愛せんが爲めに、他人を傷くれば、人之を觀て何とか言はん、自家を益せんが爲めに、隣家を害すれば、人以て何とか言はん、宜しく己を愛する如く他人を愛し、自家を憐む如く隣家を憐み、自國を重んずる如く宇宙に涉る所の正理を重んず可き也。唯僅に一局部に跼蹐たるは一般の政治家、普通の經綸家とは爲す可きも、未だ眞の經綸家と爲す可からず、苟も世の大政治家を以て自ら任ずる者は、須らく其の胸中に、宇宙を達觀するの大經綸、大政策を劃し、以て自國の安寧幸福を企圖す可きなり。

○一步を進めば吾が黨の士たらん

近頃米國メソディスト教會監督ニューマン氏は、イリノイス州西北大學校に於て、學生に告げて曰く『予は教會よりも大學を撰び、僧侶よりも哲學者を撰ばん、然れども予が最も欲する所は、哲學者たる僧侶、學問の聖壇、上帝の祭所たる教會なり、予は學問なき宗教よりも、宗教なき學問の爲めに盡さん、宗教と伴はざる學問は、懷疑を生じ、學問と伴はざる宗教は、迷信を生ず、予は迷信よりも寧ろ懷疑を撰ばん』と、言甚だ吾人の意に近し、他のメソディスト教徒も、ニュー

マン氏の言に鑑み、大に勉むる所あらば、吾が黨の士たるに庶幾からん乎。迷信固信は未だ諸君メソディスト教徒の身邊に蝟集せり。

彙報

○自由神學校の近況

豫て報ぜし如く、夏期休業中なりし自由神學校は愈々去ぬる六日を以て開校せられ、先つマッコレー氏の宣言ありて後入學試驗を擧行したるに志願者十數名の中聽講を許可せられたる者十名ありしと云ふ。猶ほ聞く所によれば敎員も前學期よりは日本人二名を增聘し何れも熱心と勤勉とを以て其の日課に從事し特に校長マッコレー氏は畢生の全力を盡して同校の爲めに計る所ありと云へば、其の前途大に望を屬す可きなり。嗚呼今日各宗各派互角の勢を以て互に爭闘するの時に當り斯くの如き比較的宗敎、科學、哲學的宗敎の種子を見んとは吾人の大に喜ぶ所なり吾人は速に彼の徒が美しく麗はしき希望の花を撒き投けて漏れなく吾が宗敎社會の弊風を一掃するに至らんことを期して待つ者なり諸士請ふ之を慫めよ

○公開狀に關する運動

余輩前號に於て公開狀に關する記事を載せ讀者の注意を促せし言あり「其の事單に一二の基督敎徒に屬すと云へとも關係の及ぶ所甚だ容易ならず思想社會の苟も す可からざる所あるを信ず」と果して思想社會の着眼今や進んで基督敎徒の大臣訪問となり大日本敎育會の小學敎育の本旨と信敎自由の權利關係問題となれり余輩は此期に際し讀者とともに大に講究する所あらんとす。

○内務文部兩大臣と信敎自由

基督敎信徒處分事件に關し基督敎徒委員中、横井時雄、原田助の二氏は去月三日文部大臣を訪ひ事情を陳述して大臣の意見を叩きたる有樣なりと云ふを聞くに

兩人頃日來新聞紙に掲載したる公開狀に依て既に御承知のことと信ず即ち熊本縣下に於て敎育社會に起れる事件にて同縣知事松平氏が小學敎員は基督敎を信ずべからずと演說し及同縣山鹿高等小學校長は基督敎聖書を研究したるの故を以て同校生徒某を退校せしめたることに就きて大臣閣下の御意見を伺ふことを得べきや

大臣然ればなり其一件は既に聞及び居れり先日來松平

知事在京中を幸ひ同人を招き事情を聞質したる所同人の陳ぶる處によれば小學教員が基督教を信ずることを禁止する旨の演說をなしたることなく又山鹿高等小學校に於ける一條は更に聞及ばざる所なれば篤と取調べ見るべしとの答なりし松平よりは其後諸新聞にて正誤文を掲るとの事なりし

兩人　横井は先日松平知事に面會し質問に及びたる所同氏は答へて自分は演說中に小學校教員の政黨に加入することを禁ず又宗教に熱心するは宜しからず小學教員は成るべく宗教を信ぜざるを善とすとのことを公言したりと明かに申されたり右の答辯は諸新聞紙上に掲載したる處及自分共の他より聞知したる所と少しく相違ありと雖ども今假りに知事の云ふ所に過ぎずとするも熊本縣下の如き保守的思想の盛んにして基督教に反對する精神の烈しき地方に於て知事の口よりかゝる演說をなすに於ては其效力殆んど之を禁止すると異なるなし今自分共が大臣閣下より承り度き所は文部省の御趣意は果して松平知事の演說の如く小學校教員又は生徒が宗教を信ずるとは成るべく止る樣にせよと云ふにあるや如何伺ひたし

大臣　文部省教育の方針は勅語に基き德育を施すにあれば教員か其職務上此主意に障害を與ふる塲合には其職を免ずるともあるは勿論なり又教員の政黨に加盟するとは實際に弊害ありと認むるが故に之を聽るさゞるなり信教の事に至りでは文部省管理外のとにして之を各個人の自由に放任して問ふ處に非らず左れば教員が佛宗であれ耶蘇宗であれ又無宗旨であれ文部省に於ては關する所にあらず

兩人　閣下の御意見の如くなれば自分共に於て更に異存なし念の爲め伺ひ置くべきとあり府下に於て發行する教育報知なるものは教育社會に有力なる雜誌のよし又文部省の或一部の意見を代表するやにも聞及べり然るに同雜誌は今般の事件に付き某小學校長の處置を以て至當なりと辯護し小學校教則大綱の主意に適へりと論じたり斯の如きは文部省の御意見にあらざるべし如何

大臣　勿論文部省に於ては該新聞に毫も關係なし、

兩人　今般の一條に類したる事柄は獨り熊本縣下のみならず各地に於て往々耳にする所なり畢竟中央政府の御趣意のある所を誤認したるより生ずることゝ信ず依て今朝問答の大要を記し之を公けにして差支なきや

大臣　差支なし（其他は餘談に涉れば略す）

以上の如くなれば此方針に違反したる教員官吏は凡べて相應の處分あるべき事と信ず

其の後委員の中横井時雄、平岩愃保の二氏は去月六日内務大臣井上伯を訪問して事情を陳述したるに伯は二

氏の陳情を聞き答て曰く「其の一件は承知せり松平知事にも既に彼の書面を示し尋問せし處知事に於ては事實相違の廉ありと云へり然し余は其事の有無に拘はらず知事は妄りに其部下人民の信教心に立入るべきものにあらず若し知事にして妄りに其部下人民の信教心に立入りて可なりとせば甲教を奉ずる者知事たらば甲教信仰者を保護して乙教信者を排斥し乙教を奉ずる者代りて知事たらば前に反して甲教主義者を排斥せん果して斯の如くならば其弊實に言ふ可らず依て知事は妄りに人の信教心に立入る可き者にあらざる旨意を同氏に談じ置けり」と付に右き該教徒は一日銀座會堂に會して今後の運動法を協議せりと

○教育と信教との關係取調委員

大日本教育會に於ては該會評議委員日下部三之介氏の建議に係る小學教育の本旨と信教自由の權利との關係取調の爲此程九名の調査委員を設けたり即其人々は

杉浦重剛　日下部三之介　元良勇次郎
能勢榮　西村貞　三宅米吉
村岡範爲馳　山縣悌三郎　國府寺新作

○宗教政治復活せんとす

大膽にも自由の政策に左袒して自由の爲めにすると思ひし獨逸新帝は今や公衆の權利自由に干渉せんが爲め僧侶政府を將に造り出さんとせり而して其の之を證明するに足れりとする風説は第一、新に苛酷の收税を爲す可し第二、政府と寺院との間に奇怪なる同盟を設く可し第三、獨逸の撰擧法に干渉して獨逸國民が畢生の實と頼み切たる他人の妨害を受けずして候補者を撰ぶ權理を剝奪す可しと此三箇條の中にて最も獨逸人民の恐慌を招くものは第三なる可しと云へり此週のキエールニッシエッアイッング（新聞）に所謂る中和黨が「階級ある人民」の爲めに尙ほ大なる權力を要求する議論あり階級ある人民に權力を增さんとするは取りも直さず階級外の群民に之を減ぜんとするものなり尙ほ一層重大なる新報はポットスダムの王宮及びウィルヘルム町の事務所に於ては國會議員撰擧法を變じて記名投票となし政府の威權を以て抵抗者の幾分を買收せんとするに在り而して宰相カブリヴィは獨逸現今の有樣にては爲政者と被政者と有階級民と無階級民と君主と國民との間に爭鬪の期接迫したるを知らざるもの丶如く伯は羅馬舊教の集權黨の救助を借らば改進黨、社會黨の反對に抵抗し國家を危急より救ふ可しと想像し居れり蓋し伯の説に羅馬教黨は昔時の好を以て保守黨を助け匿名投票を廢して記名投票を採用することに贊成すべしと云へり而して其の最も果報なるは羅馬舊教の集權黨にして彼等は若しも隨うて羅馬に得することとありとすれば隨ふことを辭せざる可し若しも彼等にして隨はん乎カブリヴィの勝利なり然れども此勝利は獨逸國の爲めに害惡を爲すこと少小に非ざるなり帝は毎日マルモル王宮に於てカブリヴィ伯及び伯の參謀長伯爵大將

フオン、シユライフエンと軍備議案に就き議する所あり宰相は此議案を耶蘇降誕祭(クリスマス)の前に國會へ提出せんと苦心最中なり陛下は未だ之を許容せずと雖も今日の所にては宰相の意見を嘉納し居るものゝ如し然るに獨立の獨逸の新聞紙は痛く之を攻擊し居れり獨逸の事態頗る困難と云ふ可し武勇に誇る大國も獅子身中の蟲には辟易することゝならんが唯氣の毒の至りなりと或る外字新聞に見ゆ（時事）

○パルレル、シユミーデル氏の歸國

氏は獨國普及福音敎會の宣敎師にして數年來我邦に在て宗敎界に働かれたり其の自由宗敎のため學理的神學のため功績の少からざりしは今更に言ふを待たず、氏深く歷史的批評學に達し又た兼て宗敎哲學敎義學に通ぜり彼の「眞理」紙上の論說、諸處に於ける說敎は皆な之が證をなし又た親く氏に敎を受けたる者の能く知れる所なり其の有神、樂天主義の哲學論法は幾多の無神、厭世主義の徒をして悟る所あらしめ殊に其の歷史的―事實的―批評は超自然及び敎權論者をして大に改むる所あらしめたり、今や任期滿ち數日の後を以て我邦を去らんとす吾人は別離を悲むと共に我が自由宗敎界の一勇將を失ふを惜むなり聊か玆に氏の功勞を謝し併て歸路海陸の平安を氏及び其の家族のために祈る

○丸山通一氏の按手禮

本誌特別寄書家の一人にして「眞理」雜誌記者同氏は嚮きに新敎神學校を卒業し居られしが去月卅日按手禮を受けられたり當日の司式者はパルレル、ムンチンゲル氏にて外にパルレル、シユミーデル、パルレル、クリストリーブ、橫井時雄、原田助諸氏も按手をなせし由

○ユニテリアン第一協會近況

◉役員撰擧　ユニテリアン第一協會には敎師と稱す可き者あらざるを以て協會の發達上幾分の障害たらんを懸念して有りしが去月二十三日小集會を開き敎師の適任者を得る迄幹事三名を撰擧し協會一切の處務を委任することに議決し直に撰擧投票を施行せしに神田佐一郞、古莊三郞、土谷忠治の三氏當撰し直に承諾せられたりと云へば同協會の面目是より一新せん。

◉說敎　常の如く每日曜日午前十時より必ず內外人の說敎ありて每會相應の來會者もあり益々自由思想の發達を見るが如しと云ふ、因に記るす說敎の終には來會者よりのユニテリアン敎義に關する質問に應じ最と懇切に應待するとのとなり。

○藥研堀敎會近況

◉說敎　藥研堀敎會は發會以來僅々數月に充たずと雖も來會者非常に多く入會者も每會增加の模樣にして以前よりは其の種類を異にし有望の信者を出せりと云ふ

◉研究會　每金曜日ユニテリアン敎に關する研究會を開き討論或は講義等ありて會員を裨益すると尠なからざるを以て會員も喜んで出席し且つ追々入會を申込む者多きに至れり此の勢にては同會堂も狹隘に至り增築せざる可らざるに至るならんと云へり。

論林

左の一編は先月一日、富士見軒に開會せる獨乙宣教師シュミーデル氏の送別會に於て、横井時雄君のせられし英語演説の和譯にして、社員の所望に任かせ、今般横井君より寄稿せられたるものなれは、之れを論林欄内に掲け以て讀者に紹介す、

諸君　今夕余は三演説の一をなすべきの榮を荷ふ余は此榮譽を感すると共に稍〻惑なき能はず蓋し委員より演説をなすべき依託を受けし時之を英語にてなすべしとの意を通せられたれはなり、余に先きだつマコレー氏は其の土音なる英語を以てし我に次かんとするシュミーデル氏は其の土音なる獨語を以てせんとし而して余ひとり外國語なる英語を以つてせさる可らず、余甚た躊躇す然れども此に明言するを要せざる理由に由り余は委員の請を納れたり即はち英語にて演説を試むべし、

苟も日本人にして愛國者たるものは外國より此國に來つて此の尤も切迫なる時勢に對して種々の援助を與ふる人々に對し感謝なきものはあらざらん、夫れ日本は古來外國に學ふを恥とせざりしなり、其の學ふや物覺へよくして且つ分別を以て習傳せり、其れ故に其の學びしものは皆な能く消化して新知識を自得し自家特有のもの丶如くなせり、佛教、儒教、支那の制度風習皆な之を輸入せり而して多くは外國教師の手を經て輸入せり、然れども我國民は幾干もなくして悉く此等の新事物を歸化せしめたり、彼等は遂に其の原との形を失して日本の佛教、日本の儒教、日本の制度、日本の風習となれり、汎く此國に行はる丶支那の書籍と雖も吾人は吾人の流儀に之を讀むなり、支那の文字も亦た吾人の勝手に之を用ひ之を讀むなり、

或る外邦人は我邦の歴史を知らずして輕忽にも批評して曰く日本はあまり急遽に新事物を輸入す、彼等曰く譬へばこれ妙齢の少婦が大食するに似たり、其食傷す

るや必せりと、然れども彼等は日本はアマゾン婦女の如く强健にして、先祖より强壯の胃脈を遺傳せられたることを知らざるなり、若しも是より二十年若しくは三十年の後に至らば最早獨逸風の兵式もなく英國風の海軍もなく、佛國風の法律もなく、米國風の文明もあらざらん、我日本は茲に獨立の文明を發達し得て其令名を萬國に輝やかすべきなり、

扨て茲に尚一つ新らしき外物ありて輸入を要求す他なし基督敎是なり、或る意味にて云はゞ基督敎は日本人に取りて必ずしも新物に非す、モーゼや預言者や使徒やに現はれ玉ひし神は亦た古來我日本にもありて前の名を以て現はれ玉へり、其故に我邦の最も善き人の心や尤も善き制度や尤もよき文學の中には基督敎の悪業の幾分を認むるを得べきなり、然れども我邦には未た曾てイエス、キリストを有せしことなし、故に其の道完全ならず其敎十分ならざりしなり、今や我國民尙ほ其のキリスト敎に對するの位置に於て未定なりと雖も吾人茲に集れる人々に於てはキリスト敎を輸入せざる可らすと云ふことに付ては皆な同一説なりと信ず、吾人は基督敎を要す、尤も純粋にし尤も有力なる基督敎を要す、而して基督敎の元氣を以て舊來の制度文物を一新せんことを要す、

然しながら　諸君よ基督敎を傳ふると云ふと其の宗派學説をそのまゝに擴布することとは自ら別事なり、歐米に於てさへも有識の人士等が一箇の神學や一箇の宗派の中に割據して以て獨り自らに關係ある宗派や學説に於てのみ基督敎の眞面目を認むを得べしと思惟せし時は過き去れり、例へはバプテスト派は唯た浸めを受けしもののみ眞のキリスチヤンなりと云ひ或は監督敎會は唯た自己の敎職のみ人をキリスチヤンたらしむるの權ありとし或は三一敎理を信ずる人々は唯た此敎理を信ずるもののみ救はるを得べしとし、或はユニテリアン派は唯たその意見のみ道理ありと信ずるの時代は過き去れり、

吾人もし歴史を讀まは神は未た曾て一派一説の人に專有せらるゝを肯せざりしを見ん、何の時にも何の處に

も凡て正義を犯し平和幸福を求めたる人あらは神は必す救を以て其靈に臨み玉ひしを見ん、故にシユライエルマイヘルの如き懷疑的の人もニユウマンの如き天主敎徒も、マルチノーの如きユニテリヤンも又凡ての儀式を廢棄するクエーア敎徒なるホイチールの如きも、他のモーリス、ロベルトソン、スポルヂヲン、ビーチヤル、ムーデと同しく基督敎の中に自己の救と國家の救あるを認めたり、

然れは此の十九世紀の末端に立ちて而して尙ほ神とキリストは只た自己の屬する一派に於てのみ在すと信するものは瞽者を手びきする瞽者たるのみ「此山に於てのみならす又彼山に於てのみならす」と最初の宣言は垂れられたり、此宗派に於てのみならす此學說に於てのみならす又は此形に由てのみならす、凡ての宗派凡ての形躰を通して、日本風により印度風に由り支那風によりキリスト敎は言ひ現はさるべしとは是れ新しき宣言の主意なり、而して此宣言の實行せらるゝの日は即ちキリストが新らしきエルサレムを率ゐて再び天より臨降し玉ふの日なるべく、天國は此世界に全く建てられて正義仁愛幸福平和は之に充滿すべきなり、

嗚呼此等の事は此れ恐らくは急に望む可らざるべし、吾人多分は肉眼を以て之を見るを得ざるべし、然れとも其の日の一日も速に來らんとは吾人の熱望なり、凡ての外國宣敎師は即ち此の爲に働く人々なり、吾人豈感謝なかる可けんや殊に今夕は獨逸の宣敎師シユミーデル氏に對して感謝に堪へざるものあり、

シユミーデル氏は恐らく數百の宣敎師中聖書批評學を專門とする唯一の宣敎師なりしならん哲學者はあり、善良の聖書學者はあり、神聖の心ある人はあり、熱心なる傳道者はあり、然れとも日本の敎會は未た批評學の何たるを知らざりしなり、此の時に當り聖書批評學の何たると聖書を歷史的に考究するの必要とを說きたるものは主としてシユミーデル氏其人ありしのみ、吾人恐らくはシユミーデル氏の結論に對して悉く同意することは出來さるべし、然れとも何人も、若しも苟しくも學問の何たるを知れる人たらは、聖書批評の必用

と歴史的考究の必用とを認めさるものはあらざるべし、或る少數の人はシュミーデル氏の說を聞き信仰を失せし人もありしならん、然れとも永久の成績を思はゝシュミーデル氏は大に傳道を益せし人と稱せさるを得ず、盖し眞理は最後の勝者なれはなり、余の如きは即ちシュミーデル氏は我邦宗敎界の思想をして益富瞻ならしむるに於て大功あるを認めずんはあらざるなり、

終に余は基督敎の一致に付き一言なき能はず、盖し一致は信條に由て生せず、又た意見の同一に由りて起らず、唯たキリスト的精神と人品との一致に由りて生すべし、而して人のキリスチヤンたるや否やも亦た此の一點によりて定むるを得べし、若しも其の人の心にキリストの精神の住むあらは、若しも其人か正しくして憐み深く、虚心にして敢勇ならば、其人か何宗派に屬し何意見を持するにもせよ余は之をキリスチヤンと稱せん何となれは凡そイエスキリストにありてはギリシヤ人とユダヤ人の區別なく、自主と奴隷の區別なく、日本人と獨逸人の區別なく、又た正統派と自由派の區別なけれはなり、

斯くて吾人をしてシュミーデル氏に對して告別せしめよ、敬愛するの朋友よ君は日本にありて貢工をなせり、吾人之を謝す、君國にかへるの日は亦た神の恩により君か新らしき貢工を初むるの日なるへし、君請ふ心安かれ君か蒔きし種は我日本にありて神恩により益良き實を結はん、而して神願はくは君と君が一族と共に永久に在せよ、

惟一眞神の躰。相。用を論す

佐治實然　演說

惟一眞神の躰。相。用を論究するは、世間に所謂理論である、單に理論と云へは、事實を離れて別に在るか如く思ひなすは、大なる謬見なり、如何となれは目前に可見の相貌ある事物の解說を與ふるか、即ち理論なれは、實事を離れたる理論のあるへき理由は、萬々無きことゝ斷言し置くへし、方今の世の中は實に議論の流行

する世界である、左樣に議論の流行する結果として、古人未發の眞理を開闡せしとも莫大なりと云へし、去る代りに、議論より生せし弊害も頗る多し、如何なる弊害あるか、今其一例を擧けん、甲乙の論者か各成立せんと欲する旨義、紛糾する塲合に於て、或は保守論と改進説の撞着する機會にありて、双方の語調を點撿するに、一方には理論上は兎も角、事實上に在りては必す斯くならねはならぬと云ひ、又一方には事實上は然あるにもせよ理論上より推すに必す斯く爲されはならぬと、相互に諍論を搆へて張皆相對すると少しとせす、右甲乙論者共に、甲の事實と認むるものを、乙か全く許容せさるにも非す、乙の正理と信する所を、甲か敢て首肯せさるにもあらて、猥に論鋒を交ふるかゆゑに、何時までも論旨の歸着するとなく、傍觀者をして論理の正否を簡別するに苦ましむるのみならす、論者其人と雖も自他の勝敗を確認するを得さるか如きとかある、是は畢竟するに、甲乙の論者か理論と事實は分離する塲合もあり、或は固着する機會もあるか如く誤想するかゆゑてある、正眼に見來れは全く謬見に墮落せし弊害てある、予は常に思考す、凡そ事物の在る處には、必す理論の存するとを、又苟も理論の存する處には、必す事實の寓するとを、故に理論の擧躰即ち事實、事實の全部即ち理論なるときは理論より推すも、事實より考ふるも、其物は實在なりと認得すへき者なりと、偖惟一眞神は眞理なり靈光なりとは、世界の宗敎學者か異口同音に唱導する所なるか、成程柳に東風のうけ流しといへる風情に左樣にまて云ておけは、何れの宗派にもてゆくも恐くは異議もあるましけれと、其眞理か如何樣に吾人を攝理するか、如何樣に吾人を救助するか、眞神と世界の關係は如何、眞神の躰性。相好。作用は何物そと、歩一歩を進め論一論を重ぬる時、玆に初めて大疑問を生し、彌〻紛擾を來して恰も亂麻の如く成り果て、敵も味方も交綏の色を呈し、例の通り理論上は兎まれ角まれ事實上を奈何せん、事實上は或は然らん理論上支吾するなきを得んや。なといへる妄論に陷るのてある、故に幾番となく論鋒を交へし後、玆

そ一番眼晴と云へき處に至り、百尺竿頭一歩を進めて、優然として理論の堂奥に入り、勝敗の判決を與ふるに方り、双方に異議を存せす、且傍觀者をして眞實の智識を開發せしめんとするには、飽まて議論の根底を鞏固にせねはならぬ、其方法は種々あれとも、今は論理學の講釋にはあらさるゆゑ、大畧其趣向を說明すへし、

上來已に陳しか如く、理論は事實の解說なるかゆへに、理論より事實に出るも、事實より理論に入るも、達人君子の相見の塲所なれは議論も圓滑に捗取へし、然れとも誤謬の深谷に陷り易きと、恰も盲者の獨木橋を渡るに似たる凡人社會に在りては、必す眼前可見の事實より幽邃にして不可見なる理論に入るか、正當なる順序ならんと思考す、言葉を換ていへは、有形科學に於て實驗を重ね最早世界の人類を通して、風癲白痴を除却するの外、各人一樣に然り〳〵と全諾する事實の材料を、幾十幾百となく、成る可く多く聚合して、廣大雄壯なる眞理の高閣を築き、其內に微妙端嚴なる眞神を安置するは、頗る愉快なる事業にして、智識を有する人類を宗敎に引入するの方術は、唯此一方法を棄て亦と一つはあるましと思はる、予か取るへき議論の作法は則ち是なり、

予は甞て先儒に聞けり、靜に造化の路を觀るに皆其事なき所に行はると、又聞く、凡そ事妙處に到る天然の形勢を自得するに過ぎす此外更に妙なきなりと、復聞く眞に大志あるものは克く小物を勤む眞に遠慮ある者は細事を忽にせすと、熟〻是等の三語を味ふるに、先儒は予か言はんと欲する所をいひ、予は先儒か爲さんと欲する所を爲すあるを認む、如何となれは予は本論に於て惟一眞神の躰。相。用を論究せんとするに、先つ事なき所に行はれつゝある造化の跡を發揚するを主意とし、其造化の跡とは、所謂事の妙處に到りし者なりと信す、之を自得するは即ち天然の形勢を觀察するに過さるのである、而して之を觀察するの要は、唯細事を忽にせさるの一點に存すと云ふへし、細事とは何そや、吾人の目前に變遷推移する事物の相狀てある、此相狀に思慮を注き經驗を積み、其等の事實と理論とを

材料として、終に不可思議の妙處に到達するときは、如何に宗教思想のなき人にても、如何に予か所論を蔑視する人にても、眞神の存在を認め得て、一毫も疑義を容るゝ能はさるは、日月を雙懸するよりも明ならん、

古來佛教者か論理を成立する作法を觀るに、頗る確實なる所もある、又大に然らさる所もある、其故は佛教者は論理を成立するに、常に現量。比量。聖教量の三量を標準とせり、其現量とは所謂目前の事實を認得する智識てある、比量とは比例して量知すと云へる意味なれは、目前の事實より不可見なる事物を推求計度する智識てある、故に此現比二量は議論に於る當然の資料として許容すへき價値あらん、唯聖教量といへる一句は佛教者に限らす、今昔幾多の宗教學者か陋見に陷りたる尤も强大なる原因なりと云を憚らす、併しなから古代の宗教を今日まて相續し來りたる原因も全く玆に存するとなれは、寛大なる論者は是も亦自家藥籠の一具として觀るを善とすへき歟、抑ゝ此三量を適當に使用して論議の標準とするには三量の同時に具足する場合てある、例へは目前の事實（現量）より比例（比量）して過去未來の雜亂中にある事相を斷定し、然る上に此斷定は自己の尊奉する其經典に如斯の明文（聖教量）ありと陳述せんか、實に公平にして而も無私なる論鋒なれは、如何に頑執なる敵者も其論理に悅服するは勿論ならん、然るに頑固なる佛教者か、彌勒菩薩は五十六億七千萬年後に此世に出て釋迦牟尼佛と同樣なる化益を施すへしといひ、又華嚴大經は今倘龍宮に存在せりと云も、又迷執なる耶蘇教者か、摩西は上帝と面談せしとありといひ、又諾亞の洪水は世界に氾濫して悪人を殲したるとありと云も、渠等各自の信奉する經典に明文ありと云に止り、彼三量の中聖教量の一のみありて他の現比二量を缺きたるか故に、儼然たる論場に於て旗幟を立へき資格なしと斷言するも誰か之を不當と云はんや、嗚呼創世記は何等の記そ法華經は何等の經そ、是等の經典は啻に古代聖賢の理想の殘片として愛翫すへきのみならす、實に吾人か現量と比量

とに相違せさる、高妙なる眞理の靈光を蘊蓄して、常に吾人の靈界を赫焉たらしむるの眞價あれはこそ創世記として貴重し法華經として尊奉すへきなれ、予は漫に佛陀を拜せす、徒に基督を信せす、佛陀基督の發揮せし高尙なる理法の眞價を評量して、之を今時に若くは後世に紹隆せんと欲するは予か生涯の目的てある、予か惟一眞神の躰。相。用を論究して、大方の君子に質さんとするの趣意全く玆に存するのてある、以上序論とす

（未完）

德行

文學士　澤柳政太郎

近世智識の進歩は駸々として寔に驚歎に堪へさるあり、宇宙の事物は一として之が理を究めざるはなく、上は星辰の運行より下は微蟲の生活に至り中は人類社會の組織に及ふまて、皆學理上の巧究を經さるはなし、曾て人智の外にありとしたることも今は兒童の智識の及ふ所となり、曾て恐怖したる電雷も今は之を馳て通信照闇の用に供す、其他凡百のこと皆學術智識の助けに依らさるはなし。例へは昔日の戰爭は腕力を以てせしも、今の戰爭は全く智識の競爭に移り、農も工も商も皆智識を有するにあらされは一日も日進の社會に立つ能はさるの狀勢を呈せり、今日は洵に智識の世界なりと云ふべし。

智識の尊重すへきそれ此の如し、之を以て我邦の新敎育も亦專ら智識の開發增進を務め、乳嗅の兒童も其智は以て白髮の老翁を凌くに至れり、人生に必要なる智識の進歩此の如きは甚た喜ふへしと雖も、亦翻て考ふれは人生に尊重すへきもの獨り智識のみならす、德行も亦極めて重要なりと云はさるを得す、古來賢哲の士か潛心刻苦して攷究する所は固より事物の眞理を發見せんとするに在りと雖も、其終極する所は多くは人の行爲をして至善至完ならしめんとするにあり。夫の哲學の如き其説く所高尙幽玄にして最も實際を離るゝと遠きものゝ如き觀あるも、其目的とする所は最も卑近なる日常の行爲に關する事ならすんはあらす。然らば

人の行爲をして德義の示す所に依らしむるは最も重要のことゝ云はさるを得す、我敎育の如き亦近年に至りて智識を偏重するの誤なるを覺り、頻りに道德の敎育を主唱するに至りたる如き、亦以て事の實相を窺ふに足らん。

人の行爲をして德義の規矩に依らしめんとするや、亦固より智識を要すへし、善の何たる、惡の何たるを知らさるものは未た必す善を爲し惡を爲さゝるを期すへからす、故に善惡の智識は德義上極めて必要なりと云はさるへからす。又善惡の何たるを知るも、如何にして善をなし、如何にして惡を避くへきやを知らさるときは誤て背德の行なきを保せす、故に行爲の規矩準繩も亦知らさるへからす。是れ古來東西に知行一致の說ある所以なり、然りと雖も人性の薄弱なる善惡の何たるを知り、又如何にせは善をなし、如何にせは惡を避くへきやを知るも、倘ほ善を行ふ能はす、惡を爲すあるを免れす、知と行とは未た必すしも相一致せさること以て見るへし。故に智識の一方より德義の行ふへきを勸むるは、未た世の道德を進むる所以にあらさるなり。然らは如何にせは以て德行を促すを得へきか、是れ實に難澁の問題にして、若し釋然之を解するを得は、德義敗頽の歎聲は立ろに息むを得べし。然るに古今東西世の仁人志士か百方苦心して猶ほ此歎聲の跡を絕たさるを見れは、此問題は更に幾多の硏究を要すへきを知るに足らん。余の見る所を以てすれは、釋然此問題を解するは極めて難しと雖も、幾分の解釋は未た必すしも難しとなさす、何そや余は宗敎家の存在する所以を考ふれは、此問題は幾分か解釋せらるへきを信す。

道德上に於ては學問該博なる哲學者の高抄なる推論よりも、高德なる人の感化一層大なりとす、宗敎家が世道人心を維持する爲め、社會に必要なるは全く此がためならん。宗敎家が主として社會に盡すへきは、智識を啓發するにあらすして、人の摸範たるへき德行を示し、以て感化するにあり。吾人か宗敎家に望む所も、亦依りて以て智識を增進せんとするにあらす、智識を

開くは吾人之を專門の學者に就て修めん、敢て宗敎家に向て之を求めさるなり。然るに今日の宗敎家たるもの、汲々として學術の講究を務め、其素行を修むるに至りては却て顧みさるものあり、抑ゝ其本分を忘却するも亦甚しと云ふべし。思ふに此の如きの弊實に宗敎家自身にありて、是に對する吾人に在らさるか如し、何となれは學者の不德なる、人之を責めさるにあらすと雖も、宗敎家の不義に至りては人之を忌嫌することと此すへきものなけれはなり、以て知るへし世人の宗敎家に望む所は、主として其德行にありて博識にあらさるを。左れは今日の宗敎家か、徒に學問攷究に孜々として、其行爲を高潔にせさるは、其咎全く宗敎家にありと云はさるへからす、固より宗敎家たるものも其宗とする所、其信する所を知らさる可らすと雖も、若し餘の宗敎、他の學術を講究して智識の該博を衒はんとするか如きは、恰も學者か名利に汲々として、其專攷の學術を修めさると何ぞ選はん、是れ共に其本分を失するものなり。余は世道日に非なるの今日宗敎家か徒に智識を求めて德行を顧みす、自ら其感化の力を減殺するを歎するものなり。宗敎家の感化を要することと最も切なるの今日、此の如き狀態ある豈慨歎せさるを得んや。

敎育家何ぞ宗敎に冷淡なる。（其二）

戸城傳七郎

余は前號に於て今日の敎育家の如何に宗敎に冷淡なるかを陳述し、而して其の原因を以て、一は社會一般の不信仰に因るものとし、一は敎育社會の輿論たる宗敎忌避說の致す所と爲せり。然れども、苟も社會文明の先導者を以て自任する敎育家にして、此の如き薄弱なる原因（寧ろ卑むべき一の情實とも云ふべき原因）あるの故を以て、眼前道德社會の一大機關たる宗敎を度外に放置し、恬として顧みざるは、決して其の職分に對して忠實なる者と云ふことを得ず。縱へ彼等一個の考へに於ては宗敎を以て道德社會の機關たるに足らざるものとするも、古今に通じ東西に亘り事實上此の如

く有力なる宗敎の利害得失に就き、曾て一たびも講究を試みんとするの念なきは、余輩の怪訝に堪へざる所なれば、余は此の點に就き充分今の敎育家に問ふ所あらんとする者なり。好し又敎育家たるもの、宗敎の利害得失に就きては、已に一定の識見ありて復た講究を要せざる者とするも、尙且本論の已むべからざる所以の者は他に非ず、彼等の視て以て講究を要せずとするものは、未だ能く宗敎の何物たるを知らざるに因ることなり、而して已に宗敎の本性如何を知らざるが故に、其の敎育との關係如何を論定する點に於て、亦大に余輩と其の見を同うせざる所あるは理の當に然るべき所にして、縦へ今の敎育家中多少余輩と其の說を同うし、眞個に公正不偏の眼光を以て宗敎社會の眞相を觀察し利害を討究する者なきに非ずとするも、敎育社會一般の情勢にして已に彼が如くなる以上は、余輩は遂に之を默々に附し去ること能はず。

然るに玆に又、前號にも已に其の一斑を揭げし如く、彼の熊本縣下に發起せる一の宗敎事件は、端なくも敎育社會の人々をして纔に其の心を宗敎問題に注がしむるの動機となり、近來敎育社會の新聞雜誌若くは演舌家等にして往々宗敎と敎育との關係如何に就き是非の論辯を試みる者少からず、且大日本敎育會に於ては、小學敎育の本旨と信敎自由の權理との關係に就き特に數名の調査委員を選定するの事あるに至れり。是れ實に余輩同感の士に取り得易からざるの好時機に際會せるものなれば、願はくは此の時機を失はず、敎育と宗敎との關係如何に就き大に講究する所あらんことを、余は切に吾黨の士に勸告せんと欲す。されば余も亦前段述ぶる所の如き單に漠然たる一問題を提起して敎育家に問ふことをなさず、寧ろ現に世間に知られたる諸種の問題に就きて卑見を陳述するの勝れるに如かざるを以て、今や姑く所論の方針を一轉し、以下逐次是等の問題を揭起して所見を陳述し、然る後結論に及ばんと欲す。讀者之を諒せよ。

第一、宗敎思想と國家思想との關係を論ず。

世の敎育上より宗敎を是非する者輙もすれば則ち曰は

く、宗教思想と國家思想とは相容れざるものなり、少なくも宗教信者は、之を他の人々に比すれば、國家思想頗る冷淡なり、然る所以の者は。一視同仁を旨とする宗教の上に於ては、眼中唯宇宙の人類あるのみにて、國家の人民あるを認めざるに因ると。思ふに此の說たる、宗教非難の口實として、方今最も勢力ある理由の一たるが如し。然れども余輩は未だ容易に此の說に服すること能はざるなり。今其の理由を略述せんに、本問題は、一方には之を宗教の性質及教義上より觀察し、一方には之を其の應用即ち實行上より觀察せざる可からず。先づ宗教の性質及教義上より觀察するに、凡そ宗教なるものは、何れの宗派を問はず、詮ずる所は皆宇宙最高の惟一絕對の眞理を以て其の歸趣とせざるはなく、而して只人を率ゐて悉く其の德に感化せしめ、安心立命を得しむるを以て究竟の目的とする者なれば、此の點に於ては宗教は明かに宇宙の人類を以て其の目的物とするものなり。然れども此の如く宇宙の人類を以て其の目的物とする宗教思想は、何故に國家思想と相容れざるか。若し宗教の教義に於て國家思想と相衝突するものあるか、若くは國家の成立を以て道に違へるものとし眞理に非ずと云ふものあらば、則ち宗教思想は國家思想と相容れざる者なりと云ふことを得べきなれども、余輩は未だ曾て此の如きの邪說を以て人に敎ふるの宗教あるを聞かざるなり。さればとて、宗教は總ての人類を以て目的物とし平等博愛を旨とするが故に國家思想に抵觸すとは何更言ふことを得ざるべし。總ての人類に善きことは特殊の國民にも善きことなり、總ての人類に惡きことは特殊の國民にも惡きことなり、宗教の敎義に於て禁ずる所の事は、我邦國の人民としても其の法律上若くは德道上に於て之を禁ぜざることなく、宗教の教義に於て禁せざる事は國民としても亦之を禁ずることなし。眞理の領內には非眞理の外總ての事物を包含せり。是の故に余輩は、宗教の性質及敎義の上に於ては、其の國家思想と何故に相容れざるかを發見すること能はざるなり。

次に之を教義の應用即ち其の實行上より觀察するに、

此の點に於ては幾分か世人の疑を受くるの原因なきに非ざるか如し、蓋し宗教家の行爲の常として、少なくも其の生涯の半は心を出世間の境界に遊ばしめ、眞理の靈光に浴するを以て無上の快樂と爲し、世間普通の利欲上の競爭に關しては概して冷淡なるの傾きあるを免れざるが故なり。然れども只此の故を以て宗教家は國家思想に冷淡なりとし國民として其の國家に不忠なる者とは云ふ可からず。宗教家の宗教的感情に厚うして世間的競爭に冷淡なるは素より其の職分の然らしむる所なり。獨り宗教家のみならず、夫れ理學者哲學者等の如きも、日夕國事に奔走せる政事家に比すれば、平生其の心を國事に勞すること割合に薄き者なり、然れとも此の故を以て理學者哲學者等は國家に不親切なりと云ふ可ならんや。若し宗教家の宗教に熱心に理學者哲學者の理學哲學に熱心にして其の心を國事に勞すること割合に少なきの故を以て、宗教家及ひ理學者哲學者等は其の心國家に忠ならずと云ふ者あれば、是れ國人を擧げて悉く政事家たらしめんと欲する者なり、人誰か其の愚を笑はざらんや。

然れども現今日本の狀態に於ては、此の如く單に宗教と云ふ廣濶なる一大名辭の下に此の問題を決するは、寧ろ速了に失するの嫌なきに非ざれば、余は更に方今の各宗派に就きて特別なる觀察を下さんと欲す。但ゞ余は神道を以て宗教の中に算ふることを欲せず、又儒教も宗教としては或一二の必須要素を缺けるものなるを以て、是をも例外に置き、今は只佛教及耶蘇教の二者に就きて觀察するに、教義の如何は扨置き、其の應用即ち實行上に於ては、佛教家の國家に對する感情と耶蘇教家の國家に對する感情とは、其の間大に相異なる所あるが如し。何ぞや。佛教も耶蘇教も其の初は等しく外國より傳播したる宗教なりと雖、佛教は傳播以來已に千有餘年の星霜を經過し、今は殆ど本邦固有の宗教なるを以て、其の性質能く本邦の國體人情と相調和し、一も相牴牾する所あらざるのみならず、吾等日本人の性情は其の一半を佛教の感化に受け得たりと云ふも誣言に非ざるべしと余は信ずるなり。是を以て佛教

家は、其の出世間的感情に於ては素より大に常人と異なる所あるべきも、其の國家的思想に於ては毫も世間の人に異なる所なく、殊に耶蘇敎の傳播以來は之を以て外敎と稱し勢ひ反對の位地に立てるを以て、一層敵愾の氣象を奮起し、其の結果たる、殆ど吾人をして彼等は宗敎家たるの面目を失せざるかとの懸念を起さしむるに至りたる程なれば、其の國家を愛し　皇室に忠なる所以の一點に於ては、わッぱれ日本人たるの特性を顯呈したりと謂ふべし。然るに耶蘇敎は之に反し、傳播以來日尙淺きを以て、未だ本邦の人情國體と相調和することを得ず、其の性質は全く歐米舶來の宗敎にして、其の宣敎師等の如きも多くは歐米宣敎師の心を以て心と爲し、之を以て日本人に接するが故に、其の言行輙もすれば本邦の國體及び社會組織を蔑如するか如きの形迹を呈することなしとせず。且つ先輩たる宣敎師にすら此の如きの迷想者少なからざれば、之が信徒たる思想淺薄なる婦人女子の如きに至りては、謂はゆる外國崇拜の流弊に陷り、さなきだに元來國家思想の發達せざりし日本婦人をして、一層其の感情を冷淡ならしめたるの事實あるは、數年來現に余輩の目擊する所なりとす。此の事に就きては、余は更に大に論述する所あらんことを欲すと雖、今は言多岐に亘るの恐れあるを以て言はざるべし。要するに耶蘇敎には現に此の如きの過失あるが故に、若し無分別なる宗敎非難者ありて、只此の過失あるの故を以て宗敎全躰を攻擊せば、則ち宗敎思想と國家思想とは相容れざるものなりと云ふも、又宗敎信者は國家の利害に冷淡なりと云ふも、强ち全く謂はれなきの言には非ざるなり。

是に由りて之を觀れば、世人殊に敎育家の宗敎を排斥し國家思想に牴觸すと云ふ所以のものは、宗敎全躰に在るに非ずして其の一部分たる耶蘇敎に在り、否、耶蘇敎全躰にも非ずして、寧ろ其の守舊派（オルソドックス）に在るものたるを知るべく、又其の重なる點は其の敎義に在るに非ずして、其が應用上の過失に在るものたるを知るべし。是れ恐らくは具眼者の一般に是認する所にして、敢て余輩一個の妄測に非ざるべしと

信ず。然るに之に由りて直に宗教思想と國家思想とは相容れざるものなりと云ひ、宗教家は國家に對する感情冷淡なりと云ふ、是れ豈一斑を見て全豹を推測する不當の論斷に非ずや。

第二、勅語の旨趣と宗教との關係を論ず

謹で按ずるに、明治廿三年十月三十日教育に關し下し賜はりたる　勅語の聖書は、男女老幼を問はず、苟も我が帝國臣民たる者の謹み畏みて共に遵守すべき、道徳上の一大訓戒たるは、申すまでもなきことなり。從ッて、教育にもあれ宗教にもあれ、かりそめにも此の聖旨に合はざらん程の學說若くは教義等を以て人に教へんとする者あらば、余輩は斷じて之を驅逐するに猶豫すべからざるは、亦論を待たざる所なりとす、然るに怪むべきは近來宗教の教義と　勅語の旨趣とは相撞着し若くは經庭する所あるもの丶如く論評する者の往々教育社會に現出することと是なり。其の言の旨趣に曰はく、凡そ學校に於ては須らく　勅語の旨趣を遵奉して教育に從事すべし、佛教又は耶蘇教の如き宗教の教義を採用するは　聖旨を等閑にするの恐れありと。即ち此の說たる其の裏面より云ふときは　勅語の旨趣と宗教の教義とは相徑庭するものなれば、宗教の主義は之を學校に採用すべからずとの意なるが如し。余輩の所見を以てすれば、此の說たる、啻に宗教なる者の性質如何を誤解したるのみならず、又能く　勅語の旨趣を解せざる者と謂ふべし。

今世人の此の如き誤謬を來せる所以の原因を考ふるに、第一彼等は　勅語の旨趣を極めて狹き意義に解釋して、單に學校教育に關して下し賜はりたる者と思惟し、次には宗教を以て只出世間の教へを說き世間教には直接の關係なき者と思惟するに因る者の如し。果して然りとせば、此の如き淺薄なる誤謬は、敢て事々しく辨解するに足らずと雖、念の為め一言せんに、先づ彼の勅語を以て單に學校教育に關して下し賜はりたるものと思惟するは甚しき誤解なるべし。茲に引例する

さへ畏きことにはあれど、勅語の中にも「敎育の淵源亦實に此に存す」とあるにても、聖意のほどは大かた推し測り奉るに餘りあるべし。要するに件の　勅語は帝國臣民一般の心得として示させ給ひたる者なれば、單に敎育にのみ關するものには非ず。尤も敎育は風敎の源泉なれば、あるが中にも重きを此に置き給ひたるには相違なかるべしと雖、是の故を以て直に其の區域を限定し、只學校敎育にのみ關するものと思惟するが如きは、實に疎忽の甚しきものなり。次に宗敎を以て只出世間の敎へを說くものとし、世間敎には直接の關係なきものとするは、是亦極めて狹き見解なりと謂はざる可からず。前にも云ふ如く、宗敎は宇宙絕對の眞理に到達するを以て其の歸趣とし、安心立命を本意とする者なれば、此の點に於ては無論出世間の敎へたるに相違なしと雖、是は只其の敎義の一面より觀察したる見解にして、未だ其の全躰を知らざるものなり。宗敎は斯く一方に於ては出世間の敎へを旨とするにも拘はらず、他の一方に於ては實に親切なる世間敎にして、徹頭徹尾勸善懲惡を以て旨とするものなり。其の然る所以の者は他なし、何れの宗敎に於ても、現世に於ける善惡の行爲は直に來世に於て享受する運命の原因なりと敎ふるが故に、勢ひ現世に於て及ぶたけ多量の善根を積まざる可からざるが故なり。且つ又佛敎の如きは、三世因果の理を說く極めて詳かなりと雖、謂はゆる眞如實相上の見解に於ては、死生の觀念を滅却して三世融通の說を立て、世間實在の現象に就きて直に眞理の當躰を看破し、國家の成立は勿論、君臣父子上下貴賤の排列整然たる處、即ち是れ眞理の發現なりと敎ふるが故に、此の點に於ては佛敎を稱して世間敎なりと云ふも亦敢て不可なることなし。乃ち知るべし、宗敎を以つて世間敎に直接の關係なしと思惟するが如きは、是亦宗敎を知らざる者の極めて狹隘なる見解なることを。

扨　勅語の聖旨の在る所及び宗敎の本義を此の如く解釋するときは、此の二者の關係は應に左の如くなるべきか。

勅語の旨趣（目的）┬教育（方便）
　　　　　　　　　└宗敎（方便）

即ち、前にも云ふ如く、此の　聖勅は帝國臣民一般の心得として示させ給ひたる國民道德の本旨にして、敎育及び宗敎の二者は此の　聖旨を貫徹する所以の方便として視るべきものなれば、此の　勅語を以て獨り敎育の爲に下し賜はりたるものとするは大なる誤りなるを知るべく、從ッて　勅語の旨趣と宗敎とは啻に相徑庭する所なきのみならず、其の關係たる、正しく一は目的にして一は方便の位地に在る者たるを知るべし。

若夫宗敎と學校敎育との關係如何は請ふ次章に於て之を詳論せん。

耶蘇は人なり奇跡は比喩なり、

吉　村　秀　藏

世の新約全書を研究する者の最も解釋に苦む者は其書に記載する耶蘇基督の行ひしと稱する奇跡とす、勿論耶蘇を以て神と爲し或は神人合躰抔の奇怪なる説を喜ふ迷信の輩は神なるが故に耶蘇が奇跡を行ふも敢て疑はずと雖とも如何せん、我輩自由派者の流儀は神は神とし人は人として不滿足なき者なるを以て耶蘇を神とするの理由毫もなく、又其證跡更になく、又必要無し況んや吾人の崇め尊み信奉する耶蘇基督自らも更に之を敎へず、耶蘇を神とするは耶蘇の敎へに背くに於てをや、試に默想せよ天地の父たる神の聖靈は秘かに其子たる地上の一處女を辱しめ卑賤なる木匠の不義の子と化身せしと、人類は天地創造中最も優美にして神の肖顔たる故に耶蘇の聖を出すとすると何れか高尙優美にして何れか劣等の思想なるを、又半神半人說の如きは人と神との觀念の一半を主觀的に結合して一種の想像を描出せし者にして客觀的には神と人との別物在るのみ、固執派の輩傍若無人にも揚言して云はく英雄豪傑を崇拜する者は偶像を拜する者なりと、豈に獨り木匠の子を崇拜するたけは偶像崇拜に非ざるの理あらんや、凡て古しへの非凡の人物は其誕生の理も亦た非凡

なりと思惟するは人智未た發達せさる時代の狀態と見へ又は後世歷史家の文辭の修飾を文字通りに解釋して徒らに迷信する者と見へ漢の高祖の生誕、木下藤吉郞の生產の如き、共に生理學の定則にはつれ太陽の化身とす、羅馬人、シーザーを暗殺するや其歲に限り太陽蒼白色を呈し光輝の美を失ふと爲し希臘人瑣挌羅抵斯を毒殺するや亞典に天災地變起りしとす、無知の小人は天躰と人の運命に密着の關係ありとし、非凡の英雄は天然の法則を左右し得ると迷想するは古代愚民心智の狀態にして又怪むに足らず、獨り大聖耶蘇基督にして牽强附會を免るの理あらんや、是れ歷史家の英雄を叙するの法則なればなり、去らば耶蘇も亦た共に歷史中の一人物にして非凡の人間たると疑あるべからす、人或は吾人を詰て曰く耶蘇を蔑視すと決して蔑視するにあらず、却て尊敬する者なり、如何となれば耶蘇にして果して神ならんか、何んそ尊敬するの理あらんや蓋し天地の主宰たる全能神にして猶太の片隅に僅々三年間敎を傳へ、終に暴君の手に磔死す何等の戯れぞ、然るに人間にして此業を爲せしを以て是を稱して大事業と云ふ、人間なるを以て尊む者にして神ならんには吾人は決して敬せさるなり、耶蘇若し神ならば如何てか人間の模範たるを得ん、人間にして神の言行を學ぶを得るや愚も亦甚しと云つべし、故に吾人は耶蘇は人間として毫も疑はさる者なり、

然らば耶蘇を旣に人間とす、人間にして奇跡を行ふの理あらんや去らば奇跡は全く排斥して取らさるやと云ふに余は解釋の出來得可き限りは解釋して之を取るなり、假令へば瞽者の目を癒せしとは蓋し肉眼を癒せしにあらず靈眼を開きて神の光を見るを得たるを云なるべし聾の醫されしは神の敎の眞理を開けとも心を悟らさりしも耶蘇に親炙して初めて其聽きし眞理を心中に會得するを得へし故に恰も聾の醫されし者なり、跛者の步みしも亦然り神の道即ち直なる道を步まさる者は兩足あれとも跛者の如し然るを耶蘇の敎に依りて初て道を直に步行するを以て恰も跛者の醫されし者なり、耶蘇曰く我は道なり眞理なり、光なり、と即ち此道を

歩ざる者を跛者とし、眞理を聞て悟らさる者を聾と稱へ、光を見さる者を瞽者と比喩せし者なり、故に耶蘇曰く、爾は聽とも悟らず視ども見ず、蓋この民目にて見耳にて聞き心にて悟り、改めて我に醫されんことを恐れその心を頑し耳を蔽ひ目を閉たりと云しに應へり(馬太傳十三章十四節)、又曰く彼等は視ても見ず聽ても聞ず悟らさるが故に云々(同十三節)又鬼に憑れたる瞽の瘖とは精神の狂ひし神經病者の類勿論尋常に者を視、又道理的に語する能はず、即ち害惡の爲に精神を誘導せられし者を醫されしを云ふなり、耶蘇曰く康强なる者は醫者の助を需ず云々とて、健康者を義人に比喩へ、罪人を不健全者とし、罪人を悔改せしむるを醫すると云へり、即ち耶蘇の治療とは肉躰の治療に非らずして精神的治療たる推して知るべし、其他五千人に食を飽せしは靈の糧てを云ふなり、戸内にて耶蘇弟子に現れしは肉躰にあらず、靈躰の現はれしなり、故に戸開かずして入りしなり、耶蘇の昇天は人間は靈魂不滅なる故に吾人も亦た死後昇天す、豈に獨り耶蘇の昇天怪しむに足らんや、

耶蘇十字架に就きし時世界中三時間黑暗となると是れ余輩の信ぜさる所なり、如何となれば少なくとも羅馬帝國の重なる部分は白晝俄かに暗黑となる然るに其時羅馬帝國の或部分に於て人民狼狽して大騒動在るへき筈なるに商工匠は常の如く依然として其職に安んじ哲學者も又泰然として驚く氣色なく恒の如く勉强せしは怪しむへき事にあらずやセチカ、老プリチハ共に此時代に生活せし人なる故に如斯き大天變は逸早く知るべき筈なり、然るに其大著述中、天然の現象は地震流星彗星、食蝕洩す事なく記載せしも獨り耶蘇磔死の時三時間天然の定則を停止せし事に限り記載せさるは疑ふへきの事ならずや特にプレニーの如きは其著書中天變地異の章句を別に設けなからシーザー暗殺後太陽少しく其光輝を欠くを記して之に比すれば遙か一大天變なる三時間暗黑の事は更に記する所なきは之にても世人は此奇跡を信するを得べきや之を以て考ふれば其他治療にも關せず解釋の出來さる奇跡は推して知るへきの

み、

宗教家には慷慨悲憤の精神なかるべからず

石　毛　太　一

天茫々地蒼々而して其間に生成せる人をして之が爲め悲むべく憤るべきことあらしむるは何ぞや人は感情の被動者にして其一動一行は凡て感情の一線の爲めに貫通せらる是を以て天地吾に於て何かあらんと雖ども人事上に及ぼせる其關係を考察し來れば不知不覺吾人の意中に一種人に語るべからざるの感情を起さしむるなり古城の寒月にして曠古懷舊の涙を灑かしめ名都の殘墟にして志士感慨の情を起さしめ其他欝々たる無心草木無情の山川渾て之れ憂世の心事をして激昂せしむるの媒介となる皆唯之が作用に外ならず是に於て乎知る慷慨悲憤なるものは一種云ふべからざる見るべからざるの間に出で來るものにして若し冷眼淡視して之に接すれば可もなく不可もなきの事にして人をして激せしむるに足らず唯時ありて目前の些事目前の利害は遠く去りて心神悲憤境裏に追ひ入られ悲憤の情溢れ慷慨の氣充ち時として人の喜ぶに涙を垂れ人の笑ふに憤り悲ましむるとある也之れ奇を好んで涙を垂れ腕を扼するにあらず其心情の發動によりて然るなり天地既に然り況んや數千年來居住せる此土に對し豈に此情なきを得んや

五畿七道已に賊巢と變じ王土纔かに笠置の寸地を餘すの時孤城を守り千載の下英名を輝せる楠公の如き、或は佛帝ナポレオンのセダンに擒にせられし巴城圍を受くる數重にして之を防禦するものは市井の少年か然らざれば老成の都人にして而も能く三ヶ月を支へしが如き、又德川の末に至り佛制を用ひ英法を學び陸海の整備大に見るべきものありしも鳥羽の一戰に兵氣又振はさるに至りしものは兵革堅全ならざるにあらず隊伍精練ならざるにあらず而して之を鏖にしたるが如き、皆な之れ進んで戰ふの心を起さしめたるもの存すればなり換言すれば國事を見ると家事を見るが如く自國を

愛し自國を憂ふるや誠心誠意を以てし若し一朝事あるの日に臨んでは其紀律の之を繫ぎ節制の之を御せざるも進んで水火の難をも辭せざるの决心の餘力に外ならざるなり

之に反して古來三國の跡を考ふるに概ね慷慨悲憤の缺乏に基づかざるなし若し夫れ異邦の語を口にし煉瓦石室の中に住し萬事異風に摸し去りて自國の觀念薄弱となるに及んでは國家の滅裂期して待つを得べし何んとなれば物に本末あり秩序あり風雪を忍ばずんば三春の佳節に逢ふ能はず夫れ然り徒に己の嗜好時流を追ふて夢幻に走り變化の定則を知らず事物の前後を辨せず先人の義魂義魄より溢れ出でたる邦國の大本を誤り滔々たる天下の民相率て異邦の風を學び櫻花爛熳たるの花園は異邦の人之を管し寒風肌を裂くの夜異邦に勞苦して故山を思ふの時に至り始めて慨嘆するも何ぞ及ばん時期已に去ればなり

然るに怪しむべきは近來一種の宗教家あり妄りに自國の念を棄て普及的國家の制を喋々するの一事なり其言や一理なきにあらずと雖も余輩ユニテリアン教徒の眼光を以てすれば彼等は今の時を慮らず漫に宇內的國家の利を唱道し而して自國古來の典禮を放拋し顧みざれども若し時去り時來り一朝大事あるに臨みては已に自身は網中に繫囚せられんことを了り泣かんか笑はんかの時に當り慷慨悲憤するも及はざるの悔に至らんことを知らざるを悲まざるを得ざるなり萬邦相對し隙あらば則ち入り機あらば則ち乘ぜんと欲するの今日に當り吾人復自ら國事に任ずるを要せずと謂ふや况んや我れには千古の俗あり風ありて一朝夕にして之を打棄する能はざるものあるに於てをや

然りと雖も余輩ユニテリアン教徒は世をして道德の世たらしめ人をして仁義禮讓の人たらしめ干戈を銷し矛戟を燒き四海異邦の別なく握手談笑の快を望まざるにあらず否な決して之を望むと人に讓らざるなり、又其要を感ずるや實に切なりと雖も唯之を幾千世の後ちに期する所のものなれば古來亡國の顚末に鑑み若し自國にして兎狸の窟となり人の問ふものなきに至ては何れ

の時か四海交通普及的國家の德に沐するを得ん空しく異邦の風月に苦楚を嘗むるに至ては慨嘆に堪へさる所あるを以て先つ自國を泰山の安きに置き而して後普及的國家を唱ふべしと言ふものなり即ち余輩は或る度迄は道德の圍範內に四海兄弟の說を主張するも現今社會の狀態に參照し之れを考ふるに之れを取て直ちに彼我兩國間に適用せんと欲するも亦得へからさるの憾なきにしもあらさるなり、

再言すれば宗敎なるものは古來人類の集合せる所に發し其地位次第に高まりて今日に至りては人類に欠くべからざる所のものとなれり然れども人類の數たる千百の少きにあらず且つや其居る所萬里の懸絕せるものあれば其地の風に從ひ俗に傚ひ彼此相同じからざる所あるは勢已むを得ざるなり之を以て其地の風を抛て彼の地の俗に摸するあらば木に接するに竹を以てするか如きものなれば此の土の物を排除し全然彼の土のものを誘導する如きは不可なるのみならず又出來べきものにあらざれば宗敎家たるもの宜しく其取るべき所を取り捨つべきを捨て常に自國の二字に注意し國家の觀念を强固ならしめ此の土の爲めには自身の利害を顧みず此の土が古來人事上に及ぼせる歷史によりて此の土の宗敎を序長せしめんとを計り慷慨悲憤的の感情により此の土の利害休戚を判ずるあらば蓋し大患なかるべし元來余輩は普及的國家の說をなせるも余は自國の事情の許す限り一方には共に萬邦と携提して社會の利を圖り地方に於ては自國の念を以て腦中に印し獻身的に國事を見內外の急務を觀察して全社會の圓滑を希ふものなれども古今普及に國をなせる人衆の興亡盛衰の理を忘却せざらんとを務むるものなり一言すれば自由よと云へる語が歐洲の文明を發起せる如く大和魂よなる文學は數千年來我國を維持し來りしものなるとを余は歐化主義論者に告げんとするものなり、

隨信家の妄を覺破す、

樂天堂主人

ユニテリアン敎の主義第一に曰く＝ユ敎は口碑的敎權

に依らす合理的大道科學的眞理を以て基礎とす＝と、蓋しユニテリアン教は世間普通の宗教の如く頑固にも古傳說に依賴し所謂述而不作の因循主義と相拒る天壤も只ならさるなり、

世間普通の宗教家は往々宗教を以て一種別物とし、宗教界を以て別天地となし、宗教は恰も人類の天然性狀以外より人界に寄生せるもの丶如く考へ、其局終に天啓說となり、超理論となり、神人同躰三一神學となり、奇跡休徵牽强附會の論說となる、其口碑的教訓は聖典として天使之れを記錄し、菩薩羅漢の手を經て世に傳來せり、故に後世之れを奉するの徒は譬ひ其經文に記載する事物にして實際と齟齬し道理に違背し時世に不適當なるも、默々之れを信徒の裡に經過せしむるもの多く之れあり、吾人をして之れを望觀せしむれは實に意氣地(イクジ)なき限りと云ふべし、然りと雖も之れか信奉者は全く之を甘受するのみならす、平生の議論にも＝宗教は若し天啓ならずして人造なりとせんか余輩は實に之れを信奉するの便りなからん、何となれは人造は無論不完全たるを免かれされはなり、余輩は反て此の不可思議あり、人智の得て理解すへからさる處あるを以て之れを天啓ありて尊信し深く賴む所あるものなり、何となれは人造は人必らす之れを理解するに難からされはなり＝と、斯くの如きは通例人の思惟する處にして余は之れを從信又は隨信家と稱し以て他と區別すべし、蓋し此れ等の人々は只だ古人の遺訓、教法師の教戒に一も二もなく同意隨信せるものにして、敢て其理非を論せす、又之れが奧義を理解する事を希望せされはなり、

吾人ユニテリアン教徒の其基礎とする所は口碑的教權に依らす專ら學理的大道に依ると云ひ、全く自由討究を以て宗教上の問題を攻究する所の方法とせり、故に余は之れを解信家と稱ふべし、蓋し一切の事物を理解し而して後信認すとの義なれはなり、

扨て隨信家の常に解信家を批難する處を聞くに

第一、解信家は道理にのみ拘泥して古人の遺法を蔑視す、故に德行の上に於ては遙かに隨信家に劣る事あ

り、

第二、解信家は專ら智識の上に宗教的信仰の標準を立てんと計畫するを以て其信仰常に冷淡なり、是れ恰も頭顱のみの人間にして感情の府たる心臟を缺くに等し、

第三、古來解信家たるもの其數幾許かある、實に寥々として曉天の星の如く、隨て其の社會を裨益せる處遙かに隨信家に劣れり、

第四、解信とは稍や教育あり、稍や智識ある人々にして望むを得へきものなるも、此の社會に在て中分以下にある最多數の人々に對ては餘りに高尙に過き、無論不適當なれば、之れを以て社會多數の人民を感化せんとするは望むへからさることにして、解信者は、目下の社會に在ては殆んと感化力なきものと謂て可なるものなりと、

其他隨信家の解信家を批難するの點少しと雖も要する以上の四者の外に出でさるものなれは、余は今解信家の一人として、自己の管見を開陳し以て宗教讀者の參考に供せん、

第一、隨信家は吾人を目して破壞黨視し、或は古人の遺訓遺法を蔑視せりと論すれとも、余は其然らさるを知るのみならす、反て隨信家こそ人間最要の智力即ち道理心を蔑視するものなるを知る、孟夫子嘗て曰はすや、是非の心なきは人に非すと、然るに隨信家にて無暗に古人の遺訓に隨從し終に之れに迷信するか如き傾向あれは余は斷じて之れに加擔する事能はさるなり、何となれは古人の遺法必らすしも誤謬なしと云ふを得されはなり、古人の遺法果して合理適中なれは可ならん、されとも實際に於て古人の遺法往々誤謬あるを以て見れば、余は斯かる誤謬の淵に古人と共に情死するに忍ひさるなり、故に余は成るべく古人の遺訓遺法とても能く理解し、取るへきは之れを取り取るへからさるは之れを捨つるに躊躇せさるなり、吾人豈敢て古人の傳說を盡く破壞し古人に無禮を加ふるを以て快事となさんや、只だ吾人の責任を負ふへき己れの信仰を得ん事を企望するに外ならさるなり、必竟之れを理解せ

んと欲するは其遺訓遺法を遵守せんと欲するの微意より起れるものにして、德行を疎んじ、實行の目的なくんは解信家と雖も始めより之れを研究せさるべし、何となれば無要の事を討究するば徒勞なれはなり、

第二、隨信家は自ら熱心を以て誇稱し、解信家をは冷淡の二字を以て打破せんと勉むれとも、解信家とて必らすしも冷淡ならさるへからさるの理由更らに之れあらさるなり、余は反て隨信家の熱心なるか如き狀態を以て虛信なり妄信なりと打破せさるを得さるべし、何となれは玆に盲人あり其の感覺する處は音響、方圓、剛柔に外ならされは、物の紅紫を辨する能はさるを以て紅色は火の如く紫色は藤花の如しと敎訓せられ、之れに隨信せるの餘り、瀧の川の紅葉狩を以て爐邊の遊興とし、紫式部を以て藤花の如き美人なりと假想するか如きものなれは、是れ決して眞誠の信仰と云ふへからさるや明かなり、故に解信家にして若し頭顱のみの人間なれは、隨信家は恐くは首の缺けたる雛人形の如きものにして不具者たるを免かれさるは同然なり、然り而して吾人は何故に之れを理解せん事を欲するや、是れ眞誠なる熱心を得んか爲めなり、然るに世の論者往々解信家の實行せさるものと、隨信家の實行せし者と比較して彼れ是れと論し、以て解信家は冷淡なりと批難せり、是れ大なる依怙の沙汰と云はさるを得ず、何となれは隨信解信に論なく實行なきの信仰は過失なれはなり、然るに議者の實行せる隨信家と實行せさりし解信家とを比較して吾人を批難するは抑も何事ぞや若し公明正大に甲乙を比較せんとすれは解信家の實行せる者と隨信家の實行せる者とを比較し、而して何れか誤謬に陷る事少く眞に價値あり、眞に有益なる信仰の結果を社會に產出し得るものなるやを比較し後ち始めて正當なる判斷の顯はるるものならすや、

解信家必らすしも智力一方に偏する者に非す、智情意三ッの者具備し始めて解信家たるを得るものにして、其解信家たる所以は只だ智力の制裁を第一位に置き之れに依て正當なる感情を起こさしめ以て健全なる實行を成就せんと勉る者にして、彼の智力の制裁を待たず

上安寧秩序を妨げず及臣民たるの義務に背かざる限りに於ては信教自由の權利を有すとの明規ある上には苟も國家が公然の確認を與へし宗教の上に就きて決して故なく他の制限を受くべからざるは判らかに國憲の擁護する處なりとす而して其の公然の宣布を爲すが如きも亦隨つて各自信教者の自由なりとは謂へ苟も小學校の如き宗教と分立し隔離すべき性質の範圍に於ては其學校に於ける各自の秩序の保維上嚴に斯かる宣布の波及を禁壓せざるべからざるは當然なりとす故に苟くも學校の教師にして宗教的の傳導を教室內に試み將た學校の生徒にして祈禱詞若くは讃美歌を校內に唱ひしものありとせば是れ猶ほ教師が不倫邪惡なる行爲を勸誘し生徒が淫猥不正なる所作を遂行したると一般之を照らすに學校の秩序を紊亂せるの罪を以てし其事情に依りて監督官廳は命ずるに該教師の解職を以てし學校長及び教師は命ずるに該生徒の退學を以てするも憲法上の信教自由と何等の牴牾あること無し何となればこは信教の自由を禁壓せんとするの結果にあらずして只學校の秩序を保維する所以の必要に出ればなり況んや何人の子弟をも強ひて就學せしむべき小學校教育の規制の上に於て或る一の特殊の宗教を採り敢て一般の他者にまで強ゆる如きは寧ろ信教自由の旨趣を無視するの甚だしきものにして國憲の擁護上にも切に捨て置き難きの事柄なるおや

されば小學校教育の上に於ては須らく正さに宗教に對して局外の超然を守るべく隨つて其各自の內心の信否如何の如きは固より他の干涉を及ぼすべきの限りにあらざれども只教師として及び生徒として之を外形の行爲に發する前述の場合の如きに於ては固より應に相當なる禁壓の處分に出づべきものとす

第三　小學校教師の職務上信教の影響　然れども內心外形の差別の如きは或る場合に於て其効力の至て微々たることあり輙ち小學校の教師の職務の如き其躬の一言一行が直ちに生徒の儀範となるべき場合に於ては苟し教師が外形上局外中立の地歩に立ちたればとて之が爲め何の功をも超然の結果に及す能はざるべし如何と

なれば凡そ內に誠あるものは必ず外に發する如く內に誠なきものも亦必ず外に發すべきは必然なれば敎師は敎師、自己は自己、及び敎授は敎授、信仰は信仰と、斯く其間に明劃の區別を立つるは決して出來得べき事にあらず敎師が心に信ずる處の或る宗敎は知らず〳〵一般の生徒の信仰心を支配し果ては信敎の異同よりして敎員と父兄と、及び學校と家庭との折合を傷ふことなしとも保せられざればなりされば凡そ小學校の敎師としては必ず宗敎家以外の人を以て任用すべき一の特別法の制定あらんことを更に當局者に促すの必要あるを認む

第四　學齡兒童を宗敎學校に就學せしむるの不可なる事　凡そ敎育と宗敎とは須らく相分立し相隔離すべく隨つて小學校の敎師の如きは必ず宗敎家以外の人を以て任用すべきは既に前項に述べたる如し而して小學校令第廿條の明規に於て學齡兒童を保護すべき者は其學齡兒童をして尋常小學校の敎科を卒らざる間は就學せしむるの義務あることを制限し換言すれば概して學齡兒童の就學は全く宗敎敎育の以外に於てすべきを命令せしにも拘はらず今日の實際上多數なる學齡兒童の宗敎學校に就學するものあるは何ぞや是れ畢竟學政の施設上未だ就學督責法の完行せられざるに因ると雖も特に一の制裁を設けて以て之を禁壓せざるべからず顧ふに小學校令の定むる處學齡兒童の就學に關する規則は各府縣知事の規定に任じ隨つて就學督責法の如きも府縣知事の便宜の施設に委せられたれば驗かて此點の必須注意に向ひ亦更に一篇の省令を發せられんことを當局者に促すの必要あるを認む

第五　帝國憲法に所謂る信敎自由の意義　帝國憲法第廿八條に曰く日本臣民は安寧秩序を妨げず及臣民たるの義務に背かざる限に於て信敎の自由を有すとされば我か憲法に所謂る信敎自由の意義たるや絕對なる無制限の自由を許せしにあらずして少くも左の二條件の範圍以內に於てのみ信敎の自由を有すといふに過ぎざるなり

一、我か國の安寧秩序を妨げざる事

し人々私利を計つて熱心に幸福を得んと爭はゞ、其手の纔に觸るゝや幸福は直に消滅すべし、然れども若し世人にして念々幸福を切望するを止めて、能く他人に對する自己の義務を盡さば、幸福の自然に至ること猶ほ團々たる朝露の爽然として零つるが如くなるものなり、故に斯氏は主樂論者が必要となせる如く、幸福の種類と强弱とを比較商量するは到底能はざるとを認め、從ッて幸福の成分を計算し、之を以て實行し、信任すべき指導者となす能はざることを論述せり。

依是觀之、斯氏は實利學派と此點に於て分離したるものなり、氏は之を以て自家道德學躰系中至要の一箇條となせり、今其說によれば、人の直接に目的となし、行爲の指導者となすべき者は幸福の計算によらずして、經驗上幸福增進の最良手段たるべき行爲の普通の規則にあるなり、普通の確言にあるなり、抑も幸福なるものは法則と狀態との結果なり、有機物と外圍との成產なり、而して個人の幸福は國家の安寧、秩序、社會の正義、眞理、及び他愛的習慣と連結して容易に分解すべからず、故に幸福獲得の最良手段は物の本性上、必然幸福を決定すべき上述の原則に從ふの外なかるべし、而して道德學者が應に目的とすべき所のものは「其特殊なると一般なるとを問はず、凡て幸福を得るに必要なる根本的の情態」に依據するにありと、是れ實に斯氏の主張せる所のものなり、然ども主樂論者の直接計算果して實行すべからずとせば、斯氏の間接一般的計算も亦た同じく行はれざるの理なり、今茲に人あり義務の標準を問ふ、斯氏徐々に答へて曰く、直覺的道德の原理は、社會繁榮の法則なり、是れ數百世の經驗によりて前賢の發見したる定法なればなり、世人須らく先づ此等諸賢の定法を以て、人類繁榮の正解となし以て「大才達觀の士更に精査して、眞正なる光輝を發揚する」を待たざるべからずと。

前記斯氏の說は從來行はれたる實利主義と大に其趣を異にし、進化論者は之を目して道德學に對する殊功となし、余輩も亦た之を以て主樂論者の弱點を庇護するに足るべき豪膽新奇の所作なりと信ぜり、然れ共氏が

千辛萬苦して經營したる新説も其功を奏する能はざるを如何んせん、是れ他なし、斯氏が「個人的なると一般的なるとに論なく、總て幸福を以て人生行爲の目的となすの有害なるを自白したる」は、實際に於て幸福の以て最終目的となすに足らざるを認許したるものなればなり、且つ夫れ幸福にして直接に求むべからずんば、何が故に之を最高最終の標準となすの價値ありとなすか、抑も眞正なる最高の目的、即ち絶對的純善を取りて常に之を適用せんとせば、或は實行し能はざること無しとせず、然ども平易簡單の塲合に於ては啻に之を適用し得べきのみならず、又唯一の標準ならざるべからざるなり、然り、苟も適用し得べきものならんには、其何れの塲合たるに關はらず總て有益にして全く恰當ならざるべからず、然るに百行の歸べ着すき根本、然も、善惡邪正の由つて生ずべき源泉たる最終目的第一原理(即斯氏の幸福)にして、他の副位的第二原理の指導に依つて幇助せらるゝにあらざれば殆んど實用をなさずとなし、行爲の大半は「苦樂の如き比較的指導を全廢して、更に他物を以て代用せざるべからず」と云へるは、豈信を措くべきの論ならんや。

夫れ行爲の最上終極なるものは、賢明善良の諸人が因りて以て目的となすべき處のものなるや明なり、然るに幸福を以て最上終極となしながら、直接に之を求むるものは却つて妨碍せらるゝと云ふの理あらんや、然り幸福を以て吾人の至當なる目的となし、人生至要の利益となしながら、宇宙の大法は鋭意追求するものに與へずして、却つて冷淡、不勤勞の諸人に付與するとは豈に法外千萬ならずや、蓋し勞力あれば爰に報酬あり、勤勉あれば爰に獲得あるは何れの塲合にも適用すべき大法なり、然るに獨り幸福の塲合に於てのみ勞者は獲ず、慢者却つて酬を得るの理あらんや。

されば斯氏は自然の組織を以て背理的となし、造化は指令すると同時に拒絶するとなすものなり、然ども眞理とは世界の事實を正寫したる肖像にあらずや、果して然らば眞理の方向は即ち事實の方向にして、眞理を取りて之を實行するものは即ち宇宙の風潮と方向を同

じくするものなり、故に人若し學術上の眞理を發見して之を實行せんか、自然によりて其進行を幇助せらるゝこと猶ほ便風に乘するが如くなるべし、然るに斯氏は曰く「道德に於ては、此普通の法則を適用すべきにあらず、眞理によりて幸福を追求せば、造化は之を幇助せざるのみならず却ッて抵抗するものなり」と、敢て讀者諸氏に問はん、自然は斯の如く矛盾背理的のものなる歟、抑も又た斯氏が人生の最終目的を誤解したるに依るものなる歟と、而して余輩は信ず。人生の正當なる終極は幸福以外別に一層高尙なるものに存するを。

○余を所有する者ありや

『世に余を所有するの權ある者ありや』とは、吾人の寸時も忘る可らざるの疑問なり、吾人の消長は實に此の一問に決するなり。讀者は未だ記臆するなるへし、南米三十年前の塗炭の苦を、其の基つく所實に此の問題に關するなり、而かも此の疑問中の最劣等に屬する問なり、即ち奴隷賣買を以て自然に反し、人道に悖る者となして、之を開放す可きは正に自由國民の務なりとし、千難萬苦を排除し、決然立つて解禁の美菓を生み出したるの塗炭なり、天下幾十億萬の人類が、今日に至るも猶ほ異口同音に『米國人は義俠なり、仁慈なり』と湛えしむるもの一に此の擧に存するなり。而して吾人は今日に於て第二の米國民を望む者也、南北激戰再演の必要を感ずる者也、特に一層の敢爲と突進とを要する事情を認むる者也、彼の奴隷の者たる束縛を受くる甚だしと雖とも、未だ以て今日の普通宗教徒の如く非らざるなり、彼奴隷の束縛未だ幾分の思想の自由を有するなり、然れとも今日の固執宗教信徒は全然禁束せられたる者なり。吾人人類の人類たる所以は精神に在るなり、思想に在るなり、生命に存するなり、決して肉躰に非らざるなり、肉躰は之れ假りの物なり、生命なきの肉躰吾れに於て何かせん。肉躰の束縛未だ安んず可き所ありと雖とも、思想の自由を禁束せらるゝに至りては、吾人如何でか之に堪ゆ可けんや、肉躰の束縛を以て自然に反し人道に悖るとなす、思想の束縛

を以て敢へて然らざるの理あらんや、肉躰解禁を以て義俠となし仁慈となす、思想の解放に於て豈敢へて然らざるの數あらんや。世に第二の米國民あらざる乎、自由義俠の人類あらざる乎。今日天下幾億萬の人類は皆殆んど奴隷の渦中に陷らんとす、而かも肉躰の賣買に非らずして精神の賣買なり、自己の所有權は移りて他に歸せんとす、見よ西にオルソドックス基督敎あり、東に固執佛敎ありて、各破竹の勢を以て殆んど滿天下を捲薦し、其先鋒の猖獗なる復た當る可らさるなり。而して是れ等オルソドックスは皆不可動的の經典を設け、不可侵的の個條を立て、吾人人類の理想如何に發達するも、イエス以上たる可らず、學理の進步如何なるも、釋伽以外を知る可らずとし、如何に不利不便なるも經典は永久動かす可らず、如何に國家に妨害を與ふるも信仰個條は萬世改む可らずとなして以て、吾人を誘ひ入れんと欲す。人類の束縛是に至りて極まれりと謂ふ可し、社會の進化を妨ぐる是より甚だしきは非らざる可し、而して能く之を救濟し、解禁す可き者は、自由の討究を許す所の吾人及び讀者の任に在るなり、唯一（ゆにてりあん）敎徒の正に務む可き所なり。

○信仰の二方面

信仰に二方面あり、一は道理心よりするものと、一は感情よりするものと之れなり、前者は之を智者に於て求む可く、後者は之を凡夫に於て見る可きなり、即ち此は眞理なり、道理なりとして理想に訴へ信ずる者は第一方面に屬し、此は基督の敎なるが故に信ず可し、此は釋伽の敎なるが故に信ず可らずとなす者は第二方面に屬す、故に眞正なる信仰は第一方面より生じ、固信迷執は第二方面の子孫なり、而して是れ等の二方面自ら特長あり、一は智者を修むるに足ると雖とも、未だ愞夫に知らしむるに足らず、一は凡夫を牽ゐるに長けたりと雖とも、未だ智者を服するに足らず、依是、第一方面は進步の宗敎にして、第二方面は幼稚の宗敎と云ふを得べし、今日世間一般の宗敎は果して何れに屬する乎、

○宗教と倫理

倫理は是れ人倫の明解なり、人類終極の目的を講究する哲學なり、而して其の結果能く可爲事と、不可爲事とを明にし、一言一行必ず清明に赴き、一蹉跌一躊躇をも見ざる可しと雖とも、倫理のものたる唯善悪の觀念を明瞭ならしむるに止まりて、之を制裁し補助するものあらざるを以て、實踐窮行に於て弱點を發見す可き也。宗教は是れ安心立命の地位を求むる所のものなり、神なる觀念の下に思考し行爲する所のものなり、故に善を善とし悪を悪とし、邪悪に遇うて屈せず、障碍に遇うて撓まざるの敢爲心を養ひ、神の制裁と補助とにより常に信ずる所を行ひ、思ふ所を表はして憚らざるなり。依是觀之は倫理は宗教の力により益々強く、益々實踐窮行に進む可き也。

○宗教學者と宗教家

眞諦門と方便俗諦門とは佛教の二妙義なり、理論と實行とは學問の二方面なり、而して兩者の相離る可らざる恰も車の兩輪の如し、然るに實際併行にせざるのみならず、全く相反するの觀を呈するとあり、以て完全なる宗教となすを得る乎、學問と稱せらるゝ乎。

眞諦門所謂眞實義とは即ち轉迷開悟、念照解脱の妙義にして、學問上の理論なり、吾人の理想なり、道理心なり、『何故』の疑問を解する力なり。方便俗諦門所謂方便義とは即ち衆生濟度、普門化益の義にして、學問上の實行なり、方法なり、手段なり、不可不爲、不可爲底の命令なり。前者は領諾にして後者は服從なり、前者は自由にして後者は束縛なり、其の兩者の優劣果して何れぞや。學者常に誇て曰く『世の進化は自由思想の發達なり、文化は理解の時代にして服從の時世に非らざるなり、開明の世に處して服從を唱ふる者は、過去の人類にして現世の人類に非らず、又未來の人類に非らず、吾が徒の勉むる所は專ら現世に在り未來に在り、現世を救ひ未來の幸福を希圖するに在り』と、方便家亦揚言して曰く『思想の發達は之れ服從の滅亡なり、理解的の盛なる處命令的の衰ふるは自然の理數、我れ猶ほ之を知る、雖ㇾ然世は學士のみに非らざるな

り、博士のみに非らざるなり。世の多くは是れ平々凡々、南無阿彌陀佛、南無妙法蓮華經、アーメン的の人類なり、是等人類即ち一般人類を救濟するは即ち方便に在り、手段に在り、未だ理解の以て奏功なく、理想の以て解するなきを奈何、彼れ學者は常に現世を利し、未來を利するを高言すると雖も、其のなす所妄想に奔り空想に流る、吾が徒の務むる所は着々歩を進め、現世の苦悶を脫し未來の冥福を祈るに在り』と、前者は所謂學者としての議論にして、後者は所謂實地家の觀察なり、

其の言ふ所互に一理あり一失あり、未だ劇に判す可らずと雖とも、吾人は信ず、純正宗敎の智識を明にし、實踐躬行を勵まし、實義と方便との調和を圖り、宗敎學者と宗敎家の一致を企つるは、今日宗敎家、道德家の最大要務なることを。

○執着は迷誤の母なり

吾人聞く『凝りては思案に能はず』と、固信迷執の起る所亦是に存する乎。三位一躰とは吾人其の意を解せざる也、イエス醫藥なくして癩疾を愈したり（路加第五章第十三節）とは思はれざる也、貧者ラザロの如く死後の生活（路加第十六章第廿二節）を知らざる也、馬太第廿一章第十九節の如くイエスの口は立刻に草木を枯すの力ありしやを疑ふ者也、イエスは果して處女の生む所（馬太傳第一章第十八節）なりしとは思はれざる也、是れ等は大海の一滴のみ、其の他イエスの再生、死人の復活、晩餐の物質變化、海上の徒行、波濤の靜止等、彼等の正依經なる聖書の大部は、殆んど神詫、奇蹟を以て充滿するも、彼れ自らは之を知らざるなり、

彌勒陀佛彼れ何人ぞ、釋尊に侍して法を聽き、佛滅後九百年瑜珈論を著すと、吾人其の長命に驚かずんば非らざる也、釋尊の降誕直に自ら步し言を發したりとは生理學上信じ難き也、弘法大師五藏三摩地觀に入るの時、俄に頂上に五佛の寶冠を涌出し、五色の光明を放ちたり（元亨釋書東國高僧傳）とは信ぜられざる也、聖德太子の生るゝや身に異香ありて手を峯して開かず、後二年にして啓けば即ち佛舍利を出す（大日本史）

と、何ぞ其の說の荒誕なるや、其の他弘法大師の呪して水を出し、空也の夢に金人の指敎を受けし、慈覺大師の夢に藥を飮んで仁疾の癒えしが如き、是等の奇蹟枚擧に遑あらざるなり、然れども彼の徒は未だ奇蹟怪談とせざる也、殊に佛徒が釋尊榮譽豪華、金殿玉樓、所謂世間的の快樂を棄てゝ妙智の英靈を發見し、玄機の本源を獲得せんが爲めに隱遁したるを稱揚する甚だ善、然れども父母妻子の極諫も用ゐることをせず、殊に甚だしきに至りては父母妻子の悲傷殆んど絕え入らんとするに至るも猶ほ顧みるに暇なしとし、或は食を絕ちて身を危くする等、俗人すら猶ほ潔とせざることとすら之を發揚す、然れども彼の徒は之を以て得々乎たり。而已ならず世の宗敎一として信仰個條を有せざるはなく、不可侵的の聖書經文を有せざるはなく、戒禁を設けざるはなく、以て人類の思想の自由を束縛し、命令的抑壓をなし、敢へて思想の自由を與へざるなり、然れども是等の束縛は、是れ唯非退步的人士の念頭に上り來るの考へにして、オルソドックス派自身は未だ嘗て此の束縛に遭遇せざりし也、又將來に遭遇せざる也、若し之れ有りとすれば、吾が黨の士、進化的の動物、所謂自由思想家也、オルソドックスに非らざる也、オルソドックスのオルソドックスたる所以は一に是に存す。而して彼れ自身は敢へて之を以て吾人の思ふ如く不自由とせざる也、束縛と思はざる也、退步とせざる也、苦痛を感ぜざる也、而も有難しとなす也、善となす也、神聖となす也、眞實となす也、神意となす也、其の然る所以は執着に在る也、彼は執着の爲めに光明なき也、執着は實に生涯の過誤也、執念の發する所復た眞理なし、佛陀の轉迷開悟を論じ固執を忌みたるも亦此の意に存する乎（隱遁生）

○佛學者と自由派神學者

近世歐米諸國の神學界に於て殊に吾人の注意を惹くものは歷史考證的批評學 Historico-critical method の勃興にあり即ち敎權を脫して自然的事實に基き批評的に敎典を講究するに至れるにあり之れ蓋し過去を講ずる最良の方法にしてその論證の確實なる未だ嘗て彼の獨

斷的註釋者及び詭辯的敎義論者をして其の後に蹉躇たらしめずんばあらず古來基督敎徒中往々奇跡を拒み敎權に反對するものありしと雖も其の論辯たる單に敎義的に止まりて著しき効果あらざりし然れども一たび歷史的考證法の起るに及でや（レッシング、ヘルデルの時漸く其の眞面を顯はし以來凡そ百年間益々進歩して今日に至れり）經典諸書編纂の順序關係等を明確にし後世の附加物なる傳說及び敎義を看破し以て純粹高潔なる師イエスの敎旨を知らしむるに至れり方今歐米の各國に於て自由派基督敎が學者社會に稱賛せらるゝ主因此に外ならざるなり

然るに佛學界を觀るに若し歷史的の意義を單に記錄的或は傳說的に俗了誤解し去れば盛に行れ居らんも眞の歷史的—事實的—講究に至ては少數の學者が其の必要を感ぜる外未だ實行されざるが如し蓋し迦葉、阿難等の傳へたる若くは傳へたるてう敎說は之を知り得べきも眞の釋尊の性行及び敎旨は未だし彌勒、龍樹等の說ける若くは說けるてう世界觀は之を知り得べきも眞の釋尊の說ける佛敎は未だしなればなり細言すれば迦葉、阿難等の敎說彌勒龍樹等の學說は素と釋尊の敎旨を解說辨明せんためなるや明かなれども其の實は活動極りなき人間の思想が變遷定りなき時勢の下に在て釋尊を觀じたるものなれば假令ひ其の文字は秀麗其の義理は深遠なるも畢竟するに彼等記者の主觀的圖畫に過ぎず（揑造の義にあらず其のまゝに非るを云ふ）之を以て各記者の種々なる敎說、年代相去る諸記錄を混合同一視するは敎義上甚だ便なる所あらんも學理的講究は決して之を許さず必ず相互の關係、年代の先後等を事實に徵し確乎たる基礎に眞の「（ありのまゝなる）」釋迦傳及び佛說を建立するを要求するなり然れども現今の佛學界を觀るに敎義的論辯書は山の如く多きも最も肝要なる（佛敎徒なるを以て）釋迦傳、經典批評（歷史的）の如きは手近き漢語（サンスクリットの原語よりせざるは暫く之を問はず）の範圍內に於てだも吾人の聞知せざる所なり（却て獨英諸國に於ては已に其の端緒開け居れり又た我邦佛學者中にも已に其の傾向あるは言ふを待たず）若し之

をして吾人の寡聞に因らざるものとせば佛學者は講學上の一大要素を缺けりと言はざるを得ず

田口卯吉氏嘗て或者に對し言へるあり曰く・・・余の如きも一時佛敎を修めんとせしか到底其徒勞なるべきを知りたれば迚も分らぬものと分りし一事を以て滿足せり云々と博識田口君の此言を吐ける亦た佛學上歴史考證的の講究法行はれず却て甲乙彼此を混同し主觀的敎義中に歴史的—事實的—眞理を埋沒し去るを痛言せるにあらずして何ぞや

吾人は平生アルノルド氏の

Christianity has much to give to Buddhism, and
Buddhism, something to give to Christianity.

と言へるに同意を表するものなり蓋し實際的及び心靈的眞理に關しては基督敎の佛敎に與ふる所多きを信ずれども佛敎に存する形而上の高遠の思想の如きは基敎の當さに學ぶべき所なればなり然れども吾人は玆に基佛二敎の優劣を論ずるに非ず單に佛學者及び自由派神學者の講究法を評するものなればア氏の言を左の如く改めんとす

Liberal theologians have much to give to
Buddhist scholars, and Buddhist scholars,
something to give to Liberal theologians.

而して何か故に自由派神學者の佛學者に與ふる所其の受くる所よりも多きやと問ふ者あらんか吾人は直ちに答て曰はん『歴史考證的批評學の實行は則ち其の一なり』と

○偉人の眞相

偉人は兎角世に誤解せらるゝ者也、古來偉人にして其の眞相を遺したる者は非ざる可し、渠等は往々人にして人に非ざるが如く、神に非ずして神なるが如く、奇蹟を以て充たさるゝは渠等の一般なりき、實に偉人の行爲は凡俗より超脱したるに相違なし、其の秀群なる所明晰に理解せられざるは素より其の所なり、畏服、驚歎は當時世俗の偉人に對する解釋なりき、此の畏服驚歎は益世俗の妄想を逞うし、偉人を一般人類に併置するを敢へてせず、一の行爲を奇蹟となし、其の人に

蒙らしむ、而して其の偉人の眞面目を傷くるを悟らざる也、斯くの如くして其の偉人逝き、當時の人々も地下に眠り、幾千萬の年月を經過し、其の傳ふる所は益眞相を蔽ひ、一の奇蹟は二となり、二は三となり四となり、又九、十となり、遂に捕ふ可らざるに至る、嗚呼こゝに至つて偉人も一の神となり、惡魔となり、天外の者となり、遂に吾人の想像す可らざる者となる、偉人果して斯くの如き者なるや

一事一業をなし、一計を案ずるに當りてや、世の毀譽褒貶を以て意とするが如きは偉人に非らざるなり、而かも己れが行はざる奇蹟を得て喜ぶが如き者ならむや。世には奇行怪談を以て基督、釋伽、馬哈德等の眞値となし、却て其の人の價値を曚ます者あるに至りては、先賢爲めに地下に號叫せん。然るに世の宗敎家なる者は、特に己れの先人、宗祖の榮光を顯はさんと欲し、却て其の人を傷けて知らざる者の如し、豈に戒心せざる可けんや

○一種の偶像敎

宇宙は目に見ゆる物、耳に聞ゆる物と考ふるは、人智曚昧の時代に在り、甲の物乙の物と、個々物を採り來りて崇拜するは、理想の發達せざる蠻野の時代なり、而して目に視、耳に聽く可らざる一元の靈を信ずるは、後の事なり、然るにイエスを以て信仰の目的物となし釋伽牟尼佛を以て無上の權力となさんには、之れ一種の偶像敎に過ぎざるなり、昔し基督敎の初世に當り、イエスを以て直ちに神となし、崇拜信仰の目的物とせるもの、何ぞ智者の爲めならんや、古世人民の闇愚なる能く神の眞理を解得せざるを以て、イエスを一の機械として愚夫愚婦を善導せんとの方便主義に外ならんや、唯信ず彼は吾人に神子たるを敎訓し、眞正なる信仰を知らしめんとせし偉人のみ、己れを神として拜せられんとするが如きは、決して彼の本意に非らざるのみならず、却て彼の拒否する所なるを、

○犯罪及び敗德の原因

國民の犯罪及び不道德に陷る原因及び其の關係の如きは、甚だ複雜なるものにして未だ劇に之を審にす可ら

ずと雖とも、人種、遺傳、宗敎、風俗、結婚に關する束縛、飲酒等は主因にして最も大なる關係を有するが如く、殊に骨相と犯罪とは甚だ密接の關係を有するが如し、然れとも骨相の如何は、人爲の能く爲す可き所に非らざれば、唯其の骨相の如何に應じて適當の方法を講じ、其他風習、結婚、飲酒等より起る犯罪及び敗德を救濟する方法を講ずるは世の宗敎家敎育家の最大要務なり、讀賣子嘗て國民の不道德に陷る原因を記して曰く、『貧窮、無學及び都會の惡習等は左程の關係を有せざるもの丶如し、則ち私生兒の數を大都會の人民に照合するも明なり、近頃ドクトル、アルヘルト、レツフイングウエル氏の公にせる私生兒の統計によれば

愛耳蘭	二六（千人ニ付）	蘭國	三〇（千人ニ付）
蘇格蘭	八〇	佛國	八二
英倫	四八	伊國	七四
露國	二八	墺國	一四六

にして愛耳蘭は貧國なり、而して最も貧窮なる地方には私生兒の割合最も少く、墺斯利は歐洲中にて最も私生兒の多き國なれとも、敢へて貧國と云ふべき程財政に窮し居るにも非らず、又和蘭と露西亞とは其の數相伯仲せりと雖とも、富も繁華も相同じからず之れに因て之を見れば、人種、遺傳、結婚に關する立法上の束縛、社會の習慣及び是等に似寄りたる事情が不德義の主因にして、敎育と敎育の條規とは唯僅に關するもの丶如し』と、又雜報中記する所の高橋次郎氏の演說は、世の宗敎家敎育家の參考となる可き所尠からざれば、殊に參照す可きとなり。

○似て非なる者

世上の事物比々皆然り、耶蘇敎徒と燒起とは似て非なる者也、チヨンマゲと愛國とは似て非なる者也、小智と大惡とは似て非なる者也、豫想と伎倆とは似て非なる者也、紳士と幇間とは似て非なる者也、佛敎と紛擾とは似て非なる者也、其の他甚だ多し、然れとも是等は唯時流の然らしむる所、深く咎むるに足らずと雖とも、其の熱心と執着の如きは特に似て非なる者也。熱心とは物に熱する事也、事に專らなる事也、其の固着

する所所謂執着也、頑迷也。而して其の熱心なる所光明と爲り、勤勉となり、進化となる、其の執着する所闇迷と爲り、迷妄と爲り、固守となる、前者は貴ぶ可くして後者は棄つ可し。古來史乘に徴するに世の大革命、大維新、大事業として目せらるゝ所のもの一として熱心の生む所に非らざるはなく、之に反して執着は過失迷妄の母なりしを察せずんば非らざる也、近くは我が國三十年前の攘夷家の如き、諸君は之を以て過てりとなす所ならずや、之れ一に熱心の變じて固執となりたるの結果に非らざるなき乎、彼等固より國家を亂さんが爲に奔走したるに非らざる也、國家を危くせんが爲に勞したるに非らざる也、其の國家を愛する熱心の遂に執着となり、時の如何を顧みるに暇なきなり、云はゞ感情の爲に目も心も眩みたる也、又之を日常の事に徴するも亦然るを見る、凝思熟慮甚だ過度なる時は、遂に他事を忘却するに至る也。故に世の宗敎家の如き人の上流に立ちて、社會の風潮を維持せんと欲する者は、其事に熱心なる甚だ善、然ども遂に執着に至るの議を招く勿れ、世態を視るに常に此の觀なくんば非らざる也、或る基督敎徒の如き、其の信仰の熱心過度に走り、基督以外に眞理なし、我れ以外に敎なしとし、佛者は佛陀に斯くの如く、遂に其の何れが眞何れが是なるや、吾れ知らず人知らず、天下亦之れを知らず。其の身社會進化の牛耳を握りながら、却て社會の爲めに導びかる、豈嘆ず可きの至りならずや。吾人は諸君に一針を呈せん『有二官守一者、不レ得二其職一則去、有二言責一者、不レ得二其言一則去、』と、其の職務を得ざれば則ち去る其の理一也。

時事

〇神學生を奴隷視する勿れ

「いのち」記者は神學校を以て奴隷養成所となさんとする乎、十五六世紀間の卑屈神學者を涵養せんとする乎、合理的の研究を拒まんとするか、新智識の發達を防かんとするか、將た討究の結果に依り後進者が記者の右

に出づるを恐るゝもの乎、「いのち」第十一號に＝謹で神學校教員に呈す＝と題して慷慨らしくも論せられたり其文に曰く＝（前略）後來眞の望みある人物なりや否やを充分に撿定せずして之れに若干の資金を給與し以て養ふ事數年、卒業して後余はユニテリアンの主義を信ず、基督は神性を具へずなど唱へ出し、之れに依て傳道の責任を逃れ去る者唯たに一、二に止まらざる云々＝と「いのち」記者は貧しき神學生に給與せし些少の手當て金を以て、彼れ等の思想の自由を買ひ得たりとなすか、或は之れを買はんとするか、明治の聖代に人身賣買を嚴禁せり、然るに十九世紀の宗教界に在て人心賣買は猶ほ行はるゝものなりや、咄怪事！

○吾が喜びの日來らんとす

『草木國土悉皆成佛』『謂一切諸佛法身與衆生身平等無二』と、誰か世に成佛せざる者やある、萬靈の蠢々たる、衆物の芸々たる、皆其の根本に歸せざる者やある、歸すれば同じく一河の流、人なく我れなく天下の有情皆吾が同胞、汎く愛する之を仁と云ふ、其の仁の及ぶ所敵なく味方なし、敵あり味方ある所是れ俗見のみ迷執のみ、去月廿日博士南條文雄師が、本郷會堂の基督教師横井時雄氏の懇請により、異端を辭せず同所竹町會堂に於て「學術上の佛教」と題する一席を演じたる由、佛教と基督教とは從來相反目して呉越も啻ならず、時に腕力を弄する事もありし又有る處なるが、今や公正唯一の正道は、兩教信徒の心頭に輝かんとす、「ホープ」（希望）の花は吾人の頭上に降り懸らんとす。兩者是より交通の端緒を開きて兩々相提携するの好果を結ぶや如何に。

○然もありなむ

吾れ未だ日本禁酒會を知らざる也、吾れ一箇人として未だ禁酒會の要を見ざる也、故を問ふ曰く吾は下戸なれば也、吾は禁酒に非らず飲まざれば也、吾は欲し飲者は飲む可しとすれば也、其の良心の許す限りに於て、其の衛生の許す限りに於て。然れども世は樣々にして吾れのみに非らざる也、上戸も有る也、會規の束縛を要する者も有る也、是れ禁酒會の起る所以乎。頃日左

の一書を得たり、日本禁酒會の陳情書なりと、此の會にして此の事あるは然もありなむ、然れども其を贈る心に贈る也、其を受くる亦心より受くる也。

陳情書

一昨年愛知縣の海嘯水害は實に今古の稀に聞く所天下の義人衣を脱ぎ食を推し其救濟に奔走せしは同胞の情義友愛の至誠固より其所なり我日本禁酒會は自ら揣らず亦聊爲めに盡す所あり幸に愛知縣知事の録する所と爲り過て嘉褒を賜ふ誠惶誠恐頓首々々凡そ人に與ふる唯其物の美を之れ擇ぶに非ず亦必其人に適するを務むるを要す若し夫れ刖者に贈るに屨を以てし戰死を葬るに翣を用ふるは其恩は則有りと雖ども而れども其用に於て益なし蓋し知者の爲さゞる所なり我日本禁酒會は同志血誓盟約し酒を飲まざるを以つて唯一の主義と爲す者なり故に此の頭寧ろ刀を受くべし此手斷じて杯を執らす然るに今强ひて酒杯を賜はんと欲するは啻に刖者に屨を贈り戰死に翣を用ふるの益なきのみならず其主義を傷け其持操を奪ふ或は寡婦に婚を强ひ節士に降を誘ふ者と比するなきを得んや人或は曰く杯未だ必しも酒を盛らず杯を賜ふ則之を受く亦何ぞ其主義を傷けんと僕等之れを聞く禮に車馬を賜へは則乘つて以つて賜ものを拜し衣服を賜へば則服して以つて賜ものを拜すと今杯を賜ふて酒を盛らずんば則僕等至愚其賜ものを拜する所以を知らず是れ我日本禁酒會の固辭して敢て受けざる所以なり俯して冀くは天地包容其頑陋を憐み其戇愚を察し速に我日本禁酒會に賜ふ所を回し以て他日有功の者を待て然らざれば獨我日本禁酒會の主義を傷くるのみならず恐くは人をして愛知縣知事の恩を用ひて其人に適せざるを笑はしめん誠惶誠恐頓首々々

明治廿五年十月　日本禁酒會長林蓊昧死謹白

○本年神學界の不幸及び幸

響きにキユーチン氏（蘭人）逝き近ごろ又たルナン（佛人）、リプシウス（獨人）の二氏を失ふ三氏は近時世界に於て有名の碩學にして頗る自由思想に富み共に宗教史の考證及び批評に精通せり殊にリプシウスの如きは教義學宗教哲學にも其の天才を顯はせりと云ふ吾人が間接に諸氏に學びしこと決して少からず嗚呼三氏の逝去之れ實に神學界全躰の不幸なり

然れども眼を轉じて我が自由派神學の氣運を視るに歐米諸國は言ふを待たず近く我邦のみに於ても其の進歩の著しき其の勢力の大なる未だ嘗て本年の如きものあらざるべし佛教改進派の吾人（自由派神學徒）を優遇

する、オルソドックス基督教の吾人に近からんとするが如き皆な之を證せざるはなし吾人は斯く進化の大法が現存せるを視轉た天地至愛の神、法界普遍の妙理に對し感謝の念起らざるを得ず

○大同團結を思想家の專用語とす可し

大同團結は數年前に於ける後藤伯の專有物なりき、然れども彼の四文字必ずしも後藤伯が政治主義の爲めに存するに非らざるなり、吾人は今日思想家の爲めに此の四文字の復活を希望する者也、世の博士學士の爲めに此の四文字の再興を計る者也、殊に吾人は其の之を世の宗教家、哲學家、教育家に望む者也、今日は各自説を取て割據す可きの時に非らざるなり、小異を棄てゝ一致す可きの秋也、利己主義の爲めに爭闘す可きの時に非らざるなり、共同一致社會の爲めに盡す可きの秋也、見よ哲學に東洋派と西洋派との競爭あり、宗教に神儒佛耶等の爭闘あり、教育に鎖國主義と進化主義との衝突あり、其の競爭する所衆庶を迷はしむる是より酷しきは非らざるなり、其の爭闘する所衆庶を傷むる是より酷しきは非らざるなり、其の衝突する所衆庶を瞞ます是より酷しきは非らざるなり。道德の衰頽とは諸君の口唱、其の原因に遡らざる者は何ぞ、今日の德義の衰頽は教育の衝突に在り、宗教の爭闘に在り、哲學の競爭に在り、約言せば今日の道德壞亂は、他説を倒して自説を張らんとするの野心に基するなり、故に是等の一致を企たて以て社會を救ふ可きは、諸君の義務なり職務なり、敢へて煩を以て之を避くる勿れ、感情を以て割據する勿れ、大同團結は諸君目下の一大要務也。

○神田錦町講議所

何ぞ世の少男少女を爲す無しと云ふ、世は是れ誠に青年者流の形造る所なり、而して神田は是れ東京市中最も多くの青年を包括する所、而かも日本國中に冠たる所たる可し、乃ち是等多數の少男少女の一擧一動は市中の影響を來し、延きて全國の盛衰に關す、於是乎之を善導するとの最も急務なるを知る。駿河臺頭既にニコライ堂の建設を見、下つて佛國童貞女學校となり、

其の他無數の講議所、説敎所、演説所、學校擧げて計ふ可らずと雖とも、其の宗敎上に關るものは未だオルソドックス宗味を脱したりと云ふ可らず、其の學術上に係るものは往々窮理の一方に偏して實行に迂なりと云はざる可らず、是れ惟一敎（ゆにてりあん）をして布敎の必要を認めしめたるものならん。而して惟一敎は先きにローレンス氏の盡力により講議所を設置したるも、不幸にして祝融の爲め烏有に歸したる所、氏の熱心は之を以て沮喪せず、今又神田區錦町一丁目十番地に再建したりと。而して編輯子未だ其の名を聞かず、今錦町講議所と云ふは編輯子の附したる假の名なり。

○眞言宗々會の解散

帝國議會の解散、某縣會の中止、町會の解散、其他何會何々會の解散、紛擾或は中止とは兩三年來の流行物也、而して佛敎社會の紛擾も今日に始まりしに非らず、遂に世人をして佛敎と紛擾とは同観念の下に在らしむるに至るも無理ならぬなり、眞言宗の大會は去月十九日を以て京都宗務所に開かる、其の集る所の者同宗一派の高僧聖侶、議する所必ず宗敎社會の一新面目を開かんとは、吾人宗敎家の豫期したる所なり、然るにあへなくも新義古義兩派の軋轢は以て休會となり、遂に解散となる、吾人の失望果して如何ぞや、噫佛敎も亦俗界のものとなり了せる乎、

雑報

○東和協會講談會

去ぬる日の同會に於て井上博士は「人種言語及び宗敎の比較より日本人の位置を論ず」と題して二時間餘の演説をなせり其の大意に曰く日本人種は南洋人種の分子を最も多く含む事、言語は支那に比すれば稍々發達を見るも未だ最高點に迄發達せざる事、宗敎に就ては佛敎は基督敎よりも玄妙なる眞理を有すれども未だ厭世的敎理の議を免れず故に世の進歩を妨ぐる事、其他美術音樂文學等亦た彼の西歐に及ばざる遠し元と日本人の位置は中等に位するを以て爾後益々進んで改進を計らざるべからず夫の他人種の憐みによりて獨立せんことを希ふは愚の極と云ふべし云々

○本郷會堂學術講談會

東京本郷會堂に於ては當冬も例年の通り學術講談會を開かるゝ由にて去廿六日午後六時半より先づ其の初會を開かれたり當夜の辯士はドクトル、オフ、フイロソヒー中島力造（哲學史上カントの位置）及び文學博士南條文雄（佛教文學）の兩氏にして此後尙井上哲次郎、德富猪一郎、大西祝、久米邦武、坪内雄藏、金井延、元良勇次郎等の諸名士も本年末より來春にかけて講演せらるゝ由

○高橋次郎氏の演說

去月帝國大學講義室に於て演說したる氏の「佛國刑事統計の話」は隨分面白味ある演說なりし即ち左に

（一）犯罪と氣候の關係

今一般より犯罪と氣候の關係をのべんに先づ子殺の罪の多く行はるゝは一月、二月、三月、四月の間なり、是は人間生殖の時期は五月六月七月にして此時期に於て多く懷胎するの結果なり、又墮胎の罪は多く懷姙の第四ヶ月目第五ヶ月目に盛んなり、是は確實なる統計の結果也、次に謀殺犯は多く十一月に於て行はるゝ事なるが是は佛國に於て新造葡萄酒の出來る結果なりといへり又故殺罪毆打創傷の如き活潑なる罪は多く七八月の間に行はる是は陽氣のために人の精神に活氣を與ふる爲ならん

（二）女子も油斷ならぬ

犯罪の割合は男子は女子よりも多き事概して四倍なり、其內身躰に對する罪は男子の犯罪百に對するの八十六にして財産に對する罪は百に對するの二十四なり、然らば財産に對する罪は男子よりも女子の方が多きなり女子は其性質上活潑なる罪を犯すこと少けれども陰險なる罪は男子よりも却て女子に多きもの也日本にても湯屋の板の間などをかせぐは多くは女子にして男子には少き樣也今日女子の犯罪が男子に對して比較上少きは學問の足らぬ爲なりといへり

（三）年齡の關係

犯罪を尤も盛んにやる年齡は二十五歳より三十歳までの間也、年をとると共に亂暴なる犯罪少く變じて狡猾なる犯罪となる又一般に三十五歳以上の罪人は改過善遷の効なきものにて再犯三犯などの多くは三十五歳以上のものなり人類は三十五歳までは智識も躰格もそだつものにて三十五歳になればかたまるに因る也

（四）犯罪と學問の關係

無學文盲の者には殺人毆打の如き亂暴なる罪多く僅に

讀書を知る者には詐欺の罪が多く初等教育を受けしものには手形僞造など多し、教育を受けたるものに疎暴なる罪を犯すもの少けれども詐僞罪の如きは却て無教育なるものよりも多し

(五)飲食の關係

昔の學者は疑はしき罪は其妻に尋ねよといひしが、今日にては疑はしき罪は德利に尋ねよといふに至れり、佛國に於ては金曜日に犯罪が少くして土曜日曜月曜日に犯罪が多し、是れ職工などに賃錢を拂ふ時なれば也、余曾て或る著述をなし之を活版に付せんため月の終りに活版屋へ依賴したるに約條期限までに印制が出來上らざる故頻りに催促をなしたれば活版屋にては之に答て職工どもが給金の渡りたるため命の洗濯に出掛けたれば給金のある內は歸らざるべし職工の歸らぬ內は印刷は出來ずといへり其「命の洗濯」といふ言葉の中には犯罪が含んで居るものと思はる

(六)時勢及び開化の關係

開化の進むに從ひ財產の罪は少くなれども身躰の罪の中自殺の如きは却つて多くなる也

(七)犯罪と人相の關係

佛國の學者は犯罪と人相の關係あることを說けり是は監獄署にて統計したるもの也第一に下頷の前へ突進した人が險呑なり(おさし合があれば御ゆるしあるへし)次に髮の毛の多くして且つちゞれたる人は險呑也是は如何にもそう思はるゝ事にて石川五右衞門などの畫を見ても、髮の毛の少く書いて居らぬ樣なり次に鬚の少い人は險呑也、是は亞細亞人種などには迷惑なるとなれども佛蘭西人は箇樣な人に犯罪者が多きとのと也次に肌の茶褐色及び灰色なる人は險呑也是も歐巴羅人のとなり次に頭の鋭角なる人は險呑也次に額のひッこんだる人は險呑也日本人は大抵額の出たる人少けれど是は元來よき相にあらず猿なども額はひつこんで居る次に耳の出ッぱつて居る人は險呑也是も日本の人相學とは異る處にて日本にては福耳などゝ唱ふれど西洋にては耳の出ッぱつた人は險呑なるものとの事也男にて女の如く女にて男の如き容貌の人は險呑也是は其通なるべし余も監獄署に行て罪人を見たるとありしが思の外によき男が居る叉漢の張良は博浪沙にて秦の始皇に鐵推を投じたる人にて當時なればこそよけれど今日にて斯くの如きとをなさば皇室に對して誠に相濟まざる罪人なり此人の傳を讀むに其容貌婦人女子の如しとあり云々

〇ユニチー俱樂部大演說會

同俱樂部は去月廿日の夕大演說會を慶應義塾大廣間に於て開き來り會する者無慮三百有餘名サシモに廣き會場も立錐の地なきに至れり此日は佐治、古莊、マッコーレイ、ローレンス等の諸氏交々演臺に上り時弊を痛論し道德振興の策を精辯せり、終て來賓及び會員一同へ茶菓の饗應あり全く閉會を告げたるは午後十時頃なりき而して今同俱樂部の組織を聞くに慶應義塾學生有志諸氏の立つる所にして其の目的とする所は實踐躬行以て自己の德義を進め且つ世間德風の頹廢を救ふの道を講し以て人類共濟の義務を全ふせんとするに在りて每週一回集會して道德社交上の事を研究し每年數回大會を開くを例とせりと云ふ今同俱樂部の役員を聞くに、會長クレー、マッコーレイ氏、副會長林和太郎氏、書記濱田長策氏、會計水野次郎氏、議長田村六郎氏、圖書掛內田榮の諸氏なりと云ふ。

〇萬國宗敎大會と佛敎家

明年開設の米國大博會の附屬として萬國宗敎大會を開く筈なれば我が國の佛敎者よりも該大會に列席せんとする者兩三名あり右列席の一名なる蘆津實全師に代りて大原嘉吉氏が米國なる佛光記者フイランジ、ダーサ氏へ向け該會議の實狀を問合したるに同氏が此程大原氏へ回答したる要領は該大會の擧たる基督敎師の手に成りたるものにて其結果は畢竟基督敎の虛光を輝かさんとするに過ぎずと信ずれば該會を利用して彼等の頑迷者を敎化せんとするが如きは思ひも寄らざる事なるべし云々と云ふに在りしよし尤も同會委員長よりは嶋地默雷師等へ向け佛敎者たるの故を以て決して之を冷遇せざるべしとの事を申越したる趣なれどもダーサ氏の回答もありたる事ゆゑ中には稍や躊躇して未だ決心せざる者もありと云ふ

〇大日本進德會

東京市芝區三田四國町二番地第拾一號地に大日本進德會なるものあり其の爲さんとする所何ぞ曰く十二德、即ち克己、愼言、順序、確志、節儉、勤勞、誠實、公義、温和、清潔、謙遜、仁愛の諸德を修めんとを期し天は自ら助くる者を助くの旨を實行するに在りと云ふ、

〇前川氏の結婚

藥硏堀敎會敎師前川太郎氏は去月三十日を以て伊藤順子(理學博士伊藤圭介君孫娘)と神田區今川小路玉川亭に於て結婚の式を擧げられたり此の日會する者內外の人士五六十名頗る盛なりき、

○地方通信一束

去月中日本ユニテリアン弘道會に宛てたる地方通信中二三書を摘載して如何に自由宗教思想が地方に發達せるか、地方人のユニテリアン教に對する感情如何を察するの一考に供せんと欲す、猶讀者諸君にして本誌及びユニテリアン教に對し批評及意見あらば本誌は喜で之を掲載す可ければ憚ることなく投稿あらんを望むなり而して其の文章の巧拙の如きは本誌の敢へて問ふ所に非らず

(其一)

(前畧) 小生が是迄聖書及現今耶蘇教徒の信條に對して懷抱せる疑念も爲に氷釋に就き且つ積年如何に思考するも本心より信服出來難き數件をばユニテリアン教の主義に於て討究の結果として既に排除せられたるは敬讃措かざる所に御座候ユニテリアンが完全なる討究の自由によりて哲學理學上に確立せるは將來第二十世紀に於て最高なる發達をなし圓滿の宗教たる可きを確信仕候(中畧)ユニテリアン教は如斯寛厚偉大純正高潔なる主義に御座候へば隨分小生等と感想を同する人士も滿天下に鮮からずと存候に付後來誠實に眞心を捧げて信仰に歸す可き人士少壯有爲の社會より陸續輩出可致奉存候云々(十一月五日三重縣山田町石谷吉平氏通信)

(其二)十一月三日鹿兒島市有村十太郎氏の通信に曰く

(前畧) 布教上の件に付當地方有志者と協議仕候所先便申上候通是非共總代一名上京せしめ種々御教示等を仰ぎ度精神にて折角奔走中に御座候目下の所にては前田清憲と申す者適當と存し兎に角本人を上京せしめ度存念にて目下其の準備中に御座候云々

(其三)十一月十八日紀州高野山大學林生徒某々二氏(姓名は憚る所あれば掲載せず)よりの通信中抜載

貴教の御主義自由の討究を許され佛書經典聖書等に拘泥せず將來益眞誠なる宗教の發達を希圖せらるゝ段吾人素より佛教者には候得共主義に至りては大に賛成を表する所にて且つ貴教の大眼目たる『天下の宗教は皆吾が交友なり』に至りては實に吾人宗教家の進で賛成同意仕所に御座候我等目下大學林に於て佛理研究仕居候得共教理上疑念百出氷解に苦しみ居候所貴宗の教義を拜見致し候以來トント融解仕候我國幾十萬の僧侶中此理をば夢にだも悟り得ず迷路に墮落致居候者等をして貴教の主義を聞かしめ度と存居候就ては以來時々教義上質問申上度候間御解答に

預り度願上候都合によりては小生等も貴教へ転宗致すも更に嫌はざる所に御座候云々

(其四)

當地方に於て貴教の主義を尊奉致居候有志者數多有之候得共目今傳導師等無之且つ貴教の教理を審に存居候者も無之爲め數十の有志者は佛教たらず神教たらず其の方向に迷ひ居る場合に御座候若し貴教に於て御差支無御座候はゝ傳導師御派遣被下候ては如何に御座候哉此段御案內申上候云々

と上州吾妻郡永井傳成氏よりの書信中に見ゆ

(其五)

小生儀少々考ふる處有之候に付貴會御出版の書籍各四部及「宗教」雜誌御送附被下度云々

と紀州高野山某院よりの注文にして其院名及氏名は憚る所あれば暫く掲載を見合す

(其六)

(前畧) 宗教第十三號閲見仕候處最初發刊のユニテリアンに比し其論說の進步と云ひ文章の流暢と云ひ編輯之躰裁と云ひ一新面目を革め實に宗教家の最良好書に相成可賀事に御座候尙將來益御盛大に可相成樣奉祈候生固より淺學宗教の何者たるを知らざれども彼「宗教」を一讀し我日本の各宗教をして中和せしめ其本據たる理想を合一せしむるは貴雜誌の發行を見て其遠きに非るを知るの想あらしむ「宗教」よ今や本躰たる上帝を覺知するに到りし以上は爾後人生未來の觀察を下し彼本躰たる上帝に合一せしむるを勉むるは記者の責ならんかと推察罷在候、聊か卑見を述へて几下に呈し候間御訂正の上「宗教」の餘白を借るに足らば滿足に御座候云々

と富山縣礪波郡福野二日町河合重雄氏より宗教子への來信中に見ゆ。(紙幅の都合により以下次號に讓る)

○ユニテリアン教會近況一束

○ユニテリアン第一協會 は幹事撰定以來諸事整頓に歸し益隆盛に赴くとのこと。該會幹事土谷忠治氏は職務上の都合により次點者石毛太一氏に其任を讓りたりと云ふ、毎日曜日には午前十時より說教又は演說あり、

○藥硏堀教會 に於ては從來日曜日及び金曜日を以て說教若しくは演說をなし來りしが去月より該地不動の緣日に際し夜間演說會を開くとのことなり

○神田講議所 は去月神田錦町一丁目十番地へ開設せられたり而して其教師にはローレンス氏及び佐々木笑受郎の二氏なりと云ふ

恭賀新年

吾人は健康安全にして我が親愛なる讀者諸君と共に。此の泰平なる新年を迎ふるを得たり。玆に謹て慶賀の意を表し、併せて舊來の恩顧に倍し愛讀の幸榮を賜はらんとを祈る。

回顧すれは宗教は一昨年十一月五日‖天下の宗教は皆な交友なり‖との主義を以て世に顯はれ、爾來江湖の寵遇を蒙り、益す〳〵隆盛の運に至りたるは吾人の欣喜に耐へさる處なり。勿論本誌は決して一宗一派の機關に非すして、健全なる宗教的智識の博覽會にして、將來此の多端なる宗教界に在て、苟も迷信を脫し、合理的、實際的宗教を研究し、或は之れに向て平素の卓見を公論せんとするに當ては、我が國宗教雜誌其の數多しと雖も、未だ本誌を捨てゝ他に其比類を見さるなり。是れ則ち本誌の特色にして、隨て本誌の盛運に進涉せる所以なり。昨秋第十三號を發行せるや、聊か讀者諸賢の好意に酬ゐんが爲め一大改良を加へ、今年今日第十五號を發行し、新ら玉の年と共に新たなる氣焰を吐露し、以て宗教界の迷霧を打破し、正義の光輝を四表に透徹せしめんとす、

明治二十六年一月

宗教　第拾五號（明治廿六年一月五日）

論林

宗教の研究法に就いて

文學博士　井上哲次郎

現今宇内に於て最も重要なる宗敎と見做すべきもの、八種あり、第一は神道にて、我邦に起れり、第二は儒敎、第三は道敎にて何づれも支那に起れり、第四は婆羅門敎、第五は佛敎にて何づれも印度に起れり、第六は拜火敎にて波斯に起れり、第七は猶太敎、第八は耶蘇敎にて何づれもパレスチナに起れり、合して八種となす、皆我亞細亞に起るものなり、我亞細亞は宗敎の本源と稱するも不可なきなり、八種の宗敎の中耶蘇敎と猶太敎は勿論、拜火敎及び婆羅門敎も西洋人の已に研究する所なり、婆羅門敎の經文たる四吠陁の如きは唯名稱のみ、佛書と共に和漢に傳はりしも、其書は傳はらず、故に古來四吠陁を研究せしものあらざるなり、西洋にてはコルブルーク　フレデレク、ローゼン二氏以後吠陁の研究に從事するもの頗る多く、ロートヴェーベルスチヴェンソンウ井ルソンムイルマクスシラーモニエル、ウ井ルリヤムスベンフハイホ井ツトニー諸氏皆吠陁の秘奥を開闡することを務めたり、是に於てか婆羅門敎の事も從ひて又頗る明瞭なるに至れり、然れども佛敎に至りては、彼國の人も未だ婆羅門敎の如く能く研究せりと謂ふべからざるなり、佛敎には古來南北の別あり、唯〻其南方に行はるゝ佛敎のみは、頗る學者の研究する所となりたれども、北方に傳播せる佛敎は尚ほ未だ其多く着手せざる所なり、佛國のビユルヌフ獨逸のシユラーギントヴイトアイテル英國の、エドキンスビール露國のヴツシリエフミナエフ諸氏は北方の佛敎を研究せりと雖も、未だ其蘊奥を極むるものと謂ふべからざるなり、然るに北方の佛敎は支那と日本の文化上に大影響を及ぼしゝものなれば、東洋の歷史を研究する上より言へば、其研究は南方佛敎の研究より一層重要なりと謂はざるべからざるなり、然るに北方の

佛教を研究せんとするには、主として支那譯の三藏(トリピタカ)に據らざるべからず、支那譯の三藏を涉獵するとは西洋人の殆んど爲し能はざる所なり、故に支那人か又は日本人此任に當らざるべからず、然るに支那人は徒に古風に泥み、今日の科學的研究法を應用するとを知らざれば、獨り我邦人のみ能く此任に當るを得へきなり、次ぎに儒教、道教の二教に至りては、西洋人も多少之れを知ると雖も、僅々なる專門家を除くの外は、未だ精確なる概念を有すと謂ふを得ざるなり、和蘭のシユレーゲル氏獨逸のガベレンツ氏伊太利のツオツトリ氏佛國のクレツコフスキー氏英國のレツグ氏の如きは實に其例外に屬するなり、又我神道の如きは、西洋人の近來切に知らんと欲して未だ知らざる所なり、佛國のレオンドロニー氏日本紀の神代卷を譯し、英國のチヤムバーレーン氏古事記を譯すと雖も、餘り神名多くして未だ廣く傳播するに至らず、其外澳國のプ井ツマイヤ氏中臣の祓を譯し、英國のサトウ氏純粹神道の恢復と題せる文を著はせるも、是れ亦未だ廣く學者の注意する所とならざるなり、此の如き現今の狀態なるが故に我邦人は決して佛教、儒教、道教幷に神道の研究を怠るべからざるときなり、歐米の宣教師が我邦に來りて動もすれば世界の中に於て唯〻耶蘇のみを眞正の宗教なりと說く、然れども彼れ曾て和漢の宗教を研究せしとなく、初めより唯〻己れの信ずる所の宗教のみを以て精確無二の宗教となし、强ひて我邦の無智蒙昧なるものを引入れんとす、妄爲も亦甚しと謂ふべし、殊に我邦に行はるゝ佛教は阿利安人種の釋迦が創唱せし所に係り、諸宗教中最も深遠に最も高尙なるものなり、耶蘇教は攝密底人種の耶蘇が創唱せし所に係り、佛教に比すれば甚だ凡庸淺俗なるものなり、然るに歐米の宣教師が己れ自らは阿利安人種にてありながら、我邦に傳はれる阿利安人種の創唱に係る佛教を信ぜずして、却て攝密底人種の凡庸淺俗なる宗教を傳播せんが爲め我邦に來るとは、抑〻又倒逆の行と謂はざるを得ず、此時に當りて我邦人は深く東亞古來の宗教を研究し、一方には衆庶をして彼等宣教師の爲めに迷はされぬとを

務め、又一方には東亞の宗教に關する事實を明かにするヿを務めざるべからざるなり、

若し舊來の慣習に從ひ、單に其宗其宗の教義のみを講究せば、東亞の宗教の眞意は決して精確なるヿなかるべし、殊に佛教の如きは科學的研究法によりて其眞意の存する所を推窮するを要す、徒に經文に據るも、其經文は僞作なるやも知るべからず、徒に傳說に據るも、其傳說は虛妄なるやも知るべからず、故に佛者は先づ佛教は如何なる方法によりて研究すべきかを知らざるべからざるなり、然るに我邦の佛者は未だ深く此に注意せず、依然舊によりて教義のみを講究するを以て甚しきは其宗教上に於ける學識は僧侶にあらざる學者にも及ばざるに至れり、然るに圓頂緇衣のもの或は世の學者を指して公然門外漢と云ふヿあり、漢は輕侮賤蔑の語にて、輟耕錄にも「今人謂二賤丈夫一爲二漢子一」とあり、故に古來惡漢、兇漢、田舍漢、無賴漢抔と云ふヿはあれども善人を呼ぶに漢を以てするヿあらず、一切衆生を愛すべき身にして世の學者を指して、公然門外漢と云ふが如き抑〻又何の心ぞや、若し僧籍上より言へば內外の別あるべきも、得道上より言へば豈に內外の別あらんや、或は又僧侶にあらざるものは學と不學とを問はず、皆之れを俗人と稱す、俗人とは世俗凡庸のものを指すの名なり、豈に世の學者をも併せて之れを俗人と言ふを得んや、况んや圓頂緇衣にして甚だ俗なるもの多く、迥に世の學者に及ばざるに於てをや、故に今日の佛者は此の如き狹隘偏固の心を一變して更に胸膈を豁大にし、世の學者と相提携して佛教の眞意を明かにするヿを務めざるべからざるなり然らざれば此有爲活潑の世に當り、一種無用の殘民たるに過ぎざるべきなり、儒者は最早今日にありては、其數極めて少く、僅に生存するものも、主として章句に泥み、末技に耽り、頑僻迂腐、共に高妙なる哲理を論ずるに足るものなし、神道家は槪して之れを言へば儒者佛者より其學識一層卑く、多くは今日の文化に後れたるものなり、然れば東洋の宗教を研究して其眞理を開闡すべきものは、今日の組織的教育を受けたるものにあらずし

て誰ぞや、然れども宗教を研究するに、其方法如何に注意せざれば、幾年間勞力を積むも徒勞に屬せずと謂ひ難きなり、凡そ學問に就いては何年間研究したるかと云ふヿは重要なる點にあらずして、如何樣に研究したるかと云ふヿが重要なる點なり、佛教が東亞の宗教中最も高尚に最も深遠なるものゆゑ、先づ之れを的例として論ぜん、

佛教は第一歴史的に講究せざるべからざるなり、若し歴史的に之れを講究するにあらざれば、決して其教の眞僞を識別鑑定するヿ能はざるべきなり、今佛者を以て自ら任ずるものは、皆其奉ずる所を以て釋迦の教に出づるヿを假定するならん、然るに若し一朝其奉ずる所の決して釋迦に出づるにあらざるヿを證明するものあらば、佛者の不愉快、果して如何んぞや、英國のマクス、ミユラー氏嘗て余に謂ひて曰く、貴國の佛教は、其實菩提教（ボザズム）なり、佛教にあらずと、マクス、ミユラー氏の斯く言ひたるは、決して全く根據なきの言にあらざるなり、和蘭のケルン魯西亞のヴッシリエフ諸氏亦皆北方の佛書を以て南方の佛書より百年も後れて成るものにて佛教の眞面目を存するものにあらずとせり、英國のリスデヴヰッ獨國のオルデンベルヒ佛國のセナール諸氏亦獨り南方の佛教のみを以て確實なるものと假定して、專ら錫蘭嶋傳ふる所の波利の原本によりて佛教を論ぜり、若し是等諸氏が信ずる如く、北方の佛教は釋迦の教の眞面目にあらざるときは、我邦の佛者は果して能く滿足するを得べきか、假りに北方の佛教は全く龍樹無着諸氏に成るものとするも、毫も之れが爲めに痛癢寒熱を感ずるヿなかるべきか、若し又一人の佛者にして之れに服せずして、北方の佛教を以て釋迦の教の眞面目を存するものと思惟せば、何ぞ歴史的に其發達を研究して之れを證明するヿを試みざるや、單に其宗其宗の教義のみを學修する而已にては、決して其奉ずる所の佛教を盛にするヿ能はざるべきなり、蓋し我邦佛者の弊は、主として末書の末書の其又末書に埋沒して、雙鬟を白盡し、遂に釋迦の教に反へるヿ能はざるにあり、少しく此に顧慮するものも、多くは

力を論部（アビダルマ）に用ひて却て諸經を讀まず、歴史上より殊に貴重すべき小乘部の經文（スートラ）の如きは、披閲するもの殆んど稀なり、此の如くにして徒に支流末派の敎義のみに跼蹐し、毫も佛敎發達の來由如何を推究せざれば、釋迦の敎の眞面目は那邊にあるや、遂に之れを確定するを得ざるべきなり、且つ佛敎は東亞諸國の文化上に廣大なる影響を及ぼしゝものなれば、之れが沿革を研究することは、信仰上の利益を離れて、單に歴史上の穿鑿としても、甚だ重要なりと謂はざるを得ざるなり、然るに是れまで眞に佛敎の歴史と稱すべきもの東洋には殆んど稀なりと謂ふべきなり、佛祖統記、高僧傳、景德傳燈錄、佛祖歴代通載の類多くは傳記（ビオグラフヒー）の如きものにして未だ歴史と稱すべからざるなり、宋の贊寧が僧史略、元の覺岸が釋氏稽古略、我邦の凝然が八宗綱要及び內典塵露章三國佛法傳通緣起の如き稍ゝ歴史の躰を存すと雖も、極めて簡約に失し、未だ多く學者を啓發するに足らざるなり、然れば我邦學者の佛敎に於ける事業も、尙ほ後來に希望多しと謂ふに躊躇せざるべきなり、

佛敎は第二に批評的に講究するを要するなり、假令ひ歴史的に之れを討尋するも、若し批評的精神を缺く時は、其功を奏すること甚だ少かるべきなり、批評とは單に評論を處々に挿入するを謂ふにあらず、古來傳ふる所の書類に就き、歴史的事實を鑑定識別するを謂ふなり、換言すれは、如何なる人の著はす所も、如何ほど人の尊信する所も、決して其儘之れを信ずることなく、必ず自ら其眞僞如何を稽査討究するを謂ふなり、近來少しく佛敎を歴史的に研究するものあるも、批評的精神を缺くを以て多く誤謬を存し、未だ古人の陳套を脫却する能はざるなり、町元呑空氏の編輯に係る十二宗綱要、島地黙雷、生田得能二氏の手に成る三國佛敎略史、吉谷覺壽氏の明治諸宗綱要、田島象二氏の日本佛法史、石村貞一氏の佛敎各宗大意の類皆多少佛敎を歴史的に叙述するものなり、然れども其中批評的精神に戻らざるものゝ至りて少きは余の甚だ遺憾とする所なり、今二三の例を擧げて之れを證せんに、十二宗綱要卷上第

廿九葉に徽照大師の事を記して云く、「諸天神將常ニ來テ之ヲ護衛シ、之ヲ賛歎シ、供スルニ天饌ヲ以テセリ、故ニ大師事ノ疑ハシキアレハ一ニ之ヲ問ニ天人答ヘサルヿナシ」と、今日の敎育を受けて生存するもの誰れか此の如き怪誕なることを信ぜんや、又第三十六葉に「佛滅後九百年彌勒慈尊無著菩薩ノ請ニ應シテ都率天ヨリ中天竺阿輸闍國講堂ニ降臨シテ五部ノ論藏ヲ說キ」云云とあり、是等の事は古來の傳說なれども、今日にありては、之れを批評的に稽查して、其事實如何を確定せざるべからず、然らざれば永く迷信の中に彷徨して到底眞理の光を見ること能はざるべきなり、三國佛敎略史卷上第十二葉に「龍智壽七百歲ヲ保チ」云云とあり、フアエランド氏の穿鑿に據れば、人類の壽は如何ほど長きも二百歲を踰ゆることなきものなり、然らば龍智如何んぞ七百歲の壽を保つを得んや、第廿二葉に「文帝ノ弟陳思王曹植云云嘗テ魚山ニ遊ビ、空中天樂ノ響ヲ聞キ、其聲節ヲ寫シテ、梵唄ヲ作ル」とあり、空中の天樂とは、抑〻何を指して言ひたるにや、古人は迷信深きが爲め、往々空中の天樂抔と云ひたることあるも、今日之れを事實の如くに見做して歷史の中に記するときは、批評的精神に戾らざるを得ざるなり、第三十四葉に寶誌大士の事を記して云く「嘗テ鱠ヲ食スルモノニ遇ヒ、從テ之ヲ求ム、食シテ水中ニ吐キ、皆活魚トナラシム」とあり、凡そ是等の俗說必ずしも、歷史中に記入するを要せざるなり、若し種々怪誕なることを記入せば、大に其歷史を信ずるの力を殺減するものなり、故に佛敎を歷史的に研究するに當りて、必ず批評的精神の要を知らざるべからざるなり、

倘ほ又一步を進めて之れを論ぜんに、經律論の三藏如何に浩瀚なりと雖も、元と釋迦の手に成りしものは一部もなきなり、皆釋迦滅後に成れるものに過ぎざるなり、故に經文中の事は盡く釋迦の言を寫して誤らずと言ひ難し、假令ひ速記者をして速記せしむるも、倘ほ幾多の謬誤を免れず、况んや人の記憶によりて敍述せしものに於てをや、故に經文と雖も、批評的精神を以て之れを撿讀せざるべからず、且つ後世末書に末書を

生じ、其上に又末書を生じ、釋迦の敎は末書の爲めに益〻蔽遮せらるゝの狀あり、此時に當りて批評的研究を盛にして釋迦本來の敎を恢復するにあらざれば、佛敎は愈〻消滅の途に就くの恐なしとせざるなり、經文の中怪誕なることあるは、是れ或は後人の附會に出でたるやも知るべからず、然るに若し經文中にあることは、假令ひ怪誕なることも、皆釋迦の敎にして萬古不易の眞理とせば、必ず今日の敎育と相背馳せざるを得ざるなり、耶蘇經文も久しく完全無缺の聖典と見做され、一字一句も疑ふものなかりしも韓圖が一たび思索的神學の根抵を殄滅したるの後スツラウス氏獨逸に起り、ルナン氏佛國に起り、何づれも耶蘇を以て神の子とせず、單に人として其傳を作り、經文を以て盡く歷史的事實を記するものにあらずとせり、是れより經文も批評的に講究する事となり、怪誕なることは、或は使徒の迷信に成るものとし、或は比喩的に解釋すべきものとするが爲め、一旦哲學及び理學と甚しき撞着を來たしたる耶蘇敎も、又幾分か其撞着を減殺し、幾分か其壽命を延長することを得たり、佛敎も亦經文を批評的に研究する事とならば、一旦大に其面目を改むるものあらん、或は旗を推立て自ら大菩薩と稱して佛敎の改良を圖るも何んぞ功を奏せんや、佛敎の改良は到底外面上より成遂けらるべきものにあらずして、寧ろ內面上より其端緖を開くべきものなればなり、或は又布敎を名として海外に航するものあり、然れども是れ亦今日佛敎を與す所以にあらず、佛敎已に內國に衰退せんとするに、未だ之れを內國に興すことを務めずして、獨り外邦に廣めんとするは、抑〻布敎の順序を誤るものなればなり、然らば今之れを如何んせば可ならん、苟も佛敎を與さんと欲せば、批評的に之れを研究して純粹なる本來の佛敎を恢復するにあるなり、

我邦人にて少しく批評的に佛敎を研究せしもの一人あり、富永仲基、是れなり、氏出定後語を著はして佛書の眞僞如何を論ぜり、其中謬誤も亦少しとせずと雖も亦甚だ銳利なる見解もあり、釋朝音と云へる僧、摑裂邪綱篇を著はして之れを反駁せるも、多くは罵詈の言

にして出定後語の骨髓の處に中らず、未だ決して擊破し得たりと謂ふべからず、朝音其書中に富永仲基を指して或は癡人と云ひ、或は愚人と云ひ、或は至愚と云ひ、或は盲賊と云ひ、或は出情狂顚と云ひ、或は破法凶賊と云ひ、或は澆世黠人と云ふ、嗚呼是れ慈悲忍辱を以て主義とする僧侶の言なるか、朝音は出定後の中に於て瑣々たる謬誤を發見して罵詈百出以て自ら快とすれども富永仲基が洋學研究上に裨補したる痕迹は、決して磨滅せざるべきなり、但し氏が巫咸の事を信じ叉幻術は疑はざるが如きは尺璧の寸瑕なりと謂ふべし服部天游亦富永仲基に次いで赤倮倮を作る、此書迥に出定後語に及ばずと雖も、亦少しく批評的精神を具する所あり、潮音金剛宗を著はして赤倮倮を反駁するも、亦取るに足らざるものなり、平田篤胤の出定笑語に至りては、主として出定後語を敷衍せるに過ぎざるなり、且つ富永仲基は初めより佛敎を攻擊せんと企圖したるにあらず、單に學問に熱心なる所よりして先づ儒敎を研究して之れに滿足せずして說蔽を著はし、次いて佛敎を研究して經文の眞僞に疑を生じ、遂に出定後語を著はすに至れり、平田篤胤は始めより神道を確信するを以て儒敎を研究するも、佛敎を研究するも、皆之れを攻擊せんが爲めなり、故に氏の研究は始めより學者の精神に戾れり、學者は眞理を探求するものにして、始めより是れは眞、彼れは僞と確定すべきにあらず、唯眞理の存する所は己れの歸する所と思惟せざるべからさるなり、此れに由りて之れを觀れば、富永仲基の功は平田篤胤の迥に及ばざる所なり、今の佛者は決して批評的精神を忌嫌すべきにあらず、却て世の學者の批評的に佛敎を硏究するとを奬勵すべきなり、然かのみならず、自らも亦佛敎を批評的に研究するとを務めざるべからざるなり、是れ實に古來宿弊多き佛敎を革新するの端緖なればなり、

神道及び儒敎道敎の如きも、佛敎と同じく歷史的且つ批評的に研究するとゝ、甚だ切要となれり、世の宗敎を研究せんと欲するもの、必ず先づ其方法如何んに注意するを要す、若し其方法を誤るときは、假令ひ終身苦

學するも、何んの功績もなかるべきなり、若し方法にして其宜しきを得ば、必ず多少の成功を期するを得べきなり、故に余は世の宗敎を研究するもの丶此點に顧慮せんことを切望して已まざるなり、

忠孝と道德の基本

文學士　大西　祝

人或は云ふ忠孝は道德の基本なり特に我國に於ける道德の基本なりと予は一概に之を非とする者にあらず但だ基本てふ語の意義如何によると云はむ

若し道德の基本と云ふ語の意味が學理の上に於て云ふとなりせば予は忠孝がその如きものたる所以を知らざるなり如何にして忠孝が凡べての正邪善惡德不德を區別するの標準基礎となるべき、一切の道德的行爲は忠孝を大本として生し來る者なるか吾人の此世に生るゝは只だ〳〵忠ならんが爲め孝ならむが爲めにして其他に目的を有せざるか忠孝てふ者の根底に忠孝をして立たしむる道德の終極の基本はなきか巧利論者が最大數の最大幸福を以て德道の基本となし若しくはカントがその所謂理性の示す所の大法を以て道德の基本となすと同し意味にて忠孝を道德の基本と云ふべきか若し倫理學說上の意義にて云はゞその如きこゝろならざる可らず然し斯るこゝろにて忠孝を道德の基本と云ふは思はざるの甚しきならずや

若し學理上の意義ならば國を異にするによりて道德の基本を異にすと云ふ可らず我國の道德は其基本忠孝にあれども西洋のは亦他に其基本を有すと云ふ可らず人或は云はむ東西古今を通して道德の基本の同一なりと考ふるは只だ想像の論のみ道德豈に其實際に於て時と處とによりて異るなきを得んやと斯る論者の言を解して道德には毫も一定普通の原理なし標準なし基本なしと云ふの意となすべくばその如きの論は遂に倫理破壞說に陷らざる可らず一定普通の原理なく標準なく基本なくば善惡正邪の區別は遂に只だ一個人的のもの、一瞬間的のものたらん一個人が彼時若しくは此時に正と思ひ邪と思ふことの外に絕えて正邪は無きこととならん又

道德上誤謬と云ふべきもの丶無きことゝならん通則なく標準なくして何を眞實何を誤謬と簡別し得むやかれも一時これも一時遂に倫理道德上の區別の破壞し去らる丶に至らむ故に只だ漫然道德は時と處とによりて異ると唱ふる如きの論者も竊に一國民若しくは一社會に通ずる民心の性情あることを假定し而して其假定の上に倫理道德を建設し得と思はざるはなかるべし若しその如く一國民若しくは一社會に於けるの通性ありとしてその上に其國民其社會に取りての一般普通の道德を建設し得べくんば何が故に人類に於けるの通性ありとして人類に取りての一般普通の道德を建設し得ざるや倫理學說に於て究め入るべき所は啻に一國民に關するの狀態にあらずして人類に通する終極の基本なり一社會一國民の道德を學理的に論究せんとせば遂に此終極の論に至らざる可らず人道を離れて一國民の道德を學理上立せんとするは盲目學者の論のみ國民によりて德風を異にするとあるは只だ恰も同一なる進化の理に從ひながら而かも風土の差別によりて進化する動物の狀態を異にするが如し道德の基本豈に國によりて異るものならんや學理上豈に我國の道德のみ忠孝を以て其基本となすと云ふべけんや

或は云はん國によりて學理の異るなきは勿論のことなるべし忠孝も特に我國のみの道德の基本なりと云ふにはあらず時と處との差別を問はず道德てふもの丶基本は必ず忠孝にあるべきなりと若し斯く云はゞ爰に直に起るべき問題は忠と孝とを共に均しく道德の基本なりと見るの意か將た否らざるかと云ふことなり若し只だ漫然忠孝を以て道德の基本となすと云ふのみにて忠と孝との關係を語らずは予輩は遂に何を以て其基本と見るべきかに惑はずんばあらず若し忠と孝とを相異る二個のものとなし而して孰れも均しく道德の基本なりと云はゞ是れ道德に二種の基本ありと思惟するにあらずして何ぞや而して其二種の基本の相齟齬することなきを如何にして保證し得るか忠ならむと欲すれば孝ならず孝ならむと欲すれば忠ならずと云ふ如きの塲合絕えてなしと云ひ得るか若しその如きの塲合あらば如何にせんと

かする忠孝兩者の中一を他よりも重しとなすか然らば是れ既に兩者を均しく道德の基本と見たるにはあらで忠を基本と見ると孝を基本と見るとは既に多少其の趣を異にせずばあらず若し兩者の一を他よりも重しとなさば何故にしかなすか苟にも此問を掲け來らば忠孝てふ觀念に止まるを得ずして國家の秩序安寧若しくは權力の大小若しくは恩惠の多少てふ如きの觀念に進み入らざるを得ざるべし」若し又忠孝の兩者は全く相互に關係する所なくして獨立異別の領分を支配するものと見らるべきか即ちその各〻支配すべき行爲の範圍を割有して彼此全く相離れたる者なる乎彼此全く相離れて毫も交渉する所のなき者なるが故に彼此撞着する虞のなきものなるか若し然らば是れ吾人の行爲を多々連絡する者とは見做さずして全く無關係なる獨立の二範圍に分ち去らるべき者となすなり假りに吾人の行爲の範圍はその如くに分ち去らるべき者となすも其行爲の主人たる(即ち其行爲をなす所の)銘々一個人はその如く分ち去られざるを如何せん一人にして一時に異別なる兩個の行爲をなす能はず故に畢竟するに若し忠と孝とを共に均しく道德の基本と見ばその苟にも相牴牾せざることを保證し得ざるべし」若し又忠と孝とは同一不二の者と見らるべきか全く同一不二にして些も相異る所の無き者ならば何が爲に殊更に忠孝なる二字を掲け來るか」若し又忠孝は全く同一不二にはあらざるも兩者の一致融合する所あり兩者に通する同一の精神あり兩者の據て立つ同一の根本ありとなすべきか若し然らば直に問ふべきとはその謂ふ兩者の同一の根本、同一の精神は何なるかと云ふと是れなりその如きの此根本ありと云ひて之れを尋ぬるとを許さば是れ取りも直さず只だ忠と云ひ只だ孝と云ふに止らずして更に一歩を進むるものにあらずや而して其忠孝の一致融合する所、其同一の精神となるもの、其同一の根本となるものをこそ道德の基本とは云ふ可けれ即ち道德の基本は忠孝にありと云ふよりも寧ろ忠孝に通して其同一の根本となるものにありと云ふべきならん然れども忠孝に通するの根本は豈又均しく他の道德的行爲に通するの根本

にあらずと云ふべけんや然らば忠孝のみならず他の道德的行爲を取り來りて之に通するの根本をば道德の基本と云ふも妨なかるべし忠孝を道德の基本なりと唱ふる輩は多くは此の如きの問題を念頭に浮ぶることを爲さず否な之を念ひ浮ぶることをだに嫌ふ只だ漫然感情的の言を吐いて罵り合ふに過ぎず國家永久の計を考ふる者の決して爲すまじき所なり忠孝の何たるかをも明かには念ひ浮べずして之を倫理學說上道德の基本なりと云ふは嗚呼がましと云はで何とか云はん

忠孝を道德の基本なりと唱ふる者に向つて先づ問ふべきは彼等の云ふ忠孝の何たるかなり若し彼等にして靜に此問に答へんと試みなば恐くは思ひ半ばに過ぐるものあらん何をか孝と云ひ何をか忠と云ふぞ問はゞ彼等善く之に答ふべきか彼等或は云はん孝は父母の命に從ふの謂ひなり忠は君主の命に從ふの謂ひなりと是れ或は最も手近くして最も念ひ浮べ易き解釋ならん請ふ假りに此解釋に從つて姑く論せしめよ

（一）若し忠孝を釋義して君父の命に從ふの謂ひなりとし而して之を以て道德の基本となさば君父の命令の及ばざる所には道德は立つ可らざる者とならんことは此の如き所見に從ひ來る必然の結果なり而して君父の命令は社會に於ける吾人の複雜極りなき行爲の如何なる範圍にまでも實際及ぶべきものなる乎若し吾人が兎やせん角やせんと惑ひたる時君父の命令の之を決するなくば一個人が只だ其知見の至らざるが爲に善惡正邪の岐路を判別し得ずと云ふのみにはあらで其の如き場合には善惡正邪の差別そのものゝ全く無きこととならん道德の基本たる君父の命令なければなり君父の命令なくば由て以て判つべき德も不德もなかるべし吾人は複雜なる世事に處して或は左せんか或は右せんかと惑ふことなきを得るか若しあらば之を決すべき君父の命令が必ずその如き場合に下り來ると云ひ得るか

（二）若し忠孝が道德の基本ならば一切の德行を悉く忠孝より割り出し來らざるを得ざるべし如何に德行は其形を異にするも其根本に於ては皆忠孝なりと云はざるを得ざるべし果して斯ることを云ひ得るか小兒の井に墜

ちんとするを見て之を救ふも忠孝なるか僕婢を使ふに寛嚴その宜しきを得るも忠孝なるか債主に向て借財の返濟を怠らざるも忠孝なるか吾人が通常此の如きの行爲に出つる時に果して忠ならんが爲に孝ならんが爲にするか或人は云はん忠孝の精神をさへ押擴むれば一切の德行を網羅し得べし克く忠なり克く孝なる者は亦一切の塲合に於て克く道德を行ふ者たるべしと然らばその謂ふ忠孝の精神とは何ぞや若し嚮に忠孝を釋義したる如くに君父の命令に從ふの謂ひなりとせば忠孝の兩者に通するの精神は惟ふに長上の命令に從ふと云ふにあるべし果して此精神をさへ押擴むれば小兒の井に墜ちむとするを救ふの行爲ともなり僕婢を使ふに寛嚴其宜しきを得るの行爲ともなるべきか若し又今云ふ所の外に忠孝の忠孝たる精神ありとせば是れ既に忠孝の釋義を改めたる者ならずんばあらず然らば則ち如何に忠孝を釋義すべきぞ假りに忠孝には如何かの一定の精神ありて之を押擴むれば一切の德行に亘るを得るとするも未だ以て忠孝を倫理學説に謂ふ道德の基本とはなすに足らざるなり惟ふに只だ正心誠意を以て一事を處する者は（其者の品性の變せざる以上は）亦克く他事を處するにも正心誠意を以てすべしと云ふ程の意味に決着せずばあらず若し夫程の意味に决着すとせば啻に忠孝の精神を押擴むれば一切の德行を網羅し得るのみならず他の德行の精神を押擴めても亦克く一切の道德を網羅し得べし忠なる者孝なる者は朋友に對しても必す信なり僕婢に對しても恩惠深しと云ふべくんば朋友に對して信なる者僕婢に對して恩惠深き者は亦必す忠なり孝なりと云ひ得べし或は云はん成程忠孝に限らず如何なる行爲にても正心誠意を以てなし遂ぐる者は其こゝろを押擴めさへすれば諸々の德行に亘るを得るならん然し特に忠孝を掲ぐる所以はこれが諸德の手始めなればなりと手始めなりと云ふ程の意味ならば是れ決して倫理學説に謂ふ道德の基本と同一意ならず子として一家族に生れたる以上は父母に對するの孝が寔に先づ其子に取りての德行の手始めならん若し只だ此の如き意味にて孝を道德の基本と云はゞ予は喜んで之を承認

せん此の如き意味にて孝を貴重することに於ては予は何人にも一歩だも讓らざるべし然しこは只だ子としての位地の上より云ふのみ家族の存立に必須なる道德は子が孝なるのみにあらず之と均しく父母が慈愛ならざる可らず父母の慈愛なるに先ちて子が孝なるを要すと云ふ可らず寧ろ家族存立の上に於ては父母の慈愛が子の孝に先たざる可らず只だ泣いて哺乳することをのみ知れる嬰兒に向つて焉ぞ孝なれと云ふべけんや故に一家族に現はるゝ德行の手始めを何ぞと云はゞ孝と云はずして寧ろ父母の慈愛と云はん或人は問ふべし其父母は父母たるに先ちて曾て子たりしことあらずや故に其父母の一個人としての德行の手始めは寧ろ孝にあらずやと然し其父母の曾て子たりし家族には先づ彼等を生みし父母がなかる可らず而して其父母の慈愛か其子の孝に先たざる可らず故に到底するに一概には德行の手始めを孝と云ふ可らず只だ子として一家族に生れたる者の位地に就いて云ふべきのみ且又今日の社會に生れたる一個人の發育の順序に就いて考ふれば忠孝を併せて德行の手始めなりと云ふは事實に反せり只だ父母あるを知り兄姉あるを知る如きの小兒に向つて忠なれと云ふも彼れ豈に其意を解し得んや忠と名くる行爲若しくは志操は一個人の發育の上に於ては遙かに後に於て現るべきものなり

(三)若し忠孝を君父の命に從ふの謂ひなりと解し而して之を以て道德の基本となさば君父の命令それ自身は道德の範圍外にあることとならん何となれば君父の命令に從ふに於て始めて正と云ひ善と云ふもの丶生し之に從はざるに於て始めて邪と云ひ惡と云ふもの丶生するなれば命令それ自身には善惡正邪の判別を附す可らざるべし若し君父の命令それ自身に道德上の差別を附すべくば道德の基本は命令に從ふ（即ち忠孝）にあらずして君父の命令をして道德上の差別を有せしむる所以のものにあるべし若し君父の命令は善なるが故に、正なるが故に從ふべしとせば是れ君父の命令てふもの丶上に正善てふ觀念を置くなり去れば君父の命令ありて始めて正善あるにあらず正善ありて始めて君父の命令

の立つべきなり換言すれば君父の命令をして正たり善たらしむるものに道德の基本は存すと謂ひつべし例へば君父の命令に從ふは國家の安寧を保ち家族の幸福を進むる所以のものなるが故に之に從ふべしと云はゞ是れ既に道德の基本を忠孝てふ觀念に置かずして國家の安寧若くは家族の幸福てふ觀念に置けるなり之を要するに忠孝を道德の基本としてこゝに道德的行爲の始まるとせば君主が命令を下すの行爲は道德的のものにあらず之を頌讃して正とも善とも云ふ可らざることとならん即ち道德的の性質はなきものとならん若し君父の命令を正善と云ふべくば正善と云はるべき行爲（即ち道德的行爲）の基本は忠孝それ自身にあらずして猶ほ其上のもの、猶ほそれよりも深き所にありと云ふべし即ち忠孝をも君父の命令をも共に均しく道德的のものとなすの基本が命令又忠孝てふ觀念の外になかるべからず世に漫然忠孝を道德の基本と唱ふる輩は概ね此の如きの道理を考ふることを爲さず彼等は忠孝を揚けんとするの餘り遂に君父の命令をして道德的行爲の範圍を脱せしむるが如き不都合なる結果に陷るを顧ず彼等の云ふ所は只だ感情的の言のみ明瞭なる思想を含畜するものにあらざる也

論して是に至れば道德の基本が君父の命令に從ふと云ふことにあらずして君父の命令それ自身が道德の上に立つべきものなることを知了するに足らん即ち服從と云ふ意味に解しては忠孝は道德の基本と云はるべきものに非るなり兵卒は將士の命令に從ふの義務ありその命令に從ふが兵卒の道德なり然し其服從をして德行たらしむる所以のものは只だ服從と云ふことそれ自身にあらずして其服從が軍隊の（戰爭の）目的を達するに必要なればなり即ち兵卒が將士の命令に從はずば兵力を自在に使用することを得ず又隨つて勝を制し得ざればなりこの故に兵卒が假ひ一個人としては將士の命令を無理と思ふことあるも枉げて之に從ふが軍隊全躰の目的を達するの上に於て必要なりこれが兵卒の義務なり然れば軍隊に屬する者としての道德の基本は其軍隊の目的を達すと云ふにありて服從は只だ之を達するの方便に過ぎ

ず只だ德行の一部分に過ぎず苟くも軍隊の目的を達するに必要なるものにてあらば啻に服從と云ふことにのみ限らず凡べての兵卒の行爲資格を皆均しく兵卒に取りての品德と見做すべきなり恰もこの如くに忠孝と名くるものも要するに吾人の德行の一部分に過ぎず之を以て道德の(倫理學說上の意義にての)基本と見るは非なり

然らば則ち臣子として君父の權に從ふべき所以は他ならず吾人が家族を結び國家を組織することによりて以て達せんとする人類存在の目的を成就するに取りて君父の權なるものが必須のものなればなり且又敎育的の勢力として見ば長上の權は道德的關係の上に於て莫大の價値を有せり小兒は未だ事理を解せず故に先づ父權を以て之に臨むを要す小兒は父の命令を是非することなくして先づ之に從ふを要す彼れ未だ是非するの知見を有せざればなり父の知見が姑く彼れの發達せざる知見に代りて働くを要す是れ小兒の道德的訓練の上に於て孝の必要なる所以なり我意を狂げても嚴(おごそ)かなる父の命令に從ふことは小兒をして嚴格なる道德の大法に從ふの習練を得しむ小兒に取りては父の命令が道德の大法を代表する者たるなり小兒は理由を解せざれども只父の命令を正しと信じ善しと信してスナホニ、オトナシク之に從ふ是れ孝の美なる所なり又その德行として價値ある所なり斯く父を信して一意にその命に從はゞ是れ後に我がみづからの知見によりて善と見、正と斷したることをば行ふの習練傾向を得るなり故に父の命令なるものは德育上必須の者たるは疑なし然れどもこは只だ敎育上欠く可らざる一大勢力たりと云ふに外ならずして之を以て道德の基本と見る可らず其命令それ自身が道德の基本の上に立つべきものなり

夫れ國家と云ひ社會と云ひ人類存在の目的を成就せむ爲めの倫理的機關に外ならず而して忠孝は此機關の運轉に欠く可らざる事柄なればそれが社會必須の德行たるは論なし然しこは只だ人類存在の目的を達することに必要なる一大事件と云ふに過ぎずして社會道德の全躰を蔽ふ者にあらず又其基本と見らるべき者にあらず且

又人類存在の目的を達するに於て（即ちそれに關係する者として）その德行たるの價値を有するなれば到底する所絕對的のものにあらず所依を有する者なり即ち人類の目的てふ依り所を有して之を達するに必要なる程度まで必要なるに過ぎざるなり而して人類存在の目的の何たるかは是れ即ち倫理學の究明すべき所とす以上は忠孝を君父の命に從ふの謂ひなりと釋義しての論なるが或は此釋義を以て狹隘に過くるとなす者あらん或は孝は只だ父母の命令に從ふの謂ひならず父母に對するの敬愛を意味する者なりと云はん假ひ之を敬愛と解するも父母に對するの敬愛は要するに道德の一狀態に過ぎずして之を以て其基本とは見らるまじきの理由は前述の論意を知了したる者に取りては敢て看取し難からざるべし畢竟するに諸德を網羅する如き宏寛極まれるの釋義を忠孝に附せざる限りは忠は矢張り一種の德行に過ぎざるべし若し猶ほも忠孝を道德の基本なりと主張せんと欲する論者あらば先づ忠孝てふ者の定義を明瞭に揭出せんことを勸告せずんばあらず斯く一篇の文章を綴りて忠孝の倫理學說上の意味にて道德の基本と云はるまじき由を論するに於て若し敵なきに矢を放つの譏を受くべきならば予の最も幸とする所なれどもその實然らざるを奈何せん最後に記せよ忠孝を道德の基本などと唱ふるは却て忠孝の價値を保持するの途にあらざるを予が論は是れ却て忠孝をして其價値を永久に保たしむる所以のものなるを予は一時を彌縫する底の政略として忠孝を說かざるなり

惟一眞神の躰相用を論す（前號の續き）

佐治實然演說

予は已に論議より生する弊害を陳述せり、又、宗敎家たる者の論議の至要とする所は、常に形而上に屬するか故に、勉て確實ならさる可らさる所以、須く眞摯ならさる可らさる趣意を敍述せり、今や本論に入らんとす、方に神の名に就て、數頁を費すへき必要を感せり、何者、予は歷史的佛敎者なり、佛敎者にして惟一眞神の躰相用を論究するは不審なりと謂ふもの在るや必せ

り矣、請ふ先ッ予か惟一眞神といへる命名の下に、其躰。相。用を論究せんと欲する趣意を叙せん

均く之れ器なり、外凸にして內凹なり、而して凹處に水を盛り炭火の上に置けは、則ち水漸く熱して湯となる者あり、其器質は土と石とを擇はす、或は金屬を用ふるとありと云、之を何とか名くる、曰土瓶、曰茶瓶、曰鑵子、曰釜、曰茶釜、等なり、此種々なる命名は其器の形と質とに依ると雖も、其作用に至りては、則一なり、水を烹て湯を作るのみ、世間此の如きの事例枚擧に遑あらす、難波のあしは伊勢の濱をき、といふか如き則ち是なり、諸君一隅を推して三隅に及ふへし

偖本論に於て論究せんと欲する惟一眞神は、古來幾多の宗教に於て、種々樣々なる名稱を附せり、其名稱は種々樣々なるも、其品位は多少の尊卑あるも、何れも宇宙を攝理する惟一眞神を顯示するか爲の詮言なるや勿論なり、而して其稱號を義理に依て分別するに、大畧二種を出てす、二種とは如何、曰人稱なり、曰理躰なり、今其實例を東西兩大宗教の中に求めん、先ッ佛教には、佛名或は尊號なるものありて、其數幾千萬に上るへしと雖も、要するに釋迦の口頭より發したる詮言にして、其詮言は即ち理用理德を表示するか爲の名稱なり、就中尤も顯著なる者は、一般世人の熟知せる阿彌陀佛、藥師如來、多寶如來の如きは、隱れもなき人稱にして、其等の人稱一轉して、異類異形の偶像となりしならん、然るに同し佛教中に於て、眞如と云ひ實相と云は、則ち不可思議にして絕對なる理躰を以て、所證の法とし、又は所歸所信の目的となしたる義趣なるや疑なし、右等の事例は、一卷の佛書を繙閱せん人は、容易に理會し得らるへけれは、玆に詳悉せす、次に基督教の聖書に就て二種の名稱を摘錄せんに、先つ基督出世已前の編纂に係る、舊約中に散見する詮言は、凡そ人稱を用ひたるか如し、又新約中基督の言行を錄したる四福音及ひ使徒の手簡に散見する者は、多く理體に就ての詮言なり、恰も印度に於る釋迦出世前後と、猶太に於る基督出世前後の宗教進化の景況は、酷た似たるものあり、唯釋迦の前後は、教學の兩系頗る複雜

にして、基督の前後は、稍箇約なるか如し、却說、舊約中に於る神の稱號たる耶和華は即ち人稱なり、此人稱なる神を太闢王は彼は軍人なりと云ひしか如き、又は西乃山頂の火焰中に現れ、摩西に十誡を授けたる神の如きは、間違ひもなき箇人にて、彼は天上に殿堂を有し、時々人間に降りて、談話其他必用の作業をなしたる記事の如きは、所謂人稱の神に非すして何ぞや、進て新約中に來れは、神は道なり、靈なり、誠なり、命なり、言葉なりと云ひ、基督を目して三位一體なる神子なりと云か如きは、深く其意義を探くれは、釋迦を指して三身即一の應身なりと云に均しく、大に理躰に傾きたる詮言なり、何者、基督教の三位一體は佛教の三身即一の義理と殆と同一なる趣味あれはなり、然れは基督教中に在りても。人稱と理體との二種の神號あるとは明なる事實なり、其他、古代の開明國に隆盛を極めし多神教中の神號と。方今野蠻人の間に行はるゝ神といへる言語の意義を解釋するときは、概して箇人的の詮言なりと云ふ、而して其神號及ひ言語に依て指示する神の品位は、現時の開明國に於る、帝王或は海陸軍の士官よりも、遙に劣等にして、其等の神躰の主成分を分析するときは「一〇〇」中に含有する所の原素「九〇」は飛行自在。勢力强猛。と名くへき原素にて、僅に「一〇」のみ、慈惠。正義と稱すへき成分なるか如し、其然り、神佛の名號とたに云へは、奇しく妙なる靈德を具足するか如く謂ふは、即ち妄信の一種なるや論を待たす、實を剋して言ふときは神佛の名號は、時代の智識を價して漸次に進化し來れるものなり、依之、神と云ひ佛と云ふ、悉く皆人間の口頭より現はれたる者にして、神自ら神は斯の如き者なりと、倫敦市中四通八達の街衢に宣言せしとなく、佛自ら佛は斯の如き者なりと、東京市内萬世橋頭に告命せしとなし、佛と云ひ佛と云ふ、神と云ひ神と云ふ、悉皆各人各個の理想中に出現したるものなるや勿論なりと云へし、故に人間の理想高尚ならんか、其神は必す高尚なり、理想雅致ならんか、其佛は必す雅致あり、淨土宗の釋迦は其端嚴なる容、一見して奇瑞あるか如く、

黄檗宗の釋迦は其磊落なる貌、一瞥すれは雄壯なるか如し、加之、駿河臺上の「ニコライ」會堂は「パノラマ」中に見る城廓の如く、飯倉街邊の「アンテレ」教會は洋行土産の寫眞畫にて英國の田舍を見るか如し、然り而して釋迦は「カピラエ」の一釋迦あるのみ、基督も「ナザレ」の一基督なるのみ、一釋迦一基督も、異種異様の各人各個の思想中に入り來れは、自ら異種異様の形狀に變化し去らんとす、況や有史以來幾千歲、邦國を建ると幾千百なるおや、而して其間に興亡盛衰せし夥しき人間の口頭より詮言したる、佛號神名にして品位性格の勝劣寛嚴なるは、宇宙進化の大法を證明する、事理の當然を得たるものにして、毫も怪訝を容るへからさるなり、之を晩菊の芳を騷士の家に吐けると、早梅の香を禁苑の亭に送るに譬ふ、其景是れ異なれとも其趣は則ち一なり、之を海棠の雨を帶ひ、柳條の霞を拂へるに喩ふ、其致は是れ一にして其趣は則ち異なり、故に這般の事、那箇の物、異は則ち同の異にして同は則ち異の同なるを知らんや、然れは彼の基督を目して三位一體の神子なりと云へるを、此の釋迦を指して法報應の三身即一なるも、吾人の感見する處に依れは、丈六の劣應身なりと云へるに視ふれは、所謂異趣同致なるものなり、神は道なり誠なり命なりと云も、佛は無相なり實相なり如々なりと云も、所謂一致異趣なるものなり、故に予は古今の宗教に於て、絶對的不可思議なる者の實在を觀念して、自己の智識と理想とに價したる名稱と屬性とを附せしは、宇宙進化の大法に依準せしものなりと確認し、人稱より云も理體より云も、尊身大小の差異こそあれ、大體の趣意同一なるものなれは、漫に歷史的の宗派に偏執し、命名の異同に於て、眞に正邪の箇別を爲すは、亦是れ妄信の範圍を脫せさるの愚論なりと思考す、尙少しく其所以を論せん、抑々佛教に散見する佛名なるものは、佛陀眞如、實相、妙覺、畢竟依、如々、一如等なるか、是は其簡短なるものなり、毘盧遮那佛、南無阿彌陀佛、歸命盡十方無碍光如來、等は是れ其冗長なるものなり、又、耶穌教に散見する神號なるものは、靈、道、誠、

命、上帝、眞神、天帝、等なるか、是は其簡短なるものにして、耶和華、在天至上者、大能力者、惟一眞神、等は稍〻其冗長なるものならん、而して此の如く種々なる命名の下に施したる、古今の注解を見るに、大同小異、麁細詳畧の差別はあるへしと雖も、結局一條の道路に於て、中央を徐行するもの、兩側を疾走するもの、先むするもの後るるものあるか如き觀あるのみ、又其注解の中に多く使用したる文字を見るに、至眞、長久、永遠、不變、寂靜、智慧、慈悲、淨明、普徧、公平、平等、憤怒、痴妬、自在、强猛、飛行、上天、降世、明鑑、崇拜、畏敬、禮拜、等の文字にして是等の文字を骨子として搆成せられたる文章は、記者其人の外界を圍繞せる種々の事情に干涉せられ、其意義雲泥の差、冠履の異あるか如くなれとも、究竟するに、絕對的不可思議者の實在を確認して、高妙なる靈界の功德を發揮し、眞正なる宗敎的生活を遂けんと欲するの希望より出てさるはなし、其然り、予か論究せんと欲する惟一眞神は、單に眞神と云も可なり、又佛陀と呼ふも不可なし、唯孰れを取り何れを捨るも、可もなく不可もなきか故に、惟一眞神と云も、絕對如來と云も、可不可なし、詮要とする所は、惟一眞神の體。相。用を明知し明信するに至るを得れは則ち可なるのみ、均く是れ神なり同く是れ佛なり、其名に依て正邪の看を爲すと勿れ、

（未完）

宗敎發達の大要

文學士　辰巳小次郎

今日の人、宗敎を以て耶穌敎、回々敎、佛陀敎等に限り、又是等は單獨に起案したる者と思ふべけれとも、其實然らす、皆其起因せし處なきを得さるなり。凡そ宗敎は其外形より論すれば、祖先祭祀を以て最初の宗敎とす、祖先祭祀即ち祭祀敎の外に、偶像敎、奇物敎、禽獸敎、草木敎、萬物敎、神敎、あり。神敎に二種あり、多神を奉する者、一神を奉する者、是なり。是等諸般の宗敎皆祭祀敎より出たりとす、野蠻人の鬼神を信するや、其祖先の靈を以て最も尊き鬼神とす、野蠻人皆

祖先を以て造物主と同一視し、日月星辰を初めとし天地間の萬物を造れりとす、然るに怪むべき事は斯く自在大力の祖先を以て蘆の中より出たりと云ひ、木の中より出てたりと云ふは、取りも直さず一新地を開墾して荊棘を除き大澤の蘆を刈り、山林の木を伐り以て平原に顯れ出たる事なるべし、

偶像敎は死人の偶像を造りて是れを拜するを云ふ、偶像を造るには死人を燒き其髑髏に詰るに石灰を以てし、髑髏の面部をして死人の面部に摸擬す、或は死人を燒き其灰を練りて偶像を造る、或は死人の遺骸を甕中に藏し、甕上に死人に似たる偶像を置く事あり、奇物敎とは、異常の形狀を有する物を以て靈ありとすることなり、深山に入れは古木の狀人間に類する事あり、海濱に到れば巖石の狀人形禽獸に類する事あり、斯の如き者は野蠻人には必ず鬼神の憑る所と思はるゝなり、世の學者或は奇物敎は鬼神の思想起らざる前に生したる者と云ふ、是れ全く誤れるなり、物の前後を知らさるなり、先つ鬼神の思想ありて後に鬼神の奇物に憑ると云ふ思想起るなり、

禽獸敎は禽獸を拜する敎なり其本元は、先祖の祭祀なり先祖の祭祀變遷して禽獸となるに種々の源因あり、第一に先祖は禽獸の形を爲して人間社會に再來すと云ふ事、第二に墓所弁に暗黒の地に住める禽獸は死人の靈なりと云ふ事、第三に祖先は禽獸の名を取りて己れの名としたるを其子孫に至りて祖先を以て禽獸と思ふ事是なり。野蠻人は形を變して禽獸となるを得ると思ふなり、蓋し夢の中に人變して禽獸となり禽獸變して人となる事より、此の如き信仰の起るなり、蜘蛇等の人家に住み家内に出つること多き動物は祖先の再來と野蠻人に思はるゝなり、蝙蝠及ひ梟は兎角墓地等の暗所に住む者也故に死人の靈と思はるゝなり、野蠻人多くは其武力を示さんとして虎狼等の名を以て己れか名とす後世に至り子孫誤りて祖先を以て禽獸とす、世の學者或は禽獸は祭祖敎に劣り祭祖敎の以前に生したるものとす、是れ誤れるなり、祖先を畏敬するを知り、祖先を以て禽獸と誤り從つて會獸を畏敬するに至る。

植物敎の起る所以に三種あり、第一に鴉片烟草又は其他植物の實を以て制したる酒の人心を酔亂するは植物烟草鴉片等の靈妙にして鬼神の宿る所と信する事、第二に野蠻人は其祖先の出てし地に生せる特種の草木を以て其祖先の出所とする事、第三に野蠻人は草木の名を以て名としたる人物を其の草木と同物視する事是なり。野蠻人の靈草神木と見做す者はソーマ草、鴉片、烟草、ハヲマ草、コカ草等なり、ソーマ草の事は波羅門經文なる韋陀經に詳なり、韋陀經には此草を以て神靈にして鬼神の其汁を吸を以て靈驗を致す所なりとす。又人にして其汁を吸ひて酔ひたる時能く鬼神に遭遇するを得ると、同經に云へり。ハヲマ草は古代波斯人の神靈と思ひし者にして其遺書に依れば、其性質功驗印度のソーマ草に等しかりしを知る、烟草は南米の白露人の靈草としたる所コカ草はチプチヤ人の神草とする所なり。

兎角野蠻人は蘆又は其類の草木又は山間の洞穴を以て萬物の本源、祖先の出所とす、阿非利加の昆哥人は其祖先は樹より生し、其王族は森より出たりと云ふ、而して野蠻人は皆其祖先の出所と思へる草木を以て神靈として之を祭る、野蠻人は男女共に名を定むる時之れを禽獸草木の名に取るなり、此事開化せる今日の日本にも存せり、其行ひに依つて其名を定むる者、其兄弟の次第に依つて其名を定むる者あれとも、禽獸草木の名を取つて己れの名とする者も亦少からず、信長秀吉家康の如きは其行ひに名を取りたる者、太郎次郎三郎の如きは其兄弟の次第に依て名を定めたる者なれは、前田犬千代武田信虎大磯の虎世間普通の松竹梅蝶鳥鷹の如きは皆禽獸草木に名を取りたる者なり、野蠻人中には日月風雨麻綿蛇蝎豺狼等の名を有する者あり、野蠻人の祖先にして禽獸草木の名を有せし者其子孫に草木と思はれ、其祭祀は禽獸草木の祭祀となるなり、以上は唯だ野蠻時代に於ける宗敎の原因及ひ其發達進化の大要を論したるものなり、然り而して現今文明世界の宗敎の發達、進化の程度及ひ其優劣等は他日を期して論する處あるべし、

述懷（第二）

虎堂學人

道德地に墜ち信義日に衰ふ人情紙よりも薄く浮華輕佻人唯だ銖利の赴く所に汲々乎として利己の後れんことゝを是れ恐る寔とに今日一般の實况にして識者の夙に嘆憂ふる所吾人の既に已に聞くに厭ふ所たり歐化偏僻の徒は之を以て歐化の未だ足らさる所となし古頑舊守の輩は一に之を開港交通の導く所以に皈し或は士氣の敗頽を歎して以て氣慨精神を既に墜つるに廻らさんと試み或は智德敎育の偏重せるを憂ひて遽に重きを人倫五常の敎の上に置かんと欲す然り今日其主義の如何を問はず其上下貴賤を論せず異口同音等しく認めて以て其一致に躊躇せざるものは實に道義敗頽の一事にぞかし

夫れ平和は平和に由て得らるべきものにあらず明治の昭代是れ實に維新騷亂の賜なり維新の騷亂豈獨り明治の昭代のみを現出せんや冷平たる鐵石其相擊つや閃閃たる發火偶ま以て阿房の殿を焦土に化するに足る些些たる衝突尙且然り况んや尨然たる此社會に於て新舊分子の一大衝突を惹起せしに於てをや餘事は暫く措て論せず古來我國の形而上界は一に儒敎と佛敎との支配に是れ依り來りたるは亦争ふへからさるの事實とす因果の理階級の敎は明かに我國往古社會の典型に適合せり古代はさて措き近く德川爲政の跡を探求せん乎其士を治むるに儒敎の階級的忠孝主義を以てし其民を御するに夷敎の人道に反する所以を說て以て之が信仰の抑壓を務めたるは是れ史乘の吾人に證する所當時社會は實に階級的にして民は率ね小乘的頭腦を有せしものに外ならず夫れ然り然るが故に維新前の德敎主義たる誠に單純潔白其頭腦の柔軟なる赤綿の如きの時より地獄極樂の談義は引て題目百遍妄然として未來安心の地を得せしめたると同時に忠孝は千斤よりも重く我身は則ち羽毛よりも輕しと日夜只だ之が注入を受けつゝありたるの結果は誠に萬邦無比の山櫻凝つては士夫の骨髓となり發しては忠孝の熱情となりたるに至つては吾人か夙に贊賞し措かざる所なり軍隊的化育は是れ實に

維新前の社會に適合せり其之か社會を搆成するに與つて力ありしは亦爭ふべきにあらず當時の形而上界其抑揚波瀾を生せさりしは豈亦偶然ならんや遽然階級制度は破壞されたり小乘的立命の根據漸く之か振撼を來しぬ靈神上の支配者は全く四面楚歌の恐慌に陷りたると同時に西教頻々として邦内に傳播することと日に益々盛況を呈し博愛の主義は漸く排夷の主義を屈し平等の教は以て軍隊的階級教育を壓せんとするに至ては舊來の德教其多少の信を人心に失ふあるは亦免かるべからさるの勢と謂ふべき歟夫れ此の如く一方に於ては西教の輸入よりして我國古來の形而上界に一大革命を來したると同時に他の一方に於ては維新の餘勢其波及する所は延ひて舊物破壞の氣運を促かし外物崇拜の徒一時に起て亦昔時の化育を屑しとせず曰く歐の事物粲乎として整然たり我か能く企及する所にあらす曰く米の德教頗る其完美を極む我以て摸すべしと滔々たる歐化の風潮は明治十八九年の降に至りて頗る其盛を極めたるに次で時機に投する一部の論客或は起て遽に國體論を唱へ或は走て盛に亡國說を叫びたるの極奇矯なる忠孝主義は漸く之か復活を見るに至り一旦全く世人の頭腦を去りたる排外の氣慨は再び現はれて一部の社會を風靡せんとするの傾何ありしに至りては吾人の竊に一奇に計ふる所西野某の同憐を受けしは何の故ぞ津田某の狂行夫れ何にか胚胎する近くは彼の生膽事件の如き其他偽激奇矯に走るの廿四孝的德教は滔々として再び倫理の典籍に入り以て將來人士の頭腦を形作らんとするか如きは是れ實に目下我國德教社界に隱韜するの景狀たり蓋し此の如きの現象其之を來すに至りたるの源由に就ては世の識者亦各々其見る所あり之を救濟革新するの方策亦夙に之に接するを得たるを以て吾人は尙ほ一に之を高識なる經世家宗教家に委ね茲に聊か蕪言を陳するあらんとす曰く何ぞや

言ふ迄もなし現時我か社會の道義德教其衰頹盖し亦未だ我が上流社會より甚しきものはあらさるなり之を政治社會に求むるも之を實業社會に徵するも其日々吾人の耳底に觸るゝ所一々茲に之を列擧し來らば其汚濁の

分子を含有せさるもの果して幾何かある德敎の本源是れ實に敎育部内の司とる所たり本源既に濁る支流焉ぞ之が淸きを望まんやとの論議の如きは吾人の容易に一致すべきの限りにあらずと雖も滔々たる上流社會の其上流たるに比して之か進歩の重きを物質的に偏せしめしの一事に至りては吾人は之を否むの辭なきに苦むを奈何せん曾て聞く女子と小人とは養ひ難しと豈に夫れ然らんや吾人は形而の上下共に駢進せざるの有識者ほど之が化育に難にして併せて身を宗敎社會に委ぬる者の須臾も忽に看過すべからさるもの亦あらさるべしと信するなり果して然る乎彼の有識なる者是れ則ち社會の先達吾人の之に向て敢て述懷を試むる亦全く無用の業にあらさるべき歟

ベーコン曾て言へるあり淺小の理學は人心を誘ひて上帝を信せさらしめ深奥の理學は人心を導いて上帝を信せしむと吾人は藉りて以て之を我一般宗敎信仰の上に云はんと欲す蓋し我國上流人士の宗敎に對する意想の如きは近年少しく之が考顧を務むるに至りたりと雖も、而も尙ほ未だ以て其冷然たるを免かれさると概評せずんばあらさるなり佛敎邦内に入りしより年を經ると茲に千三百歳其根蔕亦我に深しと謂ふべし其威信を久しく我か形而上界に維きしものは固より哲理の深遠幽邃なる職として之か由たる所以たりしならんと雖も其之を究め達したるの高僧名緇が德行道心亦與て力ありしと謂はすんばあらず今夫れ維新以來佛敎社會の實況如何に就ては彼れ敎徒の夙に自ら痛歎し措かさる所曰く佛敎衰退せり曰く僧侶腐敗せりと吾人は敢て其幾分に同感を表するに憚からず葷酒は公然山門に入り肉食妻帶唯だ意の欲する所のまゝにし浮雲の黄白以て達士の東道を委するに足り衆生の濟度亦以て銖利の取捨する所となる人心維れ危く道心維れ微なりとは是れ誠に目下佛敎社會の一部に於て之を見ること易々たるのみ頽景敗狀此の如きの類例茲に之を臚列せんこと抑も此論題以外に屬するを以て吾人は敢て深く之を探くるを欲せさるとは雖も兎に角其深遠なる釋氏の哲理に至ては今や漸く學說論究の部類に屬するの傾きを生し久しく

人心德性の本尊たりし高僧名緇の類の如きは亦以て一般人をして之を敬慕摸倣せしむるの信威を失墜せしめしこと吾人は以て掩ふへからざるの事實と信ず儒教亦焉ぞ此類に洩るゝを得んや耶教の旺盛一は是れ往古鎮國の反動たりしのみ教理の討究一たび自由を容るさん乎妄誕謬説亦多少の發見あるを免かれさりしは吾人の既に認知する所たり、是に於て乎有識たるの徒放言大呼案を叩き笑つて曰はん宗教なるもの固と是れ蠻野の遺物、畧に富む者依て以て下民を率ゆる一利器たりしに過きさるのみ理を知り道に通するの輩亦何ぞ之に依て以て吾子の所謂安心立命の地を要むるを須ゐんや看よ列國競爭日に益々之か急殆を加へ世は將に鐵火世界の現實を表はし來らんとす博愛慈悲は須らく之を理想の社會黄金の時代に求むべし眞理何にかあらん宗教何をかなさん護國と愛理とは到底併行すべきの性を有せずと是れ往々にして所謂有識の輩より吾人の耳底に達する所たり夫れ然り今日漫に厭世的教理を説き忠孝の欠く可らさるを喋々し將た又天國卿士の風景を示して之を其道に誘導せんと試む恰も是れ現代人士の教を戴髫老圃に受くると何ぞ擇ばん迂なれば則ち徇ほ可なり吾人は全然其徒勞に屬するなきやを恐れすんばあらさるなり

熟ら顧ふに彼の所謂國家主義と個人主義なるものとは誠に人をして之が取捨に苦ましむるものゝ一に屬す既に之か取捨に惑ふ知るべし彼の護國と愛理とをして強て相撞着矛盾せしむるが如きは豈亦其一因を茲に發せさるなきを得んや抑も人とは何の謂ぞ宇宙は廣し涯限なし其無限無極の空間に懸りて粒然たる此一遊星人は渺乎として地球の上にあり須らく地球を離れて身を彼の十万億土の以外に置かん人は宇宙に於て果して如何なる地位をば有する乎佛者は之を十界中の劣等に置き有神論者は則ち之を神の子なりと稱す進化の學説一たび起りて固執教派漸く其教義を二三にし只管ら相胥ひて經典の釋義を一型塑の中に入れんと欲するものゝ如し吾人は茲に其是非を論評するの要なしと信し今や左の斷定を歸納するを以て滿足せすんばあらず曰く天下

萬物皆進化の理法に從て自然淘汰の支配を受けさるはなし之か進化の原動力は實に宇宙の大源因大勢力に在りて存す換言以て之を解さば其所謂大源因大勢力は驅て以て萬物の進化を促すものなり人類の根元たる其アダム、イブなると其猿猴なると將た又其全く虚無なるとは敢て秋毫の關する所にあらず要は唯だ圓滿靈活なる現想の社會に進むにあるのみ夫れ然り今日稱して文化の民と云ふもの亦一大原動の勢力を籍りて蠻野の域を脫せしに外ならず其蠻野の原人亦何ぞ知らんや其大勢力の及ぼす所等しく是れ他の一域界より進化し來りしにあらざるなきやを其明日あるは則ち今日あればなり其今日ある是れ豈に昨日の時機を進めし結果に他あらんや則ち知る宇宙萬有是れ皆等しく一大原因の勢力以外に成立すべからざると同時に進化の理法は序を踐み秩を追うて以て之を圓滿靈活なる境域に達せしむるの火輪車なるを曰く人は則ち神の子なりと吾人は明に認めて以て論理の許す所となす博愛の理是に於て乎燎乎たり人は則ち博愛に由て立つ唯た夫れ博愛に由て立つ是れ果して何か爲めぞ疑もなく人類最終の目的を達せんか爲めに他あらんや若し夫れ國家の搆成に至りては則ち如何學理の解說は暫く要めず試に思考を太古原人の時代各國未だ碁峙分立せざるの前世に一費せん乎地球は固と是れ人類の棲處何れに耕してか不可あらん何れに憩ふてか誰しも咎めん何ぞ亦國に英米日支の區劃あるを須ゐんや當時人々全く孤立獨營其爲す所は僅に井を鑿て而して呑み田を畊して而して食ふに過ぎず人の人たる所以の如きは亦敢て容易に知るべき所にあらさるなり夫れ十人の爲す所は一人の行ふ所に什倍す是れ數理の疑を容れさる所今夫れ人口繁茂し自他稍や其別あるを知り其營活漸く爭競を釀すに至りては玆に團族の必要を感し言語風俗習慣制度の略ぼ相同しきもの據て以て一方に割守し其十矢の力を藉り來りて以て人の人たる所以を盡さんと欲す邦家是に於てか成り爪牙爭鬪玆に至りて亦各國の間に行はる文化の發達は是れ世界の共に辭せさる所年所漸く久しきを經るに從ひ人智益々進み交通の道大に開け軍備頗る整ひ從て亦

爭鬪の不利ある所以を悟りたるは是れ近世歴史の易すく示す所たりと雖も兵馬の爭鬪は移つて以て百貨の競爭となり有形上の軋轢は次第に化して精神的の刺衝とならんとす爭鬪敵氣孰れの代か將た之か已むを見んや抑も百事の進歩全然相駢行し吾人の理想愈ゝ高尙眞美に赴く之を是れ文明社會の眞相とす顧み思へば宇內の列國甲兵是れ整へ城地是れ修め國權の擴張日に愈々急なるや轉た吾人をして博愛主義の全く空理妄想たるに終るなきやを疑はしめ謬論百出遂に引て護國と愛理との撞着矛盾を牽強し形而上學は迂なりと誹しられ道義は爲めに銖利の壓する所となるに至りては妄は則ち妄にして謬は固より謬たるを免かれずと雖も一見誠に然るべきの見解吾人は之を究むるなくんばあらず疑ふ勿れ人は固と是れ競爭的の動物にして國家は實に爭鬪的の一大種族たるに外ならじ社會の文明は豈亦優勝劣敗の結果に他あらんや眞理は固より國境なし假ひ我邦滅びて人類全く跡を此土に絕すと雖も其六合を貫くの光輝に至りては獨り赫々として宇宙と共に其極まる所を知らさるなり今其眞理は何に依てか以て其光輝を發すべき人生の目的豈に遠しとせんや理想の發達は則ち其之を發輝するの强弱如何にあり蓋し國家は人類進化の促かす所而して進化は實に優勝劣敗の結果たり論して茲に至らば吾人は容易に斷定を下すを得ん護國は則ち愛理の驛程にして愛理は則ち護國の屯落なりと誰か云ふ二者相撞着矛盾すと吾人は義を欲す同時に熊の掌を欲するも亦敢て撞着矛盾の擧にあらざるへきやを信するなり抑も吾人か能く見能く知る所は皆僅に事物相對の範圍內にありて存す推理の及ほす所絕對的の護國は吾人の未だ人類に進化せさるの以前に見るを得べく其絕對的博愛に至りては吾人の現世を經過するの後にあらずんば之を求むるを得さるべし上論幸にして大過なからん乎彼の稱して國家主義と云ひ個人主義と唱ふるもの其之を絕對的に株守するあるに至りては抑も亦誤れるに近しと謂ふべき歟佛書に言へらく平等なきの差別は則ち無差別にして差別なきの平等は則ち無平等なりと其意蓋し眞理の體相平等に偏せず差別に失せさる

を說けるのみ等しく是れ水なり或は散して雨となり或は結んで雹となる是れ所謂差別の由て生する所爆然として地轟き炎々として樓閣を灰化せしむるも同しく是れ火質の作用に外ならず是れ豈に平等の由て來る所に他あらんや平等差別亦何ぞ之か兩立を妨けん夫然り吾人は移して以て之を護國と愛理の間に置かんと欲す知らず適用果して其不當を免かれ得べきや否や是れ寔とに九牛の一毛のみ已むなくんは乞ふ吾人をして三たび懷ふ所を述べしめよ

唯一神教派（ユニテリアン）と正教派（オルソドックス）との比較に就きて

白　眼　子

我か日本の始めて泰西諸國と交通せしより茲に三十有餘年、其間我に輸入せるもの其品種無慮數萬を以て數ふべく、而して中に就き尤も多數を占め且つ殆んと我か耳目を眩惑せしめしものは蓋し彼の新發明に係る諸科學的學術に過たるはなけん、從て當時之と共に輸入せる形而上の諸學術の如き亦頗る鮮少ならすとせす、方今世人か唱道せるカント、ヘーゲル、スペンセル、ダーウヰン派の諸哲學及耶蘇教等即ち是れなり、而して我か所謂先輩若くは碩學鴻儒と稱せらるゝ者の以上諸學派に對する嗜好如何を察するに、其十中の八九は夫の宇宙の大原因大結果を措きて唯り物質界即ち唯物論の研究に局促して復た他を顧るに遑あらさるもの、如し、吁是れ何爲ぞして然るか、凡そ事物の人に感を與ふる先入より甚きは莫し、而して先入は竟に主となり頭巾の見解となり、往々人をして之れより以上に一頭地を出さしめさるもの、思ふに我諸先輩の如き先に諸科學的發見の巧妙奇絕に感し爲に目眩し魂奪はれたること是れ間々其見解を狹小にする一素因たるにあらさるなきを得むや、

夫れ唯物論は僅に宇宙間に於ける億萬現象中の一小部分を捕捉し、而して太早計にも其原因結果を盡く知了し得たりとなすものなり、吁嗟宇宙に森羅せる萬象寧そ此の如き淺薄なる道理に止まらんや、是れ畢竟天地間に物質界の一小部分あるを知りて他に之れより洪且

つ大なる精神界ありて存するを知らさるのみ、故に夫の不可思議の大原因大結果に至りては彼れ懵乎として自知の明なく、乃ち一切之を不可知的範圍に附し、而して是れ自然なり天則なりとし敢て其間に疑訝を挾まさるなり、是れ恰も江海の蠡測夫の夜郎王の小を以てして自ら大なりと爲すの愚と奚ぞ撰はむ、此れ余の大に賛同すること能はさる所なり、而るに耶蘇教の如きは全く之に反し遠く唯物界を超越して純はら幽玄不可思議の精神界を論究するものなり、其我邦に輸入し來れるも亦唯此本領を説教に實行に普らしめむことを之れ謀れるに外ならす、余は茲に聊か該教か三十年來布敎し來れる其區域の廣狹及信仰の厚薄幷に實行の擧否等に就き一言を試みむ、抑ゝ耶蘇教とはヱス、クリストの言行信仰に據りて大成したる彼の太古ジユス人種の特發に係る宗教上の觀念の謂ひにして、千九百年の間歐米諸國を感化し其餘力終に我か日本に東漸せるもの即ち是れなりとす、而して今や我か日本も機械的開化の時代を超過して亦將に思想的發達の機運に進まんとす、此際唯一神教派(ユニテリアン)と正教派(オルソドックス)とを較論して以て我か將來の日本をして大に警戒する所あらしめむは決して無要の業にあらさるべし、

顧ふに耶蘇教新舊兩派か三十年間の長日月を以て其我邦に信徒を得たること其數僅に十万に出てさるも、社會發現の勢力に至りては余は反りて其著大なるものあるを信するなり、是故に耶蘇教を以て單に異端なり邪宗なり我か國粹保存に防害ありとして漫に之に退去を命せんとするも人爲法律の得て能く遂行すべきものにあらさるなり、况や彼れ決して異端にもあらず又所謂邪宗にもあらさるをや、然らは則其教義は果して眞理に合當する耶、又其信徒の實踐德義は果して高尚にして敬愛するに足るものありや、抑ゝ亦陽に端嚴なる面貌を裝ひ、乃ち圓顱衲衣巧に過去未來を說き、人生の果敢なきこと朝露の如し抔と說き去るも、其實半錢の布施に利を貪り、葷酒時に山門に入るの醜態を露はす流亞にあらさるなき耶、余は之れより以上の疑問を考察精査して其利害を硏覈し、併せて余か從來聞見せし

所を簡單に述へ、以て一個人に於ては安心立命の地位を固め、社會に取りては公共の德義を高め、而して一般精神界の改良上進を謀り益々我國粹をして發揮する所あらしめむとす、此れ余か非才なるを顧みすして敢て拙文を草せし所以なり、

唯一教と正教と理論上の比較

夫れ唯一教は唯一の神を奉し、正教は三位一體説を主とす、而して唯一教の所謂神は固と宇宙に於ける勢力の大源因なりとするか故に、宇宙の物質界を以て渾て此の大勢力より發生するものとし、又且つ之を以て造物主とはなすなり、然れとも此神たるや夫の科學上の所謂勢力（エナージー）とは稍や其趣を異にし乃ち智力（インテレクト）、意志（ヴヲリション）及情緒（エモーション）を把持するものと爲す、故に又其哲學上の神（フヰロソフヰカルゴツド）と相異なるや勿論なり、蓋し哲學上の所謂神は愛なく憎なく天則（ナチユラル、ロー）惟た是れ神意の在る所なりとなすか故に、人若し罪惡を犯すときは即ち其所業天則に違反するものなれは其範圍相當の罪科を受くへきものなりと爲す、而るに唯一教は否らす、人各々愛憎の念あり而して其來るや即是れ大勢力の一部分なれは、神も亦少くも人間と同量なる愛憎なかる可からす、如何となれは其一部分に抱藏する性質は其全躰に於て必要上之を抱藏せざるへからざれはなり、然れとも神は素と至愛の本源にして神性即ち愛なれは、憎は畢竟愛の缺亡せる名稱にして元と是れ神性の本然に非す、而して人たるものは偶々其神性の度卑きが故に斯る憎惡の念慮を生し、以て自ら其心を苦ましむるに過きさるなりと、然るに正教に於て説ける三位一體の神は宇宙の神、耶蘇基督及聖靈の三者相合して同時に同一の作用をなすものなりと云ふに在り、而して茲に云ふ宇宙の神は純然たる人神（パーソナルゴツト）を指示せるものにして、即ち聖書に所謂神は已に形（カタ）どりて人を造り（創世紀）、又神は執物偏固なるか故に人にして他の神を拜するものを嫉む（舊約書十誡）と云へるか如く、誠に愛憎の念の能く發達したるものなり、是故に一言の命令を以て太陽系なる諸星を瞬時に宇宙に發現せしめ又一片の塵土を以てアダム、イブ創生したるか如き大勢力を有す（創世紀第一章）而して人若し

一たひ此の神の正怒に觸るゝときは忽ちにして無限の熱火に焚燒し去られ、又其愛顧を受くるときは耶蘇基督と極樂淨土に比肩團欒して而も永遠無窮の生命を得べしと云へり、

抑唯一敎に在りては耶蘇基督を以て人性の最も完全に發達したる先進者となし、又之を神子と稱するも敢て愧る所なき大人物なりと爲せり、然れとも決して之を以て神人兼備の全智全能者とはなさゝるなり、故に吾人も亦等く神子たる後進者なれは、宜く彼か思想の高尙、彼か品行の高潔嚴正に則る所あるべしと云へり、然るに正敎に於ては耶蘇を以て一身にして神人兩性を兼備せるものとし、乃ち曰く神性を以ては諸の不可思議なる所業を行ひ、竟に十字架上より昇天し、然る後ち其弟子と談話したり、又人性を以ては、凡そあるとあらゆる世の中の酸苦を嘗めて其節を全うし、而も身礫木の上に在りてすら尙ほ他の罪人の爲に眞正の愛念同情を發し、其極己を忘れて他を祈れる等實に完全無缺の實例を表示したり、是故に吾人は宜く其人性に則るへきも彼の神性に至りては到底吾人々類の髣髴だもなし得べき所にあらすとせり、又聖靈とは之を唯一敎に於て解釋するときは人類良心の發動とも云ふへきものにして、一意專念に或る事物を思考するに方り、知らす識らす身內聲ありて恰も我か爲さんとする所を指導するか如き感あること即ち是れなり、然るに正敎に於ては斯る良心の發動を以て全然宇宙に瀰蔓せる大勢力の一に歸し、而して神意は聖靈なる傳令使に依りて常に我か心中に宿るか故に則ち之を以て神と爲す云々、以上の三者即ち相合して三位一躰の神とはなるなり、是れ現今歐米各國に於て最も勢力を有し且つ最も永く維持し來れる正敎派の大要なり、

若夫れ聖書の解釋に至りては兩者相容れさること枘鑿も啻ならす、其論難攻擊は數百年來一日の如く殆と一場の水懸論たるに過きさるのみ、故に其勝敗の確定は意ふに今より數百年の後にあらん、之を要するに正敎唯一敎の因りて分立する所は一に聖書の解釋如何に據るものにして、其數百年來唯一敎徒が血を以て其自由

なる信仰を購ひ得たるもの亦實に此に存するものなれは、其是非善惡の如きに至りては到底局外中立の余輩淺學の得て判斷すへき所にあらす。故に宜く讀者諸君の高明なる判斷に一任すへきなり、盖し正教は聖書を以て唯一の神言を記載したるものとなし、且つ往昔猶太の諸先哲か盡く聖靈に滿され其感化を受けて書綴りしものなれは、書中一言一句の泛設なきは勿論、其記載の事實は悉く眞確なりと信して、其間に一點の疑惑を挾まさるに在り、而るに唯一教に於ては則ち否らす、聖書は他の先哲の著書と一般殆と昔時に於ける諸大家の最良なる著述を蒐集したるものなれは、今より之を視れは其間に誤謬訛傳の錯綜せるは盖し數の免れさる所なり、故に之を以て神言なり誤謬なしとするか如きは抑ゝ取らさる處にして、斯る謬誤あるか故に盡く聖書の章句を排斥せさるのみならす、聖書を以て世界に傑出せる最良典經とはなせり、而して冀くは今や其誤謬訛傳を訂正し以て聖書の眞正なる光輝を發揚し、益ゝ之を社會の實際に應用せしめ、傍ら參するに近世に於ける諸學術の進歩を以てし、而して其をして愈ゝ至美至善の域に躋らしめむこと、猶彼の代數學上減法數理論に於て或る一個の數量より他の負印（マイナス、クヮンチチー）の數量を引去るときは則ち全躰の數量に取りて増加を見ると一般にして誤謬を除却するは即ち正義を容るの意なればなりと、云ふに在り、

（未完）

宗教の觀念

佐々木笑受郎

曰く佛教曰く基督教曰く何曰く何、教門の數何ぞ夫れ多きや更に別れて派をなし天台となり眞言となり禪宗となり一向となり淺禮となり一致となり組合となり「メソジスト」となり殆んど記憶に存する能はさらしむ一利一害は事物の免かる可からさる數、固より利益の分派に伴ふあるべしと雖恐らくは弊害の甚だしきには若かざらんか特に一宗一派をなすもの互に相反目し相輕侮し相罵詈し又相讒謗す其相容れさる氷炭も啻ならさるに於て誰か爲めに惑ふなからんや特に反目し輕侮し罵詈し讒謗する其人已に惑ひつゝあるに於てをや

此くの如きは抑も宗敎の本旨なる乎斯の如きもの夫れ能く闇浮の光たり濁世の鹽たらん乎

余をして今哲學派政治學者の國家に對する觀念を記せしめよ盖し余の宗敎の觀念と酷だ相似たるを以てなり抑も哲學派政治學者は歴史學派の如く過去現在の國家より概括し來れる國家の概念のみを以て滿足せず尙ほ更に進で吾人々類の天賦の性情に立入り人類は政治上の組織をなすべき如何なる必要と傾向とを有するや此必要と傾向の赴く處は遂に如何なる國家を組織すべきやを推度し以て國家の觀念を得んとを勉む替言せは哲理上に於て吾人の將に進歩すべき完全なる國家を推定せんとを勉む先哲アリストートル曰く人類は生れなからにして政治的動物なりと政治的組織をなすは全人類の通有性にして人の集る處必ず政治的團躰を作らさるはなし此の如く同一の性質を有する人類は現今數多の異れる國家を組織して世界の各地に割據し各相睥睨しつゝありと雖他日全人類を包含する處の宇内の大帝國を組織し天下一に歸するの現象は早晩必ず起るべきものなりとは是れ則ち哲學者か有する處の國家の觀念なりとす而して此觀念の事實をなすの時は實に最も完全なる國家にして國家の目的は此時に於て初めて貫徹せらるべし

然れとも以上の觀念は今日に在りては未だ世人一般の理想にすら浮ばざる事なるを以て到底一二世紀を經過せざれば其實を見る能はず殆んど架空の議論の如くなりと雖古より此觀念を事實ならしめんと企圖せし非凡の英雄なきにあらず之を歴史に考ふるに彼マセドン王國に起りて彼斯埃及を平げ希臘を從へ印度の境に進入し正に世界統一の大事業を成就せんとするの曉に其死と他の原因との故に因りて空しく瓦解の不幸に接せしアレクサンダー大帝の如きあり、其建國の時より世界統一の觀念を有し各國を征服して之を支配せんとを希望し其勇氣と武力とを以て終に歐羅巴亞細亞亞弗利加に其領地を擴げ殆んど開明世界の全部を包含し宇内の大帝國は羅馬の文字を冠するの止むなきに接するの時に強て全世界を羅馬凪に化せしめんとしたる希望か原

因をなし其大計畫をして空しく畫餅に歸するの不幸に陷りし羅馬人の如きあり或はシャレマン大帝の如き或はナポレオン第一世の如き皆其人ならさるなし然れども盡く失敗を免かれさりし故に直に以て世界統一は遂に見る可からさるものなりと言ふを得ず何となれは自然の勢力なる大英雄か全世界を提げて宇內帝國なる方向に進みつゝあればなり

余は最早政治界には止まらさるべし直に進んで再び宗敎界に入らん

觀よ基督敎を以て國家の秩序を紊亂するものなりと絕呼するもの、佛敎徒を目して迷信笑ふに堪へたりと冷笑するもの、群羊を牧する人衆生を濟渡せんとする人の口唇に囂々として聞かるゝにあらずや更に裏門に至りて觀よ甲派は乙の頑固を笑ひ乙は丙の不振を冷評し丙は甲の儀式を罵る偶各派の人一室に會合す表面は綿羊の如くに相語るも內心已に指笑をなす四海の人を以て兄弟同胞なりとする宗敎徒の宗敎徒たる所以夫れ何處に存するや分派の害此に至りて極れりと謂ふ可し

以上の事實は已に世人の認識する處にして亦掩ふ可からず爲めに宗敎其物の人生に緊要なるを信するものをして其適歸する處に迷はしむ宜なる哉宗敎門側入るに迷ふて躊躇するものゝ市をなすや噫彼等を道きて其宗敎心を滿足せしめ安心立脚の地を得せしむるものは抑も誰ぞ

苟も宗敎と云ふ其基礎を眞理の上に置かさるものはあらさる可し宗敎と宗敎と相異れる處は只僅かに眞理を說き人をして眞理に立たしむる方法手段の異れるあるのみ宗敎本來の目的に於ては則ち一なり此一なる點は實に人類の性情に自然に起る宗敎心の本源にして人類を導きて此點に達せしむれは以て人類の宗敎心を滿足せしむ可し夫れ然り然るを同一の眞理に立ち同一の目的に達せんとするもの互に相爭ふは抑も小兒の戯のみ此の如きは宗敎の形式を幾分か具へたりと云ふを得べきも眞の宗敎としては見る可からず眞の宗敎とは此等幾多の宗派か各自有する處の宗派上の歷史的感情を盡く放棄して一に合し一に和し宇內唯一の大宗敎を組織

し古往今來東西の人類に通有なる宗敎心を滿足せしめさる可からず是れ則ち完全なる宗敎にして進歩の最頂點に達せし時なりキリストの所謂天になる聖旨を地にもならしめよとは蓋し這般の理想なりしならん

然りと雖各派の爭議陰に陽に盛なる現今の有樣にては宗敎上の理想を此に置くの遑なかるべく特に一般同徒の思想には容易に浮ふべくもあらされば到底徒に空想に止まるの觀なき能はすと雖究竟一に歸せさる可からさるものは自然に其方向に進歩するものなり視よ一の事業の起る每に常に相反目せし宗派心の盛なる人の如何に相結托さるゝやを視よ

例令ば廢娼問題の獨り宗敎家の事業にあらさるか如くに一宗一派の人の事業にあらさるなり去れは斯る問題の下に各宗各派の有志家相集り其間宗派心なるもの未だ全く無に至らさるも甚だ薄くして殆んと無に均し或は禁酒の事業と云ひ或は慈善事業と云ふか如く此類の問題の如く社會に提出されて、特に宗敎家の其問題の下に團結し之を貫かん爲には自己の生命の犧牲とならんも亦我願なりとし熱心を有せば區々たる宗敎心の如きは早く已に打忘らるゝなり而して今や斯る問題の全世界に提起せられ月に日に其事業の進歩を見るは社會改良なると同時に宗派の一に歸する楷段をなすものなり

特に這般の理想をして事實ならしむる有望の組織は基督敎青年會と云ひ佛敎青年會と稱するの類是なり蓋し思ふに彼等青年會の內には宗派心なるものは殆んど其生命を保たざるものゝ如し現今の場合にては基督敎青年會と佛敎青年會とは相容れさるの光景ありと雖進歩一番すれは互に提携するの好朋友たる可きは今より能く想像するを得べし此等宗派心に冷淡無頓着なる青年が第二十世紀の宗敎海を橫切るの時は是れ實に宗派の一に歸する一大進歩と謂ふ可し

明年米國に開かるべき萬國大博覽會附屬に萬國宗敎會議なるものありて萬國異宗の代表者を出席せしめ各自其保持する處の本源を自由に吐露せしめんとて已に我邦の佛者に其出席を促し來りしと一大快圖にあらずや

思ふ此會席上各宗の因る處を適當に陳辨せしめば坊主悪きか爲めに袈裟までも悪かりし佛教も我味方なる可く耶蘇と味噌とを比較して大に卑めたりし基督教も我親友たる可く積日の疑心闇鬼釋然として解け倶に供に眞理の攝理を謠ふて洋々天地に洽からん若し此の如くなるを得ば豈に實に諸宗歸一の一大進歩にあらずや

尙ほ細に穿鑿せは這般の證跡決して尠少にあらさる可し然れとも此勞をは讀者諸君の自由に任せ余は聊か宗教上に於ける日本の位置と將來吾人日本人は以上の宗教の觀念に對して如何に處すべきやを簡述せん

抑も日本帝國ありてより以來邦人の如何に宗教思想に發達せしやは夙に歴史を繙くもの丶知る處なり恐らくは其最も盛なるの當時や世界の最も宗教思想に發達せし民族と比して敢て伯仲あらさりしならん今日歐米諸國に行はる丶宗教か當初に有せし機關を我日本に與へしめは、若くは同一の機關を得せしめしならは或は宗教國の大名を世界に轟かせしやも亦知る可からず惜哉他國にまで我の宗教思想を傳ふる機關を欠けるか爲に僅かに東洋の一孤島に其勢力を限縮せられて止みぬ然と雖吾人の祖先に幾多非凡の名僧知識ありしを記憶せよ眞言宗の祖に弘法大師あり天台に傳教大師あり日蓮に日蓮上人あり皆其人にあらさるなし今の日本豈に明治の弘法大師なく傳教大師なく日蓮上人なしとせんや

内地雜居の事多年の後にあらざるべし五港以外殆んど鎖國の今の日本にすら基督新舊兩教は各國より持來され各相當の勢力を有す内地開放されなは萬國の人民船頭を並べて渡航上陸すると同時に萬國の諸宗教は亦供に持來されて我帝國は恰かも宗教博覽會塲の如くならん此時に當りて祖先傳來の宗教心を奮勵し諸宗の誤を棄て丶眞を集め邪を去りて正を拾ひ迷を除きて悟を採り打ちて一丸となし完全なる宇内の一大宗教を組織し全人類を導きて眞理に立たしめは日本帝國は神前に永遠の榮譽を享有せん

傳　記

○ウエスト孃

ウエスト孃渠れそも何ものゝ變身ぞ、神耶鬼耶、將た人耶!、僅に纖弱たる女性、而かも五十有五の老媼にして、而して能く其の身に萬國矯風禁酒の重荷を負ひ、單身萬里の波濤を超へて遠く我が邦を訪はる、其の勇壯剛毅、活潑熱心なる、之を我が史乘に徵する未だ得易しとなさゞる也、恐らくは天下の史上是の種の女英雄を止むる果して幾人ぞ。素より女子の本分は之れ貞節溫柔、敢へて剛勇男子の如くある可がらず、孔子曰へり『女及日乎閨門之內、不百里而奔喪、事無擅爲、行無獨成、參知而後動、可驗而後言』と、其の言少しく極端に走るの嫌なきに非ずと雖とも、亦以て大に見る所なきにしも非ざる可し。抑も孃は是れ一の陰性耳、柔性而已、而して終身遂に獨居、五十餘年猶は一日の如く、主義の爲め東奔西走成功を期す、吾人天下の陽性、剛者を以て任ずるものゝ猶一荷を贏する所、余輩は實に特筆大書、疾聲大呼して孃の効績に對し感謝せずんば非ざる也。然れとも之を孃一人に望む可く、謝す可くして、而して天下に望み、萬人に索む可からざる也、余輩は寧ろ孃の如きをば之を男子に望むの正當にして、女子は須らく內則の所謂男子居外、女子居內底の本分を盡す可きを勸むる也。世に稱する男女同權の如き、余輩亦徹頭徹尾排斥する所に非ず、余輩の所謂同權なるものは、同じく男子に望む所を女子に望み、男子に得る所を女子に得んとするに非ずして、男は男の本分あり、女は女の本分ありて、剛柔相和し、內外相應じ、而して互に相侵す所なき是れ即ち同權なるもの、決して他の意に索む可からざる底の意味に於て之を贊する也。故にウエスト孃一種の行爲たる、之を孃一人に得るを以て大に感謝す可きも、天下を擧げて斯くある可きを欲せざる也。そは兎まれ角まれ、孃は輙ち天下の女英雄、女豪傑、女文學者として大に鑑む可き也。今や其の訃報に接して長大嘆息、天此の人を奪

ふの早やきを恨まずんば非ざる也、聊か其の德を殘表し、功績を萬世に遺さん微志を以て其の畧傳を記す、讀者幸に輕忽に觀過する勿れ。

ウェスト孃は西紀一千八百三十八年米國イリノイ州の寒地に生る。父母は誠實なる一個の基督敎信者にして、孃の宗敎上の信仰、敎育の嗜好、道德等總て是れ等の精神的事業は、早く既に其の家庭に於て形ち造られ、後日孃が奴隷解放問題に向つて大に力を致し、今日萬國矯風禁酒の大事業を以て鳴るも、皆其の時に根底を下しつゝありしとを知る可き也。孃は性甚だ勤勉にして剛直、度量該博、事に當て激せず迂ならざる、以て孃が一生、多辯を要せずして卜す可き也。

孃が健全、熱心、勤勉、忍耐なる性は、僅か十七歲の妙齡を以て州の大學の業を卒ふるに至らしめたり。而して孃は先つ生業の第一着步として敎育の任に當り、其の子弟を敎育するや、懇到周密、頗る其の法を得、於是漸く敎育社會に重きをなし、遂に二回までヲックス大學敎頭の最も榮譽ある職務を帶び、前後其の任に居る九年、猶ほ一日の如く子弟を愛撫し、鞠躬其の事に執掌して一の寧日あるとなし。蓋し婦人にして斯る地位を得たる者、イリノイ州中孃を以て嚆矢となす。

後轉してイリノイ州の禁酒會長となり、又常に敎育上に眼を注ぎ、集會等には必ず臨席して、絕えず世の子弟の爲めに盡す所ありたり、孃は時に或は新聞雜誌の寄書家として、繁劇なる生活の間に立ち、薄弱なる其の母と妹との看護を自己の責任として惓怠の狀なし。世以て其の孝義に感ぜぬ者はなかりき。

孃が孳々汲々として流水の如く曾て休するとなき、宗敎、敎育、道德等總て社會の精神的事業に對する實踐躬行の標本は、深く傍人に感化を及ぼし、幾多の善男善女が創り出されしかを知らざる也。孃が此の誠實、熱心、光明、美麗、活潑なる標本は、一度耶蘇基督の布敎者として顯はれたるとありき。其の薰陶の結果は外國傳道上に於て十二名の熱心有力なる婦人傳道者を出したり。而して彼等婦人傳道者はウェスト孃の娘と唱へ傳道しつゝある也。亦彼等は皆其の娘たり、代理

者たるを喜んで働き居れりと云ふ、以て其の如何に社會の尊敬を受けしかを察するに餘りあり。

比は彼の最も闇黑、慘憺時代として酸鼻せらるゝ亞米利加南北戰爭の時なりき、孃が燃え立つ所の義俠心は爭で此の暗憺を傍觀す可き、直に奮起して衛生委員の列に身を投じ、劍戟相摩、砲烟彈雨の間に居して、如何に山なす綿撒糸はそのかよわき手によりほぐされしよ、如何に多くの繃帶が彼の纖弱なる小手によりて卷かれしよ、如何に兵卒の上衣が直ほされしよ、硝臭、煙腥の銃身が拭ひ掃はれしよ、其の厨に於ける調理をさへ實に自ら手を下して爲されたりき。思うてこゝに至れば轉た感激に堪へざる也。孃は又生命救助會の熱心なる有力家として早とに人に知られたる人なりければ、此の時最も活潑の名ありし兵士救助會の書記として戰の終る迄大なる働を顯したり。

是等の個人的事業は以て孃が滿腔の抱負を充たすに足らず、劍戟全く歇み、砲煙全く斂まり、身無事に歸するや、即ち謀りてイリノイ州に一の家庭雜誌を刊行し、大に世の稱賛を博したり。その頃婦人十字軍てふ一隊ありて、大に禁酒會の必要を説くに遇ひ、痛く感ずる所やありけん、遂に起つて禁酒會の熱心なる働き手とはなりぬ、次で孃がイリノイ州の婦人禁酒會長となるや、廣く全州に渉り、或は學校教育の如何を察し、或は家庭教育の實情を經驗し、『小兒と其の注意及び開育法』てふ一篇の小册を著はし、世の師父たる者に好材料を與へたり。

孃が此の重任を帶ぶるや、又一の榮譽ある重荷は孃の頭上に降り來れり、そは萬國禁酒會の機關たるユニオン、シグナルの主筆たると是れ也。孃が彼の有名なるユニオン、シグナルの主筆として、彼女が熱心なる思想と、活潑なる才能を以て、勤勉に其の雜誌に顯はるゝや、發刊部數每號十萬餘に上ぼり、苟も英語を解せらるゝ所は、如何なる山地邊海も讀まれざるとなきに至りしを思へば、如何に該誌の勢あるかを知る可き也。

後其の居をシカゴに定むるや、同市中有志婦人の發起にて婦人記者間に於ける交通の便誼を謀り、婦人出版

協會の設立せらるゝに及び、推されて總理となり、何れの事業に於ても免る可からざる創業の困難も、巧に調理して遂に今日あらしむるを得たり。孃が客年中我が邦を訪はれたるは、正に是等の重任を帶ぶる時なり。實に孃は米國婦人社會の光りとして、尊重せらるゝは啻に是等のみならず、孃が與かりし有益なる事業を列記せんは、到底短紙の能くする所に非ず。孃が單身萬里の波濤を超え、我が邦に來るや、年已に老いたり、身躰健全、精神活潑、主義堅實なりと雖も、爭かでか能く耐ゆべき、而かも東北の寒土、勇壯活潑の男兒すら猶堪へ難しとなす所、況んや未だ我が氣候に慣れざるの老後、何ぞ其の身の調和を傷らざるを得可けんや。遂に名古屋より金澤に至らんとする途次病を發し、療養を加ふると至れりと云へとも、遂に他鄕一片の煙となりぬ、嗚呼哀哉、哀哉。然りと雖とも孃が我が邦に齎したる所の新空氣、世界に植付けたる所の善種は、永く史上に止まりて、永刧消磨するなきを思はゞ、亦當に瞑するを得ん。

叢談

○何をか說敎と云ふ

說敎とし言はゝ人皆對へて言はん、命令的訓誡也、服從的敎訓也、抑壓的敎導也と、然り之を吾人が經驗に徵し過古の史乘に索むるに、其の可然所以を拒み能はざれども、說敎必ずしも義務として服從せしむ可きものならざるとは、少くも心靈の何たるを解し、人智の發達昔日の比に非らざるとを信ずる者たらしめば、誤りにも首肯せざるとを信ずる也。世に命令、服從、抑壓、鞭撻を以て機械的に敎授する、之を注入的敎授と云ひ、各自の心性に訴へて敎導勸誘的に敎授する、之を開發的敎授と云ふを聞く。而して注入は敎授上の厄介物として排拆せらるゝに、猶宗敎社會に之を見るは何事ぞ。人の心は受容器に非ざる也、人の心は死物に非ざる也、人の心は全く壓搾す可きものに非ざる也。而して暫く受容器の如く、活動せざるが如く、収縮

せるが如き現を呈し、見れども視えず、聞けども聽えず、飲めども濕はず、食へども肥えざるもの誠に故なきに非ざる也。何ぞ、其の源既に濁れば也、――曰く使徒、預言者の一言一行之れ神の福音也、神の命也、神の教也、敢へて人類として犯かす可からず、背く可からず、考ふ可からず、必ず義務として守る可く服す可きは、吾が宗祖、孔子……釋伽……基督の教なりと。是れ説く者聞く者の心の與に醉へる所也、然れども神既に生氣‥活動‥能力あり、何時か醒めずにやは有る可き。人の未だ幼稚なるや、總ての事物皆能く甘受して一の推究をも試むるなきが如しと雖ども、既に成長發達するや、一事一物先づ己の理想に問ひ而して後之を受く。世の未だ發達せざるや、其の事幼稚にして説く所教ふる所悉く領諾して或は成功を見る可しと雖とも、漸次進化するに從ひ、爲す事行ふ事必らず理に適し、各自の理想の了承するに非ずんば得て功なき也。故に注入の方法たる、未開人教導の方便としては全く功なきにしも非ざる可けれど、世の發達は注入の全く効なく却つて害あるとを認む可からしむるに至れり。於是乎知る説教の必ずしも命令、義務、抑壓的のものに非らざるとを。故に曰く――説教は一般人類に對する一の開發教授的のものなりと

○固執派教義解釋の變遷

世の進化はあへなくも守舊派をして守舊す可からず、保守派をして保守す可からず、大に自由を擴張し改進を稱導せざる可からざるに至らしめたり。而して其の宗派の揭ぐる主義の如くんば、世の自由、改進派は是れ所謂夷狄也、反賊也、以て保守、守舊派の與に伍するを潔しとせざる所なる可しと雖とも、進歩は無遠慮にも渠等保守、守舊派の内幕を照し來りて竊に自宗の以て立つ可からず、守る可からざるを嘆ぜしめ、全力を盡して自由、改進派の抗擊に應ぜんとするの方法を講究しつゝありと雖とも、其の講究既に自由改進派の主義綱領にして自黨のものに非ざるとを知らざる也、渠等は自由改進派を目して亂臣賊子とすれども、自己

既に然るを知らざる也、自由、改進派は渠等より觀察すれば亂臣賊子の如かる可きも、如かも其の主義に贊りて立ち、主義によりて働き、未だ渠等の如く自ら作りて自ら破り、自ら言ひて自ら虛なりとするが如き比に非ざる也。其の主義に對して忠なる者、孝なる者を指して亂臣賊子と稱するならしめば、自由改進派の吾人は喜んで之を受くるに踟躕せざる也。余輩世の保守、守舊派の爲めに計るに、速かに其の胸中を打ち開けて語るに如かざる也、彼等の吾人自由、改進派の軍門に降せざる者、自宗の正なるが爲めに非ず、他宗の不正なるが爲めにも非ず、又自他の黑白正邪を判別するの能力なきにしも非ず、其の自らは自らを議り、自らを誤りとし、自らを卑しみて、他宗の主義を採用して而して猶反者なりと叫ばしむるもの、他に敵なくんば非ざる也。感情は實に一個の魔物、其は保守派を率ゐて闇路に彷徨たらしめ、守舊派を擧げて妖魔境裡に呻吟せしめ、遂に渠等をして自ら自己の爲す所を知り、自ら信する所を爲し、自ら思ふ所を行ふの確信を蔽ひ、勇氣ははぎ去られ、理性は隱れ、遂に全く感情の奴隸となりたれば也。是等の數百言何の爲めにか云ふ、曰く今日の佛敎家と云ひ基督敎徒と云ふ者皆其は誤解なり、斯くあらざる可からず、其は謬傳なり斯く說きたる者なりと、各自の修め得たる力を以て自由に聖書經典を解擇し、遂に何れか佛敎なる、何れか基督敎なる乎を識別するに苦ましむ、其の言に曰く古人は如何に解したるにもせよ、斯くなかる可らず、斯くありて始めて眞の佛敎眞の基督敎也と、在來佛敎、基督敎に於て決して認めざりしとをも、今日の理學科學上に應用して以て自由の討究をなし、自由の發達を計る、之れ決して佛敎の本義にあらざる也、基督の眞の敎に非ざる也、是等は所謂佛敎家に非ず、基督敎徒にも屬せず、自由の討究を許るし、不偏不黨、公平無私なる眼光を以て、天下のあらゆる宗敎を批評し、合理的大道、科學的眞理を以て基礎となす所の一大宗敎を形作る者也其の外觀は兎まれ角まれ、之れ在來の佛耶兩敎即ち守舊派、保守派の强敵にして、之をしも自由派、改進派

ならずとせば余輩復た何をか云はん、之をしも保守派、守舊派の主義綱領とせば余輩復た何をか云はん。

時事偶感

○新歳を迎ふ

瑞雲長なへに皇城に滿ちて、千門萬戸春色自ら靄々たり。時に誰か想はんや癸巳の道程果して如何を、難耶易耶、喜耶悲耶、未來吾れ知らず人知らず、癸巳の新行程途に一も知るなしとす可き乎、茲に吾が望み絶えたる也、復た何をか經營せん。然れども脈々たる大經は、恒久に渉りて進化の途に駒の足掻を早めつゝある也、明治癸巳の新運轉亦同じく此の大經の經緯を負うて來れり、敢へて絶望す可からずして、吾人が萬望の企壽は、今や一歩を經緯の大成に進めたる也。余輩回顧して往年を懷ふ、我れ能く何事をか成し得たる。宇宙進渉の一表彰たる我が經營果して得る所ありし乎、我が辛酸果して空しからざりし乎、懷うて茲に至れば太甚絶望、悔恨、遺憾、痛惜、悲哀の情、脈々として禁ず可からざる也。然れども吾が悲しみ、吾が喜びは之れ唯宇宙一細部の顯象にして、自然は恒に變りなく進みつゝある也。故に余輩は速に年往き月流れ、今年過ぎ明年來り、一年逝き十年迎へ、百年去つて千萬年を招かんと欲する者也、豈此の新正の吉祥に際し、告別の悲哀を倣ふ者ならん哉。

○日下部氏の調査案

余輩嘗つて小學教育の本旨と信教自由の權利との關係問題が、全國教育社會の意向を代表する大日本教育會の議事に上ると聞き、如何なる事を議し、如何なる事を調査せんとする乎を怪しみし、而して其の議が全評議委員の容るゝ所となり、九名の調査委員を撰擇して其の調査を附托せらるゝや、余輩は豫期すらく、大日本教育會の興望を負うて調査する者、必らず斬新卓絶なる意見あらんと、然るに今其の一人、如かも建議者たる日下部氏の調査案を一讀するに至りて大に失望せずんば非ざる也。氏が調査案は取り敢へず前號の紙上

に掲げて以て讀者に示したりき、讀者は既に之を讀んで如何なる感をか起せるらん。今其の明治初年の布令を引き來りて、大憲を左右せんとするに至りては、余輩復口を開く能はざる也。

○能く爾を知れ

能く爾を知る者は爾なり、自ら知らずして曷ぞ能く他人を知らんや、曷ぞ能く人を率ゐんや。故に凡そ事を爲さんとする者は須らく先つ之を自身に問へ、問ひて而して之を行ふ敢へて遲きに非ざる也。然るに今道を說き敎を施く者、秖に自ら知らざるのみならず、能く己を欺き人を欺く、曷ぞ能く其の効を修む可けん哉。事の濫觴は小なりとて怠る勿れ、之を久ふするに於て遂に大なるべければ也。

○跳ばんと欲せは先つ地を見よ

跳ばんと欲する者は先つ地を見よ、足下を見ずして跳ぶ者は躓かざらんと欲するも得可からざる也。世の牧師傳導師となりて能く其の効を修めんと欲する者、先つ須らく自ら修めて而して後之を人に施す可し。爾の地位は決して寄席的の講談に非ず、河原乞食的の狂言に非ず、爾の地位は最も神聖にして最も尊む可く、甘言令色を賣りて人氣を引き、人氣に投して卑褻なる言語を弄して人を笑はせ人を樂ましむ可き處に非ざる也

○最後の戰勝者

『天下の宗敎は皆吾が交友也』とは吾人の常に信ずる所にして、其の佛敎たると基督敎たるとを問はず、目的とする所に於て敢へて甲乙なく、其の敎ふる所は天下の正理公道に非ざるはなし、暫く相異なるが如きものは唯方法手段の如何に存する也。而して今のオルソドックスと云ひ自由宗敎と云ふ、達する所に於て何ぞ徑庭あらんや、歸する所は唯一のみ。然るに如斯固執と自由派の別るゝもの、一に敎義解釋の方術に存する也、是に觀る二の宗敎家を、名つけて俗宗敎家と云ひ、眞宗敎家と稱ふ、所以のもの一は營利上自宗の爲めに働く者にして、一は公理上天下の爲めに弘通する者也。前者は則ち敎義の如何に關せず甘言令色、奇跡怪行を以て天下の俗人を瞞し、信徒の頭數を計へて以て足れ

りとし、後者の期する所は彝倫日々に墮つるの時能く之を匡し、一大陶汰をなさんとするに在り。兩者何れか果して眞正の宗敎家なる乎、何れか果して最後の戰勝者なる乎。

○妖魔境

誰か云ふ文明は國の華也と、東都は是れ我が國の首府、文化の燒點地也、而して風紀の紊亂せる東都より太だしきは無かる可し、曰く收賄、曰く暴行、曰く弄花、曰く詐僞、曰く强迫、曰く隨從、曰く淫賣、曰く密淫賣、是れ果して文明の眞現象なる乎、之をしも文明と云ひ、國の華と云はゞ、余輩は其喜ぶ可く、愛す可きを知らざる也、然れども這般の敗德罪業が、社會の裡面所謂暗黑魍魎の世界に行はるゝに至りては猶ほ且つ多少廉恥の心ある所行とするも、彼の公然敎門の旗を揭げ、妙齡の善男善女を率ゐて、粉黛盛裝或は蹈り或に舞うて以て神德を傳うと稱し、柳巷花街愛を賣り媚を鬻ぐ者の狀を呈するに至りては、所謂羊頭を揭げて馬肉を賣る者と何ぞ撰ばん。吾が居を距る數百步、戀門狂恠なる者ありて盛に此の種の狂法を説くと聞く、然れども余輩は未だ斯く迄に東都の風紀壞頽せりとは信ぜざりき。然るに客年十二月十四日の朝野紙上を閱するに『天理敎一名美人手踊り敎會』と題して曰く

一種の神敎あり天理敎會といふ深川黑江町に其本部を置き府內各所に其分會あり然るに同じ天理敎會中にも唱詞のみを唱へて祈禱する一派と神歌及び手振り(舞踏)をなして敎義とする一派とあり現に京橋區內にて神歌の踊をなす新富町の敎會は曩に布敎を差止められしが其後神田區田町二丁目乾物商中代萬吉(天理敎會主)も矢張り手踊りをなす敎派を奉じ夜々男女の神徒をして盆踊的手振りをして唄ひつ舞はしめつして布敎せしより先月中警視總監は風紀を紊るものと認め其敎會に對して布敎を差止めしを中代萬吉は服せずして同月下旬警視總監を相手取り命令取消の訴訟を提起したり代言人は到底原告天理敎會に勝訴の見込無きものとなし本訴取下の意見を有し居れども敎會は飽迄も此命令を取消さんと熱望せる由

倦此の天理敎會の會長と呼ものは何れも十五六才なる妙齢の女性にて常に紅粉を裝ひ髮飾を繕ひ衣服は白無垢に紫色の袴を着け羽織は普通女流の用ゆる年頃似合の最華美かなるを纏ひ信者の請に依り崇め祭る天輪王の前にて祈禱するなり又求によれば種々の咒咀をも行ふ由にて熱心なる信者は賽錢の外に三圓五圓乃至十圓位寄進する者もありと云ふ因に記す前號の紙上に京橋八丁堀の天理敎會々長村上マチが昨今命令取消の訴訟を提起せし如く（通信社の報により）記載したれども右は本文に掲ぐる中代萬吉の誤聞なる由又八丁堀松屋町の天理敎會々長は川幡某と云ふ十五年計りの美人にて是は既に蠣売町二丁目へ移轉したりといふ穴賢〳〵

と、噫天は曇れり、地は濁れり、魑魅魍魎の屬白晝猖ほ横行濶歩す、何れの時か鷄鳴を聞き、麟鳳龜龍の屬具はり、再び天日を拜し得可きものぞ。

彙報

○自由神學校前期試驗

自由神學校にては客年十二月十九日前期試驗を擧行したりと云ふ、今漏れ聞きたる問題の一二を掲ぐれば

第二年前期倫理學問題（邦語）

服從的倫理說の缺點を指摘せよ

第二年第一年前期哲學史試驗問題（邦語）

（一）アナクシマンドロスのトアパイロンの何たるを說明しターレスの水幷にアナクシメチスの空氣とを比較せよ

（二）パルメニデスとヘラクリトスとの學說の要點を比較し且つ各がミレトス學派に對する關係を論ぜよ

第二年前期佛敎問題

（一）佛敎の分宗せる所以

（二）因緣の名義

（三）法相宗の宗名を畧解す可し

（四）我法二執の義相如何

（五）大小二乘の區別

第二年前期哲學史問題（英語）

第二年前期宗教哲學試驗問題

1. Give reasons for your belief that man is not a mere function of his physical organization.

a;—What can be said from a scientific point of view?

b;—What is the psychological argument?

c;—What are some of the moral argument?

2. In what two thoughts may we sum up our idea of human destiny?

3. What reasons from a scientific standpoint are, there, for belief in the permanent of religion?

4. In what sense has anthropomophism a place in religion?

5. How would you describe true worship in accordance with the idea of God which we have developed?

第一年前期宗教哲學試驗問題

1. Give a definition of religion which will meet the demands of modern philosophy and science.

2. What is philosophy and what two conditions are necessary in order to develope a philosophy of religion?

3. Tell what you can of the probable beginings of religion; that s show in what mental qualities religion originated and what were the eariest forms in which religion was manifested.

4. Name the Aryan peoples and describe new religion developed among Aryans that is what was the distinguishing characteristic of Aryan religions.

5. Answer the same questions refference to the Semitic people.

6. Give some account of the Sankyas system of philosophy.

7. What were the four sacred truth of Buddhism?

8. Tell some of Zoroastrianism.

9. Who were the three great Greek poets and what did they teach?

10. What was the origin of the hope of the Jews for Messiah?

○ユニテリアン第一協會の四聖會

有志者の發起によりユニテリアン第一協會に於ては四聖會と稱し東西兩洋に於ける四聖人を祭り以て其の德を尊崇するの意を表せんとすと聞きしが客月二十五日は正にイエスキリストの降誕日に際するを以て四聖會の初會の式を擧げたりと云ふ。而して今其の祭祀式の模樣を漏れ聞くに先つ神田氏立ちて四聖會の主趣を演じ亞で古莊氏はイエスキリストの事蹟の大畧を陳べ次には佐治、高田及び會員の祝詞演說ありて後來會者一同一堂に會し茶菓の饗應を受け暫時隨意談話の上充分歡を盡して散會せしは正しく正午頃なりきと云ふ

○土耳古政府軍人の一夫一婦制を定む

郵便報知紙上土耳古の首都コンスタンチノープル發の近信に據れは同國軍務大臣は此の程軍制の一部を改革し少佐以下の士官は自今一夫一婦の制を嚴守すべきとを訓令せり今其理由とする所を聞くに佐官以下に在る士官の歲費は殊に少額にして到底數婦を蓄ふと能はすと云ふに在り蓋し同國目下の情勢は啻に士官に多額の俸給を與ふるとを許さゞるのみならす又一定の期限に於て定額の俸給を渡すと能はさるを以て士官の妻子は平生貧困に陷ゐり時に或は喞々喃々涙に咽びつゝ軍務省に迫りて俸給の殘額を請求する者さへあるに至りしより同大臣は深く之を憂ひ遂に斷然此制を採用せしならんと土古耳に於ける佐官以下の將校は其數殆と一萬人以上に及び而して之に配するに平均假りに二人宛の婦女を以てするとせば（現時の實際にては平均二人以上なり）則ち二萬人以上の女軍ある譯にして其多費なる亦た以て思ふへきなり

古來土耳古に於ては各自財產の多少に依て其妻の數を增減するの風習ありしが軍人の如きは財產なき者と雖も却て多くの妻を有せり然るに現軍務大臣は熱心なる單婦論者にして若し其位階に附隨せる三人の妻を去ることを得は氏は歡天喜地して快哉を三呼するなるへし（同國官制に據れば大臣は必す四人の妻を蓄へさる可らす）何となれは之が爲め人類の德性を全ふし殊に莫大の冗費を節約し以て國家緊急の費目に充つるを得べ

ければなり兎に角同大臣が紛々たる非難の衝に立ち群議を排し斷乎として一夫一婦の制を施行するに至りしは(タトヘ其管下の一部に止るとは云へ)一は國家の趨勢に省み又大に文明の潮勢に刺撃せられたるに因ると云ふと記す

○波羅門教僧侶の行狀

波羅門教は行狀極めて正しく我が本願寺派にて買取らんとせる釋迦の舊跡も眞宗僧侶の行狀未だ波羅門教徒の滿足を得る能はずして其守護頗る困難なるべしとは豫て聞く所なるが右波羅門僧侶の食物は其住する寺院に於て毫も煮炊きする事なく飯時に至れば各々師家より授りたる鉢一箇を携へて市街に出で信者の與ふる一盃の食物に饑を凌ぐものゝ由にて信者も豫め鉢一盃程の食物を供へて僧侶の至るを待つよしなれ共中には人類の食ふに耐へざるものを手向くる徒ありしかし僧侶は決して之を辭みがたくまた食はずして捨つる能はざる定めなりといふ尤も長老とか智識とか云ふ地位の僧侶は自から市街へ出づる事なく信徒の方より食物を運ぶ定めなれど是また鉢一盃に限る趣(我監獄の差入れものゝ如く第二着以下の信徒は携へ行ける食物を進むる能はず)又此宗旨を奉ずる僧侶は金屬のものを持たず炎天履物をはく事なければ曾て語學修業の爲め同地へ赴きたる臨濟宗圓覺寺派の老僧は銀側時計を携へたりとて大に叱られたり併し熱國の跣足は何分耐へがたしとて羅漢のはける如き草履を用るを願うて纔に許可されたりと云ふ(讀賣)

○大日本佛教軍

長崎縣佐世保軍港の有志者は今度協議の上我國躰の鞏固を圖り自他の幸福を增進せんとの目的にて佛教軍なる團體を組織し其本營を該地に設け分營を適宜の地に置き加入者を總て佛教軍人と稱して夫々隊伍を編成する事と定め已に假規約をも設けて目下擴張の準備中なるよし

社説

日本將來の宗教

クレー、マッコーレイ

苟も國家萬歳の謀を定めんとするの士にして、就中身を宗教界に處する者は、其の何れの國に在るを問はず、盡く其國に於ける將來の宗敎は如何なるものなるやの問題に向て注目し、且つ之れを研究す可きことは言を俟たざるなり、今日余は此の國に在留し且つ日本帝國の宗敎の爲めには、不肖をも省みす出來得べき限りは助勢の勞を辭せざる者なり、故に聊か其管見を吐露し以て大方諸君の參考に供へん、

此の問題を論ずるに當り豫め讀者諸賢の注意を乞はんとするは、此の日本は決して昔時の日本に非ずして、維新の日本たる事是れなり、之れを證せんに舊幕時代迄ては、日本に於ける商人の地位は四民の中最下級に位し、之を呼で町人と云ひ甚たしきに至ては素町人と呼ばれ、双刀武士の常に云ふ所を聞けば＝斯かる素町人の身として云々＝或は＝彼は元來町人の身なれば迚ても公法の何たるを辨ぜぬ＝とて一言に町人と申せば無氣力、暗愚、賤劣の別號なるが如くにして、彼の小西行長は泉州堺の町人なりと云ふは、正しく行長を罵詈したるの言語なり、然るを維新以來泰西文明の輸入せらるるや之れと共に日本の商人の上に一ッの名譽をも輸入し來り、今日は素町人の語を以て之れを呼ぶものなきのみならず、彼は紳商なり、豪商なりとて大に世に持て囃やさるゝに至れり、勿論舊幕時代の町家を賤視し尙武の風を以て建國の基礎となせし當時に在ては、必要の上に起りし風習たるべしと雖も、今や國家經濟の原由する處は刀鎗に非ずして商業に在るを知ると同時に、其國家經濟の原因となるべき殖産家及び商業家は、武人に代て其の名望を得るに至るは當然の事なるべし現に昨年高等商業學校に於て擧行せられし卒業式の如きは、大に商家の面目を一新せし證憑とし

て見るべきものあり。之れに臨席せし人々は日本帝國の親王家を始めとし、內閣大臣、高等官、學士弁に豪商なりし、而して其の祝詞に演說に至る迄で一大眼目とする處は、盡く該高等商業學校及び日本商業界に向て將來の大企望を含有せざるはなし、其の企望たるや日本の商家を以て將來實に國家の柱石、國家の骨髓と迄で稱揚せられたるは、判然彼の素町人視せし舊慣より蟬脫せしものたるや明かなり余は今、此の一事を以て見るも日本現在の社會は已に既に大變革を來せし事實を證明して猶ほ餘りあるものと信せり、故に此の變革は單に商業上のみ然るものに非ずして、社會百般の事物の上に隱れも無く一大變革を及ぼせし事なるべし、換言せば、日本は維新の初年以來已に一大革明をば泰平の裡に成就せりと云ふも亦過言にあらざるなり。

扨て斯くの如き新日本に向て如何なる宗敎は適當するや、余は大人を以て襁褓の裡に置き、文明人をして穴屋素衣せしむるに同意せざるを以て、參考熟慮の上之れに適當なる答案を試みん、退て日本在來の諸宗敎（佛敎は其傳來已に久しく隨て信徒も亦最多數に居れは余は特に佛敎を指す）就中佛敎の如きは今日の新日本人の信仰し得べき宗敎なりや否やを考ふるに、余は斷じて其否らざるを知る、惟ふに現在丁年以上の日本人にして、社會の大勢を維持せる人士十中八九、必らず其祖先傳來の佛敎に向て置ける信仰は、彼れが祖父達が當時に於ける信仰に比較して冷淡なり、無頓着なりしは疑ふべからざる事實なりとす、何となれば舊來の佛敎は今日の新日本人に對しては不合格にして、隨て之れか信仰を維持するの力なきものなればなり、余屢々日本の有名なる寺院佛閣に詣で、佛陀の像を見るに何れも幽暗なる殿堂の裡に瞑目、坐禪し、寂滅爲樂の相を表示せり、隨て其說法も亦消極的厭世主義にして、人をして生きながら佛化せしめ、生きながら木偶と化し去り、五官八識の用を絕塞せしむるか如し、之れに反して今日の日本は木偶にも非す鎖港時代の隱者にも非ずして、外は泰西文明の刺衝に遇ひ內は日本人固有

の進歩的性質を發表するの秋なり、故に斯る佛敎と佛像は全く世と相容れさるを以て自然社會より擯斥せらるゝは數の免かれさる處にして、今日の儘にて押し行かば巨刹靈場の維持すらも日に困難あるの時節到來するは恰も暗夜に火を見るよりも明かなり、左れば將來の佛像は四肢五躰を完備するのみならず、能く之れを運用し、人間社會に出て活眼を發て自在に活動する佛像にして、生存爲樂の說法に非れば此活潑に運行する社會と伴ひ得る事は到底望む可らざる者にあらずや」

玆を以て佛敎界の先見者は之れか改革を主唱し、法界も亦或る政界の如く風波の崩し無きにしも非れとも、余は寧ろ斯かる因襲の久しきものは恰も朽木の彫るべからざるが如く倒底改革の見込みなしと信ず、現に活眼の聞へ高き時事新報記者の如きも、日本の佛敎改革は倒底望むべからずと迄で明言せり、好し之れを改革し得とするも佛敎は其根元より變更せずして、其消極性の數理を抱合せる限りは、將來の積極的新日本に向て不適當なりと斷言するを憚らざるなり、惟ふに佛敎は其初め炎天燒くか如き熱帶地なる印度國に起り、バラモンの楷級制度を排し、一時五天竺に爲すあらんとせしかども、如何せん寂滅爲樂の消極性敎理に根底を置き、此の世を以て憂きものとし、只管死滅を俟つの觀あるのみならず、印度地方の如き鬱滯固定の風習を以て支配せられたるものなれば、隨て日本國の如く天然に中和寒温適度の國にして東洋列國中頗る進取の氣象に富める國柄に對して不合格なるは勿論なりと雖も、如何せん斯かる風敎の輸入せらるゝや殆んと二千有餘年間、識らす〳〵も日本の人心に融合し之れか爲め幾許か日本人が固有せる進取の氣風を損失せしや明白なりとす、

且又印度の文明は如何なる者なりやを考ふるに殆んど無爲の政策と謂ふも可ならんか、彼れ等内地の人民は今日も猶ほ二三千年以前と同樣の衣食と居住に安じ、少しも舊慣を改めず、只だ少數の歐州人殖民地近傍は稍や十九世紀の文物に化せらるゝの觀あるも、是れ亦歐洲人のみの文化にして、其土着の人民に至ては無爲

にして未だ曾て現世紀の風潮と併行せざるを見れば以て其進取の氣風に乏しきを知るに足るべし、固より是れ等は強ち佛敎の罪に非ずして印度の氣候風俗習慣の然らしむる處なりと雖も、其内に發生せし佛敎は必す其餘弊を蒙りしは勿論、猶ほ之れが流を汲む處の東洋の諸邦も亦多少其の餘波を襲きたるは明々白々なり」斯の如き消極的宗敎は獨り現今の日本に於てのみ枯死せしに非ず、泰西諸國にても亦然るものなり。要するに宗敎の時勢と伴はさるの致す處にして、現に泰西諸國に於ける「キリスト」敎も若しグリーキ、ローマの學識と美妙との觀念に「キリスト」敎の樂天主義を加味するなかりせば、今日の隆盛を見る夫れ或は難かるべし。彼の中世の「オーソドックス派キリスト」敎の如きは、有名なるカルヴ井ンの神學を形成せるものにして、厭世消極の敎義を含蓄せるを以て、斯かる敎義は泰西諸國に在ても已に死滅に歸しつゝありて、今や「オーソドックス派キリスト」敎も名目上猶ほ舊套を脱せざるが如しと雖も、實際に於ては大に進歩的樂天主義に傾向しつゝあるは現在の實證なり、

然らは即ち日本將來の宗敎は如何なるものなりや、無論健然なる哲學科學の發見に依り益々光彩を加へられたる合理的樂天主義の敎法に非ざれば適當ならざるなり、何となれば今日の社會は單に日本人のみならず、何れの邦國に至るも此の進歩發達せる合理の新空氣を以て充滿せられたれば、隨て舊來の厭世隱遁の主義を抱有する敎法を容るへき餘地なければなり、

然らは即ち社會の健然なる發達を冀望する者にして、誰れしも從來の僧侶が頑固なる説法を聞て滿足を表し、寂滅爲樂無爲の敎法を以て處世の任を果さんとする者は非るなり。故に將來の日本人士は此の新時代を處するに當り、活潑有爲なる宗敎の基礎を定め以て治國の要素を養成せられん事を眞實に企望す、

論林

徳道の勢力

西村茂樹

凡そ國中に大勢力ある者五つあり、曰く政事、曰く法律、曰く經濟、曰く軍事、曰く道德是なり、政事は內閣を始めとして內務外務文部遞信の仕事、各府縣より郡長町村長等の仕事皆是なり、法律は司法省、帝國議會、府縣會より市町村會の仕事皆是なり、經濟は農商務省國立私立の銀行、商工會、鐵道滊船の仕事皆是なり、軍事は陸軍海軍の仕事是なり、是等官省及ひ議會なきときは、國は一日も立行かずといふとは世人皆之を知る、道德に至りては何れの國にも道德省と云ふ者もなければ、世人以上の四勢力と比較すべき者に非すと思ふ者もあるべし、是諸君が一考を煩さゞるべからざる所以なり、

凡そ政事と云ひ、法律と云ひ、經濟といひ、軍事といひ、其爲す所は大に異なれども、何れも道德を以て其根本と爲さゞるへからず、之を人身に譬ふれば政事法律經濟軍事は耳目鼻口手足の如く、道德は血液の如し、良善の血液能く身躰を循環するときは、耳目鼻口手足皆よく活動し、之に反して汚穢の血液循環するか、或は血液其循環を停むるときは、耳目鼻口手足は其活動を失ふべし、昔よりして政事の善きといふは道德に協ひたる者なり、政事の善からずといふは道德に協はざる者なり、法律の善き者、及ひ善く法律を用ひたるといふは道德に協ひたる者なり、法律の善からざる者、及ひ惡く法律を用ひたるといふは、道德に協はざる者なり、善く經濟を立たりといふは道德に協ひたる經濟を立たるなり、惡しき經濟を行ひたりと云ふは、道德に協はざる經濟を行ひたるなり、善き戰爭を爲したりといふは、道德に協ひたる軍を爲したるなり、惡き軍を爲したりといふは、道德に協はざるの軍、即不義無道の軍を爲したるなり、其事は和漢西洋の歷史に昭々と記載ありて、一々之を擧ぐるに及はされとも、今衆人の耳に熟したる者二三を擧て其證と爲すべし、仁德天皇の三年の租稅を赦し玉へる、醍醐天皇の寒夜に御衣を脫き玉へる、其他武家に至り、北條泰時の勤儉の如き、德川吉宗の明敏の如き、又德川光圀、細川重賢上杉治憲の良政を以て世に名を得たるが如きは皆道德

を以て政事を爲したればなり、之に反して惡政弊政といへるは皆道德に背きたる者なり、即ち或は奸臣を用ひ、或は婦言に惑ひ、或は租税を重くし、或は刑罰を酷にするが如きは、皆道德の禁ずる所なり、又法律を以て言はゝ古より良善の法律といふは皆道德に協ひたる者なり、即ち中正寛大威嚴の三德を具へたる者なり、又法律を執行する者も板倉勝重大岡忠相の如き良判官は即ち道德を以て審判を爲したる者なり、松平綱村の家の爭訟のとき、酒井忠清と板倉重宗との審判の如き、其道德に基く者と基かざる者と其良否判然たり、又經濟の如きも熊澤了介が備前國中の水利の不便なる地に溜池を作り、河村瑞軒が淀川を疏修して安治川を開き今日に至るまで人其利に賴ると、荻原近江守が混合の貨幣を造り、幕府の府庫は充實したれども、是が爲めに物價騰貴し、諸民其弊を受けしとは、道德に基きて經濟を立つると、道德に基かずして經濟を立つるとの差別を見るべし、又軍事の如きも豐臣秀吉の山崎の戰、德川家康の小牧山の役の如きは誰人も其義戰たるを認めざる者なし、義とは何ぞ道德の謂なり、之に反して浦上村宗が赤松政村を弑し、陶全姜が大内義隆を滅せるが如きは之を何とか謂はん、不義無道の極と云ふべし、此の如きは踵を旋らさずして其身も亦滅亡せり、政事法律經濟軍事の四勢力も道德の力に依りて或は其勢力を增し、或は其勢力を失ひ、或は其美名を傳へ或は其惡名を傳ふることは是を以て明かに之を知ることを得べし、此の如くして政事法律經濟軍事皆道德に協ふ所の國は其國富庶にして其民安寧、常に外國に對して其聲譽を高くし、其國威を輝すことを得べし、之に反して政事法律經濟軍事皆道德に協はざる所の國は其國貧窮にして其民安からず、常に外國に對して聲譽振はず、動もすれば國威を墜すことあり、道德の勢力豈大にして壯ならずや、

政事法律經濟軍事は皆之が爲めに巍々たる官衙あり、數千萬の官員ありて其事を施行するを以て明かに其在所を認むることを得べし、道德に至りては目にも見えず耳にも聞えず、知らず何れの處に存在するかと問ふ者

あらば、余は之に答へて言はん道德は諸子四千萬の心中、否、全世界十二億の人の心中に存する者にして、終古を亘りて變することなき者なり、官衙何程巍々たるも火災に逢はゞ忽ち灰燼となるべし、官員何程多きも盡く之を免職するときは無一人となるべし、獨り道德に至りては之を燒かんと欲するも燒くこと能はず、之を除かんと欲するも除くこと能はず、人類のあらん限りは道德は必ず存在す、人類存在して道德のみ獨り消滅すること能はざるなり、此の如きは造化の妙といはんか、上帝の大能力と云はんか、吾儕の淺智を以て其然る所以を料ること能はざるなり、

政事法律經濟軍事の四者は何程其道に通達せる人にても、其地位を得、其權力を握るに非ざれば之を國中に實行すること能はざるなり、即ち全國四千萬人の中其實行の權力を有する者は百餘人に過ぎず、即ち四十萬分の一に過ぎず、且其勢力を行ふことを得るも其在官の間のみにて、一朝其官を失ふときは少しも其權力を行ふことを得ず、道德は之に異にして、官位を要せず家格を要せず財產を要せず、何人にても之を行はんと欲すれば、即時に之を行ふことを得べし、則ち總理　臣も公侯爵者も人力車夫も日雇取も同樣に之を行ふの權力あり、道德は譬へは大氣の如く、其大より言へば大地を覆ふべく、其細より言へば針の孔にも入るべし、故に道德は之を大にしては天下國家をも包括すべく、之を小にしては一身一家一事一物にも及ふべし、今日立つにも道德あり、坐するにも道德あり、談話するにも道德あり、仕事するにも道德あり、商賣するにも道德あり、農業するにも道德あり、况して親に事へ兄弟に接し夫婦相交はり、子供に對し召仕に對し皆道德あらざることなし、夫より進んで他人に交はり町村に對し本國に對しては其道德の箇條尤も入組みて頗る考究を要する者あり、故に人あれば必道德あり物あれば必道德あり、事あれば必道德あり、人は道德の動物なれば人の居る所に道德なきの地なし、道德は三度の食事の如し、是なければ一日も社會は存立すること能はざるなり、

既に道徳は人類の身中に固有する物なりといふときは、是を打棄置くも消滅の患あることなかるべし、然らば之を振起するなど丶いふ樣なることは無用の事にして、縱令振起せざるとも道徳は自然に世上に流行することなるべしと思ふ者もあるべし、是大に然らず、凡そ如何なる美質の物にても天然に任かせ置きて少しも人力を加へざるときは遂に成長すること能はざるべし、穀物の如き花卉の如き果木の如きも皆天然の儘に棄置きて肥料も施さず、草萊をも刈らず、水をも灌がざれば竟に痿衰枯死すべし、たとひ枯死せざるも良善の結果を得ること能はざるべし、道徳も之と同樣にて、世上の行きなりに任かせて之を養ひ之を助けざれば遂には委靡して其勢力を失ふに至るべし、現に王政維新後國民の徳道大に昔に及ばずといふが如きは其一證と爲すに足るべし、

然れども道徳は其理を知りたるのみにては、何の役にも立たず、蓄きたる食物の腹を肥すこと能はざるが如し、必ず之を實行したる上にて初めて之を道徳と名くべし、學問の中にて天文學算術の如きは之を知りたるのみにて已に其學問は成就したる者なれども、醫學政事學の如きは知りたるのみにては物の用に立たず、道徳の學問は醫學政事學の如くにして殊に其甚しき者なり、論語に君子欲訥於言而敏於行とあり、又先行其言而後從之とあり、其他古人か實行を勸むるの言一にして足らず、近年學問大に開けたるより世間の書物にも道徳のことを載たる者甚多く、大抵の人は皆能く口に道徳のことを言へり、然れども其實行に至りては之を務むる者甚寥々たるを見る、是を實行せんとするには先づ我身を修め、次に我家に及ぼし、後に我一鄕に及ぼし、夫より我本國に及ぼすなり、但し是は正當の順序なれども實際に於て、四者互に之を行ふべし、我身を修むることは支那西洋の道徳書に詳なれば今之を言はず、其要は克己修養の二者に出でず、克巳は程子は自性偏難克處克將去といへるは實際上の名言にして、後光明天皇は之を實行し玉ひしと聞けり、一家を治むるは支那の五倫の說其當を得たる者なれども、余

は殊に晏子春秋に言へる父慈、子孝、兄愛、弟敬、夫和、妻柔、姑慈、婦聽の語を採れり、一鄕と一國との道德は余が日本道德論に詳なれば今之を言はず、就て見るべし、

宗敎と學校敎育との關係を論ず

戸城傳七郎

本論は曩に「敎育家何そ宗敎に冷淡なる」と題して「宗敎」第十三號及ひ第十四號に連載したる卑說の續稿なりと雖も、論旨頗る多岐に亘り且つ稍題號と相合はさるの觀あるを以て、便宜の爲め特一の論題として玆に揭載する者なり、讀者之を諒せよ。

政黨に關係し若くは宗派に拘泥する者は小學敎員たるの資格なしと故森文部大臣は云へりしと聞く、蓋し拘泥なるものは既に中庸公正の見を失して一に偏するの謂なれは、吾人の思想若くは行爲として素より好すへきことに非さるなり。然りと雖も、宗派拘泥の弊あるの故を以て直に宗敎を排斥し、宗敎を信する者は小學敎員たるの資格なしと斷するが如きは亦正當の見解なりと云ふへからす。苟も只其の弊を見て而して其の利を見すんば、敎育上必須不可缺の事物にして而かも又頗る忌避すへきの性質を具する者、豈唯宗敎の一のみならんや。世の敎育家たる者若し宗敎に就きて是非の論評を試みんと欲せは、先つ自ら偏僻の見を脫して可なり。余の本論を草するや、敢て好んて宗敎の爲に辯護の勞を取る者には非す、亦聊か敎育の爲に盡す所あらんとするの微意に外ならさるなり。

世の敎育家にして宗敎を排斥する者の言を聞くに、其の口實とする所一にして而して足らすと雖も、今其の最も重要なる點を擧ぐれは、第一小學校敎員にして宗敎の信者たるときは、其の思想感情は自ら率ゐる所の兒童に傳播して、知らす識らす宗敎的感化を與ふるの已むを得さる者あり、信仰は人々の自由に一任すへきものなるに、此の如く無知の兒童に宗敎的感化を與ふるは、取りも直さず彼等が成長の後自己の分別により隨意に撰擇すへき宗敎上の自由を奪却する者なりと云ふ。此の說たる一應其の理あるが如しと雖も、余を以て之を視れは寧ろ敎育の本旨を誤解せるに非さるかの

嫌なき能はさるなり。

玆に一人あり自ら好みて基督教に歸依したりと假想せんに、其の時若し他より之を制して、基督教は本邦に有害の宗教なり信すへからすと云はんか、「信教の自由を奪却す」と云ふ語を極めて廣き意義に解釋せば、或は此の如きも奪却の部類に入るへきなれとも、未た始より何等の信仰をも有せざる兒童に宗教的感化を與ふればとて、信教の自由を奪却するものとは云ふことを得ざるなり。既に有するものを奪却すればこそ奪却なれ未だ有せざるものを奪却すると云ふは事實上有り得べからざるの言なり。兒童は他年自己の隨意に宗派を撰擇するの自由ありとは云ふべきも、現に之を撰擇すべき自由の思想ありとは云ふことを得ざるなり、好し又之を撰擇し得る迄に發達したる思想を有したりと假定するも、未だ撰擇せざるに先ちて撰擇の自由を奪却したりとは云ふことを得ざるなり。萬一之をしも信教の自由を奪却する者として之を非難するに於ては、夫の寺院又は教會堂に於てする說教の如きも、未だ一定の信仰を有せざる人々に就きて云ふときは、亦其の自由を奪却する者と云ふを得べきなり。世に此の如きの道理あらんや。

學校に於て兒童に宗教的感化を與ふると云ふことは、換言すれば道を傳ふるなり、又善を教ふるなり、更に換言すれば道德教育の善良なる結果の一なりと云ふも敢て不可なきなり。教育に於て期する所は只人間普通(コンモン)の感情(センス)に於て謂ふ所の善たるに止まりて、信仰上より得る所の善に非ずと云ふの說は立ち難かるべし、苟も道は一にして、而して善は如何なる所にも善なりとせば之を教育上より教ふるも宗教上より感化するも其の結果は一なるのみ、兒童の善の情操は須らく唯教育上より之を養成すべし、宗教上より之を感化すべからずと云はゞ、則ち是れ善に二善あるなり、其の一は眞にして而して他の一は僞ならざるべからず、然れども是亦正理の許さゞる所たるを奈何せん。是の故に宗教的感化と云ふと雖も、其の學校教育に於て得たる所の善の情操は之を德育の結果なりと云ふも何等の不都合ある

ことなく、又德育の結果として宗教上の信仰を發生するも事實に於て不都合あることなし。然るに之を稱して信教の自由を奪却すと云ふ、余は其の何の故たるを知るに苦むなり。道德教育の目的とする所は唯惡を避け善に就き善良の習慣を修得せしむるに在り、故に此の目的を達するに利便にして且つ他に恐るべきの弊害を生ずることだになくんば、之を德育の手段として採用する者あるも何の不可なることか之あらん。世の論者より之を觀れば、兒童に宗教的感化を與ふるは即ち恐るべきの弊害を伴生する者と思はん。然れども謂はゆる弊害とは如何なることぞ、信教の自由を奪却する是れ即ち弊害なりと云はんか、道を傳へ善を勸むるの結果あるもの之を弊害なりとは云ひ難し、况や實に信教の自由を奪却する者に非ざるをや。

次に又論者の口實とする所を聞くに曰はく、小學校教員にして宗教信者たるも可なりとするときは、學校の教育は往々父兄の信仰と相衝突するの恐れあり、例へば、玆に一村より村內の人民は多く佛教信者なるに反して教員のみ獨り基督教信者なるときは、教員の信仰と父兄の信仰とは勢ひ相衝突せざるを得ず、此の如くなるときは兒童の教養上不良の結果を生ずるの恐れありと、是亦寧ろ杞憂の甚しき者と云はざるべからず。勿論父兄と教員との信仰相衝突するに於ては其の不可なること言を待たずと雖も、而も教員を撰擇するは或制限內に於て町村の自由に在ることなれば、多數人民の信仰と相容れざるが如き恐れある人をば、始より之を聘用せざるに如かず。今日教員の任免は府縣知事の職權の一部なりと雖も、果して此の如き恐れある場合に於ては、府縣知事に於ても亦相當の斟酌あるべきは勿論の事なり。故に此の事たる實際に於ては萬々論者の言ふ如く恐るゝに足らざるものたることを余は信ずるなり。或は曰はん一町村多數の人民にして幸に同一の宗教信者たる場合は兎に角、若し其の一半は甲教の信者にして一半は乙教の信者たる場合に於ては、父兄相互の間に衝突を來すの虞あるべしと、是亦憂ふるに足らざることなり、若し其の衝突甚しうして到底相容

れざるまでに宗敎上の競爭を生じ來らば、已むを得ず彼等の任意に學校を分立せしむるも可なるべし。然れども、之を從來の有樣より考ふるも、事の實際に於て此の如く激烈なる競爭を生ずべしとは思惟すること能はざるなり。是は啻に佛敎と基督敎とに就きて然るのみならず、佛敎中にも許多の有力なる宗派ありて、甲乙の信者共に一村内に住すと雖も、左まで激烈なる競爭の起りしこと恐らくは無かるべし。好し又萬一此の如き激烈の競爭ありて兩部の人民相容れざることありとするも、さる人民は到底永く一町村内に住して自治團躰を共にし得べきに非ざれば、早晩相分離して互に一町村を構成するに至るべし、是亦理の宜しく然るべき所なり、況や共に兒童の敎育を俱にするに於てをや、分合集散は自然の數に一任するも亦何の不可なることかあらん。

以上は主として宗敎排斥論者の口實とする所に就き、小校敎員にして宗敎を信ずるも決して不可なるなきの理由を論辨したるものなり。然るに今若し一歩を讓りて、果して論者の云ふ如く凡そ小學校長若くは敎員たる者は須らく宗敎以外に超然たるべし、宗敎信者は小學校長若くは敎員たるに適せずと云ふを以て至當の斷案なりと假定するも、此の如きは果して能く實地に施行し得べきの見解なるか、余輩の疑惑する所なり。若し法令を以て敎員の宗敎信者たることを禁止するか又は宗敎信者は敎員たることを得ずと規定するが如きことあらんか、是れ則ち明に他の信敎の自由を奪却するものなれば、素より爲し得べきの限りに非ず。然らば輿論の制裁を以てせんか、輿論は只輿論たるに止まりて實行の權を有せざるものなれば、現實に敎員の身を左右することは出來ざるなり。今若し佛敎若くは基督敎の一派にして布敎の方針を普通敎育部内に向けて一轉し來り、大に青年有爲の信者を派して小學敎育に從事せしむることありとせんか、政府は素より、如何に有力なる敎育社會の輿論と雖も復た之を奈何ともする能はざるべきは理の覩易き所なり。而して此の輩各〻其の位置を占有して、陽には敎育家として其の職に盡力

し、陰には布教を以て專一とし、以て相助けて運動するとあらば、此の布教軍の到る處、教育社會は忽ち宗教家の爲に蹂躪せらるゝの奇觀を呈することなしとも云ふべからず。事の是非利害は姑く置き、此の如きは必ずしも世に有り得べからざるの企謀には非ざるなり。知るべし論者の謂はゆる超然主義なる者は言ふべくして而して遂に行ふべからざることを。

余輩の所見を以てすれば、一定の信仰を有すると云ふ一事は教育家たるに缺くべからざる性格中の最も主要なるものとして、寧ろ積極的に主張せんことを欲する者なり。尤も此には極めて廣濶なる意義に於て信仰の語を用ふるなり。例へば儒教の如きは。宗教としては一二の必須要素を缺くものなるを以て、余は之を宗教の部類に入るゝことを欲せざるなり、然れども人若し之を學習して深く孔孟の所說を信奉し、之を以て脩身齊家の大本とする者あらば、是等は儒教に就きて一定の信仰を有する者とす。又若し信を自己の良心に置くこと極めて親切確實にして、良心の命ずる所は即ち天命なりとして之を信奉し、之を以て行爲の標準とする者あらば、是亦實際には一定の仰信を有する者として視るも不可なることなかるべし（儒教の如きも亦良心說の一部に入るべきものならんなれども、玆には姑く西洋哲學の所說に關して主義を立つる者を云ふ）。但し信仰なる語を此の如き意義に解釋するに就きては、定めて世に非難多かるべし、且つ余輩自身に於ても亦多少の異議なきに非ずと雖も、右は唯便宜の爲め假定する者と知るべし。

扨何故教育家には此の如き一定の信仰あるを要するかと云ふに、元來道德教育即ち德育の目的は、前にも云ふ如く、只惡を避け善に就き善良の習慣を修得せしむるに在り、而して其の實効を奏するに缺くべからざる條件中最も主要なるものを學校長及び教員の智識德望なりとす。委しく之を云へば、德育には二重の目的あり、即ち一には道德上の智識を授くるを以て目的とし、一には德性を涵養するを以て目的とする者なり。前者は之を德育中の智育とも稱すべく、後者は之に對して

情育及び意育と云ふも可なるべし。然れども德育の本領とも云ふべきは全く後者に在りて而して前者に非ざるなり。或ゝ情感意思及び行爲の善惡正邪を判別せしむる所以の智力即ち道德上の知識を授くるの一事は勿論必要なるに相違なしと雖も、之を其の本領たる德性涵養に比すれば寧ろ副貳(セコンダリー)の位置に在るものと謂ふべし。

又德育の方便として今日一般に採用する所の方法を觀るに、其の主として勉むる所は先づ　勅語の意義を解釋して之を敷衍するに古人の嘉言善行を以てし、以て之を記臆せしむるに在り。然るに此の方法たる、實際は自他の感情を主とするものに非ずして、偏に文字文章の知識に依りて敎授するものなれば、道德上の知識に依りて敎授するものなれば、道德上の知識を授くるには頗る適當なる方法と云ふべきも、德性涵養上には割合に効力少なきものと謂はざるべからず。其の他或は音樂唱歌の方便によりて温良優美の德を養成すると稱し、或は兒童相互の交情を利用して同情(シンパシー)の感を發起せしむると云ふが如き種々の手段なきに非ずと雖も、是亦德育の方便としては第二流に位すべきものにして、而して其の骨子と云ふべきものには非ざるなり。是の故に、兒童の德性を涵養して眞に其實効を奏せんと欲せば、別に相當の工夫を要すべきなれども、先づ今日の有樣にては格別良法の出づべき望みもなければ、已むを得ず敎師自身の言行を以て摸範と爲し、其の德によりて兒童を感化せんと欲するに過ぎざるなり。然れども是れ恐らくは最良の方法なるべし、將來と雖も是にましたる方法の發見せらるべしとは思はれざるなり。故に余は將に斷言せんとす、德育の最良法は感化に在り、道德的感化は即ち道德敎育の別名なりと。

然るに此の道德的感化なる者は素より偶然にして行はるゝものに非ず、何人にても學校長若くは敎員として兒童に對すれば必ず其の間に感化の効を呈するが如き容易のものには非ざるなり。蓋し感化なる者は或ゝ一種の勢力の他に傳播するの謂に外ならざるなり。是の故に、苟も他人を感化せんと欲せば、先づ己レに感化の本

源たるべき相當の勢力を具有せざるべからず、即ち敎師としては敎師たるに相當の德あるを要し、宗敎家としては宗敎家たるに相當の德あるを要するなり、德の在る所は即ち感化の本源たるべき勢力の存する所なり。之を火の物を熱するに譬ふべし、火に熱あればこそ之に接近する諸物は悉く其の熱を受くることを得べきなれども、若し火にして熱なくんば素より稱して火と云ふべからず、而して已に火に非ざるが故に其物を熱することは能はざるは勿論なりとす。故に有德の人に非ざるよりは、道德的感化の實效を奏せんことは到底得て望むべきに非ざるなり。然り而して謂はゆる有德の人なる者は、之を事實に徵するに、必ず或る宗敎若くは哲學上より得たる一定の信仰を有するを常とせり。古より賢人君子と稱せられ其の德以て一世を利するに足るほどの人物にして、而して曾て何等の信仰をも有せざる者は、余輩未だ之を聞知せざるなり。但し信仰なる語は通例甚だ狹き意義に解釋せらるゝが故に、前にも云ふ如く、此の如き塲合に使用するは正當ならずと云ふ者あらば、他に相當の語を使用するも可なり。要するに、余輩の視て以て有德の人なりと爲す所の者は、一言に之を云へば、衷心實に善を好し惡を惡むの人にて、換言すれば、眞に道德的性質（モラールキャラクター）を具有せるの人とも云ふべし、而して此の如き有德の君子にして曾て已に信奉する所なき者、即ち眞理の信仰者たらざる者は古より未だ之あらざるなり。果して然らば、一定の信仰を有すると云ふ一事は、以て敎育家たるに缺くべからざる性格の一にして、且つ其の最も主要なる位置を占むる者と云ふも決して誣言に非ざるべし。誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり、人道を說かんと欲する者は先づ天道を講ずべし、天道を講じて而して眞理の信仰者たらざるべからず。誠なきの敎育は又誠なきの結果に終らざるを得ざるなり。

宗敎と學校敎育との關係に就いて余が平生持する所の卑見の大要は此の如し。故に余輩は小學校長若くは敎員にして宗敎に歸依するは、啻に敎育上弊害なきの事たるのみならず、寧ろ熱心に之を勸誘せんことを欲す

る者なり、然れども只恐るべきは宗派の異同に拘泥して平和の社會に爭論の端を惹き起さんとするの虞あること是なり、此の點に就きては充分豫防策を講ずるの必要あるべし。且又近來基督敎の特に敎育社會に嫌忌せらるゝの一事は、本論に少からざる關係を有する問題なれば、之に就きても一言せざるべからずと雖も、今は其の機會を得ざるを以て、姑く後日に讓り置くべし。

宗敎國化論

古荘三郎

熟〻我邦に現存せる宗敎を視るに皆其源を他邦に發せざるなく、佛敎の源を印度に發し、支那、朝鮮を經て我邦に注ぎ、耶蘇敎の猶太に起り、歐米諸州を遍匯して日本に流れ來れるが如き、其原を探ぬれば、國體、國情、風俗、人情、氣候、風土を異にしたる異國の流入物たるや、其歷史に於て明々白々なりとす、固より宗敎の道なるものは、國の東西を別たず、時の古今を問はず、貫通して更に變る所あるなしと雖、一宗敎の起るや必ず之に伴ふの由來あるものなり、佛敎の釋氏に起る敢て因緣なきにあらず、外にしては波羅門敎が、人に安心立命の地を與ふる能はざるを慨き、內にしては古來印度の宗敎が誤謬迷信に陷り、害を其國に流すあらんことを憂ひ、世を救ひ且つ人を安心立命の地に置んが爲に、心と身を此理想の巷に挺したるの結果たるなり、印度國當時の事情なくして釋氏起らず、波羅門敎の刺戟微りせば、彼れが決心豈に斯の如く速ならんや、耶蘇敎の起る亦同樣の趣あり、猶太敎已に腐敗して其骨全く碎け、僧侶は敎權を弄して其敎徒を虐げ、宗敎社會交〻利を收りて道德將に地に墜んとす、眼を上げて國家の有樣を視れば、祖先の國は羅馬國の蹂躪する所となり、壓抑の下に惟其名を有ち、義を唱へんか志士なし、起らんか兵なきを如何ん、一片の丹心凝りて宗敎となり、猶太敎の誤謬を鳴らし、神敎の骨髓を說き、新に敎門を起し、生時其結果を納むる能はざりしも、死後世の光なる大名を天下に轟かすに至れり、猶太國なくして耶蘇起らず、猶太敎なくして彼の決意

豈に斯の如く壯んならんや

然れば宗教なるものは、其起るや必らず其國家其社會の狀態と關係を有するものにして、大道不二、至理一なりと雖宗教苟も人によりて唱道せられたりとすれば、佛教、耶蘇教の中に自から印度、猶太の國情及び人情の含まれ居るや敢て疑ふべからざるなり、斯の如く諸國を經歷せる宗教にして、支那に入りて支那の宗教たらず、朝鮮に渡りて朝鮮たらず、歐米に來りて歐米の宗教たらざるものなし、佛教は元來印度の宗教なり、支那に入るや支那化して初めて支那の宗教たるなり、耶蘇教の歐米にあるや、是れ歐米の宗教たるなり、其日本に入るや日本化して初めて我邦の宗教となるなり、歐米の形を存し、歐米の精神脫却せさる限りは、假令耶蘇教に宗教の極意を收めをるとも、決して日本化せさる中は、之を日本の宗教と云ふ能はざるなり、佛教の始めて我邦に渡來するや、之を評するもの毀譽相半し、議論紛々たりしも、幸に上流社會の信する所となりて、疾風の勢を以て各地に傳播したり、然れども惜哉當時の僧侶、印度、支那、朝鮮の佛教を其儘採用せしが故に、暫時にして儒教の爲めに其勢力を奪はれ、上流社會の擯斥を受け、傳道の好地位を失ふに至れり、蓋し我邦が忠孝を以て國の大本とせるは、建國の要義に於て明白なりとす、佛教の倫理敢て此義を說くなし、於是乎漸く識者の忌む所となり、邪道を以て目せられ、忽ちにして之を信ずる者は野翁村嫗に限るの觀を呈せり、されども佛教者悉く愚蒙の者のみにあらず、我國體の基は忠孝の道に在ることを知り、其徒にして傍ら儒教を脩むる者起り、佛教中に忠信孝悌の倫理を加へ、尙進んで神道なるものと合躰せんことを勉め、佛寺に神躰を併祭し、專ら我日本の宗教たらんことを求めたるが故に、遂に佛教は全く日本化し、今日に至りては大に我社會の道心を維ぐの勢力とはなりたり、惟惜む彼徒異躰を裝ひ、世と遠かり社會の皮骨に入りて、其道を傳へ、罪惡に沈み、憂苦に病めるものを慰藉するの勇氣なきを

抑〻耶蘇教の我邦に傳はる、佛教と同じく、外國の教

を開きたるものなり、故に歐米の風俗、慣習を共に移し來り、殊に耶蘇敎は支那、朝鮮の如き國柄にあらずして、世界文明國と稱する國民の手に由て來りたれば、其感化力一層强盛にして、耶蘇敎に入るの徒は多く歐米化し、日本人たるの性格は惟容貌に存するの外、他に視る能はざるの奇觀を呈するに至れり、其弊や流れ流れて、國體を忘れ、國情を輕しめ、眞理を討ぬる者と稱ふれども、眞理の微を知らず、病窮りて歐米皮相の開化に誘惑し去られたり、於是乎世人は大に其徒の非行を責め、耶蘇敎徒を視る蛇蝎の如く、國賊と罵り、邪敎者と賤しめ、之を遠ざけ、之を厭ひ、何人も共に齒するを恥辱となせり、然るに彼徒は愚かにも之れを以て榮譽とし、道の爲めに責めらるゝものとし、其義を守る强きを喜びたり、豈に知らんや、彼徒の迫害せらるゝは更に眞理の爲にあらずして、却て其故國の在ることを忘れたる誤解の譴責にありたるを、人固より義を守らざる可らず、眞理に順はざる可らず、國體を重んずる是れ眞理なり、共和政躰の國獨り眞理たるにあらず、君主國躰亦眞理たるなり、愛の道獨り眞理たるにあらず、忠孝の道亦眞理たるなり、握手獨り禮なるにあらず、膝行、頓首亦禮たるなり、彼れに一種風俗の存する在れば、我にも慣習あり、苟も國あれば、之に伴ふ國體と慣習の存するあるなり、彼歐米にも厭ふべきの習俗あり、我にも亦改むべきの習慣尠からず、然れども吾人が常に記臆して忘る可らざるは、我は日本人なりとの思念是なり

近來耶蘇敎徒中に國體論、國家論を唱ふるものあるを聞く、之れ吾人の大に喜ぶ所なりとす、佛敎は已に日本化したれば玆に說くを要せされども、耶蘇敎は未た日本化せず、實に惜むべきの至りなりとす、佛敎は其本躰學に於て大に視るべきものありて、吾人の脩業すべき事甚だ多しと雖、其社會的倫理に至りては取るに足らず、耶蘇敎は全く之と反對にして、其本躰學に於ては視るべきもの更になしと雖、倫理上吾人の以て師とすべき所尠からず、佛敎は理に偏して理に迷ひ、往々空架の說を爲すことを脫れざるなり、然れども吾人が

理想を開發するに於て大に益あるものなり、耶蘇教は宗教としては實に宗教の宗教たるものなり、殊に倫理の點に妙味ありて食ふて飽かず、其勢力は大陽の光の萬物を育するが如く、人に生命を與へ、人の德は高め、天下の道は是に在りて存す、然れども今日我邦に傳へらる所の耶蘇教は歐、米の耶蘇教にして我が耶蘇教にあらず、信徒も之を日本化する能はずして、其解說、其儀式、其墨守する習慣、其社會との關係、其倫理の應用等悉く歐米に摸倣し、一も我國情に由て起りたるもなし、故に一時大に其勢力を逞ふせんとしたるも、今や年々衰頽を顯はし、僅かに其餘生を保つもの、如し、何故に耶蘇教は其教る所の倫理の大本則ち「愛」をして忠孝の道に及ぼす能はざるか、何ぞ其教義を狹めて、窮屈なる解釋を爲す、日本國には日本の習俗あるを知らば、我に冠婚葬祭の美俗あるを知らは、何故に之れに從はずして、强ひて他國の習慣に傚はんとする乎、耶蘇教を日本化し了れ、耶蘇教、佛教と共に我邦の宗教たらん、之を國化せしむるは、耶蘇教徒將來の第一義なりとす

教育と宗教の衝突

文學博士　井上哲次郎

余は久しく教育と宗教との關係に就いて一種の意見を抱き居りしも、其事の極めて重大なるが爲め、敢て妄に之れを叙述することを好まざりき、然るに或時教育時論の記者余を訪ひ、現に熊本縣に於て教育と宗教と衝突を來せるが。抑〻勅語の主意は耶蘇教と相合はざるものにや、如何にと問はれたれば、余は最早平生懷抱する所を隱蔽すること能はず、少しく其要點を談話せり、然るに記者は其談話の大意を教育時論第二百七十二號に載せられたり、是に於てか耶蘇教徒は頗る之が爲めに激昂せしものと見え、其機關たる諸雜誌に於て余が意見を批難し、中には隨分人身攻擊をもなせり、橫井時雄氏は六合雜誌第百廿五號に「德育に關する時論と基督教」と題せる文を掲載し、主として余が談話の主意を辯駁し、本多庸一氏は教育時論第二百七十六號及

び次號に「井上氏の談話を讀む」と云へる文を寄送して百方耶蘇教の爲めに辯護を爲せり、其苦心想ふべし、氏自らは辯護の爲めに草せしにあらずと云へども、畢竟牽强附會なる辯護に過ぎざるなり、同志社文學第六十號に「勅語と基督教」と題せる文を掲げて又余が意見を批難し、間〻罵詈の語を交へ、人身攻撃に類するものありて、自ら宗教家なりと誇る者の口吻に似ざるなり、自由基督教第二卷第五號にも「日本の德育問題」と云へる文を載せて余の意見をも彼れ是れ評論し、不合理なる辯難を爲せり、其固執の爲めに眞理の光を見ると能はざる、誠に憫むべきとなすなり、今一々是等の諸雜誌に答辯を爲すの暇あらざる而已ならず、又彼等は實に一々答辯を爲すほどの價値あるものにあらざれば、余は此文を草して一度に之れが答辯を爲さんと欲するなり。

然れども先づ冒頭に辯明し置かざるを得ざるとあり、何ぞや是れ他にあらず、教育時論の記者が余の談話を後にて文章に綴られたるは、能く余の談話の主意を述べられたるに拘はらず、毫も誤謬なきものとすべからざると是れなり、凡そ言論は練達せる速記者をして速記せしむるも、尙ほ多少の謬誤を免れず、況んや錯雜せる論辨を記憶によりて敍述するに於てをや、然るに耶蘇教徒が余が意見を批評するに當りて、毫も此點に顧慮せざるは抑〻又何故ぞや、余は今余が主意の存する所を明瞭にせん、耶蘇教徒は極、公平なる念慮を以て余が主意の存する所を領解せざるべからず、若し些の固執を離れざれば、直きものも、斜に見ゆべきなり、余が教育時論の記者に談話せし處は、單に東西道德の發達を異にするを謂ひたるなり、未だ彼是の正邪如何を判せしにあらず、余固より彼是の正邪に就いて説あり、然れども彼の談話は單に歷史上の事實を敍述したるに過ぎざるなり、然るに駁者は恰も余が彼是の正邪に就いて判ぜしが如くに論辯し、平生此點に就いて言はんと欲する處を一時に吐露せしは甚しき大早計と謂はざるを得ず、且つ余は耶蘇教に就いて陳述すべきこと多きも成るべく之れを後日に遲延せるに、耶蘇教徒

は益〻迫まりて余をして余が秘する所までも陳述せしめんとす、耶蘇教徒も亦紛争を好むの徒にあらずと謂ふを得ざるなり、

嚮きに教育に關する勅語の出づるや、之れに抗せしものは、佛者にあらず、儒者にあらず、又神道者にあらず、唯〻耶蘇教徒のみ之れに抗せり、或は言はん、耶蘇教徒は　勅語其れ自身に抗せしにあらず、勅語を拜することに抗せしなりと、然れども是れ唯〻表面上の口實に過ぎず、其實は勅語の主意を好まざるなり、耶蘇教徒は皆忠孝を以て東洋古代の道德とし、忌嫌に堪へざるなり、故に或は發して不敬事件となり、或は激して宣告文となれり、何故　勅語の出づるに當りて唯〻耶蘇教徒のみ勅語に對して紛紜を生ぜしや、能く其因りて起る所に注意せざるべからざるなり、耶蘇教徒の中日本の風俗に同化して忠孝の教も採用し、甚しきは勅語をも會堂に講せんとするものあり、是等は保守的の耶蘇教徒と相容れざるものなり、其相容れざるは、一は我邦に適合せざる舊來の教旨を保存し、一は舊來の教旨をして枉げて我邦に適合せしめんとするに由るなり、要するに、耶蘇教は元と我邦に適合せざるの教なり、故に我邦の風俗に同化すべき必要も起るなり、若し耶蘇教が始より能く我邦の風俗に適合せるものならば、豈に之れに同化するを要せんや、從ひて又同臭の耶蘇教徒中に別派を生ずることあらんや、世の教育家は公平なる眼を以て能く近時社會の現象如何に注目せよ、勅語の出づるに當りて第一高等中學校に不敬事件を演せしは何人ぞ、耶蘇教徒にあらずや、令知會雜誌第八十三號に云く、

第一高等中學校囑托教師、内村鑑三が同校の勅語奉戴式に列して、陛下の勅語に對して、尊影に對して敬禮せざりし、其不遜不敬最も憎むべき所行は云云、其最初よりの顛末を記すべし、抑〻此の事の起りは本年一月九日、同校就業始めに於て、木下校長は、生徒一同を集め校内倫理室を以て式場とし、各教員列席の上、舊臘陛下が文部大臣へ下し玉ひし、教育上に關する勅語の奉讀式を擧行せり、其砌教員内村鑑三は、他の生徒教員が何れも肅々として、敬禮を盡くすにも拘はらず、一人傲然として更に敬禮せざるの狀の、如何にも不遜なりしより生徒は大に激奮し、嚴しく内村を詰りしに、彼は慢然として、我は基督教者なり、基督教の信者は、斯る偶像や、文書に向て、禮拜せず、又禮拜するの理由なしと答へたるより、生徒は益〻激し、一同校長に迫り、

校長も捨置かれぬ事なりとて、内村に問ふところあり、内村も同教徒、金森通倫、木村駿吉、中島力造等と協議の上、前非を悔て、禮拜することゝなり、折節内村は病氣にて蓐にありしかば、木村をして代拜せしめ、全快の上、自身更めて禮拜することゝ定まりしも、一旦其眞面目を現はせし上は、今設ひ禮拜するも、決して眞心に非ざるは勿論、不敬の所爲ありし上は、相當の處置あるべしとの論、生徒中に喧しく、到底一同の折合つかざるより、初は免職すべき筈なりしも、故ありて内諭解職となり、此一條先づ事濟となりしも濟まざるは基督教者の内幕にて、此事に付、二派に別れ、横井高橋の一派は、禮拜するも不可なしとし、他の多くは、飽迄も不可とするものにて、今尙ほ紛然たりと云ふ」

是れ實に第一高等中學校に於ける不敬事件の顚末の概要なり、内村氏が此の如き不敬事件を演ぜしは、全く其耶蘇敎の信者たるに因由すると亦疑なきなり、耶蘇敎は唯一神敎にて其徒は自宗奉ずる所の一個の神の外は、天照大神も、彌陀如來も、如何なる神も、如何なる佛も、決して崇敬せざるなり、唯一神敎は恰も君主獨裁の如く、一個の神は一切萬物の主にして、此神の外には神なしとし、他神の其領分中に併存するを許さゞるなり、獨り自宗の神のみを以て眞正の神とし、他の諸宗の奉ずる所は、如何なる神も、皆眞正の神と見做さゞるなり、多神敎は之れに反して共和政治の如く、他宗の諸神をも併存するを許すと多く、決して唯一神敎の如く、嚴に他神崇拜を禁ずるものにあらざるなり、唯一神敎と多神敎とは此の如く全體の性質を異にするを以て、多神敎たる佛敎は古來温和なる歴史を成し、唯一神敎たる耶蘇敎は到る處激烈なる變動を成せり、内村氏が勅語を敬禮することを拒み、傲然として偶像や、文書に向ひて禮拜せずと云ひたるは、全く其信仰する所唯一箇の神に限るに出づるなり……余は今此に多くの神若くは唯一の神を信ずるとに就いて其是非如何んと斷案を下だすにはあらず、唯〻不敬事件の起れる理由を辯明するに止まるなり……我邦は古來神道の敎ありて、神の多きと實に千萬を以て數ふ、然るに其最大の神たる天照大神は實に皇室の祖先なりと稱す、然かのみならず、歷代の天皇は皆亦神として尊崇せらる、然かのみならす、倫理に關する敎も皇祖皇宗の遺訓と見做さる、是れ現に我邦の國體の存する所とするなり、然るに耶蘇敎徒の崇敬する所は、此にあらずして他にあり、他

とは何んぞや、猶太人の創唱に係る所の神に外ならざるなり、余は今耶蘇教徒に對して神道者になれと勸むるにはあらず、此には單に耶蘇教者の國體を損傷すると多き所以を解釋するに止まるなり。

然れども斯く論じ來らば、耶蘇教徒或は云はん、内村氏の事は實に内村氏一個の過失に出づ、豈に此例を引いて一切の耶蘇教徒を論ずるを得んやと、然れども内村氏の所爲、決して内村氏の過失にあらず、彼れは堅く耶蘇の教旨を守るものにて我邦の忠臣ならざるべきも、疑なく、耶蘇の忠臣なり、内村氏の如くならざる耶蘇教徒は多少其教旨を枉げて我邦の風俗に同化せんとするものなり、又内村氏の所爲の如きは、決して偶然ならざるとは尚ほ他の例を參考せば氷釋するを得ん、天則第三篇第六號に云く、

近頃聞く、名古屋の代言人中に徳義家を以て稱せられたる、有賀某は耶蘇教信者の一人にして、某教會中に、頗る信用厚き人なりしが、一朝感ずる所ありて、斷然該教會を引き去りしと云ふ、其原因を尋ぬるに、去月（明治二十三年十一月）三日の天長節に、同教會にて恐れ多くも我が　陛下の御寫眞の上に、某國の國旗を畫ける扇面を掛け置きたるを見て、大に其の不敬を咎め、直ちにその扇面を撤せしめ、牧師等に對ひて、懇々忠告する所ありしが、其後、國會開院祝祭の折にも、又々これに類せる所爲ありしより今はとて、遂に袂を拂ひて脫會するに至りしぞ、

余は曾てニコライの禮拜堂に於て我天皇の寫眞を言ふに忍びざる仕方によりて甚しく汚瀆せしものあるを聞きたりしも、他の耶蘇教徒も亦同樣の事あるを知らざりき、然るに天則の報道する所に據りて推測するに、耶蘇教徒中には隨分我邦の元首に對し、不敬の所行あるに似たり、其中吾人の耳朶に觸れざるものも多かるべきも、又間〻世人の感情を傷ふものあるが爲め、相傳へて遂に吾人の耳朶に觸るゝものあり、天則の報道する所の如きは、即唯其一例に過ぎざるなり、耶蘇教徒が某國の國旗を畫ける扇面を我天皇の寫眞の上に掛けたるが如きは、事甚だ瑣細なるが如しと雖も、唯〻耶蘇教徒に限りて殊更に他國の國旗を畫ける扇面を我邦の至尊なる陛下の寫眞の上に加ふるは如何なる動機に出でたるか、且一度ならずして二度まで之れを爲せるは如何なる故ぞ、有賀某の忠告するにも拘はらず、殊更に國會の開院式に當りて再び之れを爲せるは抑〻何等

の意志の然らしむる所か、余は少しく之れが解釋を試みん、凡そ人は其學ぶ所に僻するものにて、大抵は之れを免るゝこと能はざるものなり、國學者の愛國心に富めることは衆の熟知する所にて、何も角も日本を以て最上とし、甚しきは言靈のさきはふ國抔と云ひて日本程言葉の發達せる國は他になき樣に思惟せるもあり、漢學者は亦一も二も支那と云ひて、終身唯〻支那のみを摸範とし遂に自ら東夷と稱するものあるに至る、佛敎徒は亦偏に印度を景慕するの傾向あり、佛陀伽耶恢復の策も之れが爲めにて、アルノルド氏が日本の佛者に印度は君等の故鄕なりと云ひて、佛陀伽耶恢復の事を奬勵したるも、此動機に乘じたるなり、又彼の近來歐米の學藝を修むるものを見よ、曾て米國に留學せるものは、米國を以て己れの本國の如く思惟し、摸擬せずとも濟むとも、矢張强ひて彼國に摸擬し、彼國の迷信固執より婦人崇拜の陋習に至るまで、浮慕艶稱して之れを我邦に實行せんとす、英國にありしものは、英國を賞讃し、佛國にありしものは、佛國を嘆美し、獨國にありしものは、獨國を稱揚し、各〻其學ぶ所に僻するの傾向あり、國學者の名譽は、國學と共に消長し、漢學者の名譽は漢學と共に消長す、若し國學をして價値なきものならしめは、國學者も亦價値なきものとなる、若し漢學をして、價値なきものならしめば、漢學者も亦價値なきものとなる、故に國學者も漢學者も各〻其修むる所を尊崇して其價値を貫からしめんとす、歐米の學藝を修むるものも……假令ひ必ずしも其國に留學せざるも……大抵は此傾向を脱すること能はざるなり、就中耶蘇敎徒の如きは、多くは和漢の學に精通せざるものなり、若し初めより和漢の學に熟達せしことゝならば、容易に耶蘇敎に移ることなかるべきなり、稀に多少和漢の學を修めたるものにして、耶蘇敎を信ずるものあるべけれども、其等の人は未だ眞誠に能く和漢の學を修め得たるものと謂ふべからず、要するに、耶蘇敎徒の最大部分は和漢古來の敎育を受けずして單に英米人の敎育を受けて生長せるものなり、此の如き現狀なれば、彼等が我邦よりも寧ろ英米を尊崇し、遂に他國の國旗

を書ける扇面を我邦の天皇の寫眞の上に掛くるに至るも略解釋するを得べきなり、世の敎育を以て自ら任ずるものは、深く是等現象を惹起す所の動機を察せざるべからざるなり、

又曾て押川方義氏等五名の寄書として郵便報知新聞紙上に投載せるを見るに、云く

各小學校に陛下の尊影を掲げ、幼年の子弟をして之れに向て、拜禮をなさしめ、勅語を記したる一片の紙に向て稽首せしむるが如きは、必ずこれ宗敎上の問題として之れを論ずべからざるも、我輩敎育上に於て其何の益あるかを知るに苦しむ、寧ろ一種迷妄の觀念を養ひ、卑屈の精神を馴致するの弊あるなきかを疑ふ、云云皇上は神なり、之れに向て宗敎的禮拜をなすべしと言はば云云吾輩死を以て之れに抗せざるを得ず、

此言の是非は姑く之れを置き、是れ實に內村氏が不敬事件を演ぜし胸中ならん、耶蘇敎徒は多く外國宣敎師の庇陰を得て生長せしものゆゑ、甚だ愛國の精神に乏しきなり、苟も愛國の精神に富まば勅語を拜するも何かあらん、唯〻勅語のみを拜禮して愛國の精神なきものは、固より取るに足らざるの無腸漢に過ぎず、然れども眞誠に愛國心あるものは、生命も亦國の犠牲に供するとあり、何んぞ復た勅語を拜するを拒むを用ひんや、耶蘇敎徒は何時の間にか知らず識らず愛國心を失ひ、他人の行爲を怪訝し、風俗に逆ひ、秩序を紊り、以て國の統合一致を破らんとす、國の災實に是れより大なるはなし、我邦人たるもの深く此に意を留めざるべからざるなり、余は此間に耶蘇敎徒中の最も甚しきものを擧げて其如何程我邦に不利なるものあるかを明かにせん、駿河臺の上に高大なる建物あり、兀として雲表に聳え、我宮城を俯瞰するもの丶如し、是れをニコライの禮拜堂となす、然るに此禮拜堂にて敎ふる所は、抑〻如何なる事か、世人は曾て注意せざるが如しと雖も、又大に我邦の國是に關するもの之れなしとせず、羅馬加特力敎にては、羅馬法王を以て頭とすれども、露西亞の宗敎にては露西亞帝を以て頭とす、露西亞帝は啻に露西亞帝國の元首たる而已ならず、又露西亞宗敎の頭なり、我邦人の中一人ニコライの宗旨に歸依すれば一人だけ露西亞國に從屬するも同樣なり、十人彼れに歸依すれば我邦は十人を失ふ譯なり、

其師とする處の宣敎師も亦歐米人なるを以て、敎育を受くる間に漸々敎師の思想感情を傳受し、遂に己れ自らも布敎の爲めに我邦に來る者の如き狀態を露はすに至るなり、然かのみならず、耶蘇敎徒は唯一の神を信じ、此神に對して之れを言へば、如何なるものも差等あることなし、天皇も穢多も同等と見做し、唯〻其奉ずる所の神のみを以て至尊無上となす、是れ實に耶蘇敎徒が屢〻聖影に對し、不敬なる所行ある所以なり、去年八月二十九日の日本新聞に左の記事あり、云く、

肥後八代の某小學校生徒何某は、第一敎場に掲げ奉れる聖影に向ひ、ナンダと云ひ檬扇子にて打落しければ、敎師は早速呼寄せ其所因を糺したるに、傲然として曰く、我が信ずる傳道師は、神より外に尊い者なしと申し聞けたるが故に、之れを打落したるのみと忽ち地方の一大紛擾となり、遂に其生徒に退校を命じたるよし、

又去年十月十二日の繪入自由新聞に左の如き報道あり、云く、

我邦の集治監、監獄は憲法發布以前は大抵眞宗の僧侶敎誨師として幾分の手當にて專ら囚徒を敎誨せしが、去る二十二年二月憲法發布以來宗敎は信仰の自由なるより空知集治監にては典獄大井上輝前氏が佛敎を廢し更らに基督敎誨師を置き囚徒に敎誨し其の成跡如何は知らざれ

況して彼れに歸依するもの、已に我邦の言語に通じ、我邦の事情を知るものなれば、我邦の不利實に淺小なりとせざるなり、然るに我邦人が幻夢中に行動するが如く、毫も是等の事を熟念せざるは、最も危險なりと謂はざるを得ざるなり、又彼のニコライの禮拜堂のある地面は、我邦より永世貸與したるものなりと聞く、ニコライは實に我邦の特惠を受けたるものなり、然るにニコライの處より毎月刊行する正敎新報と題する雜誌あり、少しく己れに不利なることを言ふものあれば、如何なる人と雖も、忽ち之れを誹謗することを務む、實に耶蘇の敵をも愛すべしと云へる敎に戻るものと謂ふべきなり、

然れどもニコライ敎派の如きは、蓋し他の耶蘇敎徒と頗る其趣を異にするを以て、此れに由りて一切の耶蘇敎徒を評論することを得ざれども、耶蘇敎は歐米諸國に行はるゝ所の宗敎なるゆゑ、之れを信ずる者は自然其敎の由りて出つる所を本國の如くに思惟し、却て我邦を外國の如くに見做すの傾向を生ぜざるを得ず、且つ

共次で官制改革となり、北海道の各集治監は樺戸を本監として、空知、釧路、網走は各分監となし、矢張り大井上氏は典獄なりしにより悉く囚徒の教誨を基督教として是まで例年一月元旦には天皇陛下の御眞影を囚徒に參拜せしめしに、本年一月の元旦には大井上氏之れを各分監に命じ、陛下の御眞影を脱して、物置の隅に押し入れ、囚徒に拜せしめざりし囚徒は何故に斯くの如くなるやと疑ひしに、全く基督教信仰の結果なりとのことなるが、苟も集治監の典獄たるもの何たる不敬ぞや、

世人は一時是等の事を嘵々すれども、忽ち又忘却し、曾て是等の事はなかりしものの如くに經過し去るの狀なしとせず、余は冷淡なる智識的探求の精神を以て其由りて起る所を明かにせんと欲するなり、右二新聞の報道する所の如きは內村氏が不敬事件と全く其本源を同うするものなり、寫眞は天皇の寫眞も、穢多の寫眞も、皆均しく紙片なり、紙片として之れを見れば、崇拜するに足らず、然れども聖影を現出する寫眞を見れば、必ず是れ我邦の元首たることを思惟し、我邦の元首を崇敬するの情も亦從ひて起るならん、是れを人の常情となすなり、拿破列翁の墳墓を過ぐるもの皆脱帽して禮を爲すを見る、華盛頓の墳墓に於けるも亦同樣なりと聞く、是れも理論上より言へば、嗤笑すべきが如しと雖も、感情上より見れば其決して然らざるものあるを知る、之れと同じく陛下の寫眞は紙片なりと云ひて輕侮するは理論上恕すべきものあるが如しと雖も、感情上より見れば決して然らざるなり、一箇の寫眞にして陛下を代表する以上は、陛下を尊敬する念慮は、陛下の寫眞にも及ぶものなり、親戚朋友の寫眞若くは肖像を壁に掛くるも、英雄豪傑の彫像を街頭に建つるも、名士の相貌を新聞雜誌に載するも、聖賢の筆蹟を愛翫するも、皆其人を愛敬欽慕する情に出づるなり、神功皇后の靴とか、フリデレック大王の笛とか、釋迦の頂骨とか云ふものを後人が可笑しきほど鄭重に保存するも亦古人を追慕する感情に出づるなり、如何なる人も多少此の如き感情を具せざるはなし、若し此の如き感情を具せざるものあらば、是れ全く高尙なる人情を缺くものなり、耶蘇教徒と雖も、又聖書を尊重するにあらずや、若し之れを紙片なりと云ひて足にて踏み、汚穢物中に投せば、耶蘇教徒は毫も不愉快なる感情を

起さゞるか、耶蘇教徒が耶蘇を崇敬するの感情は延ひて耶蘇の教を記載する、書籍に及ぶにあらずや、國家的精神ある者の國主の寫眞を尊重するは、此感情に異ならざるなり、又思へ。十字軍は何の爲めに起れるか、全く耶路撒冷を恢復せんが爲にあらずや、耶路撒冷は何故恢復するを要せしか、是れ耶蘇の死處にして耶蘇は既に在らざるも、其地は尙ほ之れが爲めに神靈なりと思惟せしに本づくにあらずや、果して然らば十字軍は耶蘇と關係ある耶路撒冷を追慕する感情より起れり、國家的精神あるものが、國主の寫眞までも崇敬するは、情感に異ならざるなり、然るに耶蘇教徒が或は聖影を打落し、或は撤去するが如きは大に我邦人の國家的精神に戻れり、是れ國家的精神の我邦に勃興するに當りて耶蘇教徒の大に世人に厭忌せらるゝの傾向を生ぜる所以なり、

耶蘇教徒は或は以爲らく、寫眞を崇拜するは、偶像崇拜に類す、故に之れを爲すに堪へずと、然れども神の觀念を心中に描出して、之れを崇拜するも、寫眞を見て其表する所の人を崇拜するも、本と甚しき差別あるにあらず、一は主觀的、一は客觀的にして兩者の間井然甄別すべきが如しと雖も、其之れを崇拜する念慮に至りては、同一なりと謂はざるを得ざるなり、ショッペンハワー氏曰く、偶像は木石若くは金屬より造るも抽象的の概念より結成するも皆同一なり、若し己れの前に人性的存在を有し、之れに供へ、之れを呼び之れに謝するときは矢張偶像崇拜に外ならざるなり、生羊を捧ぐるも、辭誼を捧ぐるも、又根本的の差あるにあらざるなり、如何なる儀式も如何なる祈願も斷乎として其偶像崇拜たるを言ふを得べしと、誠に痛快の辨となす、耶蘇教徒が動もすれば彼れは偶像崇拜にして我れは然らずと劃然藩垓を立つれども、詳細に看來れば左樣に嚴肅なる區別は本となきものなり、耶蘇教徒が實に偶像崇拜を非とせば何故人性的の神を崇拜するよも亦非とせざるか、前後撞着と謂ふべきなり、余は此に偶像崇拜の是非如何を斷言するにあらず、單に耶蘇教徒取る所の不整合なるを叙述するものなり

要するに、耶蘇教徒が我邦人の國家的思想と相背馳するとは上來陳述せるが如く着々社會の現象に就いて之れを證明し得べきなり、是れ決して揣摩臆測の說に係るにあらざるなり、然るに耶蘇教徒は啻に我邦人の國家的思想と相背馳するの行爲ある而已ならず、又父母に對して孝ならざるものも之れなしとせず、然れども單に斯く言ふ而已にては、耶蘇教徒必ず之れを首肯せざるべければ、今唯〻一例を擧げて之れを證せん、三寶叢誌第百五號に不孝なる牧師と題し、左の文あり、云く、

山口縣山口に牧師服部省三と云ふものあり、常に實母よし子を天主教者に爲さゞれば牧師の名に背くなりとて、老母の否むをも顧みず頻に說付しも、よし子は元來眞宗の熱信家にて殊に漢學を修めし人なるを以て、いかで斯る邪教に迷ふべきか、却て省三の外教を信ずるを悲しみ、果ては病氣を惹起し、起臥不自由の身となりたりしに、省三も致方なく更に手段を變へて傳道會社に手を廻し、同會社より經典及神學の書を老母の許へ送與せしめしに、老母は痛く省三の不心得を慨き前世の宿緣を嘆じ、右の聖書には左の二首を添へて傳道會社へ返したりとぞ、

こゝくにの造り花をばいかで見ん
豊葦原の春に逢ふ身は

我れさても野山のかやの身ではなし
なびけさや吹く風ぞうるさき

耶蘇教徒は動もすれば信教の自由を名とし、他人の耶蘇教の事に喙を容るゝを排斥するにあらずや、然るに身自らは却て他人の信教を妨け、横說竪說、枉げて耶蘇教に化せしめんとす、今此に擧げたる服部省三の如き、即ち其一例なり、若し他人の我信教に干涉するを忌嫌せば、何故自らは他人の信教を妨くるや、是れ實に耶蘇教徒の免れ難き自家撞着と謂ふべきなり、然るに服部省三の塲合に世人の注意を促がさゞるを得ざるとあり、何ぞや、是れ他にあらず、服部省三が無理に改宗せしめんとしたるは、他人にあらずして即ち己れ自身の老母なると是れなり、己れ自身の老母已に眞宗に熱心するをば、強ひて天主教に轉ぜよと說付くるは、毫も信教の自由を名とするものゝ精神に戻らざるか、然かのみならず、老母が已に其子の外教を信ずるを悲み、果ては病氣を惹起し、起臥不自由の身となりしにも拘はらず、又更に方法を換へて其否むをも顧み

ずして改宗を勸むるは、果して孝道に背くことなきか、毫も敎語の「父母ニ孝ニ」と云へる精神に戻らざるか、少しく東洋古來の倫理を知るものは、此事に就いて正確なる判斷を下だすことを難しとせざるべきなり、又一歩を進めて之れを考ふるに、眞宗の信者を耶蘇敎に改宗せしめんとせば、先づ耶蘇敎の眞宗に優ることを證明せざるべからず、然るに未だ耶蘇敎徒中一人の之れを爲したるものあるを聞かず、思ふに服部省三の如きは、未だ眞宗の敎義の何たるを知らずして、天主敎に歸依し、獨り己れの信ずる所のみを眞實なりと妄想し、其先入主となるものを以て老母を强ひたるならん、然りと雖も老母の信ずる所の如きは決して妄に之れを非とするを得ざるなり、三部經の中高尙なる道德上の敎を記すること少しとせず、殊に無量壽經に「善人行レ善、從レ樂入レ樂、從レ明入レ明、惡人行レ惡、從レ苦入レ苦、從レ冥入レ冥」と云ふが如き、「人在ニ世間愛欲之中一、獨生獨死、獨去獨來、當レ行至ニ趣苦樂之地一、身自當レ之、無レ有ニ代者一」と云ふが如き、又「端身正レ行、益作ニ諸善一、修レ己潔レ體、洗ニ除心垢一、言行忠信、表裏相應」と云ふが如き、皆人を高尙なる道德に引誘するの言なれば、如何なる人も、取りて以て己れを裨補すべきなり、又觀無量壽經に「心想レ佛時、是心即是、三十二相、八十隨形好、是心作レ佛、是心是佛、諸佛正徧知海、從ニ心想一生」と云ふが如きは何等の名言ぞ、未だ此の如き敎を研究せずして、初めより之れを以て耶蘇敎より劣れりとするは果して是なるか、服部省三の如きは擧げて論ずるに足らざるべきも、耶蘇敎徒中少しく名望あるものは、暫く公平の心を以て東洋の哲學宗敎等を研究するを要す、然らざれば遂に復た服部省三の如き所爲に出でざるを保すべからざるなり、服部省三に反して大に稱揚すべきは、其老母なり、老母が東洋の主義を持し、確乎として動かざるを見れば、眞に女丈夫と云ふも不可なかるべきなり、然かのみならず其詠じたる二首の歌は、東洋は自ら東洋の敎あれば必すしも外國の敎を要せざるの主意にて其勇ましき氣概は殆んど紙上に躍出せんとす、後來日本の女學史を著はさんと欲す

るもの、決して此老母を忘るゝことなかるべきなり、然るに此老母に孝ならざるは服部省三と稱する耶蘇敎の牧師なることも亦永く記憶せざるべからざるなり、

余は局外に立ちて靜に是等社會の現象を觀察せるに、近來に至りて耶蘇敎徒は益〻我邦人の國家的思想に反せる擧動を爲し、其敎育上に於ける衝突は頗る重大ならんとするに至れり、去年六月中旬熊本縣知事松平正直氏は熊本縣飯田郡横手村長國寺に於て町村長、町村會長を集めて曰く「小學校敎員に禁示すべき者二、一は政黨政社に關することなり、二は耶蘇敎を信ずることなり、耶蘇敎は外國の敎なり、決して信ずべきものに非ず、小學校敎員は宜しく去年頒布し玉へる敕語に殉すべし、若し耶蘇敎を信ずるものあらば猶豫なく處分すべし」と、是れは世の學者が耶蘇敎に就いて己れ一個の意見を述ぶるものと同じからずして、寧ろ行政處分に關することなり、是故に耶蘇敎徒が之れが爲めに憤激せしも亦理由なきにあらざるなり、然るに去年七月二十五日及耶蘇敎に關して紛紜を生ぜり、其事に就いては當時取調の回報あり、其文に曰く

山鹿高等小學校生徒退校の件に付其事實を調査せしに右は同校高等生徒四人が基督敎を信じ、校内に於て他の生徒を勸誘し、授業上妨げあるを以て、校長は之に諭して、宗敎は各自の信仰に任せ、素より隨意たるべしと雖も、在校の間は授業上に差支ゆる次第もあれば、卒業までは用捨すべき旨を以てせしに、父兄に相談の上返答すべしと云へり、依て校長は事の間違を生せん事を恐れ、其父兄に直接して右の趣を述べたるに、三人の父兄は其說に同意して、生徒に諭したるも、一人の父母は遂に校長の說を容れず、生徒も依然校内に於て誘導をなし居り、敎師に於て敕語の聖旨を講述するも更に耳に入れず、之が爲め何となく他の生徒にも影響を及ぼし、一般に敎師の說話を耳にせざるの風を生じ、取締上にも關し、學校整理を缺くの一端ともなる次第にて、何分其儘に看過し難きより、不得止右一人の生徒に退校を命じたる者なり、又該生徒は常に學校内に聖書を携帶し机上に並列し居りし事は、學校主任の郡吏其他の者に於ても之を認め居れる事實にて、必竟右の生徒が公然の所業を以て敎師の訓戒に反抗し、他の生徒之に倣ふて校中一般の取締上に關する所より、不得止退校せしむるに至りたる義にて、巡査の密告を受けたるに基因せる抔の事は全く無しと、

右の兩事件起るに及んで植村正久本多庸一外八名の耶蘇敎徒は公開狀を各新聞に送りて廣く世人に訴へて熊本縣知事が耶蘇敎に關して演說したる事、及び山鹿高等小學校長が耶蘇敎信者の生徒に退學を命じたる事等

は信教自由の大權を侵害し、國民教育の旨趣に戻るものとせり、若し耶蘇教徒は其耶蘇教徒たるが爲め、學校の教員生徒たるべからずと云ふものあらば、固より不可なり、若し又耶蘇教信者の教員生徒を耶蘇教信者たるが爲めに之れを免職若しくは退學せしめば尚一層不可なり、何んとなれば其所爲全く信教の自由に反すればなり、日本の臣民たる者が已に憲法によりて均しく信教の自由を有する以上は其人が佛教信者なるも、神道信者なるも、耶蘇教信者なるも、又如何なる宗教の信者なるも、均しく學校の教員生徒となるを得べきと固より論なきなり、若し之に反する意見を有するものあらば、實に憲法に違背するものに外ならざるなり、然るに憲法第二十八條には「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」とあり、然れば日本の臣民たるものは、皆均しく信教の自由を有すと雖も、亦制限のあるあり、何ぞや、第一には社會の安寧秩序を妨げざる事、第二には臣民たるの義務に背かざる事、是れなり、伊藤伯の義解に云く、

但シ信仰歸依ハ專ラ内部ノ心識ニ屬スト雖其ノ更ニ外部ニ向ヒテ禮拜儀式布教演説及結社集會ヲ爲スニ至テハ固ヨリ法律又ハ警察上安寧秩序ヲ維持スル爲ノ一般ノ制限ニ遵ハザルコトヲ得ス而シテ何等ノ宗教モ神明ニ奉事スル爲ニ法憲ノ外ニ立チ國家ニ對スル臣民ノ義務ヲ逃ルヽノ權利ヲ有セス故ニ内部ニ於ケル信教ノ自由ハ完全ニシテ一ノ制限ヲ受ケズ而シテ外部ニ於ケル禮拜布教ノ自由ハ法律規則ニ對シ必要ナル制限ヲ受ケサルヘカラス及臣民一般ノ義務ニ服從セサルヘカラス是レ憲法ノ裁定スル所ニシテ政教相互關係スル所ノ界域ナリ

此れに由りて之れを觀れば、信仰の自由は如何なる境界にまで達するものなるやを知るを得べし、然るに耶蘇教徒は果して毫も社會の安寧秩序を妨ぐる傾向なきか、又臣民たるの義務に背く傾向なきか、内村氏の不敬事件の如きは、能く安寧秩序を維持したるの結果なるか、吾人が皆臣民として服從すべき元首の寫眞を或は打落し、或は撤去し、或は其上に他國の國旗を畫ける扇面を掛くるが如きは、善良なる臣民たるの徵なるか又學校にて教員の命に從はず、殊に全國教員の典範となれる敕語に違背する生徒の如きは、能く外部の規則を守れるものなるか、耶蘇教徒は單に信教の自由を

名として曉々せずして、先づ能く耶蘇教徒の近來我邦に於て經過し來れる事蹟如何を顧慮せざるべからざるなり

然るに尙ほ一層深く之を推究するに、敎語の精神と耶蘇教とは、大に其趣を異にするものなり、故に苟も敎語を以て教育の方針とせば、耶蘇教徒は之に抗せざるを得ず、若し耶蘇教徒にして敎語に同意を表するものあらば、是れ必ず時勢の如何んともし難きを知り、姑く之れに附和して、機會の乘ずべきを竢つものならん、然らざれば多少其教旨を枉げて我邦の教育に與せんとするものならん、敎語の中には少しも宗教に關するとはなきが如し、然れども其主義は決して耶蘇教と同一なりと謂ふを得ざるなり、今逐一其要點を述べん

（未完）

日本の德育主義

土谷忠治

敎育と宗教との關係は如何、日本德育主義は如何なる點に立てざる可からざる乎は、余輩が嘗て又現在未來に於いて研究し、研究せんと欲する所の問題也。然れども日本の國躰たるや、世界廣しと雖ども未だ其の比を見ざる所、故に其の間に處して此の問題を決せんとするは人の最も難しとする所、敢へて余輩淺見薄識の徒の能くする所に非ざれども、余輩の素志は決して動かす可からず、遂に今日の如く全く身を宗教界に投じて徐ろに策を畫せしむるに至れり、而して余輩が今日迄研究し得たる結果及び其の方針は、都度々々名を換へ事を新め世に公にせしと既に幾回、幾千萬言。然るに時勢は今や余輩を促して再演するの止むを得ざるに至らしめたり。讀者若し通讀の榮を賜はらば、又將に吾人が意の熱する所を知るに庶幾からんか。

過來一年間に於ける宗教界の波濤は、大に余輩が研究の好材料たりし也、故に時節遅れとは知りながら雜錄欄内に記する所あれば、本論と參照せられんとを請ふ也。彼の不敬事件、不遜事件の如きは、其の當時々々余輩をして筆を下さしめたり、然るに其の後稍鎭火の運に向へりと思へりしに、思はざりき今日復た再燃せ

んとは、事の起りは井上文學博士の談話の、教育時論記者の手に借りて二百七十二號の同誌上に現れたるにあり。今や其の聲に應じ、響に對へて起てる者、教育時論誌上本多庸一氏の辯護說、横井時雄氏は六合雜誌に、同志社文學、自由基督敎は社說に、各自採れる所の主義を發表し、今又井上文學博士は『敎育と宗敎との衝突』てふ一長篇を本誌に投ぜられたり。余輩は是等全躰を通じて批難する者に非ず、又全然賛意を表する者に非ず、余輩は余輩に一個の考案あり、記して以て世の公評を仰がんとす。余輩の常に口にする如く、事の宗敎に關するものは、特に感情の爲めに盲目となり、偏執となり、頑迷となり、不測の結果を招く者比々類あれば、宗敎上の論客正に意を用ゐて可也。

吾人が今本論を草するに當り、便宜上左の五項に區別して論ぜんとす、曰く

第一項には全躰に渉りて日本德風の衰頽せるは、學校敎育の主義と社會敎育の主義と衝突せるに在るを記し。第二項に於ては吾人が嘗て草せる所の論旨を抜萃して、更に重ねて論ずるの勞を省き。第三項には敎育行政上より宗敎の位置を論じ。第四項には日本古代及び現時の德育主義の評論をなし、其の主義は果して持續し得可きや否を索め。其第五項に至りては之が局を結び、德育と宗敎とは必ず同一主義の下に立たざる可からざるを明さん』と欲す。吾人が取れる項目順序以上の如しと雖とも時に應じ機に臨み、或は減じ或は增加するとあらん、讀者請ふ幸に之を諒せよ。

第一項　德風衰頽の原因を論ず、

抑も日本の今日を何とかなす、之を地理上より考ふるに、之を歷史上に推すに、之を商業農業工業上より極むるに、吾人をして能く首肯せしめ得るものあるか、實に我が邦は天然の樂園也、而して能く天然に反せざる乎、我が邦が東洋の帝國として計へらるゝものは何ぞや、諸他列國に對して全然獨立せると云ふ可き乎、能く海王の名に背かざる乎、固有の美術をして其の光輝を世界に揚發し得る乎、根本既に枯る、枝葉何ぞ振

ふ可きの理あらんや。請ふ首を回らして世界の大勢を見よ、列國の眼光は一に此の樂園に注げり、商戰の關ヶ原は此の皇土に在り、一瞬片時も偷安す可き時＝所ならんや、往け々々往いて汝が樂園に耕せ、進んで汝が皇土に戰へ、獲ると獲ざるとは意の如く也、負くると勝つは汝に在り。而して汝をして一層奮はしめ、勵ましむる所は一に是に存せず、

眞理の光は東より西より、南より北より照し來れり、實に汝が勇を皷して世界に濶歩すると否とは、此の一髮にかゝれり、堅忍不抜の眞理に對する眞の信仰は造られんとして有る也、見よ基督敎は歐米文明の空氣を含んで來り、佛敎は殆んど我が國に於て、最高の發達をなせり、然れども基督敎は基督敎たり、佛敎は佛敎たり、而して能く其の間に處し兩敎の融化を計り、眞の信仰を形ち造り、堅忍不抜の氣風を養成し、以て世界に雄飛するの時期と場所とは我が國に與へられたる賜ものなり。然るに我が國には感情てふ眞理の魔物有り、常に其の光輝を遮蔽して照さしめず、其の照さゞる所軍備整はず、政治擧らず、民業達せず、貧弱の悲みは日々に增長し、風氣の紊亂日一日より其の度を高め、遂に停止する所を知らざる也。斯く志氣振はず、德風隆らざるもの一に練心術の足らざるによる、練心術の足らざるは敎育其の當を得ざるが故なり、若し幸にして其の當を得るあらば、上は制度文物より殖產工業に至る迄、挽回せらる可きは期して俟つ可き也。陳選曰『格物致知、則因吾巳知者而究極之也、誠意正心修身、則因吾巳行者而惇篤之也、由是推之於家、則家可齊、推以賛道化、則國可治、天下可平、』と、故に高きを知らんと欲する者、先つ其の近きを見、一家一國を治めんと欲する者、先つ其の身を修めざる可からず、其の身を修め行を整ふるは、皆家を興し國を治め天下を平ぐるの本たる所以也、故に人に修身の道を敎ふる者の任も亦難い哉。

世間見苦敷く厭ふ可きものありとせば、德敎の振はざるより猶甚だしきはあらざる可し、世の敎育家は之を知りて爲さゞる乎、知らずして爲さゞる乎、否決して

爲さゞるに非ず、熱心之に從事するも徒勞に屬する有るを如何せん、果して其の勤勞を水泡に歸せしむる者は何ぞ。請ふ少しく之を顧みよ、水と油とは兩性互に反撥して相容れず、相容れざる所決して和衷協同の實を得可からず、我が帝國議會は休會せり、停會せり、沸騰せり、喧囂せり、殆んど此の一ヶ月間の政治社會は、暗雲朦朧として天地を蔽へり、其の基く所政府と民意の衝突に在り、內閣の意志と人民を代表せる議會の意志と相容れざるによる也、斯く兩性相背き相反する者爆發となり、破裂となり、解散となり、干渉となり、腕力となり、生殺となるにあらざれば停止せざると世の常也、教育而かも勤めざるに非ずして而して其の結果の擧らざる斯くの如く、德教而かも勵まざるに非ずして而して風氣の紊亂斯くの如きもの、兩性衝突の結果に非ざるなき乎、見よ如何に我が國四千萬の衆民は佛陀の薰習を受けしか、如何にイエス、クリストの空氣を呼吸せる乎、然るに翻つて普通教育內の方針を見よ、能く外圍の空氣と一致せるや、社會一般の德風と學校內德教の方針と撞着する所なき乎。實に今日の學校德育は藩閥政府也、薩長政策也、彼れ等は社會の發達と共に進步の實を見はす乎、彼れ等は自己の地位を保たんが爲に衆意を捨つるに非ざるなき乎、彼れ等の取れる主義は佛教耶、基督教耶、將た無政策耶、皆非也、彼れ等は儒教を以て無二の政策とし金城鐵壁とし、四面皆楚歌の聲たるを知らず、妄に守舊して唯我獨尊となし、佛不可、基督不可、而して遂に內外の事情相容れざるを顧みず。故に四五時中校舍に受くる所の德教は、一步校舍を離るゝに於いて忽ち衝突を來し、子は親を凌ぎ、親は子を責め、弟は兄を叱し、兄は弟を叱し、紛々擾々、一家の和親遂に保つ可からず、國家の和衷協同遂に望む可けんや、假りに一步を讓り斯く迄に至らずとするも、其の主義上幾部の差異は、遂に學校內に於ける德教を無効に歸せしむるの價値あるや疑ふ可からず。今や世の進化は和衷協同の必要を促せり。其の任に當らんと欲する者、能く民意の有る所を察し、清淨潔白なる本心を以て、能く眞理の光る所に

向へ。總て法文は働かず、唯之を用ゐる人に於いて、或は生かし或は死せしむるもの也、善良完美、圓滿無缺の勅語を下されたる今日、敢へて德敎の主義定まらず、校舍内外の倫理的行爲の最高標準齟齬すると云ふ可からざるも、勅語は之れ僅々數行の文字、如何に能く倫理の大法を指示せるものとするも、唯單に一般の標準を示すに止まりに、個々行爲の善惡正邪を指示せざる也、故に之が活用の任に當るもの、從來取れるが如き方針を一變して以て正義の軍に投じ、勅語の眞意を發揚せしめよ。

第二項

前言に云へるが如く、本項は唯重ねて論ずるの徒勞を省かんが爲め、特に嘗て吾人の論ぜる所の摘要に過ぎざる也。

本誌第五號論林欄内『自然感化力と宗敎』と題して

吾人日常の行爲は善にまれ惡にまれ、皆内心活動の現象に非ざるはなし、故に社會の道德をして高尚ならしむるも腐敗せしむるも、一に内心に在りて存す、而して今日の如く卑賤粗野の行爲あらしむるものは何ぞ、之れ即ち内心の嫩芽未だ可塑性を有する時に其の培養法當を得ざりしによる、然らば云はん、今日の德風衰頽は一に内心の培養を司る所の普通敎育の罪に非ざるを得ずと、然れども人類が普通敎育内に呼吸するは數年間のみ、他は皆社會自然の敎育、即ち自然感化力にありと云はずんはあらず』と論斷し、更に一轉して『自然感化と宗敎との關係を論じ』又一方よりは、第十號に於て「宗敎の本領と宗敎家の覺悟」と題して

迷信固執は吾人の固より與せざる所、然れども迷信固執を厭ふの極、遂に理論熱に浮かさるゝに至りては是れ亦吾人の賛せざる所也、眞正なる宗敎家の本領なるものは、一方に於ては偏執頑迷に陷るを防ぎ、一方に於ては實踐躬行以て、自己を救ひ他人を濟し、自己を汰し社會を化し、自身を愛するが如く公衆を愛し。以て社會道德的制裁をして、最も高尚に最も善良ならしめざる可からざるに在りと論じ』歩一歩

を進めて、『宗敎家の覺悟は確固たる信仰を以て、堅忍不抜敢爲勇奮、直言直行以て其の局に當らざる可からず、然れども自ら信ずるとの厚き、頑固偏僻遂に他を知るの薄きに至るものなれば、宜しく其中を取つて以て進まざる可からず』と局を結び、其の他第十三號には「宗敎と敎育」第十四號には「宗敎と倫理」の關係を記する等、吾人が常に敎育の上に眼光を注ぎ來りしと決して誣ふ可からざる也、今復た吾人は本論を草するに至る、果して世の容るゝ所となるや否は得て知る可からずと雖とも、兎に角世人の此の點に注意あらんを切望する者也、吾人の特に遺憾とするは、敎育雜誌中夙に錚々の聞えある敎育時論記者等にして、一言是に及ばざると之れなり、請ふ少しく吾人に敎ふ所あれ。

（未完）

雜録

○死とは何ぞや

炬燵に煖を取る者あり、雪中車を挽く者あり、五味八珍に不足を鳴らす者あり、燒薯に舌を鼓する者あり、獄中に呻く者あり、高樓に吟ずる者あり、無邪氣なる小兒あれば、悒鬱たる老人あり、笑ふ者、泣く者、苦む者、樂む者、喜ぶ者、怒る者、冥想一瞬の間即ち百萬無量の世界を現し來る、去年此の如く、今年此の如く、昨日此の如く、今日亦此の如し。之を常住と謂はんか、之を無常と謂はんか、人生の目的果して如何。噫、死とは何ぞや。

○惟一敎徒の試金石

人あり曰ふ『我れは惟一敎徒（ユニテリアン）なり、能く神を信仰し、謹んで神に禮拜を捧ぐる者也』と、善し爾の言ふと甚だ善矣。吾人は爾と與に居り、爾と與に語るを喜ぶ。爾速かに來れ、吾人爾と與に大なる神を崇め、惟一なる神を拜せん。神は常に心の正しき者を憐み。心の清潔（きよ）き者を愛する也。爾決して强ち敎徒なり、神を知る者也と云ふ勿れ、爾の心を知る者は爾に在り、敢へて他に索め、他に告ぐるの要なき也。吾人は聊か爾の爲めに試金石を献ぜん、

マルチノー氏曰く『神は何處に在りや、汝は在まさゞる處なしと云へり、然らば爾は嘗て逢ひし處ありや。爾は神を常住不滅と云へり、然らば爾は嘗て見し時ありや。爾は試練にあふ者は彼に依りて安易を得、頭を垂るゝ者は彼に依りて擡げらるゝを信ずと云へり、然らば爾が激怒する時に、嘗て神の靜謐なる惠にまで沈みしとありや。爾がいや勝さりて悲しむ時に、神のいや勝したる喜を得しとありや』

是れ等は實に吾人が、知る可からざる神を知り、信ず可からざる神を信ずる試金石也。自ら問ひ自ら對へよ、是より明かなるとはあらじ。

○日本に於ける愛の義

愛なる語は基督教徒によりて甚だ審かに解釋せられ(哥林多前書第十三章)爲めに世態人事を行るに最と便利となれり。然れども此れ素より泰西人の專用語にも非ざる可し、試みに駿台雜話なる左の一節を見よ、仁は即ち愛なると、室鳩巣夙に之を言へり。

心の仁あるは、人の元氣あるが如し。人の元氣は脈にあらはれ、心の元氣は愛にあらはる。脈のかよひ絕ゆれば人死する如く、愛の理ほろぶれば心死する程に、仁は心のいのちとも申すべし、夫れ心は活物なるにより、人に情あり、物哀を知りて、常にいきたる物ぞかし。よりて父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず、君長をみては自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず、齒德を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず、義を聞きては必ず耻づるとを知る。もし情なく哀をしらずば、其心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さもしらずなりなん。何をもて自愛し、何をもて恭敬せん。義を聞きて感ずるとなく、不義を聞きても恥づるとなかるべし。是をもていふに、仁義禮智いづれも心の德にして、各其理分なれども、其本源は仁に外ならず。人として不仁なれば、義も禮も智も、其さまあり其樣ありといへど、所詮内より生ぜねば眞の德にあらず、公の理にあらず、この故に仁に心の德といひて、外に德をいはず、仁に愛の理といひて、外に理をいはず。その

いはざる所にふかき意ありとしるべし。

○宗教の勢力

噫大なる哉、宗教の社會に占むる力や。之を用うる善なると邪なるとは、以て社會の盛衰に關すると云はざる可からず。世に或は社會の道德的制裁を擧げて、教育の責に歸せんとする者あれども、之を實際に徵するに却つて宗教の力大なるを思ふ可し。今明治二十三年の調査に據るに

宗教	神社	一九三、一五三	神官	一四、七〇〇
	寺院	七一、八五九	住職	五二、五一一
	合計	二六五、〇一二		六七、二一一
教育	普通學校	二六、一五〇	教員	……
	專門學校	一、七一八	教員	……
	合校	二七、八六八		七四、七九五

是に依て觀るに、教員數に神官住職數の及ばざると僅七、五八四に過ぎず、之を人口に比すれば殆んど人口六百に付て一人の割合也、之に住職に非ざる僧侶を加へ、基督教等の牧師、傳道師を加ふれば、實に容易ならざる勢力たるを知る可し。而して是れ等偉大力は如何なる方針に向つて進み、如何なる人物によりて代表せらるゝか、左表に就いて觀よ

新教派	基督教		
教派	重なる人物	新聞雜誌	學校
組合教會	小崎弘道、宮川經輝、海老名彈正、横井時雄、原田助、綱島佳吉、浮田和民、グリーン、デビス等	基督教新聞 六合雜誌	同志社（京都） 梅花女學校（大坂） 神戸英和女學校
一致教會	押川方義、田村直臣、植村正久、服部綾雄、井深梶之助、フルベッキ、ノックス等	新福新報 いのち	明治學院（東京） 女子學院（仝） 共立女學校（横濱） フエリス女學校（仝）
メソディスト	本多庸一、小方仙之助、平岩恒保、マクドーナル、ホイッテング、カックラン、イービー等	護教	東京英和學校 東洋英和學校 仝女學校
日本聖公會	左乙女豊秋、今井壽道、ヒショップビカスタス、ウヰルアムス等	日曜叢誌 公會月報 信仰之友	立教學校（東京） 仝女學校（仝）
浸禮教會	ベンネット等		捜眞女學校（横濱） 駿臺英和學校（東京）

佛教

宗派	所依經典	分派	管長	新聞雜誌	學校
淨土	無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經天親菩薩ノ往生論善導大師ノ觀經疏、往生禮讃、法事讃、般舟讃、觀念法門及九帖	鎭西派	日野靈瑞	佛教、淨土新報	宗學本校
		西山派	太田廓空	佛教公論	全支校（三）
眞言	大日經、金剛頂經、蘇悉地經	舊義派	楠玉諦	傳燈	古義大學林
		新義派	…………	密嚴新報	新義大學林
天台	法華經	山門派	三浦實源	四明餘霞	大學林
		寺門派	山科祐玉		
		眞盛派	牽溪考恭		

自由派

クエツカー			普連土女學校（東京）
普及福音教會	三普眞、丸山通一、ムンチンゲル、クリストリーブ等	眞理	新教神學校（東京）
ユニバーサリスト	ペリン、吉村秀逸等	自由基督教	宇宙神學校（東京）
ユニテリアン	神田佐一郎、前川太郎、マコーレー、ローレンス等	宗教	自由神學校（東京）

宗派		所依經典	分派	管長	新聞雜誌	學校
禪宗	臨濟	…………	天龍寺派	高木龍淵	…………	普通大學校
			柏國寺派	荻野獨園		
			建仁寺派	齋藤龍關		
			南禪寺派	松山舜應		
			妙心寺派	改撰中		
			建長寺派	霄貫道		
			東福寺派	濟門敬冲		
			大德寺派	河野伽山		
			圓覺寺派	釋宗演		
			永源寺派	澤村禪機		
	曹洞	…………	…………	欠員	扶宗雜誌、洞上新報	大學林、中學林二校、全支校
	黄檗	…………	…………	多々羅觀輪	…………	…………
眞宗		無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經、龍樹菩薩ノ十住毘婆沙論易行品、十二禮、天親菩薩ノ淨土論、曇鸞大師ノ淨土論註、讃阿彌陀佛偈、道綽禪師ノ安樂集、其他六釋	本願寺派	大谷光尊	傳道會雜誌	內學院
			大谷派	大谷光瑩	令知會雜誌	文學院
			高田派	常磐井堯熙	法之園	高倉學寮
			木部派	木邊淳慈	婦人教會雜誌	
			興正寺派	華園澤稱	心の鏡	
			佛光寺派	澁谷微妙定院	反省雜誌	
			出雲路派	藤善聽		
			山元派	藤原善住		
			誠照寺派	二條秀源		
			三門徒派	平洊宣		

日蓮	妙法蓮華經、無量義經、觀普賢經	一致派	小林日董	法鼓	大檀林
		妙滿寺派	錦織日航		
		八品派	中田日修	日蓮宗教報	
		本成寺派	清水日數		
		本隆寺派	同　入		
		不受不施派	釋日正	信正誌	全支林
		興門寺派	釋日珠		
法相	華嚴經、深密經、如來出現功德莊嚴經、阿毘達磨經、楞伽經、厚嚴經及瑜伽論、顯揚論、莊嚴論、集量論、攝論等總十一論	……	西谷勝遍	……	……
融通念佛	華嚴經、法華經	……	秦教忍	……	……
時宗	無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經、往生論、全註、安樂集、玄義分等五部九卷、選擇集等	……	河野覺圓	……	……
華嚴	華嚴經	……	菅沼英樹	……	……

（基督舊教及神道に關しては調査未濟に付次號に讓る）

○三者必居其一矣

事の敎育に關する者は、細大洩さず之を揭載し、報道し、論辨し、諫議す、其の筆鋒の鋭利なる、其の言論の公正なる、其の識見の該博なる、其の情操の高潔なる、恐らくは敎育雜誌中の泰斗と稱するも恥かしからざるに反して、一旦事の宗敎に關する者に至りては、默然として言はざること啞の如く、藐乎として與り知らざるが如くなること胡越も啻ならず。曾て基督敎の性質に關する某博士の談話を揭載せしことあり、而して其の外には復た何等の意義をも有せざりき。知らず記者の眼中には曾て宗敎なる者あらざるか、將た之ありと雖も、敎育雜誌の記者なるが故に、宗敎を談論するは其の職分に非ずと謂ふか、卽ち記者も亦超然主義を守るの一人なるか、抑々又時流に阿り、讀者の意を迎ふるに急にして而して未だ之を談論するに遑あらざるか、三者必ず其の一に居らん。敢て某敎育雜誌記者足下に質す。

○明治二十五年

本文は宗教第拾五號の塡め草にもがなと新年早々紛雑の際起稿せしものなりしが餘白を得ざりければ今玆に掲げて余輩が懷舊の感を讀者諸君に紹介するとゝなりぬ固より客月の稿なれば或は今日に適せざるあらん讀者幸に之を寛恕せよ

白駒隙なく、年盡き歳革まりて、去年の新年今年の舊年也、今年の新年復た明年の新年ならず、明年の元旦再び元旦たり難し、改端は年々歳々期を過たず來れども、明治二十五年は早や再び來る可からず、今や二十六年の新天地を迎へたり。吾人は能く此の新天地を新ならしむるか腐敗せしむるか、未だ知る可からず、唯此の際過來一年間の經歴を記して以て鑑とするも徒勞に非ざる可し。然れども事の詳細に及んでは、片紙の能くする處に非ざれば、聊か大要を記さんのみ。

頭を回らして過來一年間の大勢を觀察するに、大に痛惜に堪へざるものなきにあらざれど、概して滿足の年なりきと云はん。何ぞ曰く、内村氏の不敬事件餘波、與村氏の解雇事件、肥後八代小學生徒退校事件等は、皆勅語に對する不敬事件として計へらるゝ主なるものにして、其の他東に西に南に北に不敬事件、不尊事件として吾人の耳朶に達するもの一二にして足らず。又一方に於ては久米邦武氏の解職事件、曹洞宗兩本山分離、河野義平事件、犬養事件、眞宗大會議の解散の如き、皆直接或は間接に宗教上に關係するものにして、之に對する余輩の感慨は、痛惜、悲歎、哀傷、憂憤、慷慨と云はんより外に言なし。然れども是等の結果として世人の宗教に注目する、昔日の比にあらざるを想へば、又以て大に余輩を慰むるに足る、特に大日本教育會の宗教と教育との關係調査となるが如きは、世人が宗教志想の發達として大に見る可きものあるなり。該調査の結果は、一つ日下部氏の案（宗教第十四號を見よ）を得たるのみにて、未だ全く其の成行を知る可からずと雖ども、吾人が公平心を以て卜する時は、必ず兩者の相一致す可きの理を發見悟得するならんを信ず、其は兎まれ角まれ、吾人は宗教志想發達の根底既

に明治二十五年に於て、作られたるを信じ且つ歡ぶ者也。

現今我が邦に於ける教育家の宗教に對する觀念の、吾人の觀察は前述の如く、既に其の種子を播蒔したりと云ふ可く、翻りて宗教社會の有様を回顧するに、宗教家が批評的の眼光を以て、歴史的に攷究するに至れるは亦宗教界の理想發達として見る可き也。今宗教家をして斯くならしめたるもの、亦一般人宗教志想の發達が、刺撃したるものと云はざる可からず、所以のものは世人相集まり、相寄れば（苟も考へある者）彼は固信也、彼は迷執也、彼は自由也、彼は破壞也と云ひ、一歩を轉じて僧侶は腐敗せり、牧師は國賊也、彼は何、此は如何と、客年中に於ける新聞雜誌を閲し來らば、其の占むる所の紙幅、政治上に關するものを除いて、第一に位するを知らん、以て如何に世人が注意を惹起せしかを知るに難からざらん。是れ等消極的の論鋒、批評的質疑の多くは、否定的に宗教上に向へり、其の否定的の刺撃は、遂に吾人の喜悦を不知不識に招けり。曰く從來オルソドックス派として擯斥せらるゝもの、大に自由を唱ふるに至りしと是れ也、ヨシ又自由を唱へずとするも、既に自由を愛し、友とし、眞理想を戀ふるをば、決して蔽ふ可からざるの事實也。見よ過來一年間に於ける惟一教（ゆにてりあん）の運動は、假に之を外形上觀る可きなしとするも、裏面に於て大に嗜好せらるゝを觀る也、況んや日月隆盛の結果は、外形に溢れて復た隱す可からざるをや。余輩の主義として、惟一教（ゆにてりあん）の外面に隆盛なるよりは、寧ろ内部に於ける發達を期する也、惟一教は必ずしも信徒を募らんとする者に非ず、惟一教は決して偏執する者に非ず、吾人の期し吾人の望む所は、天下の宗教をして皆交友とし、益進みて一致の美果を獲んとするに在り。然り而して客年間の顯象は、大に此の期望を滿足せしむるに足れり、何ぞや。各宗各派は未だ各宗各派たり、固執教派は依然固執教派たり、吾が徒自由思想家を夷狄とし、破壞黨と譏る者亦依然たり、然れども彼れ等は既に其の目的に於て、攷究の方法に於て內實殆んど一致の姿を呈

せり、彼れ等は既に自由の思想を以て歷史的に敎議を解し、經典を分拆し、世人の質疑、攻撃に應ふるに至れり。是れ吾が主義に降伏せるものに非ずして何ぞや、然れども吾人は之を以て吾がものとせざる也、同じく彼れが有。若し彼れ等にして此の進行を止むるなくんば、遂に余輩が宣言の下に立つに至る可きも、余輩は之を以て強ひて吾が宗とせず、自ら進んで彼れ等の軍門に投ずる者也。爾のものは爾に屬す、敢へて余輩は之を奪はんと欲せず、彼れ等の得たる結果は彼れ等に屬す、余輩採りて以て代らんとする者に非ず、故に余輩は今日にして千百の信者を得んよりは、寧ろ反對に立つ所のオルソドックス派、固信迷執の徒の、自由に近づくを喜ぶ者也。

以上一言以て之を蔽へば、明治二十五年は、能く一般人＝敎育家……信仰の基礎を造れり、宗敎家＝神學者……理想の柱石を得たりと云ふに在り、果して今明治二十六年の人＝敎育家＝宗敎家＝神學者……能く之に嗣はりて建築し得るや否や。記して以て後日の參考に供す

○佛徒の公認運動

出でたりな出でたりな佛徒の公認運動、又ゝ出でたりな、佛徒の國敎たり公認敎たらんと請願すると既に久し矣佛徒は果して斯くの如くせざれば其の目的を達し能はざる乎、維持に差支ふるとなす乎、若し然りとせば憖れ助けて之を許すも可也、然れども世の公道決して偏す可からず、弱き者先つ斃れ、人力の及ぶ可からざるを奈何せん、聞く近頃、長防の佛徒にて佛敎を公認敎となさんことを請願せし由、今ま其の意見を聞くに歐米各國の如く信敎自由の十分に行はるゝ所すらも國敎あり公認敎あり而して公認敎は國敎に似て非なるものにして其の國固有の歷史上に最も永久密着の緣故を有し比較上信徒の多數なるものを云ふ佛敎の我國に於けるは實に公認敎の資格あれども未た其名を得ず故に今後政府をして明に佛敎の我邦公敎たるとを明言せしめ其の結果をして僧侶の兵役免除小學德育の掌握寺院保存規則の制定等を實行せんと云ふに在りて同志者

も殊に多しと、好きは則ち好矣、獨り斯くの如くならざる者あるを奈何。

○醜猥の極

醜躰も亦極まれりと云ふ可し。余輩先に朝野新誌上を閲みして天理教なるものを知り、其の醜其の悪誠に慨切痛嘆に堪へざらしめたり。然れども手踏の不躰裁は其の筋の禁止を受けたりと聞き稍〻愁眉を開くを得たりしが、此に又もや一の狂怪を出せりと、其はいと華麗に装飾せる佛堂の溜りへは、純張芝居の俳優若しくは妙齢の婦女を扣へしめ、以て參拜者に應接せしめ、萬病の妙藥てふお水を賣り與へて神への務なりとすと、世には迷信者もあればあるもの、應接を受くるがせめてもの御利益と、お水を戴きに出かくる者引きも斷らざる由。嗚呼何ぞ濁れるの甚しきや。余輩に斯る報を齎す者既に數回。起て〱世の宗教家社會德風の改良をなさんと欲する者、先つ此の種の徒を朴滅せずんば又何の時か道德の改良を期す可きものぞ。

○何ぞ執拗の甚しき

何ぞ執拗の甚だしき、禁酒會が主義に背くが故に之を辭するの志や甚だ好矣。然れども與ふるも愛くるも物品を受授するに非ずして心を受授するなり、然るに客月中日本禁酒會總會に於て賞杯を受けざる可からざるに於ては曩に義捐せる金員を取戻さんとすと、彼等は何の爲めに義捐せしか、必ずしも其の杯を受けたりとて決して主義を枉げたりと思ふ者ぞ、今其の杯の故を以て義捐金の取戻を請願するに至りては、誰か其の執拗に驚かざる者あらん。之を與ふる者素より罪なきに非ず、故に余輩は今之を受けて而して第二策を取るも亦遲きに非ざるを信ず、第二策とは何ぞ曰く該會が特に今回賞杯を改めて日章の旌旗に代へんことを請願せんと奔走中の會員もある由、則ち是れ也、此の方策を取らんと欲すれば、余輩も共に進んで一臂の力を添へんと欲する者也、

彙　報

◉ユニテリアン文學會、同會は自由神學校生徒の企に係るものにて其目的は演説討論文章等によりて學理と實用とを探らんとするものにて毎月第二第四日曜日午后一時より同校内に開くの規定なりと、而して初會は都合により客月二十二日午后一時を以て開會せられ同校講師大西文學士及佐治氏の演説ありたりと云ふ。

◉火曜會　も亦自由神學校生徒の機關にして同會は第二年生が特に毎火曜午前十時より集會して互に智識交換の道を開くに在りと

◉第一回講談會　は十二月十八日より開會し該夜理學士足立震太郎君出席せられ「原素の話」てふ演説並に化學上の實驗を為せり、廿五日夜には自由神學校のダブリユー、アイ、ローレンス君出席せられ演題は「宗教と科學」にして頗る盛會なりし由又去る一月一日夜は星野久成氏出席せられ幻燈を以て「耶穌の生涯に於る奇事」を説明せられたりと云ふ尚ほ講談會は引續き各日曜日夜に中央會堂にて開會せらるゝ由

◉飯田町の火災　去十一月廿九日夜飯田町四丁目四番地（中央會堂裏隣）より出火し一戸燒失して鎭火せり中央會堂は為めに些少の破損を蒙りしも幸に類燒を免れたり、又破損の場所も兼て火災保險を依賴し置し為め該會社より修繕費を償はれたり

◉新教神學校　普及福音教會が小石川區上富坂町へ設立せる同校に於ては今回規則に改正を加へ從前の速成科を廢し本科のみとし大に神學に通じたる卒業生を養成せんことを計りムンチンゲル氏は專ら聖書學を教授し、去秋新たに渡來せられたる哲學博士クリストリーブ氏は其の得意の手腕を振ひ純正哲學を講ぜられ又た優等生賞與の規則を設け毎年優等生に三十圓乃至六十圓を書籍購入費として附與することゝなりたる由

◉壹岐坂會堂　朝の集會は午前十時より日曜學校は午前八時半より夕刻の宗教上の演説會は午後六時よりなりと云ふ

◉クラーク氏　基督教共勵會々長クラーク氏は日本の基督教會の為めに共勵會の設立を望まんとて去月中渡來せられ東京横濱大坂等に於て度々其主意を演せられ

[illegible]

仝上第十三行目に金剛宗とあるは金剛乘の誤

[illegible]

宗教　第拾七號（明治廿六年三月五日）

社説

神に關する信仰

教授　マツコーレイ

大凡宗教の定義を通觀するに、其の基礎とする所何れも神に關する信仰ならさるはなし、惟ふに此の信仰、其の始めに在ては未開野蠻人種の信するが如く、自己の周圍には玄妙不可思議の活ける力あり、此の活力は時あつて人類に災し又之れに福するものとせり、或は近世の哲學者の如く充分なる切瑳琢磨の効を積みたる人々の論ずる處に依れば＝總て世の中の不可思議なるものは之れを追究するに從ひ益〻不可思議となるものなり、然れども其局終に一ツの絶對正確なる事實あるを見認むるに至るべし、此れ他なし、人は宇宙萬有の大原因、無限永久なる生氣の前に終始生存する事是れなり＝と、故に人類宗教心の根元基礎としては天然自然に神に關する信仰を有するものたるや明らかなり、

若し人あり余が信する處の宗教は、抑も如何なる基礎を有せりやと問はゞ、余は之れに答へて曰はん、余の信仰は今日[illegible]世界に於て最も必要最も鮮明なる智識にして最も確實なる論據の上に在りと、且つ今日人間の最も高尙に發達せし德義上の觀念は斯かる信仰を要するものなれは、余は是れより順を追ひ余が前提に揭げたる議論に向て至當なる結論を誘導すべし。

人若し人類の歷史を虛心平氣に通覽し來れば、彼の神に對する觀念は本來神の默示なりとすると否とに論なく、正しく此の觀念は最初に或る不規律なる狀態を有し、人類の物質界に於ける智識の發達と道德上の必要事件とに依り斷へず生長發達せしものたるや明らかなり。而して神學界の歷史は人間智識の生長と信仰の發達とを記錄せしものなれは、隨て科學と宗教との衝突頻繁なる時節に當てや其の證憑は當時の著述中に充滿せり。蓋し此の二者は最初より實際衝突するものに非すして、古來未た曾て此兩者の衝突せる實證を發見せ

さるなり。されども時としては兩者衝突の現象を呈するが如き事ありしは、全く或る宗敎團躰の人々が世界と生氣(神)との上に於ける一般人民の觀念一層進歩したる時に於て、當時最も發達せる哲學科學の眞理を社會に應用するの際に當り自然に發生する處の競爭にして、實際科學と宗敎との衝突に非さるや知るへきなり。通例宗敎的團躰は保守主義に傾向し易きものなれは、其の衝突は寧宗敎と科學との衝突に非すして科學を宗敎に吸引するの際に當て起る處の保守的精神と進歩的精神の衝突に外ならされば、實際斯かる衝突は宗敎を滅亡せしむるものに非ず、反て宗敎的觀念を奮興し、隨て人智の成長を幇助するものなり。遠く太古の人間社會に溯て之れを考ふるに、當世の人類は各〻小團躰の群民を組織し、而して此等の小群民は甲乙丙丁全く孤立の姿にして、多くは山川、湖海、砂漠に依り天然自然に限界せられ、隨て彼等の世界に對する概念も亦甚だ狹少にして、蒼々の天は透明躰にして穹狀の屋蓋なりとし。當時の智識は僅かに彼等の狩獵し彼等の穴居せる小範圍内に於て得たる處の些少なる經驗より推測を下したるものなれば、其の口碑に至ても亦甚だ簡短にして幼稚なるものなるを以て、今日吾人の所謂高妙不可思議なる神の觀念等に至ては實に思ひも寄らさる事なるべし。

今日に於て最も眞に近き處の推測に依れは、太古の人類の考ふる處は、上世此の空中に在て恰も其行爲彼れ等人間の如きものありて、其性質は又幽妙不可見なるもの夥多ありしと做したり、斯かる太古人類の世界と世界の主宰者に關する概念は今日の小兒の考へよりも遙に劣等なりしもの丶如し、而して彼れ等は日々只其の卑賤なる慾望を滿足せしめんが爲めに生活せり、故に彼れ等が左右し能はさる一切の出來事に向ては、往々無適着にして之れか解釋を試むる事なく、時に或は之れが解釋を爲すあるも、通例此れ等の出來事は彼れ等の如き或る不可見の者ありて之れを左右するに當り一大神通力を顯はすものなりと爲せり。

此の如く太古の人類は世の不可思議なる事物を解釋す

るに當り、全く自己を以て標準とし其の存在者も亦必す自己の如く思想と感情とを有するものなりとし、且つ人類の數百群居するを以て毎日種々雜多の出來事に遭遇せり。故に此れ等不可見の存在者も亦彼れ等と等しく多數存在し、隨て種々雜多の事物を此の世に降すものとせり。而して此れ等不可見の精靈は人類の如く善良なる者あり、或は醜惡なるものあり、時として彼れ等を災し又彼れ等を福するものなるを以て、彼れ等も亦時あつて此れ等不可見の精靈を愛し或は惡めり、又或る時は之れに感謝し又其禍福を祈願し、又或る時は之れを欺き之れを非難せり。されとも彼れ等は常に此の不可見の精靈が人類の知らさる間と雖も亦人類を洞觀しつゝあるものとせり。故に此の不可見の精靈は人間の知らさる塲合に於ても偶然其勢力を逞ふし、之れが爲め案外なる災害を崇るが如き事あるを以て、人類は自然に此の不可見の精靈の前に謙遜し、專意其の旨を奉せん事を企つるに至り、終に太古の禮拜なるものゝ起原を創製せり。此の如く太古の人類は兒戲に等しき考案と方法とを有せしものなれは、今日吾人をして人類幼稚の時代に在て如何なる信仰を有せしやを知らしむるに容易なるへし。

人智の變遷進步するに隨ひ此の世界或は世界の支配者等に關する概念に達するや、實に莫大なる歲月を經過し、無量なる經驗を積みしものにして、最初山河の爲めに遮斷せられたりし小群の人種は山川、湖海、砂漠を跋渉して集合し、一大部落の民族を形成せしものなれば、隨て其の口碑に於ても亦必ず各〻過去に在て種々なる經驗に依り發生せし處の口碑ありしは論を俟たさるなり。されども斯く大部落の民族を組織せし上は、自然甲乙丙丁相混交し終に一つの融化せる口碑と化せしや推知するを得べし。斯くして第一に社會は粗ほ組織せられ、次に多少社會の秩序なるもの發生せり。されは人間智識の發達に伴ふて玆に始めて世界に關する思想、又進んで世界の原因に關する思想を發生することと明かなり、換言せば斯くの如く事物の變遷は小群民を集合して社會を爲さしめ、一變して大部落の

民族を爲し、再變して未開の國民を形成せり、隨て人類をして精神界にも亦人間社會の如く秩序、階級、法則等の必要なる事を推測するの必要に迫らしめたり。之れを例ふれは、古代歐洲人の口碑の如く、太古渾沌の時代に於て一大元首なる神あり、彼れは凡ての精靈界の王者なりし、彼れは又多くの諸神を支配し、此の諸神は世の聖賢、詩人等の師となり玄妙の天理を敎訓し以て吾人に傳ふるものとし、且つ此れ等諸神は數ふへからさる年代の前巳に此の世界に在りしものとして、其の生産の時代を論ずる事甚だ稀れなりき。

各國人民の有する處の口碑は大約此の如きものにして、何れも廣漠邈遠なりと雖も、正しく人類思想の變遷を明示せり。而して斯かる茫漠たる天地の思想より進んで或程度に成長せる人種の思想に至り、終に此の大世界を守護し、支配する處の一神ある事を明示するに至れり。彼のヘブライ人の如きは嘗て斯かる時代を經過せり、彼れ等の祖先は其の昔カナンの地のみジエホヴアなる神の御國にして、他は盡く他の諸神の國たりと想像せしかども、一朝人智の一新するに當てや、彼れ等は又此の大世界は盡くジエホヴアなる彼れ等の神の有にして、其の中に在る萬物も亦然りと宣言せり。此の信仰は勿論歷史時代に於ける或る特殊なる人民の宗敎的經驗の結果なりと雖も、人類一般の歷史を通觀する時は必ず人類は何れも一神ありて此の世界を創造し、又は諸神ありて之を創造するものと爲すも、亦其の上に一の不可見の大王者即ち諸神の神ありて之れを支配せるものなりとの信仰の下にあらざるはなし。故に實際的唯一神敎は其の性質の高下を問はず、古來宗敎の全躰を支配せしものたるや疑ふへくもあらぬ事實なり。故に余が宗敎の基礎として神に關する信仰は必らず唯一神敎を奉じ、唯一神の外決して諸神ある可き事を信ぜさるなり。

然りと雖も余が唯一神に於ける信仰とは果して如何なるものなりやとの問題に對ふるに當て、余は之を過去の歷史に徵せされは滿足なる答辯を與ふる事能はさるべし、何となれは歷史的唯一神敎は人類の宇宙又は世

界に對する理想及び企望の變遷に伴ひ變遷するものなれはなり。見よ神學は太古歴史以前の人民が此の世界を觀察せしよりも一層人智の發達せし時に當り、大に其の勢力を增加するものなるを。而して天地の觀察益々廣くして終に唯一なる神は天上に在て此の物質界を照臨するものなりと信じ、恰も人間社會は何れも各自の王者に依て管轄せらるゝものゝ如く、萬有は盡く神の管下に在るものなりと爲せり、其の他諸國の帝王は隣國に敵手を有するか如く神も亦其の敵を有し、或は諸國の帝王が敕詔を發する如く神も亦訓誡を發し、或は神の務めとしては神の王國の繁榮を畫策し、或は神は軍人にして帝王なり、或は神は其の撰民の爲めに戰爭する事恰も諸國の王者が其の國民の名譽、安寧、幸福の爲めに戰爭するが如く、又神は諸國の帝王と同一の感情を以て嫉妬し、宥恕し、復讎し、又仁慈を其撰民に與へたり、而して天は即ち神の王國にして神は屢〻世に降る事恰も各國の帝王が其の王宮を出でゝ管下を巡狩するが如し、神は恰もエジプト人の王者ファローホの如く數千萬歲の昔より已に此の世界を管理せり。

是より數世紀を經るに從ひ人智は日に益〻廣大となり、隨て其の理想も亦彌々高尚となり、神學も亦漸次に膨大せる思想と願望との反應を顯はし、社會は日に太平を加へ、人間生活の梔(くびき)も稍や輕く、同情同感の氣運は終に人類を誘導して神聖地に到らしむるに至れり。人類の進歩と共に漸々發達せる神學說は言語を文字に畫くの術に依り或る點迄は精密に古人の說を保存し、且つ活版術の發明に依り、諸國の口碑に向て新勢力を追加し、之れに依りて古來人智と共に成長せし處の神に關する思想の記錄は容易に典籍となりて社會に流布し、又之れと同時に當世の新思想も容易に其子孫に相續せしむるの便を得たり。斯くの如く神學說の一般人民の間に流布するや、新思想と舊思想との間に敎義上の權威を爭ふ事屢〻なるを以て、往々人をして宗敎は人智の發達と正比例して爭論の種子を蒔くものとし、或は全く人智の發達を妨害するものゝ如く思惟せしむるに至れり。蓋しヘブライ人の古典を閲するも、

ジェホヴァなる神は一見して正反對なる事物の代表者の如く認めらるゝなり。譬へはジェホヴァは軍事の神にして又泰平の神なり。彼は嫉妬の神にして又自ら長く辛酸に泣けり。彼れは或る時己れの寵愛せる國民の勇者と共に其の敵手を苦しめ、苛酷にも頑世なき敵人の幼兒の頭腦を打破せん事を謀り、又他の一方に在て彼は愛の極にして其の父母が愛兒を忘るゝ時だにも猶ほ彼れは之れを忘るゝ事なく、自ら呼んで國民の父なりと云へり、惟ふにヘブライ人の古典は其の國民の信仰、困究、企望、及び高尚なる理想が神學上に反射せし徵證として見るに足るものにして、其の典籍は今日多數の人類の中に保存せられ之れに依て數百千万の生靈は確かに神に關する信仰を形成するものなり（未完）

論　林

米國チカゴ市に於ける第一回萬國宗教大會議

佛國伯爵ゴブレツト、ダルヴイエラ

古來教法家の教權或は宗制等を處理せんが爲めに宗教大會議を起こせし事其例少なからず、佛教徒と基督教徒との大會議の如き、教法師會議の如き、其他種々なる名目を以て歳々各地に宗教會議を開會し、之れに依り、各自宗教上に於ける信仰を補翼し、布教の方法を研究するものにして、就中新教諸國に行はるゝもの其數最も多きを占む。

加之ならず、反對の教法學者等が其の神學説の雌雄を決せんが爲めに古來各處に討論會を開きし事其例少なからずして、通例斯の如き會議は時の執政者の招集に係るものにして、古代に在ては彼の有名なるカーメル山上に於けるエリヤとバアールの争論の如き互に電火を舌頭に點じて論難せり、或は「バラモン」教徒と佛教徒の争論の如きは常に劇烈なりしこと今日猶印度の古典中に散見せり、或は異邦教と基督教との如き、猶太の教法師（ラバイ）と天主教の僧侶との如き宗教革命後に於け

る天主敎徒と新敎基督敎徒との間に於ける爭論の如き、實に其例少なからず、畢竟是れ等は爭論の結果に依り、時の執政者の裁斷を受け優勝者は自然其國内に在て威嚴を恣にし終に反抗者を壓倒するに至れり。然るに吾人の生活せる現世紀に至りては、過去の宗敎界の風潮と大に其趣を異にし、各人各自其の信認する處に據り、其の信認する處の主動者を撰び一般の道德幷に慈善の方向に對つて進路を取り、隨て組織せられたる團躰には泰平會（ピース）あり、節制會（テンペレンス）あり、社會改良會（ソーシアル、レフォーム、ソサイテー）あり、公共德育會（パブリツク、モラル、ソサイチー）ありて人類一般の上に於ける同情同感の興奮を促がし、間接には神學思想の上に少なからさる波動を及ぼせり、而して天は義氣あるアメリカ人の爲めに其大運動の發端を今日に擧行せしめ、天が下た總ての信仰、凡ての宗派、統ての精靈を盡く招戴し以て宗敎進步の便益を與へたり、是れ決して他國他宗の信徒に戰鬪を挑み以て雌雄を决せんとするに非す、反て同情同感を表旌し、凡ての宗敎に於ける普及一貫の宗敎的眞理を探究するに在るのみ。

勿論斯かる大計畵の趣意に就ては餘り拘泥するの必要を見さるなり、而して甲或は乙なる一種特別の敎義或は敎政或は儀式等を以て唯我獨尊の宗敎なりと信認せる、所謂宗派的觀念に反對して左の如く謂へり、（一）夫れ宗敎的意見なるものは各種各別なる神學說と雖も其實際の應用に於ては必ず先つ普及一貫の狀態を抱有するものなること、（二）諸種の敎會に附屬せる人々は之れに依て各自處見の差異ある處を知り、又相互信仰の類似せる處を學び、而して天下の諸宗敎中に一貫普及の眞理ある事を明知し得るものなり云々。

此の大事業の發端を米國チカゴ市に開會せんとするコロンブス世界大博覽會、開期中に擧行せん事を確定せられたるは偏へに米國諸敎會員諸氏の効にして、該會の委員は直ちに米國に於ける侵禮敎會、羅馬敎會、組合敎會、猶太敎會、監督敎會、路得敎會、美以美敎會、クエッカー敎會、スヱイデンボルジアン敎會、ユニテリアン敎會幷に宇宙神敎會等の諸役員を招集し以て之れか準備に向て必要なる會議を開き、長老敎會の敎師

ジョン、ヘンリー、バロース氏を擧げて之れが委員長となし、人類發達の事實として道德幷に精神上の和合せるが如く地球上人類の歷史的諸大宗の和合一致を目的とし、玆に始めて萬國宗敎大會議の計畫を始めたり、而して此れ等の委員は更らに各派の相談委員を新世界幷に舊世界の諸宗諸派より撰定し、益々其規模を宏大にせり、之れと同時に其計畫せる大事業の性質及ひ目的を以て普く天下の宗敎家に告白せり、而して其告白の大要は即ち左の如し、＝今や萬國人民は相互友誼に富み既往に比すれは遙かに近親なりしは事實にして、已に萬國諸宗敎の同胞なる事、幷に宗敎的新現象と發達との時機に到達せり、人類は大洋と言語の海の相違に依り種々に區別せられ、隨て宗敎上の形態に於ても甲乙相異なるものにして、萬一宗敎は其の望みに於て一ならずと爲すも亦必らず實際必要の上に於て一ならさるへからさるなり（中略）此の運動は神と人とに對する義務に就き人心の一致を產生せんとする運動にして隨て各國、諸宗敎家の助力協賛を仰く處のものなれは、各宗の代表者等をして相ひ互ひに腦中貯藏の意見を開陳し、此の世界をして更らに善美ならしめんが爲めに其智識を交換せんとするものにしあれば、其會議の問題に在ても勞働問題の如き、敎育問題の如き、現世紀に於て復雜を極めたる社交問題等の如き者なれは此の會議は一千八百九十三年以後に於て如何なる光輝を社會に與ふるものなるや云々＝とはジョン、ヘンリー、バロース氏か此の運動の準備を爲さんとするに當て告白せられたるものなり、

以來此の計畫に同意を表せられたる人士其數多けれは、其れ等の書翰中に云へる處の要點を抜萃し、以て世人に知らしむるは又無用の業に非さるべし、猶太敎徒幷にユニテリアン敎徒は勿論、正統派キリスト新敎し、有名なる天主敎々法師長フイーハン氏の如きは一點の疑惑もなく、直ちに新敎長老敎會の敎師なる、議長バローース氏の指命せる委員たる事を承諾し、或は「アングリカン」派天主敎會の監督は其の副議長たる事

を承諾せり、又同意者の姓名錄を閱するに、第一米國天主敎會敎法師長ギッボンス氏の如き、或は印度カルコッタ市の回々敎徒アミーヤ、アリ氏の如きは人の注目を牽くものなり、

日本の佛敎家に在ては之れに協力せん事を約せられ、且つ此の大會議に臨席せらるゝ向も少なからず、而して斯かる異色の宗敎を和合せしめんとて計畫せる、古今未曾有の大試驗を成就する事に同意せられたり、

コロンバス世界大博覽會の、萬國宗敎大會議補助委員長は、此の大會議の準備に就て已でに其の第一報告を爲せり、曰く、=今般の宗敎大會議は最も有要なるものなれば、只だにキリスト諸敎會のみならず、普く天下の宗敎界にも此の和合一致の精神を傳搬せん事を冀望して止まさるなり、吾人若し一千八百八十三年に於て單に天主敎徒、新敎徒、猶太敎徒、希臘天主敎徒の代表者のみにして、佛敎徒、バラモン敎徒、儒敎徒、火敎徒、回々敎徒の代表者等と隔意なく膝を接し、互に精神上道德上の問題にして、人間生活に欠く可からさる普及一貫の眞理を討究する事なかりせは、此の「コロンバス」大博覽會の大なる名譽と必要とを缺乏するに至るや必然なるへし、云々=而して補助委員長は、又米國、英國、獨乙、ベルシャ、佛蘭西、伊太利、瑞西、印度及び日本に於て何れも有名なる人々より申し越せし同感贊成の文章を出版せり、就中グラッドストーン氏故ホイチアー氏故テニソン氏等は世人の已に知る處にして、敎法師長ギッボンス氏は左の如く言へり=吾輩今此の計畫を見るに卿等は大善事業を發達せん事を期し大に吾人を奬勵せり（中略）余は自他の國々の異同を問はす、人間の思想及び進步の表面に於て、斯かる有爲の團躰に同情を表し、加盟し、此の計畫の何たるを學はん事を欣慕するものなり、而して斯かる大會は好意と和合の精神に依り管理せらるゝ時は必然天神の祝福を辱ふし、吾人の望外なる幸福を此の社會に及ぼすや鏡を掛けて見るよりも明かなり云々=アミール、アリ氏は現世紀に於ける大事業の幾分を負擔せんが爲めに一千八百九十三年には必ずチカゴ市に到着せ

ん事を約せられたる序に左の如く云へり、＝凡ての緊要なる道德、信仰箇條の代表者を世界の大舞臺に招集する處の大事業の共力者として、卿は余の最も親密なる眞友なり、余は卿の告白書（プログラム）は宗教發達の歷史上に一大特筆すべき時機を生産せりと信ず云々＝コンスタンチノープルのアングロアメリカン大學校々長は又左の如く云へり、＝余は卿が告白書の精神に對して無論同意者なり、且つ余は信ず、此の大會に由て古今未曾有の事實、即ち凡ての宗教には必らず一致せる處あるものなる事を世界に發表するに足らん、而して此の事實は從來世人の豫想せしに勝りて遙かに廣く、遙かに深く、各宗の相一致せる處あるを證明すべし、尙ほ且つ吾人は神の前に在て吾人行爲に向て責任ある事、正義を爲すへき事、慈悲なる事、及ひ神と共に謙遜に世を渡る事等の如きは、余をして眞に宗教上の必須缺くへからさる根元、基礎なりとの信を厚からしむ云々＝チー、エフ、ソーワード氏書して曰く、＝斯かる會議は古より今日に至る迄て決して出來得へきものに非さりしが、今日は人種長途の進化に於ける一紀元となれり云々＝、美以美敎會の監督ヴヰンセント氏は美以美敎會派の會議席に於ける二時間餘の演說中に左の言を爲せり、＝斯の事業は世界の未た曾て見さりし處の一大現象なるべし云々＝英國エヂンブロー大學の敎授サイモン氏書して曰く＝人類多數の識者が曾て冀望し、且つ之れに向て運動しつゝありし、四海兄弟主義を一層發達せしむる事たるは疑ふへからず、余は昨年米國に在て山水明媚の間を逍遙し、彼の不可思議なる五大湖の濱に在て我が英語より分派せる人種は、其の古し十三州の聯合せし時代を轉た追想せり、而して今日の卿が夢想は曾て余の爲せし夢想を抱括して猶ほ餘あり、望むらくは單だに夢想に止まるのみならず、眞正なる事實なれ、而して速かに成就なれ云々＝「ユニテリアン」敎會の當時有力家の聞へあるシー、ガンチツト氏云へるあり、＝卿が計畫は世界の未た曾て夢にだも見さりし處の宗敎的世界大集會を招喚せらるゝや必然なり、誰れか宗敎的自由、交誼、品格を望むものにして、

此の事業の完美に成功する事を望まさるものあらん、誰れか此の事業を發達せしめんが爲め欣然之れを翼賛せすして可ならんや云々＝英國オクスフオールドのマンチエスター新大學の博士ゼイ、イー、カーペンター氏書を送て曰く＝當世紀に在て有名なる出來事、就中英語國に於て計畫せられたる事業の中、斯くの如く未た曾て余をして宗教上に高尚なる利益を與へし事あるを知らしめさりし、(中畧)異種の國民をして相互其の得る處を交換し、之れに依て猶ほ新鮮なる人類一般の義務及ひ神に對する一般の愛を增進せしむるや知るへきなり、余は眞心を以て卿が諸國諸邦の教會に同情同感の精神を喚發せんとする計畫を欣慕す云々＝其他ミチソータ、ミシガン、ワシントン、レーキフオレスト等散在せる宇宙神教者の重もなる人々よりも同意の返翰に接せり、

ハーヴアト大學の教授ピーボデー氏は左の如く曰へり、＝上帝を以て天父とし四海を以て同胞とせる、キリスト教信仰者をして斯くの如く宗教の上に大なる名譽を歸せしもの未た曾て之れあらさるべし云々＝レーキフオレスト大學の校長ロバーツ氏は將來宗教哲學を攻究する者に向て此の大會議は實に有益なる好材料を供給せりと論じ、且つワシントン大學の教授ゼイ、イー、ランキン氏は熱心に叫で曰く＝昔者「バベル」の爲めに世界は異種の言語に區別せられたりしが、今や天國の五音を談するの時運に回復せり云々、＝(注曰「バベル」は大塔の名にして猶太の口碑に依れは人は神に逆ひ惡事を增長しノアの大洪水の後之れを避けんか爲めに大高塔「バベル」を建築す中途にして神の怒りは終に人々をして言語を異ならしめ甲者斧を要むれは乙者之れに石を與へ乙者之れに瓦を需むれは丙者之れを解せずして草を與ふ斯くの如くにして人々相互の一致を失ひ其言語相同しきものは各々區別せられて各國民を創成せり云々舊約書創世紀第十一章を見よ)其他諸方よりの來信一々枚擧するに遑あらずと雖も、要するに何れも前數者と大同小異なれは、此の大會議の緊要なる事と高尚なる事に同意なるものにして、何れも此の大計畫に依り各異なる諸宗派をして舊來の惡感情を去て、將來人生の目的とする正義道德の勢力を強大ならしめ、隨て各宗の交誼をして益々厚からしめん事を企望するに外ならさるなり、

勿論此れ等の回答書中には又米國人の評論あるを免か

れさるへしと雖も、一般人心の傾向は何れも之れに協賛する處の前徴甚だ少なからざるなり、併し又他の一方より考ふれは、猶ほ將來に於て種々なる困難あるを豫知すへきは勿論の事にして、彼の批評の時辰機は未だ警鐘を打たさるもの丶如し、而して最も遠隔し又反對の形態を有せる宗教界の寛大なる意見を抱持せる諸大家の結合を爲さしめ、且つ此れ等の諸大家をして虚心平氣に此の精細なる宗教的信仰を評議せしめ、之れに依て各宗派以外に於ける普通一般の宗教的行爲を發見せしむるは、這般の大計畫に向て一大難事たるや知るへきなり、然りと雖も斯の如き協合的思想の發生せるは事實にして、兎にかく諸教會諸宗派に在て同意を公然表白せられたる夥多の人々に依て、宗教進化の徑路に新時期を造成するの時節到來せる事を見認めらるべし、

以上に列擧せるものは即ち此の計畫の進涉せる事實にして、今若しチカゴ市に於て開會せんとする宗教大會議は、彼の宗派的感情の外に獨立し得るものならば、其の問題は即ち彼れ等の宗派內の會議の問題よりも遙かに高尙にして遙かに緊要なるや論を俟たざるべし、而して玆に始めて各宗特別なる形態の宗教よりも遙かに秀逸なる宗教を發見するに至るものにして、此の普及なる宗教は各宗各教會一貫の信仰即ち神、道德、賞罰義務の命令的性質等に於ける信仰を盡く網羅し、神と人とに於ける愛、道德の實踐、人々自ら其の天性を完全ならしむるが爲めに協力し、且つ人間社會の關係をして益々整理せしむるに至るや明らかなり、之れに依て凡べての世に知られたる處の諸宗教は此の大なる團躰に向て親和し、神人の交り圓滿なるに至り玆に始めて宗派的弁に地方的感情、虛禮を去り、準備的假りの教會より普及なる眞正の教會に進み、近來正統派と稱する處の名目を以て將來人類の進步を多く補益する處のもの丶上に名附くるに至るべし、

勿論此の大會議の斡旋者等は何れも好意を以て之れを計畫せしものにして、其の告白書中に云へるあり、彼れ等の目的は＝世界各宗の各自に必要なる特色を冷評

し、彼の宗教無頓着主義の發育を養成する者に非ず、反て各宗異類の信者中、其最も各自の特色に熱心なる有名の士にして、且つ高尙なる宗敎的眞理を發見し、之れを世間に明示せんとするの士を招待し、親密に隔意なく相協議し、而して當世紀に在て宗敎は如何なる地位を保つを得る者なるやを攻究せんとす云々‖、然りと雖も玆に高尙なる宗敎的眞理と云へり惟ふに或る宗敎的眞理は高尙ならずとし、然らされは必要上或る宗派的眞理は第二位に居る處の眞理なる事を豫め承認するが如し、加之ならす「キリスト敎、猶太敎、回々敎、火敎、佛敎、儒敎等各自異なる信仰を有せりとする時は、單に各自特色を有するのみならず往々非常なる相違あるを發見し之れが爲め舊來自己の信仰を脫却するや否やは、最も注目の價あるものなり、余は寧ろ吾人の時代吾人及ひ吾人の社交上の圍範内に於て一大利益を保證する此の普及一般なる宗敎は、其の普及性なるが故に人類の兄弟たる事の必要に向て多數の人々が同意せられ、且つ少くも科學者の口實とする處に反對する事を告示するに容易なるべしと云はんとす、吾人は歐洲に於て宗敎と科學との絕緣せし以來、宗敎上の危機を制理せんと始めつゝあり、而して科學は嘗て敎會が之を束縛せんとせし覊絆より脫却するや、直ちに專斷なる敎權に反對し、益す〳〵其の勢力を增進し、而して終に執拗狹隘なる惑溺說の下に、成長せし不合理なる宗敎說を痛く怨惡し、此の如き宗敎的感情を全く撲滅せん事を務めたり、然りと雖宗敎的觀念は人間の理想に向て必要なる普及一般の冀望なれは、隨て他の技術、演劇、文學、哲學等の如く不可思議にも人力の得て反抗すへからさる反動を社會に發生するものにして、恰も時辰機の卷鐵を堅く其極度に卷き詰め置くが如く瞬時にして其の反撥力を逞ふし、全く正反の運動を起こすものたるや明かなり、此の反動は如何なるものなるや、惟ふに古代の複雜なる禮拜式に代ふるに淸潔單純なるものとなり、且つ此の反動は只だに理想的、道德的、宗敎的復活の方便に非ずして、人生の進步、社會の安寧に向て働く處の新勢力となれり、吾人

は各宗の爲め、特に此の目的に依り斡旋せらるゝ處の諸君に向て明らかに此の運動に加擔する事を告白すへし、此れに依て余は信ず此の革新運動の先導者、開路者たる者は必らず凡へて吾人の奬勵と吾人の同情とに向て充分なる權利を有するものなれは、何時何處にても彼れ等に向つて協贊の手を擧けらるゝを見れは、彼の實行的米人の精神を以て飽くまで果斷の勇を奮ひ此の大業を決行すべきなり、

今日は吾人をして己れを欺き人を欺く事なからしめよ、吾人の文明を幇助維持するか、或は之れをして敗滅に歸せしむるか、語を代へて之を云へは社會問題、宗教問題此の二大問題の吾人に直接なる關係あるは、彼の近眼なる經濟學者或は我が佛國の社會黨員などの妄想せる事物よりも、遙かに重大なるものなれはなり、此の兩個の謎語(なぞ)は今日長く握り潰ふし得るものに非されば、吾人は合理的に之れを解釋するか、否らされは「スフ井ンクス」は吾人を啖ひ去らん！（古昔ギリシャのチベスに於て人民諸神の怒に觸れ諸神スフ井ンクスなる魔物を遣はし之を苦しむ此のスフ井ンクスは顔より胸部は美なる婦人の形にして胴と四足の爪は獅子の如く市中を徘徊し人に逢へは之れに至難なる謎語を問ふ人若し彼れが謎を合理的に解釋し能はされは彼直ちに其人を啖ふ云々故に斯く云ふ）

社會改良策

矢部新作

余輩の觀察する所に據れば我邦は今日政治商業上其他萬般の上に於て著しく道義の缺乏せるを認む可し、我國維新以來の形勢は未だ立國の本躰を具せる者に非ずして何事も假設の姿也。人々棲馴れし己の家に此生を送るに似ず恰も急はしき旅行中に在る如く其行先きも定かならざるなり。故に人心何となく安からず危險にして、物珍らしからざるに非ざれども、是ぞといふて樂む可きものもなし。彼等は二千五百餘年來持續し來れる日本帝國の住民の如くならず、恰も南洋諸島若しくは米國新開地の人民の如く、未だ靜穩の地位を占むるに至らず、東顧西盼風潮に從つて其歩を轉ぜんとを期す。此間禮式の見る可きものなく秩序の稱す可きなし、況んや又社會の制裁なるものあらんや。各其情慾の欲する所に從つて之を肆にし、何事を爲すにも法律にだに觸れずんば良民たるを妨げずとの意氣を以て此

日を送る。余輩は日本文化の中心と稱する東京に於て幾多の紳士學者論客が暗夜に哀を他人の門に乞ふて白日肥馬に跨る者あるを知る、加之口に自由權利を唱へ同胞の爲に利益を圖ると公言するの士が巧に愚民を籠絡して以て己が慾望を滿す者少からざるを知る、否彼等知名の士にして詐僞騙術暴飮亂行一種の賭博等をもなして其日を送る者又數あるを聽く。余輩は玆に至る迄屢〻筆を投じて大息せり。「社會は既に澆季の極に達して又之を如何ともす可きの道なかる可きか」と、余輩の斯く嘆ぜしも故なきに非ず、余輩は數〻之を勉めたり。身を以て一部の狂瀾を制せんとを圖れり。然れども其結果は啻に心の十分一を實にすると能はざるのみならず、却て之を激して怒號せしむるに至れり、余輩は重盛に非ず、又ハムレツトに非ざるも時に身の不遇を嘆じて進退是れ谷まるの思なき能はず、余輩屈原の偏僻を倣ばざるも倘足を濁流に洗うて永く清泉に飮まんとを欲せざるを得ず、併し退いて再び一身の周圍を顧み社會の形勢を案ずるに此一般の腐敗は何今日に於て止まらざる者あり、其到る所は如何なる可きか、結果は必ず二なる可し、愈家庭の紊亂を加へて人生の幸福を抹却し、父子相賊し夫婦相敵し此世を變じて惡鬼の街となし。又他の一方に於ては今日已に少きに非ざる人口は年々歲々愚民と共に增加し來り貧富の懸隔著しく此間所謂有識の貧民愈輩出團結して乾燥せる火藥躰をなし而して一火を此中に投するに至らば國家は殆と危急存亡の淵に臨み若し彼の窮に其爪を鋭にし其牙を磨き時こそ來れと待ち受けたる英獅露鷲の來襲するに至らば我國民は何を以て希臘印度の覆轍を免れんとするか、其國を亡ぼす者は他國に非すして實に其國民なり。「敷島の大和心を人問は丶旭に香ふ山櫻哉」の佳句をして空しく他國人の口に誦せしむるに至ると勿れ。

我邦今日の文明は則基礎なくして建築をなせしものなり、否沙濱に向つて煉化石造の大屋を立てしものなり。一時は廣大華麗なる建築と見へしなり。然れども其結果は廿四年の濃尾震災の如く將に國家の一震動に向て崩壞し去らんとす、濃尾の震災に於て或人は煉化造

の我國に不適當なるかを疑へり、然れとも煉化造は其質に於て不適當に非ず唯彼の煉化造を摸倣せし我文明流の職工の不適當なるに由りしなり、若し我國の技手と職工をして其地を撰み其任を盡さしめば煉瓦造は堅固なる建築にして文明人の居宅に適す可きものなれども、我明治の人々既に其文明を基礎と方法とを問はずして打立てしが如く又其家を建つるに於ても僅少の利益の爲に煉瓦石に水を含ませモルターを附着せしむ可きの順序をなさず、斯くて他人の爲には生命財産の如何を問はず一朝震災に遇うて土崩瓦解の醜狀を見はせし也。去歲に於ける實業界の不始末の如きも此理に外ならずして人々皆人を欺き己れを欺くの愚を爲せしもの而して斯の如きの結果は遠からずして我邦全躰の上に墮落せんとす、堅固なる基礎なくして事物の永久に樹立する理由なければなり。

一友人のニユーヨークに遊びしもの余輩に告げて曰く余嘗てニユーヨークに在り彼の有名なる自由の記念標に對す、標は港を去ると遠からさるロングアイランドと名つくる一小島の上に屹立するものにして、歐洲自由の魁なる他國人の寄送する所に係る、石礎鐵柱頗る廣大なるものにして其上に自由の女神を安置す、此女神の像たるや實に人工の妙を極めたるものにして想像の美を其儘にし其が手に保てる寶燈は絕えず光を放つて米國人民の爲に幸恵を散布するに似たり、余仰て之を視つゝ側の椅子に腰打ち掛けし折、一米人あり白髮銀鬚宛然たる隱君子、余に禮して問ふて曰く「君は此自由の記念標に對して如何なる感慨を起せるや」余曰く「實に能く出來たり、思ふに米國人の至寶なる可し」老人曰く「何故に君は之を能く出來たり、米人の至寶なりと云ふか」余少しく躊躇しながら答へて曰く「像は希臘獨有の長技を奪ふて眞に慈愛の神念を籠め、彼の頭彼の手彼の躰彼の足よろしきを得て一も批難を加ふ可きの點なし世界の美術として其比を見ると少かるべし、且つ又米國は之れ自由の光榮を以て其人民を保護するの處、此國にして此標あり是余の稱揚する所以なり」此時老人少しく聲を大にして曰く「君の言未だ

我が意を得ず、此標を建つるに當つて技師の尤も苦心せし所は彼の象に非ずして此基礎に在り、土を堀り石を埋むると四方數百尺堅きか上に堅きを加へ、其上又此石を疊みしものなるが、アラス！、彼の像を見るとを知つて此基礎を見るもの少なし、彼の像の能く幾多の風雨を凌ぎ巍然卓立衆人の眼に觸るゝ所以のものは全く此基礎あるが爲に非ずや、此基礎――少しく聲を震はして曰く――嗚呼事物の基礎は常に人の眼に觸れさるの邊に在つて重きを爲すなり、老人侚息を續て曰く「恰も然り、君は今日米國事物の隆盛なるを見るなる可し、政治民論の盛なる、其運動の活潑なる、商業の繁榮なる、其他敎育、社交に於て君等の眼を喜ばしむるものあらん、然れとも君請ふ單に之を稱賛するを止めよ、又君が歸東の後徒に我事物に摸倣するを止めよ、米國が今日の文明を致せしものは今日に非ず、其原因實に獨立戰爭に在る也。見よ僅に三百萬の窮乏疲弊せる人民が武器なく彈藥なく、當時歐洲の牛耳を握り、其版圖の廣くして勢力の大なる世界到る所に達して、所謂英國々旗の南風に飜る邊、日光未嘗て其顏を沒せずてふ強大の敵に當り前後九年間寒に叫び飢に泣き侚毫も屈撓せず、遂に能く狂瀾を制し流石強暴なる英人をして其國を改め斷然合衆國の獨立を承認するに至らしめしの精神を見よ、此精神ありて始めて今日の結果を來せしものに非ずや。此時余將に云ふ所あらんとせしが老人侚之を遮て曰く「我は君が此事を知るのみを以て足れりとせず、何に由て彼の獨立の精神が養成し來りしかを知らざる可からず、偶然にして三百萬の人民が大英國三千萬其他版圖を合すれば幾億無數の人民に對して勝を制し得べきに非ず、彼のワシントンフランクリンをしてアダムスたらしめしものは遙に前代に遡つてウイリアム、ペン、ジョン、スミス等の精神に存するなり、ペン等が宗敎の自由を重んじて政府の壓制を惡み、己の確信する所に對して斷然住み馴れて最ともなつかしき故郷を辭し、身命を孤舟に托して米國に渡り雪を發き荊を斬り、食盡きて求むるに處なく疫病起りて兄弟を運び去るの中に終始其心を變せず、遂に猛

悪近つく可からざるのインデイアンを感化し去つて無二の朋友となし、ペンシルバニアを創立して其基礎を横へしに由る也。ジヨン、スミスが百折不撓好んで危難に當るの資を以て能く路なきの内地を跋渉し、土人の酋長に擒せられて部下一槌の下に其頭を砕かれんとするに際し幸にも彼の娘ポカフホンタスの救ふ所となりて其生を全うし移住殖民の爲に一方ならざる裨益を與へしが如き又是れ米國の基礎中に埋め込みたる強固なる分子に非ずや。君若し經世經國に志あらば須らく此理を知らざる可からずと、突如として去る。

伏して東京城を繞れる三重の巨濠を看よ、仰いで日光丘上無數の宮殿を視よ、巖を欺く巨大の石は積んで幾丈の高きに達し、文明社會の器具を用ひるとも尚幾年を費すかを知らざるの城壁、そが堤上には老松頭を伏して長へに宮城を護し、濠心常に魚類を育して波上更に水禽を養ふ。彼の日光宗廟は世界第一の美看と稱す、眞に我邦美術の粋を集めたるもの、一點一畫悉く皆彫師の技倆を見はさゞるはなし。我國が今日各國に向て美術國の名を博し古代の希臘をして顔色なからしめ奇慧なる佛人をして尚腰を屈して摸倣せざるを得ざらしめたる者多くは皆此裡に在り。徳川三百年の治平を致せしもの豈其れ偶然ならんや。織田信長が稀世の卓見を以て、豊臣秀吉が空前の智と勇とを以て一は其終を善くする能はず、他は身死して其肉未だ冷ならざるに、已業に天下は徳川家康の手に歸せしもの豈亦偶然ならんや。後者が智仁勇三徳を備へて以て深く其基礎を横へ、時を知り所を考へ民を愛する子の如く爲せしの報果に非ずや、勇は一時を處するの利器にして、智は其前後を計つて法を誤らしめざる所以のもの、然れとも仁の作用を假るに非れば決して永久不變の計策を立つるを得ず。余輩今日に於て徳川政府の壓制なりしを見る、然れとも之をして足利專制の末路群雄割據騒亂止むなきの時を以て織田の無謀、豊臣の粗豪に止まらしめ、東照公の世に出つる勿りせば、我日本國は何を以て能く今日此躰面を持して世界各國に對するを得んや、家康は以てワシントンに配す可し。余輩は東洋の

史上此一、眞正の政事家あるを喜ぶ者也。余輩已に此好龜鑑を有す、今日の志士たる者深く考ふる所なくして可ならんや。

斯く論じ來て吾人再び眼を我國今日の社會に轉ずれば、轉〻痛嘆に堪へざる者あり、余輩今此言をなすも容易に社會に容られざるを知る、假令一篇の論説として、或は一塲の演説として嘉納せらるゝとあるも、之を思ふと之を行ふとは其間倘千仭の懸隔ありて非常の決心と勇氣とを以て一貫の重き習慣の繩を絶つに非ざれば到底彼岸に達するを能はず。習慣の力は恰も後押し前牽の車に乘て馳するが如し、前を制せんとするも後を止むる能はず、後を押へんとするも前を如何ともす可からず、而して一種の調子に乘りて深海に入るものなり。故に人一度其非を知りて決斷する所あるも元と來し道に引き返さるゝの恐あり。余輩今日の社會に向て救濟策なきに非ず、否其策は余輩を待たずして已に世の智識あり經驗ある者の知る所ならん、唯之を行ひ難きを如何せん否行はざるを如何せん。知て而して之を行はざる呼んで怯と云ふ。今や滿天下の人概ね皆情慾の弱點に支配せられて終に之に打勝つの氣力なきに至らんとす、世間良心の指示する所を守る能はざる者程怯なるはなし、然るに人は往〻此怯を目して則ち良心に背き不道德の事を行ふを見て大膽なり勇壯なりと稱するに至る、又た是非を顚倒するの甚しきものに非ずや。余輩今默視すると能はず假令社會に容れられずとするも我は我責を盡すに於て何かあらん。人一日生存すれば一日の義務あり、なす可からざるを知ると雖も豈力を盡さずして可ならんや。若其れ幸にして同感の士あり、共に與に此點に向て歩を進むるを得ば假令生時に成功を期する能はずとも、天下後世を益するに足り、子孫に對する余輩の罪を免るゝを得べきなり。

之を許せ、之を咎むる勿れ、余輩は今敢て一身の微弱を顧みず、大聲疾呼天下に向つて要せざるを得ざるものあり、我社會は宜しく道德上の團結を造る可し。何故に言はでも知る可し、凡そ世界上何れの國とてか其地歩を未開以上に占むるもの、道德上の團結なかる可

き。歐洲諸國の最大都府より半開諸國の最小村落に至る迄、尤も人類の心を注ぎ意を傾くるの所は巨堂地を排し、此堂空に達するの寺院と會堂とに非ずや。是れ皆道德上團結力の造る所のものにして、而して其文明の度は其數の多少と大小とによりて判す可き者あり。何が爲に古來より今日に至り倘ほ將來に渉つて社會は斯の如きものを要するか。余輩は斷言す、其敎議に於ては進步すべく其信念に於ては變化すべきも倘人民の此天地間に生存するの間は道德上團結力の必要なるとを何故に、我邦に於ても建國以來維新以前迄は佛敎儒敎其勢力を占め、國民の最高至重なる觀念を繫ぎしの寺院庠序は盡く無益なるものにして今日は之を一掃し去つて代ふるに何物をも以てせざるか。世界各國の未開なるものも又文明なるものも皆之を以て國家の基礎と爲し人心の集合點と爲すなるに、我國獨り是なくして可ならんや。否決して可ならざるなり。何故に妄誕不稽なる宗敎、蛇を以て神と爲し石を以て佛と爲すものと雖も倘是れなきには勝るなり。東洋の天地をして儒敎佛敎なからしめば支那印度日本人は今日に至て水草を逐ふて轉居し禽獸に伴ふて生死し宛然たる亞弗利加の土人たらずんは亞米利加、インデアンと其伍を同ふせんのみ。其是に比し數千尺の相違を爲し兎も角も三千年來國民たるの生活を導き來りたるもの是れ則ち儒敎佛敎の賜に非らずや。

併し今や我國は亞細亞の日本に非らずして世界の日本と爲りしなり。其道德の改良進步を爲さゞるべからざるは勿論なりと雖も、漸々之を排斥し去りて權謀術數唯利是倘ぶの拜金宗を導くに至ては、余輩は人類社會が禽獸界に墜落し去りしかを怪まざるを得ず。何事ぞ此身の何處より來つて何處に至るべきかを講せず又此身の行爲が將來に向つて如何なる結果を來すべきやを考へず、漫然禽獸の如く生れて禽獸の如く死せんとを欲するや。然れども讀者諸君幸に喜悦せよ。我邦社會の有樣は斯くの如くなるにも拘はらず、我思想界今日の境遇は實に好地位を占めたり。若し天資英邁心根誠實の士輩出せば、數十年來東西南洋の蓄積せる寶藏を探

つて自在に眞理を發見するとを得、而して目今腐敗の社會は之を試みて十分其効力を示すに足るべきなり。西洋諸國に於ても從來の文化を養ひ來りたる宗敎の力は最早今日以後の社會に不適當なるが如きの觀を呈し學識卓絶の徒頻に之を改良せんとを主張するにも拘はらず、其神を喪ふて其式のみを存するの宗徒は頑然として動かず、徒に夕陽の西空に映するを見て旭日東天と主張す。則ち眞說正理を示すものなりと雖も之を容るゝに所なきなり。我國の形勢は然らず。當今人皆亂醉前後を分たず、妄呼妄吟且つ飮み且つ食ひ殆ど底止する所を知らさるが如しと雖も、躰疲れ神倦みて一睡の後、再び寛め來らば口腹渇を告げて將に淸水を求めんとす。此時に際し、識者彼に與ふるに東西兩洋の蘊蓄する所を蒸溜したる純淸潔白の水を以てせば彼等は好んで之を飮み、依て以て神を養ひ心を復し更に明朝の好天氣に向つて其爲す所を撰ぶに至るべきなり。余輩は私に疑ふ今日は是れ東洋滅亡の時に非ざれば、東洋勃興の時なるとを。而して、余輩は切に信ず、世界の歷史と時運の循環とは前說にあらずして後者に歸すべきとを。余輩は今此信念を懷て以て運動の途に上らんとす。其人を以て自ら任ずるに非らず、唯聊か志を盡すものなり。

惟一眞神の躰相用を論す（第十五號の續き）

佐治實然演說

予は已に惟一眞神の躰相用を論究するの序論として、本誌第十四號及ひ第十五號の紙上に於て、凡そ予か懷抱する所の、見解の大途を叙述したりき、本號の讀者は、先ツ彼紙上に於る論旨を會得して、而して後に已下に叙述する所を閲讀し給はんとを請ふ、夫レ惟一眞神の躰相用を詮顯するに、先ツ此躰相用を、最も明白に簡短に精確に、之を指示せんと欲するには、如何なる文字を假り來りて言ひ詮すを可とせん乎、曰く、

宇宙の現躰　即ハチ是レ惟一眞神の躰相用なり

右の如く三句を連綴したる一語にて、其意義充分なりと思考す、

抑々躰相用てふ名言は、古來佛教學者に於ては、最も肝要なる普通の慣用語なり、然れとも吾邦に於て、佛教傳播の當初より今日に至るまて、千有餘年間、佛教の典籍を講究することは、概ね僧侶にのみ委ねられし傾向ありて、廣く士庶人の間に行はれさりしか故に、目下博士學士の稱號を有する人々にても、二三或は四五の大學者を除くの外は、佛學上の用語の意味を解釋するに、頗る難澁なるか如く、常に見聞する所なり、故に己知の學士より見れは、素より冗言なるは勿論なれとも、未知の人等に對しては、佛教學者の説に依りて、一應躰相用てふ名言の、畧解を下しおくも、強ち無用にはあらさらん、

蓋し躰とは實躰なり、此の實躰に就て、古來佛教學者中に二説あるか如し、一説には、躰とは事物を搆成する極微分子なりと云ひ、又一説には、躰とは事物をして事物の如く存在せしむる實理を指すの言なりと云ふ、之を佛學の專門語にて言へは、前説を事躰理用と名け、後説を理躰事用といふなり、而して予は佛教學者の説の如何に拘はらすして專ら予の所見に從ふて、別に立論する所あるか故に、右二説の優劣に就て、全分可否の批評を下すへき必要を見す、然れとも已に二説あり、此二説中孰か予の所見に近似するやと問はゝ、予は寧ろ前説ならんと答へんとす、次に相とは相貌なり、目前可見の形狀を云ふ、又用とは作用なり、事物の形狀永遠固定することなく、常恒不斷千變萬化の應用あるは則是なり

右躰相用の畧解は、佛教學者の普通の説を、其儘に寫したるに外ならす、今一歩を進めて、予が所見に依て之が解釋を爲さん、玆に人あり、齡の老幼を問はす、躰の大小を論せす、之を評量するときは、必す權衡を上下すへき重量あり、此重量は、即物質の重量なるや言を俟たす、而して此物質か局部を形造り、局部相寄りて人躰を構成するとき、一箇の確實なる現象として、過去現在未來の三世に渉りて、有形無形の事物の道理を思慮分別する、靈活なる妙用を發顯す、所謂心識是なり、（予は此妙用を心識と云ひ、意識と呼ひ、或

は單に心。意。識。と名く、然れとも靈魂といへる名目は、他に濫するの恐れあるか故に之を用ゐす、讀者希くは注意し給はんことを）、故に人也者の名稱は、即物質と心識との連結點に立つるものにて、單に心識のみを指して人と云はす、唯物質のみを目して人とは呼び做さるなり、然るに此物心二要素か、連結する形狀は、實に微妙不可思議にして、言語の能く及ぶ所にはあらされとも、近く例を取りて云へは、化學に所謂親和せる抱合躰にして、異種の混合躰に非さること、掌紋を觀るよりも明なる事實ならん、故に之を物心の二限界とはいへ、爭か割然として分拆し得らるへきや、其道理も、方法も、必然絶無なれはなり、但し物質は質礙あるか故に、觸覺に於て認知し得らるへく、心識は虛疎無方にして、唯推理の上に認得すへき現象なれは、假りに有形無形の言詮を用ひて、科學上吾人か研究の方法を便にす、斯の如く研究の方法已に異なり、是を以て、蒙昧なる學生は、物心二要素は時としては別在して實存するか如く想像するに至る、嗚呼蒙昧も此に至て其れ甚しと云ふへし、然り此二要素の抱合せる形狀如何を問はす、確在實存するは勿論なれは、物質宇宙に徧滿せんか、心識も亦太虛に融通して能く其作用を顯すへし、物質極微にして所謂隣虛塵と稱すへき形狀を呈せんか、心識も亦其中に潛在して、尙介爾の作用を失はさるなり、之に仍て人躰の局部を解剖し、尙其物質を分拆すれは、漸次に極微分子と成り果つへきも、其實躰に於ける物心の二作用は、本の如く依然として、人躰に於けると同樣なる作用を保持す、但し其勢力の强弱優劣は、勿論躰格構造の如何に伴ふへし、而して此論旨は、智者の前には强ち不可思議なる邪推には非るへけれとも、無學無識の俗輩と、一科學の株を守る學士には、是等の理趣を語らんも、容易に理解し能はさるへし、是に由て之を觀るに、躰とは人躰も躰なり、人躰の一局部なる心臟胃腑五官四肢等も亦躰といふを妨けす、又其局部の形狀たも有せさる極微分子も、素より躰の外ならすと雖も、然れとも躰の躰たる正躰は、吾人か普通に見て以て一毫も奇異の念を惹

起せさる人躰を指して、原位と定むへきは理勢自ら然るものとす、是を數學に藉りて説明せんに、人躰は即ち一位なり、局部及ひ分子は一位已下分厘毛等の小數にして奇零なり、又一町村を一自治躰と稱し、一郡一國を一法人と爲し、延て一世界を個人性と見倣すは、即ち拾百千萬等の大數に比ふるを得へし、而して厘毛等の小數も數なり、萬億等の大數も亦數なり、數といへる一文字中に、大小二數を抱括するは論を待たすと雖も、究竟するに是等の數は、單位一也者の變形に外ならす、故に云ふ、躰は必す萬象の單位に依て定めさるを得すと、

次に相と用とは、前段已に佛學者の説として、畧解を附せり、予か所見に從ふも大途上説の如し、故に更に喋々論下するの必要を見す、

夫れ萬象の單位とは如何、曰く大陽は幾種の原素の聚合物なる乎、之を確實に測量するとは、容易なる業にはあらす、雖然大陽の自躰は、最強なる發光躰なりと定むるを得、又富士山は元來荊棘焦土の堆積せる者なるとは、敢て疑ふへきにあらされとも、其躰を定むるには之を荊棘と云ふ可らす、又豈之を焦土と呼ふ可んや、必す八面都て向背の處なく、蒼天より突出して人に與へて看せしむる者則是なりと云ふときは、恐くは富士山の躰を表するに近きを得ん、故に惟一眞神の躰を顯はさんと欲せは、須く躰と同時に、相と用とを示さゝる可らす、方今の學者、偶ゝ神の存在を論せんとするに徒らに高尚玄妙を衒ふて、現實なる事例に依らさるか故に、其神躰は幽靈の如くなるにあらされは、即日影より生する巨像の如くなり了らさる者殆と希なり、斯の斯き怪説は、愚人野婦を瞞着するの機會に於ては、相當の價値あるへしと雖も、五箇と八箇の和は十三箇にして其兩數の相乘積は四十箇なりと認識する底の人士に逢着するときは、鐚錢半箇の値に劣ると、豈唯千百級のみならんや、嗚呼頑固なる神説佛論の運命は、盡期旦夕に迫れり、有爲の宗教家たらん者は、頃刻も戒心せすして其れ可ならんや、予は毎に神を説き佛を論す、然れとも古人の論旨を反覆するを好ま

す、又經典の明文に依りて安んせさる者なり、偏に自己の腦裏より溢出する所の思想に藉りて、活神活佛を筆尖に現さんとを勉めむ、之を最上の快樂となす、故に前段の語句即惟一眞神の躰相用を指示せし語句に就て其義意を布演せん、曰く、

宇宙の現躰は即是惟一眞神の躰相用なり

又曰く

躰相用ある宇宙の現躰は即是惟一眞神なり

又曰く

惟一眞神の躰相用は即是宇宙の現躰なり

斯の如く躰相用と、宇宙の現躰と、惟一眞神と、の三句の位置を輾轉前後するに拘はらす、惟一眞神の全躰全相全用は、常に露堂々なり、明歴々たり、故に智者の前には多辯するの必要あらさるのみならす、多辯は却て蛇足を畵くの嗤を招かん、唯此三句一語を以て、惟一眞神に對する予の所見を充分に說明し終れりと思考す、然れとも世間一般より觀るときは、或は其義意の汎爾漠然たるを恐る、是則下文に於て聊か其意を布演する所以なり、

夫宇宙の現躰は實に廣大なり、時間の無限なる、空間の無際なる、誠に不可思議といふの外なし、況や兩間に碁布羅列する日月星辰山川草木は、高妙淸潔にして、其相を言はんとすれは語亡し、其用を語らんとすれは慮絕す、所謂口を開けは第二第三にして、萬象其物の眞相を距ると風馬牛も猶及はさらん、然るに時間は無限なるも、空間は無際なるも、又其萬象は錯雜無數なるも、予か確認する所を總稱大別すれは、平等なる眞理と、差別せる事物に漏れたるはなし、又之を大別して有形無形の兩種なりといふも可なり、或は之を目して物質心象の二界なりと云ふも不當にはあらさらん、斯の如く幾種の名稱を用ふるも、悉皆宇宙の現躰といへる一句の概念より分岐する所の抽象に外ならす、而して宇宙の現躰には、目前可見の相あるや論を待たす、已に相あり豈其作用なからんや、如是躰如是相如是用は、何處より來り那邊に去るやを思惟せよ、古往今來、去來の相と絕したるとを觀ん、何に由て起

り何に緣て滅するやを觀せよ、恐くは起滅の期を認む可らす、是即時間の無限なる空間の無際なる所以にして、所謂造化の無盡藏なる者是なり、

其然り、斯の如く宇宙を觀し、斯の如く現躰を察するは、吾人の自躰に具有する、靈活なる心識の作用に由らすんはあらす、吾人現在の一念は、能無限なる時間を攝し克無際なる空間を容る、而して宇宙をして宇宙ならしめ、現躰をして現躰たらしむるか故に、或は又吾人現在の一念は、宇宙の起初點より現躰の滅盡期まて、包容し得といふも何の不可か之れ有らん、加之、吾人は兩間に於て萬象の首位を占めたり、故に萬象は所使用者なり、吾人は能使用者なり、言を換へて云へは、日月星辰山川草木は、些か五尺にたも滿たさる吾人の使用に供せらるゝ者なり、如何となれは吾人なきときは萬象其用を顯はし得へからされはなり、嗚呼人也者の位置は、實に高且大なりと云ふへし、

予曾て聞く、萬首の歌を讀むに、其秀逸なるものは其中讒に一首を得ると、歌聖人丸のほの〳〵に於る、杜樊川の紅於に於る、豈其實例を示す者にあらすや、此に由て之を觀れは、宇宙の現躰は萬象森羅端睨し難しと雖も、就中人也者唯一を擧くるときは、餘他の如何を問はすして可ならん、宜哉天地人の三才といひ、小天地といひ、或は之を目して萬物の靈長といふや、其然り宇宙の現躰は、常住不斷活潑々地なるか故に、吾人も亦造次顚沛轉轆々地なり、活潑々地は眞理の妙相なるへく、轉轆々地は人躰の妙用なり、眞理人躰は打して一片と成り、妙相妙用は和して表裏を見す、於是乎諸般差別の人事、連綿息はすして經營進歩す、即是惟一眞神の躰相用也者なり、嗚呼宇宙其廣し、現躰其大なり、而して人也者其廣大無邊の中に於て已に精美の域に進入し、尙將に靈妙の極に到達しつゝあるものなり、然れは世の宗敎に志ある者に語らん、惟一眞神の躰相用を拜觀せんと欲せは、創世記の華園に往くを得され兜率天の內殿に生るゝことを得され、目前可見の相貌ある人間を諦視熟觀すへし、釋迦牟尼は淨飯王の子にして、耶蘇基督は 摩里亞の 胎より出てしにあらす

や、吾國の神皇、支那の聖賢、皆人ならさるはなし、吁嗟人間の外遙遠の境に、至高至大の神佛ありと妄想し、昇天の道を求め、往生の果を欣ふものは、愚中の至愚にして予は其愚の何たる愚なるを知らす、所謂其愚には及ふ可らすとは是之等の謂也歟、（完）

教育と宗教の衝突（承前）

文學博士　井上哲次郎

勅語は元來日本に行はるゝ所の普通の實踐倫理を文章にしたるものにて、其倫理は一家の中に行ふべき孝悌より始まり、一家より一村、一村より一鄕に推及し、遂に共同愛國に至りて終る、其意一身を修むるも國家の爲めなり、父母に孝なるも、兄弟に友なるも、畢竟國家の爲めにして我身は國家の爲めに供すべく、君の爲めに死すべきものなり、是れ我邦人が古來歷史的の結合を爲して實行し來れる所なれば、今日より以後益之れを繼續して各其臣民たるの義務を全ふすべしと云ふにあり殊に勅語の中に「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ」とあるを以て之れを觀れは、我邦の臣民たるものは如何なるものも、國家の緩急に際しては、身をも犧牲に供して皇運の隆盛を圖るべしとの意なること復た疑ふべからず、然れば勅語の主意は、一言にて之れを言へは、國家主義なり、然るに耶蘇教は甚だ國家的精神に乏し、啻に國家的精神に乏しき而已ならず、又國家的精神に反するものあり、爲めに勅語の國家的主義と相容れざるに至るは、其到底免れ難き所なり、耶蘇自ら能く國家の事を知らざりしものと見え、新約全書中國家の事を說く所殆んと之れなく、纔に之れあるも遂に共同愛國の要を說くに至らざるなり、耶蘇教は實に非國家主義なり、此一點に就いては耶蘇教徒が如何ほど辯護せんとするも、到底辯護し能はざるなり、若し强ひて辯護せは、牽合附屬の詭辯に陷らざるを得ざるなり橫井時雄本多庸一二氏を始めとし、總べて駁者は耶蘇教は國家主義なりと斷言すること能はざるなり若し彼等にして耶蘇教は國家主義なりと云はゝ未だ耶蘇教の眞意を曉らざ

るものと謂ふべきなり、耶蘇敎の國家主義ならざることは其全躰の性質より判斷を下だすを得、耶蘇は元と國家を主として敎を立てたるものにあらず、種々なる國民の上に脫出し、自ら萬國普通と認むる所の敎を開きたるなり、是れ實に耶蘇敎の敕語と相合はざる所以なり、本多庸一氏自ら「成程耶蘇は現世國家の事に付、明言したるなし、是れ蓋し耶蘇の本意なるべし」と云へり、余が敎育時論の記者に談話せしは即ち此事なり、耶蘇は天國を立てんことを欲すれども、地上の國家は其目的とする所にあらざるなり然るに敕語の主意は專はら地上の國家に關するものにて毫も耶蘇の言ふ如き天國に關するものにあらざるなり、且つ思へ、愛國主義は決して耶蘇敎によりて鞏固なる基礎を得べきものにあらず、然るに敕語は愛國主義を喚起するの精神を有するものなり、

耶蘇敎徒或は云く、耶蘇は古今の差なく、東西の別なく、如何なる國家にも、如何なる社會にも、貫徹して戾らざる所の道德を立つるものなり、故に如何なる國に應用しても戾ることなきなりと、是れ實に陳套なる耶蘇敎徒の辯護にして、彼等は實に此れより外に辯護すべき根據を有せざるなり、然れども今之を實際に徵するに、耶蘇敎の道德は決して古今に亘り、東西に通じて戾る所なしと謂ふを得ざるなり、耶蘇敎は歐羅巴に於て古來少しも不利なる結果を來したることなきか、又耶蘇敎は果して歐羅巴に於ける現在の弊害を救ふに足るか、古今の狀態大に異なるが爲め、耶蘇敎は決して古今の差なく、均しく效用を爲すべきにあらず、耶蘇敎が時勢に從ひて屢〻變遷するは抑〻何の爲めぞ、加特力敎に滿足すること能はざるものありて、「プロテスタント」敎起り、「プロテスタント」敎に滿足すること能はざるものありて「ユニテリアン」敎起れり、耶蘇敎が此の如く變遷するもの、是れ豈に古今の狀態の同じからざるが爲め敎旨を枉げて時勢に適應せしめんとするの意に本づくにあらずや、又思へ、近來歐米の倫理學者は漸々耶蘇敎を離れて別に倫理學を立てんとす、英國のベンタムミルベインスペンサー獨逸のウンドキズチ

キーヂユーリング丁麻克のホフヂング米國のソルター

コイト諸氏皆耶蘇教を以て倫理の基礎とせざるなり、若し耶蘇教が古今の差なく効用を有すべきものならば、耶蘇教を離れて倫理學を立てんとするの傾向も生ずべきにあらざるなり、然るに今日にありて耶蘇教は最早陳腐に屬し、到底此れに由りて今日の倫理を維持すること能はざるが故に、進歩的の精神に富める學者は倫理學の基礎を耶蘇教以外に求むるにあらずや、果して然らば耶蘇教豈に古今に亘りて毫も戻らざるものならんや、又其耶蘇教を以て東西に通じて戻る所なしと言ふに至りては、斷然其非なるを告知するを得べきなり、耶蘇教が已に如何なる國にも行はれて少しも戻る所なきを實驗し得ば、始めて其東西に通じて戻る所なきを斷言すべきも、之れを實際に徵するに、耶蘇教は未だ一般に支那、朝鮮、西藏、暹羅、緬甸、印度、波斯、亞剌比亞等の諸國に行はれざるなり、是等の諸國に對して耶蘇の宣教師が如何ほど力を盡くして布教を務むるも、未だ充分に其功を奏せず、其功を奏せざるは、耶蘇教の是等の諸國に適せざるに由るなり、耶蘇教徒は耶蘇教を以て古今不變、東西一貫とすれども、儒教徒も、道教徒も、波羅門教徒も、佛教徒も、回々教徒も皆各〻其奉ずる所を以て古今不變東西一貫なりとするものなり、然るに是等諸宗教の道德は或は一致するものありと雖も、又大に相異なるものありて存するなり、耶蘇教徒自らも亦耶蘇教の儒教、道教、波羅門教、佛教、回々教等と同じからざることを知るならん、然らば耶蘇教徒が他の宗教を奉ずるものは如何ほど其教の古今不變東西一貫なることを主張すれども、皆之れを打消して獨り己れの奉ずる所のみを古今不變東西一貫とせば、實に是れ甚しき利己主義に過ぎざるなり、若し又此思想にして利己心に出でざるならば、其固執より起る謬見に外ならざるなり、我日本も亦古來一種の國民的倫理を有せしが、敕語の出づるに及んで教育の標準となれり、然るに此敕語の主意は決して耶蘇教と着々符合するものにあらずして、頗る其由りて立つ所の根本を異にするものなり、如何なる耶

蘇教徒も耶蘇教と敕語は毫も相戻らずと云ふに躊躇すべきなり、果して然らば其いはゆる古今不變東西一貫は焉んかある、若し又敕語の主意即ち耶蘇教の主意と謂ふを得ば、耶蘇教徒に取りても最早我邦に耶蘇教を布教するの必要なかるべきなり、又思へ、耶蘇教が毫も敕語に戻るが如き元素を有せざることならば、耶蘇教は何故敕語の出でしより以來種々なる不敬事件を演し、我邦人の國家的感情を害せしか、單に浮泛なる言論を述べて牽強附會なる辯護を爲すべきにあらず、必ず事實に徵して之れを言ふべきなり、余が先つ初めに敕語發布以來耶蘇教徒が國家主義に反せる事蹟を成しゝことを明かにせるに由りて、耶蘇教が決して敕語と着々符合するものにあらざるを知るべきなり、又之れを考ふるに、敕語の中に「之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」とあり、若し耶蘇教も古今不變東西一貫にして、敕語の主意も古今不變東西一貫ならば、兩者當に背戾する所なかるべきなり、然るに敕語の主意は徹頭徹尾國家主義にして耶蘇教は非國家主義なり、若し非國家主義にして古今不變東西一貫ならば、非國家主義は其反對ならざるを得ず、然るに吾人日本臣民は敕語の主意に從ひ、共同愛國を期せざるべからざるものなり、果して然らば耶蘇教の古今不變、東西一貫は焉んかある。

耶蘇教の非國家主義なるとは、啻に耶蘇自身が國家の觀念に乏しかりしに由りて知り得べき而已ならず、又耶蘇教徒が如何ほど國家の觀念に乏しかりしかを見て知るべきなり、テルチュリヤンは「國家の事より己れの目的に遠きものはあらず」と云へり、テルチュリヤンの如きは眞に耶蘇の教旨を守るものなり、レッケー氏に據ればセント、シペヤンは現在の國家の思想なくして、唯〻他の世界に於て勝利を得ることのみを思意せり、セント、オーガスチンも「死する時に當りては、如何なる國にあるも、其れには拘はらず、單に治者の爲めに壓せられて不信不正となることなければ、最早遺憾なることなし」と云へり、其國家的思想に乏しきこと亦以て見るべきなり、是等耶蘇の信者が非國家主

義に陷るは、決して偶然にあらず、全く其敎旨を奉崇するの結果なり、去年一月十二日の九州日々新聞に云く、

熊本英學校々長授任式の席上、敎員奧村禎次郎なる者、同校敎員總代として、左の如き演說をなせりと、本校敎育の方針は、日本主義にあらず、亞細亞主義に非ず、又歐米主義にあらず、乃ち世界の人物を作る、博愛世界主義なり、故に我々の眼中に國家なく、外人なし云々、

奧村禎次郎は此演說の爲め、忽ち解雇せられたり、余は未だ奧村禎次郎が果して耶蘇敎徒なるや否やを知らずと雖も、其演說の主意は、全く耶蘇敎徒の懷抱する所なり、然るに耶蘇敎徒が妄に之れを公言せざるは、或は其位置を失ふの恐あるが爲め、或は其人望を失ふの恐あるが爲めなり、若し一朝此の如き恐なき事とならば、耶蘇敎徒は忽ち異口同音に其非國家主義を吐露せん、假令ひ今日までは耶蘇敎徒が敕語に反し、公然其非國家主義を吐露せざるも、其擧動に現はれたるの形迹は、已に余が初めに敘述したるが如く、決して復た蔽ふべからざるなり、敕語發布以前にありても、耶蘇敎徒は已に我邦人の國家的感情を害せること往々あり、今唯〻其一例を擧げんに、佛敎第十號(明治廿二年十二月廿日發行)に云く、

京都同志社に於て去月三日天長節に祝意を表したるものは唯〻生徒一二の發意にて、校の係員は曾て祝意を表するの心得なく、餘りに祝意を表したるを不與意に思ひ、發意したる生徒を處罰したりと、云々、又石川縣金澤私立女學校は十月十七日の神嘗祭に休業せず、同地研學會長猪瀨藤重氏は同女學校長戸田忠厚氏に向ひ其理由を問ひ大祭祝日には休業せざるべしと勸告せしかども遂に聞かざりしと、かゝることの往々人の耳朶にふるゝ故にや、靑柳高鞆氏は駁邪鐵鎚と云へる書を著して曰く、西敎は我大日本帝國の國躰を破るものなり、秩序を亂す者なり、社會に害あるものなり、心を腐らすものなりと痛く攻擊せりと、

耶蘇敎徒は唯〻耶蘇の昇天日とか、誕生日とか云ふ日のみを大祭日とし、我邦人が均しく祝意を表すべき天長節も、紀元節も、如何なる國家の大祭日も、皆其顧慮する所にあらざるなり、耶蘇敎徒の居らんと欲する所は、此地上の國家にあらずして、耶蘇のいはゆる天國なり、然るに我邦人が實に改良進步の企圖を爲すもの

は、此地上の國家にして、耶蘇のいはゆる天國にあらざるなり、且つ如何なる人に取りても、先づ富强にすべきは、己れが從屬する所の國家なり、未だ己れが從屬する所の國家の爲めを思はずして、反りて萬國の事を慮るが如きは、事の順序を誤るものなり、況して全く空想に屬する天國抔を先にするは甚しき謬見なりと謂ふべきなり、横井時雄氏は耶蘇反對者を批難して曰く、「彼等が常に心に銘すべきものは、一時代の思想、或は其習慣より上に永遠の主義あり、萬古の眞理あり、動かすべからざる天の理法ありと云ふ事是れなり」（六合雜誌第百二十五號）と、然れども、此の如き永遠の主義、萬古の眞理、天の理法の如きは哲學者又は理學者の日々講究して止まざる所にして、耶蘇敎徒の專有する所にあらず、啻に是れ而已ならず、哲學の進步、理學の開發に從ひて耶蘇敎が益〻歐洲に勢力を失ひしは、全く其敎旨の謬見に係るもの多きに因由せざるはなし、然れば耶蘇敎徒は決して永遠の主義、萬古の眞理、天の理法抔と云ふことを口實として遠廻はしに非國家主義を輸入すべきにあらざるなり、

耶蘇敎の非國家主義なることは、余一人の說にあらず、耶蘇敎國の學者も亦往々之れを言へり、有名なる哲學者ビエル、ベール氏は「耶蘇敎律は强固なる國體に必要なるより寧ろ有害なり」と云へり、ルーソー氏は、民約篇の終りに耶蘇敎の國家に害あることを論ずると頗る詳密なりとす、其言に云く、「總べて社會の統合一致を破壞するものは、毫も價値なきものなり、云々、耶蘇敎は民心を國家に結合せしむる處ではなく、反りて一切地上の物と共に民心を國家より分離せしむ、余は別に是れよりも社會的精神に反するものあることを知らず、」と、其言甚だ耶蘇敎に適切なり、エルネスト、ルナン氏亦耶蘇敎が民心の地上より分離せしむることを論じて曰く「耶蘇敎が己れの父に抗し、又己れの國に向ひて戰ふは、皆基督の爲めなることならば、不良なる子、不良なる民なるを以て賞せらるべく、（以下節略）國家も法律も神國と敵對の地位にあり」と、ルナン氏は哲學者としても文章家としても佛國近世の

一大家なること疑なし、氏は兼ねて希伯拉、シリヤク、カルデイク、亞剌比亞等の如き攝密的克諸語に精通し、曾て耶蘇敎起原史と稱する一大著述を爲せり、余が今引用せるは其第一卷第十九章の語なり、余曾てルナン氏を佛國學院の樓上に訪ひ、哲學宗敎等の談話を爲せり、其時余氏に問ひて「君は耶蘇敎起原史を著はされたるが、耶蘇敎と信ぜらるゝや如何に」と云ひたるに、氏微笑して曰く「余は少しも耶蘇敎を信せず、耶蘇敎は最早今日となりては信ずべきものにあらず、然れども耶蘇の事蹟は研究を要す、猶ほ拿破烈翁の事蹟の研究を要するが如し」と、氏は昨年卒したれども、氏の言は尙ほ耳に在り、氏が耶蘇敎を信ぜずして耶蘇敎起原史を書きたるゆゑ、記事精確、人を啓發するもの少しとせず、若し一たび耶蘇敎を信ぜば、頑固なる信仰の力勝りて自由なる探求的の精神消失するものなり、故にルナン氏の一言の如きは、淺薄なる耶蘇敎徒が千萬人聯合して謂ふよりも價値多きなり、然るに我邦の耶蘇敎徒は動もすれば、己れ獨り耶蘇敎の事に精しく神學に深きもの丶如き口吻を爲し、自ら已に迷信の爲めに瞞まされたるを悟らずして、耶蘇敎に關することならば、如何なることとも、人に向ひ說明を試みんとす、然れども余は未だ我邦の耶蘇敎徒中に有力なる神學者あるを聞かざるなり、耶蘇云はずや、「故凡自謙、若二此孩提一者、其在二天國一卽爲二至大一」と、又云はずや、「且自高者、必降爲レ卑、自卑者、必升爲レ高也」と、我邦の耶蘇敎徒は果して能く耶蘇の此言を守れるか、已れ獨り永遠の主義、萬古の眞理、天の理法等を知ると公言するは、果して謙遜の意に出づるか、耶蘇敎者にあらずして耶蘇敎を論ずる者あれば忽ち罔目なりと稱して直接には貶せざるも、間接には甚しく輕侮するもの、果して自ら卑うするものと謂ふべきか、況してルナン程の學識なきものにして自ら大神學者を以て居るものあらば、果して彼の孩提の如しと謂ふべきか、耶蘇敎徒は、他人を責めざる前に先づ其脚下に注意すべきなり、今尙ほ此に米人の言を引いて最も耶蘇敎に熱心なるもの多しと稱する米國にさへも、耶蘇敎の國

家的精神に乏しきことを言ふものあるを證せん、ソールター氏曰く「耶蘇の政治的觀念は吾人が經驗上より知り得る一切の事とは、最も奇怪なる反對を爲せり」と、又曰く「耶蘇は國家の事を思はざりき、又國家に就いて理想をも與へざりき」と、斯く歐米の學者が余と同じく耶蘇教を以て國家的の精神に戻れりとするもの、豈に偶然ならんや、皆歷史的事實に就いて其果して然るを認めて然か言ふものなり、我邦の耶蘇教徒が如何ほど耶蘇教は國家主義に反せずと辯護するも、決して其事實を蔽ふを得ざるなり、

今現に新約全書中國家の事に關する字句を搜索するに、馬太傳第十二章第廿五節に云く「凡國自相分爭、必墟」と、此文又路加傳第十一章第十七節に見ゆ、其意は如何なる國も四分五裂すれば必ず、滅亡すと云ふにあり、然れとも此の如き事は如何なる人も已に知る所にて、又別に國家主義と稱す可き旨意を釣出するを得す、但耶蘇教徒が我國の國家主義に反し、民心の統合一致を破るが如き痕跡あるを以て之れを觀れば、若し今より盛に耶蘇教を我邦に振興せば、耶蘇教徒は遂に國家をして墟ならしむるにあらざるかの感ある而已、其外耶蘇屢〻國の事を言へど、皆天國なり吾人の富强にせんと欲する此地上の國家にあらず、此大日本帝國にあらず、此達嶽琶湖の美景を有する邦國にあらずして、全く空想に係る天國を指すに過ぎざるなり、馬可傳第十四章第廿五節に云く「我誠告爾、我不復飮葡萄樹所產者、迨他日飮新者於神之國矣」と、果して然らば天國には葡萄酒ありしと見ゆ、印度の蘇摩、波斯の「ハオマ」希臘の「ヂオニゾス」及び「バクヒユス」を驅りて彼處に至らしめば必ず與會淋漓ならん、然れども天國なるものは本と唯〻空想のみ、決して勅語の主意の存する所にあらざるなり、然るに自由基督教第二卷第五號に云く「基督教豈に毫も勅語と矛盾せんや」と、勅語と耶蘇教とは到底同一視し難き者あるを知りて之れを言はゞ欺騙に過ぎず、知らずして之れを言ば其不學を表はすなり、又一步を進めて之れを考ふるに、此地上の國家は却りて是れ眞實の天國なり、吾

人の住する地球は、幾千萬億の星の一つとして無根の空間中に懸り、東西も南北も左右も上下も皆茫々たる無根の空間なり、天は唯、地球の上のみを指すべきにあらず、地球の下も地球の左右も、如何なる方位も皆天なり、之れを要するに、吾人人類は皆蒼々たる天心に行動するものなり、果して、然らば吾人は已に眞實の天國にあり、何んぞ別に空想的の天國を要せんや。

（未完）

教育と宗教

（井上博士の説を評す）

土谷忠治

世に末流の濁れるを見て其の泉源も亦汚濁ならんと速了する者あらば、誰か其の大早計に驚かざらん。若し群盲探象底の態に擬する者あらば、誰か其の管見蠡測なるを議らざる者やはある。今日我が國の非基督教徒の言、大に此の恐なくんば非ざる也。彼の非基督教徒而かも國家樞要の地歩を占むる教育家が、基督教攻撃の偏強の牙城となし言據となす所のもの夫れ唯一二教徒の所作に止まる也。試に余輩が言ふ所を見よ、非基督教徒の躍起彼れ必ずしも其の知ありて而して論ずるに非ず、爲めにする所ありて而して躍起する耳、彼れ必ずしも忠臣なるに非ず、唯忠臣を装はんと欲する奴耳、果して然らずば無智の至極、善悪正邪の識別心なき者と云はざる可からず。上來皆否ならば他に吾人未發の眞理存する也、請ふ教を吝む勿れ。

今日非基督教徒＝教育家の意見を代表す可き者は、文學博士井上哲次郎君の『教育と宗教の衝突』てふ一篇也、是れ獨り井上博士の議論として見る可きに非ず、非基督教徒＝教育家の鬱積せる不平が井上博士の手を借りて迸發せるものとして大過なかる可し。博士の高論吾人後進者の窺ひ知る所に非ず、吾人にして之に當らんとするは、恰も蟷螂の斧を揮ひて龍車に當るの議を免れずと雖も、教育社會の大勢見るに忍びざるものあれば、敢へて世人の驥尾に随ひ博士が高論を請はんと欲す、吾人は素より博士の知遇を辱うする者にて、

敢へて仇讐に非ず寧ろ味方なる者、本論の故を以て、私交を傷らざらんを切に祈る也。特に讀者の注意を請ふ可きは、博士の議論未だ完からざるに、其の駁論を草することとなれば、後段如何なる齟齬を生ずる可きかは計り難けれど、博士が豫て教育時論記者に談話せる所と參照するに、大過なきを信じ。且吾人の意見を發表せん爲め是に出でたる也、讀者幸に此意を諒せよ、而して又博士の說に附帶し今日教育家の意見一斑を窺ふに足る可きものは、大日本教育會の教育と信教自由の權利との關係調查委員日下部三之介氏の調查案なりとす、故に吾人最後に該案の駁論をも試みん。

第一、基督教と風俗習慣

世に批評の最も困難なる者とは其れ宗教に關すると乎、或は偏愛に失するに非ずんば、冷淡に趨るものなれば也。故に凡そ宗教上の批評をなさんと欲する者は、須らく審に全躰を通じて最も公平に沈思熟鑒を要す可し。而かも其の勢力は時を以てすれば殆んど二千年、土地を以てすれば全地球四分の一を占有せる基督教を、豈輕忽に論下して可ならんや。基督教が其の範圍の廣き年代の長き變遷革新は屢〻にして復た蔽ふ可からずと雖ども、根本の教義に至りては東西一貫千古不變なりし所、以て基督教の基督教と名けらるゝ所以也。博士の言の如く、殆んど二千年前猶太に勃りし基督教と、嘗て羅馬に法王として全盛を極め、魯西亞に希臘教として愛せられ、或は米國の華奢を受けたるものと、今日我國の如き國家主義の迫害を崇りし基督教とは自ら其の趣を異にせずんば非ざれど、教會は基督教に非ず、基督教は儀式にも非ず、基督教根本の教義、天父、悔改、博愛の如きは終始一貫敢へて渝ることなし。然るに基督教が我國の美風良習を勸めて以て益〻其の發達進歩を畫策するを見て、是れ基督教の缺點を蔽はんが爲めに國風に同化するの必要を生ずる也と云ふに至りては、誠に博士の言とも思はれざる也、吾人は博士の爲に其の淺薄を歎かずんば非ず。博士及び博士一派の論客注意せよ、身躰と衣服とは全く相異なることを、衣服は如何に變するとも、其の人の人たるに於ては決して悖ることなし、

人は人たると共に衣服も亦一定なる可しとは三歳の童兒も猶能く首肯せざる所、況んや博士に於てをや。博士は博士たると共に南洋の熱帶に至り衣を薄うするとも、西比利亞の寒帶に至り衣を襲ぬるとて決して博士の價値を損せざる也。若し衣服の薄きが故に凡夫たり、厚きが故に鴻儒たりとせば、吾人も今より飽食暖衣して以て博士たらんと欲す然れども世豈此の理あらんや。思ふ可し、基督教決して裸躰に非ざることを、身躰あり衣服あり、身は何處に至るも始終一貫、假令其の衣服の變易あるにもせよ』。博士の言に『耶蘇教は元と我邦に適合せざるの教なり』。故に我邦の風俗に同化す可き必要も起るなり。若し耶蘇教が始より能く我邦の風俗に適合せるものならば、豈之れに同化するを要せんや、從ひて又同臭の耶蘇教徒中に別派を生ずることあらんや』と、何ぞ其妄の甚だしきや。今日は既に西洋心醉等の陳套語を尋ね來りて論難す可き時に非ず、其の嘗て基督教徒が直に歐米の基督教として運動し、若くは禮拜儀式等をも其の儘輸入せんとせし者なきにしも非ざれど、是等の事たる實に耶蘇の本旨に背けることは固信派の或一部を除くの外皆等しく否まざる所にて、日本には日本の基督教を施かざる可からずとは今日の公論、基督教の本義也、馬太傳五〇十七―十九『勿レ意ニ我來壞ニ律法及預言者ヲ我來非ニ以壞ヲ之乃成レ之。我誠告ニ爾天地未レ廢律法之一點一畫斷不レ能レ廢悉成矣。故毀ニ此至微之一ヲ且如レ是以教レ人者在ニ天國ニ必謂ニ至微ヲ惟夙行而教レ之者在ニ天國ニ必謂ニ之大ト也』と、此の言蓋し舊約書若くは猶太教を指したるものにて總ての風俗習慣に及べるに非ざれども、其の精神に至りては決して渝ることと非らざる也。然れども吾人は決して無制限に同化を主張せず、耶蘇の意も亦然り、一時代の思想或は習慣に反するを恐れて以て已む可きに非ず、如何なる困難に遭遇し、如何なる迫害に陥るも、永遠の主義、萬古の眞理に訴へて以て善なりとし、正なりと是認せざる限りは如何なる國躰、如何なる風俗習慣と雖も、根本的に破壞し去つて一歩をも假さゞる也。是等永遠の主義、萬古の眞理の爲めには敵味方

を問はざるは聊か自由派の特質にして、正統派と撰ぶ所也。博士は『耶蘇教が時勢に從ひて屢〻變遷あるは抑も何の爲めぞ加特力教に滿足すること能はざるものありて「プロテスタン」教起り「プロテスタント」教に滿足すること能はざるものありて「ユニテリアン」教起れり』と、眞に然り、加特力教に次で「プロテスタント」起り、亞で又「リベラリズム」起れり、然れども是等の起りたるを以て基督教が正理に反し、國風に適せざるものと呼號するは眞に大癡の見、以て一時昧者を惑はす可きも開眼者を伏するに足らざるなり。見よ佛教は如何に分宗分派せる乎、既に三十餘種の多きに及べるに非ずや、然るに基督教の分宗分派をば不理不適と解する博士が、佛教の分宗分派を如何に解せんとする乎を聞かまほし。

第一一　教義と教徒　一二教徒の所作を以て教義を判せんとするは博士及ひ博士一派の見解也、然とも之れ實に大痴大迂の見。然り一二教徒の所作固より其の信仰の發作せる所なる可きも、一部を見て而して全躰を評論せんとする、何ぞ其の管見の甚しきや、知るや、知らずや機關と運轉手と異なるを、運轉手の巧拙を以て眞に機關の價値を定めんとする者あらば、誰か其の速斷に驚かざらん。津田三造の如き一二攘夷論者を出せしの故に日本國民は皆攘夷論者なり、西野文太郎の如き迷信家を出せるの故に日本人民は皆迷信家なりとせば、如何なる暴漢迷執家と雖も首肯せざる可し、然るに苟も國家の碩儒を以て鳴るの博士等にして、此の所業に出で恬として顧みざる抑も故なくんば非ざる可し、見よ今日宗教＝基督教嫌として立てる者の偏強の言據は抑も何處に在る乎、其の言據の骨髓根本とも稱す可きは基督教徒中の不敬事件に存するが如し、博士が這回意見の本據として列擧し來れる内村氏、某教會、ニコライ堂、肥後八代の小學生徒等の不敬事件、及び服部氏の所作、山鹿小學校の退校事件、大井上輝前氏の處置等、現に之れ有りとせば、吾人は口を極めて攻撃するに憚らざれども、彼の新聞雜誌の記事とて決して信ず可からず、ヨシ信ず可しとするも

其の眞意果して不敬に在りし乎、十歩百歩を假し眞に不敬の意に出でしとするも、是れ一二敎徒の所作也、未だ劇に敎義の如何を辯す可からず。固より數年前に於ては是等不敬者が出でざるに非ざる可きも、論者とてサスが盲目には非ざる可し、當時の風潮を察せよ、又以て可然理を知るに難からざらん。彼の洋風尊拜時代決して批難を免る可からざるは豈獨り宗敎の上に止まらんや。當時基督敎も米國の基督敎、英國の基督敎、獨逸、佛蘭西、魯西亞等の基督敎を直輸入せるに相違なし、然れども嘗て然りければ現在も亦然る可く、未來も亦然る可しとの理あらんや。數年前の敎徒は往々主義と方法とを混ぜり、即ち敎會儀式語格容躰風俗習慣等の、事の行政事務に關するものをも、直に輸入し來りて歐化せんとするの傾きありし爲め往々批難を受けたりしが、之れ一時の誤解に過ぎざりしなり。基督敎社會の迷夢は爽として覺め、豁として悟り、遂に其の主義と行政事務との區別す可きを知るや、躍として起り、勃として奮ひ、一大新面目を開けり、豈數年前と同日にして談す可けんや。

博士の言に『凡そ人は其學ぶ所に僻するものにて大抵は之れを免るゝこと能はざるものなり』と、眞に然り、國學者は自尊に失し、漢學者は支那を以て中華國とし、英法學者は英を慕ひ、佛法學者は佛を擬するが如く、佛敎徒は印度を以て故鄕なりとし、基督敎徒は歐米を景慕するの傾向或は免る可からずとするも、豈此の一事を以て全部を否議す可けんや、況んや其の人心の昔日の比に非ざるをや。見よ基督敎社會に於ける新傾向は決して蔽ふ可らざるを。人或は基督敎社會の國民的精神の惹起を以て、國粹保存論者の影響に歸せしめんとする者あらんめれど、決して然らず、我國民がその國民たる自覺を强うせると、能く基督敎の精神を明察せるに歸せずんばあらざる可し、而して其の國民的の自覺を喚起し、基督敎の本義を悟得せる原因をば、國粹論若くは攘夷論の結果なりとする者あらん、然れとも之れ大に非也、其の原因は實に我國民三十年來の發達經歷にありし也、而して其發達經歷は常に二の方向

に於て進めり、一は二千有餘年來繼紹し來れる國躰の觀念、一は批評的研究の發達之れ也。彼の國粹論攘夷論の如きも亦此二方向の發達經歷によりて喚起せられたる一現象に外ならず、近く之を察せよ、今より數年前頻りに國粹論燃え、攘夷論の盛なりしは抑も何に原因せる乎、是れ當時歐化熱の熾盛なる遂に馳せて洋風尊拜となり、亦國躰の觀念を忘却し、妄に奔馳せるの反抗に外ならず、基督敎社會に於ける國民的精神惹起の原因は、大に其の趣を異にし、我國從來の宗敎は、自身の發達に任じて以て向後の宗敎とす可からざるを知り、一方には德風の敗頽到底宗敎の力に憑らざる可からざるを悟るや、歐米宗敎思想を入るゝの必要を感じ、之を入るゝには批評的に其の精神を採り、我國には我國特殊の發達を要す可きを覺知せるによらずんばあらず、即ち前者は唯單に反動の結果にして、後者は三十年來の發達經驗より、日本の基督敎は日本固有の文化を地盤とせる日本融化的の基督敎ならざる可からざるを想はしめたるによる也。

要之、基督敎は依然基督敎の範圍に於て同化せるものにて、其の同化の原因も亦決して他より影響を蒙りしに非ざるを知る可き也。實に吾人も一個の基督敎徒として拿撒勒の耶蘇を尊崇し、敬虔の意を表する度に於て決して人後に立たざる覺悟なりと雖も、吾人は基督敎を以て絶對的に完全なりとし、超自然的の現象として說明し得可き者とせざる也。是等素より神學上の一大擬疑にして、吾人「ユニテリアン」敎徒の如き自由派と、固信派との判るゝ所以是に存する也。而して今日は固信派と云へとも既に自由派に於ける如き新傾向を取り醇々乎として日も猶足らざるが如し。博士及び其の一派は之を以て基督敎に非ずとする乎、吾人は其の名の如何を問はず、之を佛敎なりとせば佛敎徒にて甘んじ、之を神道なりとせば又之を受く、吾人は耶蘇の基督敎を信ずる者にして敢へて聖書を信じ名を信ずる者に非ず。博士及び其の一派は吾人が基督敎を絶對に完全ならず超自然的に非ずとするを如何に解せんとする耶、吾人決して故なく此の言を發する者に非ず、基

督教に於ける奇蹟等の超自然的の分子は耶蘇の教義に非ざるは、歴史的討究、批評的観察の結果として明なり。自由討究を否む者はイザ知らず、博士の如き既に其の必要を説ける者、此の自由討究の必然的結果たる非絶對的完全、非超然的の分子を排斥するを否ざる可し。又基督教が決して絶對に完全ならざるをば聖書の明に示す所にして、其の教義は団結躰のものに非ず、漸次發達成長す可きこと耶蘇の言行に徴して明々白々たり、ヨシ耶蘇の言明に之を證せざるにもせよ、彼の一大偉人、空前絶後の俊傑にして豈此の覩易き理を知らざるの理あらんや、既に基督教を以て超自然的に非ずとし、絶對に完全ならずとす。今にして之が發達進歩を圖る、豈決して基督教の教義に背く者ならんや。論者或は曰はん既に基督教を以て完全ならずとせば、敢へて布教の要なしと、然り不完全なるもの素より布教の要あらず、然れども基督教の完全ならずとは絶對に完全ならずと云ふに止まりて、全く不完全と云ふに非ず、素より二千年の昔なる教を其の儘採り來りて之を再演せば、或は人の嗤笑に屬す可きも、吾人は其の精神を採り其の教の本義を採り來る者也、耶蘇の教は當時に適して施せるものにて、風俗習慣を異にし、時代を隔つる今日に直行す可きに非らず。於是乎其の同化も敢へて教義に反する者に非ず、基督の教は實に其の精神に在る也。基督の教は何れの國躰に適用し、何れの國に行ふも敢へて悖るとなきを知る可き也。

（未完）

唯一神教派と正教派との比較に就て（第十四號の續）

白　眼　子　稿

余は之れより進んで唯一教か宗教上の理論を以て如何に個人の實踐躬行上に勢力を及ぼすや又正教か其宗教上の観念信仰を以て如何に個人に感化を與ふるや兩者に於ける勢力の强弱如何を學術上幷に實際上より調査比較し以て之か優劣を研究せむとす想ふに此問題たる決して不要に屬せさるのみならず現今我か社會に於ける實際問題として宜しく十分に研究すへきの價値を有

するものなりと信するなり茲に余輩一個の管見を以て忌憚なく兩者の優劣を評せしめは余は則ち云はんとすユ教の長所は理論に在りて實際に在らす正教の長所は理論に在らすして實際信徒の信仰厚きを以て多く清潔の士、篤行の人を出すにあり

樂天曰、抑も何の據ありて兩者の信仰厚薄を論し得るや、恐くは白眼子の編見に非るなきを得ん、

と是れ他なしユ教の神學は偏せす黨せす其歸する所、常に正々堂々の趣きあれはなり故に其要旨に謂らく大凡世界に於ける宗教は一として其發達の旨趣を同うせさるはなし乃ち彼の狉々たる亞非利加蠻野の黑奴と雖も猶ほ且つ天帝を信し祈禱を奉するを知る况や印度に於ては釋尊を出し支那に於ては孔夫子を生し猶太に在ありては耶蘇基督を出したり要するに其說く所にこそ精粗の差別、程度の高下は存すれ未だ其規を一にせさるものは之れあらさるなり故に世界の宗教は盡く兄弟の親あり朋友の誼あり宜しく共に倶に協同和合して以て天帝の眞道を研究し現世紀に至るまて漸次に發達進步したる哲學及科學の智識を加味し更に眼界を廣くして以て萬世不磨の一大眞理を確定し眞に四海兄弟たるの實を擧ぐべきなり嗚呼其志や高遠にして且公平なりと謂ひつべし是れ余の大に敬服稱賛して措く能はさる所なり而れとも其之を信して之を躬行せんと

樂天曰、果して然らは幸甚なり

欲するものより視るときは則ち其理論寔に曠々乎として此の如く其大なりと雖とも如何せん耶蘇教を信せんと欲すれは其金科玉條たる聖書は既に巳に誤謬ありと云ふことを是れ第一に信徒の心を惑亂するの虞れあるものなり

樂天曰、耶蘇降生以前又は以後に在りて著作せられたる經書も亦耶蘇教なりや、否らされば舊新兩約全書中多少誤謬あるも耶蘇が垂訓せし處の章句に誤謬なき限り耶蘇教を信ずる敢て難からさるべし、吾子は耶蘇の未だ嘗て教ねざる事柄にして且つ耶蘇の教訓に齟齬せし後世人の捏造說も經書中にあるものは盡く耶蘇の教訓なりとせざるのみならず、斯くするは大聖耶蘇の品位を低落するものなりと信ず

何んとなれは如何なる區域まて眞正にして將た如何な

る部分は誤謬に屬するや未た之を明示したることなけれはなり語を換へて之を云へはユ敎は殆と信憑すへき確固たる經典の據るへきなしと云ふも可なり故に之を推言すれは四書五經も以て經典とするに足るべく佛經も以て經典となすに差支なからん然れとも是れ等しく人爲の書籍に過きされは現今の哲學上科學上の眼を以て之を視るときは豈に盡く完全無缺なりと云ふを得んや是に據りて之を觀れは佛者も以てユ敎徒たるへく儒者も亦ユ敎徒たるの資格あるへし果して然らは日本に向て復たユ敎を說くの必要を感せさるなり何んとなれは日本人は此點より觀察を下すときは盡くユ敎徒に非さるはなしと云ふを得へけれはなり豈に斯る道理あらんや是れユ敎は宗敎としては大に其團結を强固ならしむること彼の正敎に遠く及はさる所以なり

樂天曰、ユ敎徒に經典なきにあらずして反て他宗派に比して經典とする處の範圍廣きのみ、此の範圍の廣きを以て斷然之れを皆無とするは不當の評論と云はざるを得ず、何となれは吾人は信ず敎法は神、人のある處何國何州にも存在するものなれば隨て之れが聖典たるものも亦各處に之れあるべし、然りと雖も之れ盡く神爲不可思議の經文に非ずして天然なる人爲の聖典なりと、故に彼の天地の一小局部に跼蹐し宗派的觀念の爲めに眩目せし輩の迷頑不靈にも唯だ自己の神言こそ唯聖なりと妄信する者と勿論同一のものに非るなり、故に所謂ユ敎の眞理なるものは萬國の敎法に顯現し萬邦の歷史に其證憑を殘存せり此の眞理は六合に瀰滿したるものにして彼の一宗派以內に在て眞理にして他宗派に至れは外道と化するが如きものに非るや萬々なり、

又曰、吾人の團躰は或る點に於ては勿論宗派的觀念の爲めに本性を失せし人々の如く頑にして固きものにあらざるべし

之に反して正敎信徒の狀態を視るに聖書を以て眞正に神の言語なりとし耶蘇を以て寔に唯一の神子なりと確信するか

樂天曰、正敎徒にして果して論者の言の如くに聖書を信認せば彼の人爲の書籍を以て妄りに神の言語と定め耶蘇を以て神子と斷定するものにして所謂自分免許の判斷と云はざるを得ざるべし

故に晨に夕に課業として必す聖書の字句を誦讀し以て之を己か薄弱にして罪過多き心に對照し些少の過失あるも眞實に天帝に祈禱を捧けて之を懺悔し又身如何な

る苦境に沈淪するも百万の讐敵に圍繞せらるゝも猶自若として動せす己の友に耶蘇基督あり十字架の苦境に在りてすら猶ほ能く罪人を愛撫し正義と眞理の爲には身を以て犧牲に供し一歩だも功名榮利の爲に其志を奪はれさる好例あり

樂天曰、經文素讀の數を以て、教會へ出席せし度數を以て信仰の有無を速斷す危い哉

我宜しく彼の大勇に傚ひて難事に處す亦遺憾なからんとて信徒の心情の牢き實に鐵壁も啻ならざるものあり其確信の美豈に敬服に堪へさらむや斯る信仰を以て團結せるの教會誠に此の浮薄なる社會に對して如何なる大事業をなしつゝあるや或は慈善病院を建設し或は學校を創立して矇昧の民を教育しグリーンランドの氷原も爲に春日和光に浴しサハラの熱砂も爲に冷風清氣を生するに至る眞愛の發する所は人生幸福上進の一大要素たること炳として火を見るよりも明なり嗚呼之を外にしては社會改良の實功を奏するに足るものなし矣是れ正教派信徒の把持せる信仰一念の凝結より成りたる晶塊にして即ち社會上に發現したる事實なりとす嘗て聞く本多庸一氏滯米の時日本の社會と米國の社會と其最も異なる點を觀察して曰く我國に欠くる所のものは耶蘇教家内（クリスチアンホーム）なりと余か淺薄なる實驗に徵するも亦然りとす故に余は大に正教派の實踐躬行を嘆賞して措かさるものなり

樂天曰、好し一歩を讓て論者の言の如く ユ教徒は不熱心なりとするも未た嘗て正教熱心家の如く火刑を世に行ひ己れと道を同ふせさるものは小數なるを侮り其の首領者以下を虐殺し天意に叶へりと謳歌せしとは未だ嘗て之れなきなり、吾子は 正教徒の 善事業を世に旗てたるを承認せりと雖も ユ教徒豈獨り 無爲にして 今日を過ごせしやは乞ふ詳細なる歴史を繙讀せよ明解其の裡に在り、

結論

余は前段に業に已にユ教と正教との比較を詳述せり而して各々得失あるは蓋し社會に存在する事物に於て免る可からさる所とす之を要するに如何なる事物にても其利の最多にして其害の最少なる者を取捨撰擇して以て吾人人類の幸福を上進發達せしめむは苟も志士を以て自任するもの丶須臾も忘る可からさる所なり余か此

學の如き即ち觀察の及ぶ限り之を調査して世に公けにし以て大家の垂教を促さんと欲するに過ぎさるなり夫れ社會の事物は盡く一定の方向に進行して一瞬時間も靜止停滯せさること猶恰も地球の運行を止めさるか如し宗教も亦社會の事物として最要部分を占むるものなれは思想の發達如何と時と所とに依り其程度に高下の差あるは是れ自然の數にして毫も怪むべきにあらさるなり既に第十九世紀は思想界劇變の時代にして將來も亦其變遷なかる可からず而して其變化の極終に善を以て惡となし正を以て虐となすに至るを得んや然れとも此の如き疑問を發し又決して斯る杞憂を懷くも要せさるなり何んとなれは其變遷を來すや必す思想に基かん而して思想は則ち一に眞理を以て其標準となすが故に如何に變遷するも其裡面には必す一定不變の一大主義ありて包藏せらるゝや明なり則ち此の一大主義を指して眞理とも云ひ又神主とも稱ふめり

現今各派神學上の爭論は殆んと其沸騰點に達せしものゝ如く甲辯し乙駁し囂々嘵々皆な宗教新聞の最好材料たらざるはなし是れ各派盡く眞理てふ大道を進行しつゝ相互に驅馳衝突するの實況に外ならさるなりジョン、フヒスク曰く宗教各派の確信宣言と宇宙不可思議の實在(リアリチー)とを比較對照するに世に天眞を得たると嘆賞せられたる神學説の注解說明も其光輝甚た微弱にして僅に淺薄の地層と全躰の地球とを左右の秤板に載せたるの觀あり又曰く太古より現今に至るまで冥想(スペクユレチーヴ)革命(レヴオリユーシヨン)即ち哲學上思想界變遷時代の經歷に徵し實驗に基きて觀察を下すに其變遷頗る頻繁にして前代の智識は老朽し信仰は墜落し彌か上にも彌增に信仰箇條に信仰(フエイス)箇條を累ねたれとも唯宗教の最要素たる信念なるものに至りては決して缺損若くは打破し能はさるものにて依然宗教の蘊奧なる底に沈在すとジエームス、ラッセル、ローウエル曰く各時代に於て神を崇拜するの狀態は各々其時代の神に對して思想を以てするものにして其思想たるや多少當時の世俗的塵埃を混同するも一時代を經過する每に其塵埃は脫却して光輝を增すの觀ありとウ井リアム、アイ、ローレンス曰く凡そ神學は其派

の何たるを問はず皆悉く宇宙に瀰漫せる一大精神界を概括せんとして各大家の最も熱心に千考萬慮したる結果に非さるはなし故に總ての神學に對して必ず尊重敬愛の念を表せさる可からず夫れ一神敎と云ひ多神敎と云ひ或は三位一體說と云ひ或は唯一神敎派と云ひて各々名目こそ異なれ相互に反目疾視、論難攻擊するか如きは盡く非なり何となれば是等は盡く宇宙最高の神を注解了知して而して之を概括せんと欲する人心の表顯に過きされはなり嘗て聞くダニエル、ウエブスター一友の來りて三位一體說に附き大に論難考究する所あらんと欲せしに氏は悠然として答へけらく君も僕も天上の數學三と一との差を知らさるなりと實に至言なりと云ふべし余は正に云はんとす　わけのぼる麓のみちは多けれど同じたかねの月をみるかな

讀者以て如何とす請ふ垂敎を惜む勿れ

樂天曰、ダニエル、ウエブスター氏は彼の大辭書を編纂せられたる大家なりしは皆人の知る所なり、然れども事宗教に關するに至ては斯かる曖昧の言辭を以て之れを抹殺し去らんとす、氏をして若し彼の大辭書の裡に斯かる曖昧の文句を挿入せしめしならば、氏の名は辭書と共に亡ばれん、氏は天上の數學三と一との差を知らずと云つて暗に三位一躰の妄說を保護するか如し、然れども今若し宇宙間の天則（即ち法）にして其合一を欠くとすれは今日の智識は盡く暗夜に黑牛を探くるの類なるべし、之れに反して吾子は茲に一大信仰あり此の信仰は彼の超理論者又は理外理論者の如き曖昧なるものに非ずして確實なる信仰なり、是れ他なし宇宙間天上天下法は盡く合一なるをなり、換言すれは天則の一致せるをなり、今若し地上の數理二一天作の五にして天上の數理天作の八と云ふときは何人も其妄に驚かざる、何となれは地上の數理能く天文の上に合一なればこそ吾人は之れを用ゐて天球を不完全ながらにも觀測し之れを以て茫々たる大洋を晝夜となく安全に航海し得るに非ずや、吾子は天上天下至る處善の賞せられて惡の賞せられさるを知る、是れ天則の合一なるに外ならずして何ぞや、茲に到てウエブスター氏の妄極まれりと云ふべし、然れどもウ氏決して此の論法を自製せしには非さるべし、何となれば舊約書に在てジョブも嘗て之れに類せる消極的否定說を用ゐたり、所謂敬して之れを遠ざくとは是れ之れを云ふか、此の評は勿論白眼子に向て試みたるに非ずして世のジョブ的人物の妄論を辨したるに過きざれは、白眼子幸に舊友の好みを以て不肖の妄評を恕せよ、

雜錄

○會堂及寺院

基督教の會堂には、幾千百の善男善女常に時を以て相會し、禮拜し、祈禱し、説法を聽聞す。然るに之に反して全國二十六萬有餘の佛教の寺院を見るに、門樓多くは荒廢の觀を呈し、伽藍半は朽壞きたるに、加ふるに堂上には曾て信徒の隻影だも見ると能はず、其の景象の甚だ寂寞無聊なる、殆んど無人の境を行くが如く、人をして是れ等の寺院何が爲めに建立せられ、何が爲めに存在するものなるかを疑はしむるの已むを得ざる者あり。抑も知らず佛教家は如何に是れ等多數の寺院を利用し、如何に其信徒を滿足せしめ、又如何にして濟度の實効を奏せんと欲するか。若し宗教家の任は只死者を引導し、空理を談じ、淨材に衣食して而して其の生を終るに在りと云はゞ、則ち吾人又を何か云はん。

○宗教＝教育の目的

宗教と教育とは其の目的に如何なる相違あるかを考ふるに（主として普通教育に就いて云ふ）第一宗教の目的は現世のみならず來世に亘りて、其の期する所頗る遠大なるに反して、教育は只現世のみを目的とするものなり。第二に宗教は專ら心性の修養を目的とし且つ道德を以て主眼とすと雖とも、教育には心性に關する教育の外更に軀躰の教育あり、又道德を以て之が主眼とする點に於ては、彼此相似たりと雖とも、宗教の如く道に純なるものに非ず。次に宗教は人に教ふるに過を改め善に遷る可きとを以てし、且つ之を導きて絶對眞理の本躰を覺悟せしむるを以て本旨となすと雖とも、教育の關知する所は此くの如く遠大なるものに非ず、只善意の情款を養成し、他日世に處するの準備として善良の習慣を修得せしむるを以て道德教育の歸趣とせり。されば、宗教と教育とは其の目的に於て互に相違せる所ありとは云ふ可きも、彼此相矛盾し若しくは相背反せりとは云ふ可からず。換言すれば、宗教の目的と教育の目的とは、其の範圍に廣狹深淺の差こそあれ、其の方向に至りては全く相一致するものと云ふ可き也、即ち二者共に改過遷善の一點に於て其の所歸を一にするもの也。

○世界諸宗教の特質

クラーク氏の著書「テン、グレート、レリヂオンス」中、

世界に於ける古今諸宗敎の特質を最も簡明に比較せるものあり大に研究の材料たる可きと信じ茲に譯載して讀者に紹介す。

波羅門敎	埃及の宗敎
(1)靈魂……	(1)肉躰
(2)物質……	(2)形式
(3)統一……	(3)雜多

波斯敎	回々敎
(1)自由……	(1)運命
(2)二元……	(2)神意
(3)鬪爭……	(3)服從

チュートン種族の宗敎	希臘人の宗敎
(1)自然の勢力……	(1)人類
(2)獨立……	(2)美妙
(3)戰鬪……	(3)發達

佛敎	孔子敎
(1)個人……	(1)社會
(2)自然の法則……	(2)倚古
(3)進步……	(3)保守

而して之素より表面上の觀察に過ぎず、深く其蘊奥を究むるに於ては其趣を異にす可しとは云へ、兎に角各人種の特性を詳に顯示して餘あるを見る可し。又チュートン種族の宗敎と佛敎とを比較し、希臘の宗敎と支那人の宗敎を比較せば、

チュートン種族の宗敎	佛敎
(1)自然の勢力……	(1)自然の法則
(2)個人……	(2)結社
(3)活潑……	(3)姑熄

希臘人の宗敎	支那人の宗敎
(1)內心……	(1)形式
(2)進步……	(2)保守
(3)美妙……	(3)秩序

○いのち記者

嗚呼記者も亦爭を好むの徒なる哉、「吾人が前々號に『神學生を奴隷視する勿れ』と題し記者の注意を惹きたりしに、記者は如何に口惜しくや感ぜられけん、毎號牙を揃へて喰てかゝれり、吾人之に對するの大人氣なきを耻づれども、記者の眠氣醒しに一鎗進呈らせん。」記者は既に狂◎りたる主義に憑りて進む（或は退くに非ざる乎）と自白せり、窮鼠敢へて逐ふ可からず、吾人復何をか言はん。唯一言御注意申さん、顏を洗つて（記者の口吻）主義の宣言を見よ、ユニテリアン敎はユニ

テリアン敎たり、雜誌は雜誌たり、何を以てか區別なからざらん、記者若し宣言を解せずば更に解して御聞かせ申さん、主義の宣言第二項に『「宗敎」はユニテリアン弘道會に於て發行し其目的は純正宗敎の智識を明にし實踐を勵まし之が改良進歩を計るに在り元來ユニテリアン敎は宗敎上の一運動にして其本源と歷史とに於て基督敎たり然れとも「宗敎」は決して表題に掲げたる濶大包容の名目に背き一宗一派に偏するものにあらず』と、吾人は素より基督敎徒たり、然れとも吾人の信ずるは記者の云ふ如き狂りたる基督敎に非ず、聖書如何に尊しと雖も、夢中に之を信ずる者に非ず。記者知らずや聖書は徹頭徹尾耶蘇の敎義を記載せるものに非ずして、後世人が想像と口碑とによりて敘述せるものなるを、凡そ言論は練達せる速記者によりて記せしむるも尚多少の誤謬を免れず、況んや無極無邊の一大眞理を口碑等に憑りて敘述せるをや。記者は之を以て絕對的に完全なりとす可けれど、吾人は批評的に觀察し、歷史的に講究して、苟も實際及び眞理想に訴へて是認せざる限は、之を棄却するに吝ならず。然るに記者は之を以て無主義となすか、吾人は甘んじて之を受くる也。人は無主義と云はゞ云へ、吾人は合理的大道を歩して耶蘇の敎徒たらん者也。吾人素より確信の必要を認む然れども記者の如き偏執の信仰に非ず、吾人は唯哲學科學の基礎の上に立てる信仰を有す、之を記者より見て以て不信仰となす、固より其處、記者の如き頑迷偏僻なる信仰に非ざれば也。記者は又福音新報が本誌を評せるを見て加勢を得たりとなし、欣喜雀躍吠え來れど、エヴリーシング、ナッシングの評吾人に於て何かあらん、本誌は正理公道の爲には敵と味方を問はず、唯其期するは紙上を擧げて自由討究の戰塲となし、益進んで未發の眞理を發見せんとするに在り、故に神道にまれ、佛敎にまれ、又記者の如き迷信家にまれ、喜んで之を容るゝ者也。記者兎に角蟷螂の斧を以て龍車に當るの愚を學はず、尋常に哲學神學の研究をなさんこそ得策と存ずる也。

○俗より俗

世を稱して俗界と云ひ、己を呼んで出家と云ふ、何ぞ名實相背くの甚しきや。世に其心根の賤陋猥褻なる爾出家より甚しきはなし。故に出家は俗より出てゝ俗より俗に、敢て三文の價値もなし、彼等復還俗して俗界の人となる、俗界の俗の俗より俗にして又三文の價値なし、嗚呼爾僧侶遂に度し難し。

○淨土宗大會

淨土宗にては全國同宗寺院より六十名の代表議員を撰拔し、芝増上寺内に於て大公會を開設すと、其旨趣や甚だ善矣、然れども出家未だ家を出でざるにや、佛教大會と紛擾とは常に相伴ふが如し、諸師大に鑑みよ。

投　書

説の可否は記者其責に任せず

井上博士の論文と基督教徒

歸信居士

客月來井上哲二郎氏の教育と宗教の衝突と題する論文諸雜誌に掲載せらるゝや今尙ほ其の稿を了へざるに基督教徒中之を批評するの聲最と喧し以て井上氏の論文が如何に基督教徒の注意を引しかを知るに足る殊に基督教徒中重立ちたる牧師宣教師等は頻に評議をなし辯護運動をせんとし居りしやに洩れ聞けり余は當に其の然るべきを信ず就中ニコライ派の如きは正々堂々其の實を明かし以て天下の惑を解かざるべからず又新教中或オルソドックス派は從來其の信徒中に行はれし奇事に就き答辯せざるべからず唯夫れ自由派に至ては井上氏の論に對し寸毫の辯解を費さずして可なり何となれば自由派の所謂基督教は近世の批評的講究上より立論せる基督の基督教を說くものなればなり即ち彼等は基督の眞教と後世の所謂る附加的基督教とを劃然區別して前者を取る者なれば歷史的基教に辯護の責を負ふのみにして後人の作爲せる教義迷信等は敢て知らざる所なり余は博學井上氏が今回の論文（宗教第十六號）を以て自由派をも駁せしにあらざるを信ず。若し斯る論法（本日迄の稿に據る）を以て自由派をも攻擊するものとせば自由派は答へん彼の內村氏の事件の如き之を內村氏に問ひ服部氏の事之を服部氏に問へ歷史的基督の教旨決して之を見ず又之を奉ずる自由基督教徒も其の責を有せずと而して氏に向ひ何故に名こそ同じけれ實大に相異るオルソドックス派と自由派とを混同し單に耶蘇てふ總稱を以て（自由、固執の別ちなく）論ぜらるゝやを問はんとすオルソドックス派仆るゝも基督の基督教は依然たるべく之を奉ずる自由派も確乎たるべしオルソドックス派の事變は自由派の關する所にあらず況んや辯護をや自由派の責任は基督の基督教にあるのみ天父、博愛、悔改の根本的教義にあるの

み

日本に於ける神學者及基督教主義哲學者

靜觀學人

我邦の基督教は其の歷史、信徒の僅少なるに比して有爲の人物に乏しからざるは吾人の密に喜ふ所なり今其の神學に關係ある者を擧げんに

小崎弘道氏　氏は實着溫和の神學者にして哲學にも多少心を傾けらるゝが如し深く藏めて輕しく言はざるの風あり

森田久萬人氏　氏は比類少き篤學の士なり其の學識は普通の學者を超過するに足る

横井時雄氏　氏は實際的神學者なり時勢を看破する甚だ妙

海老名彈正氏　氏も亦一個の英人物、神學の識、教務の器に加ふるに雄辯とを以てす

大西祝氏　は質素誠實なる好學者なり基督教界のみならず日本哲學者中輕からざる地位に立てり氏が將來日本のロッツェーたらんことは吾も人も共に希ふ所

三並良氏及び丸山通一氏　此の兩氏は邦人中進歩せる獨逸神學を代表するものなり論法往々精鋭なるを覺ゆ

植村正久氏　氏は我邦基督教者中有名の士にして學力筆力兩ながら備はれり其の學說には相違する所あらんも其の趣は大に英國のマルチノー氏を學ぶに似たり

中島力造氏　氏は帝國大學の教授にして學識深し長ずる所は哲學史、倫理學等にして神學に密接の關係を有せり

以上は唯世人の能く知れる者のみ記したるものなれば尙ほ此外幾多の臥龍なしと言ふにあらず余の寡聞之を耳にせざりしのみ否之を耳にせしも忘れたるに因るのみ今茲に思出さゞるのみ臥龍諸先生諒之

尙ほ和田垣、元良等の諸大家も素より英人物に相違なけれど神學に直接の關係なければ今茲に擧げず

ユ教の急務

歸信居士

宗教上の自由主義漸く歡迎せられ人々空理を遠けて實際を重ずるの今日ユニテリアン一たび奮起せば其の勢力破竹の如けん、自由教會の設立、實際的宗教運動之れユ教今日の急務にあらずして何ぞ

雜錄子曰適論、適論。吾人大に歸信居士の意を賛す居士幸に怠ると勿れ、以て協心戮力大に爲すあらん。

批　評

バプテスト敎會略史

横濱山手六十七番館米國バプテスト共同傳道會發行

本書は米國人ヘンリー、シー、ヴェッダー氏の原著をエフ、ジー、ハリントン及び久代外治雨氏の手に譯せられたるものにして書中全くバプテスト敎會歷史にして元始の基督敎會より中古暗黑時代を經現時に至れる由來を錄せるもの譯者記して基督敎會の性質を知得し基督敎に關する多くの疑問を解くの鎖鑰とならんとを祈ると云ふ果して譯者の期する所に適ふ可きや吾人は之を知らず兎に角バプテスト敎徒たるものは一讀す可きの書ならん

女學雜誌　文學界

東京市麴町區下六番町六番地女學雜誌社發行

潮流は大に隆れり文學社會の潮流は七八年來隆まり來り今や其の極點に達し評論的に進めり然れども勢熱は何時か冷む可く時流は一時のものなりされば時流につれ熱度に浮かれて生れ出てたるものは亦一時のものなり其の根本的の主義を以て立つ者の外は皆冷却し去て唯僅に早稻田文學しがらみ草紙の評論的文學雜誌が生き殘れるのみ而して是一は英文學の趣味を帶び一は獨逸文學の趣味を含む。今や此間に處して一種の特色を帶びて生れ出でたるものあり何ぞ女學雜誌の文學界是れ也記者は其一號發行緒言に記して「別に一派の旗幟を立てんとなど此冊子の志にあらず」と云ふと雖も第一號所載の琵琶法師（悲曲）吉田兼好、阿佛尼、文章の道、富嶽の詩神を想ふ、漫詩、附錄に女歌仙家集、兼好法師家集、阿佛乳母の文等其幽麗淸雋にして高潔なる其躰裁の淸楚にして雅致ある既に一と風異りたるものなり記者大に勵め世人は記者の手になる文學雜誌の出つるを待つや久し矣

六合雜誌

東京本鄕區東竹町廿五番地警醒社發行

第百四十六號には基督敎の總合的特性と題し天下の諸敎皆眞理を含有し互に相敬し相助くるの義務を有するものなれども其の間自ら高下完未完の區別判然たるものあり而して其の基督敎の長所とする所は基督敎の總合的特性に在りと論じ其の要素を五項に分論し最後に天下諸敎の特長を總合し一宗敎に於て之を天下に發揮するは今日の急務にして其の任務に當らんものは基督敎を措ひて將たまた何邊にか求めんやと論結せり又本號には大西文學士の「讀我觀小景」てふ演說筆記を載せたり其の結尾に曰く我觀小景は想像的文學の著作としては讀むに足る可きも哲學上の議論としては一向感服せずと氏が抱負の大なる其の識の卓絕せる吾人敬伏の外なし其の他本誌が常に材料に富める先宗敎雜誌としては第一流に居る可きものならん。

眞　理

東京神田區三崎町世光社發行

本誌は獨逸自由基督敎派の機關たりと雖とも其の學說としては全く我自

由基督教派を代表する者にして實に自由派の哲學者、神學者として吾人は之を稱贊す其の第四號には希臘哲學に於ける保羅神學の基礎（ムンチンゲル）使徒信仰の由來（キリストリープ）無前提智識論（キリストリープ）等基督教に於ける從來の學說を排して一新學說を開けるを見る可し若し我國今日の自由基督教の教義を知らんと欲せば先づ之を閲く可し。

同志社文學

京都市相國寺門前町
同志社內同志社文學社發行

同志社文學第六十二號には小崎弘道氏の傳道と吾人の責任と題する一篇あり中に基督教會に於て近時の新現象に二あり即ち一は外國傳道他は社會問題にして實に基督教の社會問題は嘗て期せざりし所にして基督教近時の一現象なりと論じ進んで近時の教會は神學の爭論を以て充ち信仰消極的に傾き儀式的の死せる信仰に流れ基督教の特質たる傳道的を忘れたりと嘆じ更に外國傳道に緊要なるは國民を導き之に自國傳道の責任を負はしむるに在りと論結せりサスがは同志社の機關ダケありて見る可きもの少からず。

女學雜誌

東京麴町區下六番町六番地
女學雜誌社發行

白表第三百三十八號には當世治安策と題して一、三田の老先生が主張する名譽分配の議は眞箇の改革に非ず先づ人の心を改革するを以て根本的改革策となし二、石を化して人と爲すとて名譽分配策は策の得たるものに非ず之れ唯凡俗卑下の名譽が散布せるに止まり依然俗氣紛々たり吾黨の期する所は人世の大目的を索めて安身立命の地位を得るに在り三、立脚の地は目的としての名譽に非ずして天職を考へ其の任を辨じ至誠愛人の念を以て吾去就を決するに在り四、百年の大計は最も眞面目に最も質朴なる地方民に交り根底深き事業を興すに在り有爲多望の人種速に去つて田舍に入れ入れば則ち現今の雜々たる世の騷ぎは少なくも其の過半を減す可しと論告せり吾人も常に三田老先生的の姑熄手段を取るを厭へり請ふ世の有爲多望の人士女學雜誌の勸告を容れ眞面目に世の根本的改革策を講ず可き也。

右文

東京神田駿河臺西紅梅町
十二番地右文會發行

本誌は右文會の發行にして欄を分つと論說史談講義錄名勝誌文苑等の八、其の第四號載する所の講義錄中老子、書經、唐詩、文章軌範、大學等の諸講義は之を蕃山、山陽、艮齋、因是、慊堂等の古人の遺書に據りし所現時世に行はるゝ何々講義錄若しくは何々全書と稱して營利上出版するものに勝り漢學の眞趣を味ふに足らん乎。

彙報

◉萬國宗教大會　本年七月米國シカゴ市に開かる可き世界大博覽會の附屬として世界諸宗教の和衷協同の實を擧げ益其發達を圖るの目的を以て開かる可き萬國宗教大會は同市レーキ、フロント公園內紀念美術館（同

館の廣は三千餘人を容る可きもの二室三百人乃至七百人を容る可きもの二十有餘室）内に開かるゝ由而して自由神學校々長マッコレー氏は今回同大會の顧問委員に推撰せられたり因に云ふ南條、島地、柴田の諸師も佛教家とし招待せられ出會の承諾せられし由

◉萬國ユニテリアン大會　吾人ユニテリアン教徒の豫て抱持する自由主義を博く世界に輝さんとて萬國宗教大會と同時に同所に開かる可き萬國ユニテリアン大會代表者を撰定せり當自由神學校々長マッコレー氏は日本ユニテリアン教代表者に撰定せられたり又同時米國に於て開かる可き自由主義基督教の大會にもマッコレー氏は委員に推撰せられたりと云ふ因に同氏は是等の大會に出席し傍ら教務上の件に付來四月頃歸國の途に上ると云ふ

◉ユニテリアン文學會　同會は開會以來日猶淺しと雖とも會員の盡力と熱心とにより追々盛大に赴き去月第二第四兩日曜日には會員の演説及び討論會あり皆熱心に之を演じ大に見る可きものあり自由基督教の前途も亦多望なる哉而して同會は以後引續き毎月第二第四兩日曜日には演説及ひ討論會を擧行し會員の紹介ある者には傍聽を許すと云ふ

◉普及福音教會の新傳道區開創　普及福音教會は其本據を東京に置き從來專ら府下と近縣に於て實地傳道を勉め傍ら機關雜誌「眞理」を以て其主義を擴張せられしが是まで該雜誌の爲に盡力せられたる丸山通一氏は今度大に實地傳道に從事せらるゝ由にて本月中に大阪に移り新傳道區の開創に着手せらるゝ趣なり○洗禮豫備講義は本月より毎週木曜日夜小石川區上富坂町三十九番地牧師ムンチンゲル氏宅に於て開講せらる

◉東京青年會　には去月十一日集會を開き此迄は別に定期に會員集會して運動の方法を議し或は祈禱會を催す等のことなかりしが已に會館建築も日々其工を進めたれば今後は會員自動的運動を奬勵せん爲め毎月第三土曜午後六時半より祈禱相談會等を催ほし且其節は會員各自の演説等もある由

社説

神に關する信仰（前號の續）

教授　マッコーレイ

余は本題を解釋するに當り猶ほ一つの歷史的事實を引用するの必要に迫れり、今を去る事大約三百年、實に歐洲に在て開闢以來未た曾て之れあらざりし處の奇異驚愕に堪へたる大變革を人心の上に來たせり、此の變革の巨大なるもの丶一二を擧くれば則ち、吾人の依て生活を營む處の地球と太陽及ひ諸星宿との關係是れなり、彼のコーパルニカスの推理は此の地球を太陽及ひ諸星宿か周廻するに非す、反て地球は太陽の周圍を回轉して四時を爲し且つ地球は自轉して晝夜を爲すものなりとせり、或はガリレオの望遠鏡に依り諸星宿を抱藏せる處の天空は當時人間の臆測せしよりも遙かに廣大悠遠にして其内に數萬の星界碁布せるものなる事を發見せり、或はケプラーの遊星運行の方則は終に人心より蒼々たる天外穹隆狀の屋葢ありとせる妄想を除却せり、或はニユートンの引力說に依り總への物質界に於ける勢力（或は重力）及び其の性質を明らかにし、且つ總への勢力は宇宙間何れに至るも合一なる事實を證明せり、而してコロムバス以來世界を一周して航行するに至るも、從來眞面目に說法せし彼の地獄の針山、地獄の竈釜の處在を失ひ、蒼々たる天上も亦神の宮殿玉坐より天使天軍の屯在所を失ひ、盡く其の跡を收むるに至れり、斯くの如く僅々兩三世紀間に古今未曾有の最重大なる智識上の變革を發現し、今日となりて此の潮流は普く文明人種の腦中に到達せり、彼の死地に瀕する舊來の憶說は此の斬新なる科學と到底併馳する能はさるものにして、今や『宇宙の中心は何處にもありて又其周圍とては何處の極てに至るもなきものなり』との推理上の觀念をして益々强盛ならしめ、隨て神は宇宙の或る一點に寶坐を定むるか如く憶測する事の益々困難となるに至れり、之れに反して神

は此の物質界宇宙の何處に於ても融合充滿し眞實に現在する者とはなれり、此くの如き新鮮なる神の遍在説に依りて彼の舊き專制君主の如き一神説の全躰は日々益々薄弱に傾向せり、故に各國に在て太古より傳來の口碑に在るが如き神は實際何時迄で其の餘喘を保ち得へきものなりや、或は神は口碑に在るが如く此の世界と全然分離せるものなりや、否なやに向て批評的討竅の必要に迫れり、或は宗教的口碑として最も世人が尊重する處の人間墮落説、惡魔の説、神の化身の必要事件、贖罪の奇怪なる道理、救ひの設計、天堂及び地獄の所在、此の世に於ける神の王國並に神の政治の企望等の敎理は、全く神の觀念に際限ありとし、又神は遙遠なる十萬億土に存在し、此の世界及ひ人間と遠く離隔せりと想像せし時代に非るよりは得て信すへきの敎理に非ずとは、目下多數有識の士が專ら主張する處なり、然れとも斯かる舊神學説は多少今日に於ても殘留し、過去二百年間の歷史は此れ等新舊兩思想の衝突せし實錄にして、今や舊神學説は日々死滅に瀕し、新鮮なる信仰は大に社會に普及し、承認せらるゝに至れり、

余は此の問題に答辯を附するに當り最初已てに論ぜし如く、吾人の神に關する信仰は最も明了なる智識と最も道理ある宇宙の觀察とを兼ね、今日人類の最も發達進歩せし道德上の要求に向て充分適當なる價値あらさるへからずと信ず、而して吾人の信仰——無限永久の氣力にして萬有の依て來る所の原因なり——とは只だ科學上簡單なる神に就ての信仰記號に過ぎずして、吾人の神に關する信仰は即ち全智全能にして生命及び原因となりて六合に瀰漫す、換言せは此の宇宙は即ち神の現象、被造物にして全く神の裡に抱括せられ、神は吾人の發端、直接の氣力或は萬有の實質、本躰、生命にして近くは地上を照らす太陽光線の細微分子より最も遠き火雲に至る迄盡く神に依りて產り神に依りて動くものなり、

光線分極術の立證する處に依りて之れを例せんに「地球の分子を打擊する時に當て發作する一小震動は遠く數億萬里外の星辰に同一の波動を傳達するものなるを

以て今茲に一事を作さんか、此の發作は上下八面に之れを傳へ其の震動に强弱の差こそあれ、終に廣漠無限の宇宙をして盡く震動せしむるに足るものなり、果して然らは、此の宇宙は決して死せる物質の集合躰に非ずして無究なる生氣の充實せるものたるを知るに至るや甚だ容易なり、されは吾人の生を營む處の一小世界も亦此の大勢力の裡に網羅せられ、望遠鏡を以て之れを窺ふに非ずんば見るへからさる遠距離の星宿より發射する光線極微分子の震動と相連絡するものなるを知るを得べし、是れと同時に吾人は彼の犯すへからさる全能力が萬有界に到達せりとの結論に向て如何に接近しつゝあるよ！誰れか生々舍まさる生氣勢力の內より人間或は砂礫の一粒をも分離する能はさるの理由を知つて、然して後ち無限永久の常住者(即ち神)は萬有を抱括せりとの思想に達せさるものあらん！吾人人類は太陽諸星宿と共に宇宙の一部分を構成せる者にして、隨て吾人は此れ等の諸星辰と相聯係して分離すへからさるものなり。斯くて此の宇宙なる文字の意義は嶄新にして貴重なる者となれり、而して天則秩序なるものは其の主動者の意志にして此の年代時日も等しく神聖なる者なりとの結論に至るは自然の道理にして間然すへからさる者なり、然らは則ち從來人間經驗上不可思議なる事物の解釋を改整せさるへからさるに至るへし。然れとも今深く神の攝理は此の世界と人類の上に於て如何なる秘蘊を藏する者なりやとの問題に迄で立ち入らさるべしと雖も、余は只だ此の新信仰の上に於て確かに古來人心の問題たりし、人生の困難、辛苦、罪惡等の事物を高尙に解釋し得べしと信して疑はさるなり、故に余は往古宗敎熱心家の曾て叫びし處の――神は猶ほ善なり――との高尙なる道德上の思想は尙ほ將來の宗敎界にも生存せん事を信ずるなり。人は自己の知れるに勝りて廣大なる見識理想を要するは勿論にして、此の見識に早晩到達し得るの道を發見するを得るものなり、尤も此の新信仰は過去人文未開の世に行はれしが如く神は慘忍、酷薄、嫉妬、復讎深きものなりとの憶測を以て眞實なりとする能はさるものなり、

如何となれは斯かる性質は之れを聖神と爲す能はさるのみならす反て今日の人間よりも遙かに劣等なるものなれはなり、

世の罪悪、辛酸、死苦、は此の新信仰に於ては決して神の憎悪より出づる者に非ず、反て神は之れを使用し以て世に正義、善良、泰平を産生せんとするの聖意に出つる者なりとせり、彼の舊神學に在て悪鬼或は悪魔なる者が製産せりとする處の、世に哀しむへき事物の出づるあらば、神は全能に在り乍らも之れを監督する能はさるか如きの嫌ひなきにしも非ずと雖も、吾人の結論は決して斯かる淺薄なるものに非さるや明白なり、吾人はカルヴンの想像よりも一層確實に此の世界は神のまに／＼産れ隨て絶對に神に依て統御せらるゝものなりと信して疑はさるなり、然らは則ち此の宇宙とあらふる生靈とを作爲し之れを統御し玉ふ神にして、其の被造物の價値より劣等なる事なきは勿論にして、若し其の被造物中に慈悲、愛敬、純潔の價値ありとすれば無論神は此れ等の諸徳を具備するのみならず、少くも被造物と同等なる價値を有するは自然の理法にして、造物者は己れの造化せしものよりも無限に超絶するものたるや云ふを俟たさるなり、斯かる抹殺すへからさる道徳上確固なる基礎の上に吾人の信仰は堅固なる企望を置けり、然る時は如何に世上無數の罪悪或は辛酸なるものは此の不可思議なる生命の上に簇り襲ひ來るも、時代と吾人の適當なる觀察力とは必らす此れ等の事物をして盡く宇宙進化の一段落とし隨て瞬時に過ぎ去るものとし、何れの日か此れ等一切の出來事は吾人と其の周圍に現在する處の萬有に向て純良なる結果を生ずるを見るの時あるべしとせり、人若し斯かる瞬時の經驗を以て神意の標準を測定せば其の愚反て狂愚よりも甚だしき愚者たらさるへからず、故に余は今日人間の最も高尚にして最も正當なる研究の方法は絶へず嚴肅なる信認を以て此の人間社會及び世界の萬事萬端の上に於て毎秒時に偶生する處の出來事をば未來永遠に迄で觀察するに在り然る時は必らず一層美妙、一層純潔、一層泰平にして尙ほ完全なる者あ

るを知るに到らん、吾人は天然自然に此の結論に到達するか、否らされは今日の智識を盡く否定し、吾人の最高尙なる箇人的法則并に道德的理想を蹂躪し去るに等しきものなり、吾人は萬有の依て來る處の原因、永遠無究の精氣に依り生産せられたるものにして、且つ結果は其の原因に超過すへからざるものありとせば、此の結論は實に至適必要の結論たらさるへからす、世界中何處に至るも慈悲なるもの丶人心に存在せる限り、神は飽く迄も惡者たる能はず、然れとも人をして神の智德、慈愛は總への智德、總への慈愛よりも遙かに完全なるものなりとの事實を知らしむるは猶ほ更らに永久なる時代と廣大なる觀察を要するは勿論なり、吾人は此の最も高尙にして嚴肅なる信仰の上に立ち、神の觀念の上に宗敎定義の根元を置けり、是れ則ち人間の最も深遠なる道德的觀念の下に發達せし哲學科學の高尙なる結論を宗敎的に化身せしめたるものなり、而して余は將來の「キリスト」諸敎會は勿論其の他の諸宗派も亦盡く舊來の迷信を去り、早晩此の新鮮廣大なる信仰の下に一致せん事を信じ之れを切望する者なり、余は本論を草するに當て、近世哲學の泰斗(スペンサー氏)の告白を以て起稿せり、今又此の說を終へんとするに臨み左に近世卓見の聞へ高き詩人の句を以てせん、

常住に惠みも深き獨り神、
理め給へる法道は一つ。
久かたの天が下なる成業は、
長しへまでも聖なる、
神の思のまに〳〵ぞ行く。

論　林

自由神學ハ積極的ナルヲ論ス

ウイリヤム、アイ、ローレンス

抑も神學上の說、宗敎上の論は古來より其基礎を全く肯定的若くは獨斷的に取りしものにして蓋し實際に於て往昔、社會人類、其文化の程度に照らして當に斯の

如くならさる可からざる理由の存するありてなり、然るに近時、批評の學大に其歩を進むるに隨ひ從來の肯定說に對して全く否定的の論歩を取るに至りしは蓋し學術の上進、文化の發達に伴ひ論說の變遷、轉倒は亦社會の事物進化するの餘波にして天下の趨勢に因由するものとす彼の歐米、文明を自稱するの諸國に在りて已に然り而して余は倘ほ日本に於ても既に其の然るを見る、客年十二月九日の發行に係る傳燈の如きは即ち其實證なり然らは即ち何故に斯る影響を宗教界に現出するに至りし歟と問ふものあらん余は之に答へて左項數條の要領に因由するものなりと云はんとす

第一、宗教上の質疑者は通常否定的の言語を用ひ既に幾分か其論法を變し乃ち古來の頑迷を蟬脫せしと雖正教派(オルソドックス)は未だ獨斷的若くは肯定的解釋の範圍を脫すること能はすして倘ほ其內に彷徨しつゝあるなり又彼輩は時に自ら許して否定的解釋を下すことなきに非すと雖吾人の所謂否定とは自ら大に其趣を異にせり

第二、之を歷史上に討ぬるに自由神學は往々正教派信徒を誘導して其端嚴なる信仰箇條を放擲せしめ以て彼徒の所謂異教民たらしむるは是れ爭ふ可からさる事實なり而して此異教民視せられし人々は已に幾許か眞理に近きしを確信するの厚きより頻に正教徒(オルソドックス)の妄想迷信を反論攻擊するに至る、其聲四周に傳はりてより之に反響するの趨勢は日々に科學上の發見、智識の進步に伴ひ愈々益々其度を高めんとするの狀況とはなりぬ

第三、然れとも米國に於ける唯一神教派(ユニテリアン)と正教派(オルソドックス)との論難攻擊は業に既に鎭滅せしものゝ如く復た相互の間に甚劇なる論戰を見さるに至れり然るに目今反て正教派各組合、教會中には區々の見解を異にする所あるより交々論爭鬩牆して外、其侮を來すの醜あるの活劇を演するは抑も何如そして然る乎是れ一に自由神學の餘勢溢れて正教派信徒者流の腦漿を刺衝するに職由せずんば非さるなり寔に自由神學の步武は益々速度を增して前進し宗教界革命維新の時期は愈

々切迫を告けて止まさるなり

世に自由神學を稱して破壞的なり建設的に非すと云ふものも亦少しとせす是れ即ち其一を知りて未た其二に達せさるもの丶言のみ請ふ試に見よ彼の代數學上の減法數理論を即ち或る一定の數量より或る負（マイナス、クオンチチー）量を減するときは數量全躰に取りて幾多の增加を見るに非すや是れ萬世不變の數理なり之と等しく肯定說を否定すれはとて俄に之を見て破壞的の事業なりと斷言すへからざるものあり請ふ試に之を擧けん例へは玆に神は嫌惡の動作ありと云ふ肯定命題を否定して神の動作は純愛なり嫌惡ならすと云ふか如き又人は罪惡深くして絕望に歸せりと云へる命題を否定して人は進化發達すへき動物にして極めて有望なりと云ふか如き皆是れ肯定說を否定したるに外ならずと雖其實は消極的に非すして反て積極的に論定するものなり果して然らは則ち眞理てふものの眞實の光輝を現出せんと欲せは須く之に附加隨伴する所の誤謬、其方法手段として應用したる失躰、（現今の哲學上、科學上の智識に照らして之を言ふなり）を排斥すへきなり夫れ然り而して宗教なるものは聖書の全部を擔ふて進む人に依りて創めらる丶が故に宗教上の要素も亦聖書を以て直に神の言葉として尊崇するか如く其記錄の誤謬、荒唐無稽、及其卑陋なる道德も亦聖書の授受と共に授受せらる丶は蓋し暗黑なる社會に於ては免れ難き自然の數なり而して現今に至り稍く多少の光明を得たれはとて尙ほ其中に就き特に眞正の敎訓と仰くへき眞理をのみ甄別撰擇せむは思ふに一般人類の得て能くすへき所にあらさるなり然るを其誤謬を去らむと欲して却て全然之を放棄し若くは宗敎即ち聖書に養成せられたる思想を以て聖書の放棄と同時に宗敎其ものをも合せて放擲に付し而して尙ほ且つ之を觀さるの謬見を生するに至る恐れても尙ほ懼るべきなり豈に自由神學は此愚を學ふものならんや故に曰く自由神學は破壞的の事業に非さるなり

抑も自由神學は聖書の荒唐をも誤謬をも併せて受けさる可からずとは爲さす又聖書內外の卑陋なる道德敎を以て一身保護の正鵠法規と爲すことを排斥する所以の

ものは蓋し斯の如きものゝみに拘泥するときは則ち天稟の人性を發達養成するに大害を來すと尠少ならざるか故なり抑も聖書の吾人人類に益する所あるは實に吾人が絶えず發達進化しつゝある生涯の行路に於ける純善、純美、及其の至大不可思議なる勢力と歷史とに視て決して疑を容れざるものなり（吾人の多數か知る如く）故を以て人性發達に妨害を加ふるもの又は宗教界の方針とすべき道理を拒否するか如きことあらば宜しく奮進一番之が排擊に努むべきなりカーライル曰はずや凡て誠實なる探究の結果は決して擾亂を惹起さず而して其擾亂の發起するは却て誤謬、妄誕、不實、半信等に於てするものなり故に誤謬に反對して抗論する者は自己を以て眞理を信ずる人々と會合すへき方向に進むものなりと由之觀是、彼の數理論と一般聖書の妄誕、謬傳を打破するは則ち破壞的のことに非ずして其眞價を知り眞理の光輝を發せしむる等更に大なる建設的の事業に非ずして何ぞ

論して玆に至れは自由神學は建設主義なり積極的に論據を取るは焰として火を見るか如し是れ一に世界の進步と其發達を共にせんと欲するに因る、視よ、吾人人類は太古、蒙昧野蠻の時代より進步發達して以て今日文明開化の隆盛あるに至りしを其大勢、駸々乎として瞬時も止むとなきは日月の軌道に轉々たると何ぞ擇はん、眼を閉ち少時間、沈思默考せよ、轉々驚嘆に堪へざる明論卓説も衆愚の反論難議する所となり一時は雲霧の爲め覆沒せらると雖、霹靂一聲、忽ち眞如の月、皎々として光を放つは日夜吾人の經驗する所に非ずや嗚呼宇宙間果して眞理に敵し得るものあるか嗚呼日月の明と其光を競ふものは夫れ自由神學なるか

終に臨んて自由神學は宗教界に立ちて如何なる局面に當りつゝあるやを説かむ、即ち自由神學は宗教界の先鋒にして他の區々たる宗派の率先者たるなり左に其の狀況を述べむ、

第一、之を歷史に徵するに我自由神學は元來自由思想の發動に因りて起りたるものなれは他に羈絆せらるゝとなく進み得るか故に其速度甚大にして他の宗派

の先導者たるに至れり然るに正教派の現今立脚の地位を顧みれは五十年前の狀態と一も異ならす加之彼輩の進路を精査すれは一に吾人か遺せし先蹤を追跡するに過きず

第二、正教派の目下取る所の方針は吾人の目的と其軌を一にせり而して彼此の間、唯前後の差あるのみ、又彼輩の行進するや互に相衝き相倒し亦他を顧みるの餘地なきもの丶如し

第三、凡そ事物の何たるを問はす吾人は世に最も卓絶せる思想家と常に歩武を共にするの觀あり之を歷史に徵するに往昔より世界の先導者となりて今日の文化を致したるものは最も少數なる蓋世の偉人に非さるは莫し然らは則ち此世界は最小數の偉人に依り支配せらる丶なりと云ふも敢て溢言に非さるなり果して然らは吾人信徒は其數僅少なるも亦此種偉人の群中に入りて其責任を果すへきの希望を有せり彼も人たり我も人たり眞神豈に昔人を愛して今人に疎なるの理あらんや吾人信徒は思想の大海を遊進し正義を矛とし純愛を楯として懈怠することなくんば其凱歌を謳ふ最後の勝利あることは決して疑を容れさるなり

社會の性質

矢部新作

社會は個人の集合躰なり。個人は社會の主人にして而して社會は又個人の主人なり。個人の力社會を變更することを得、社會の力又個人を支配することを得。唯個人は社會の一分子なり、故に個人は死すとも社會は亡びず、否個人は又個人をして其後を續がしむるを以て社會に對する個人は常に死せざるなり。斯くの如く個人は其相續者を以て永く社會に伴はしむると雖ども、先の個人と後の個人とは其性情資格に於て、決して同一なること能はず、後の個人にして先の個人より賢なるか若くは愚なれば、社會は等しく其影響を受けざるべからず。玆に於てか社會に變更を來すなり。此の現象は社會禍亂の際に於て殊に著しきを見るべし。楠氏盛にして南朝盛に、楠氏亡びて南朝倒る。彼の足利氏の一度天下に臨に當てや、其勢力は波動を爲して社會人心

の間に充ちたり。是れ其個人の如何に依て社會の形狀を變ずる所以のものにして更に其異殊なるものを求めば、從來英國の勢力の下に屈從し居りたる米國人民がワシントン、フランクリン等の助を得て後世に向つて獨立隆盛の基礎を固めしが如き、個人の力に依て社會は改革せられたるに相違なきなり。然し今又他の一方より看察を下す時は斯くの如きの個人も、畢竟社會が造出せしものたるを免れざるなり—否余輩は之を造出すとは言はじ、英雄豪傑の出るは他に考究すべき理由のあるありて存するものなれば。但し社會は之を養成若しくは刺衝すと言ふを妨げざるべし。余輩は嘗て言へり「佛國はナポレオンを養成し、ナポレオンは佛國を養成せり」と何を以て佛國はナポレオンを養成せしか、ナポレオンは佛國に非れば決して出づる能はざるの英傑なり。當時佛國は君主專制の餘光を止めたる大革命の後を受けて、人心の動搖甚だしく、怒り易く、泣き易く笑ひ易く叫び易く、而して人情の自然として己れの依賴すべきの人を須つや久し。此の時に於て彼れは躍出せり、威儀端正、擧動活潑加ふるに稀世の才能を以てせり。佛人は思へり「此人なり」と。恰もイスライルの長老が救世主を迎ふるの情と一般、家を棄て財を擧げ妻を去り子を遺し以て彼れに從へり。然し其實は彼の鯨飲者流が事情の爲め、一二個月の禁酒を爲し、飢渴に飢渴を重ねし後圖らず一樽の酒に對せしが如くなり。彼等は玩味せり、稱美せり、口を極め手を擧げ之を歐洲に吹聽して以て、自由酒の壓制酒に勝りセーヌ河邊此銘酒を產出せしとを誇れり。何ぞ圖らん、彼等が嘗て無類の銘酒と思惟せしものは一種の毒酒にして、其酒の未だ歐洲に徧ねからざるに、身は早や已に亂醉し一朝夢覺めて後之を隣人に問へば、耳に入るものは唯己れが亂暴狼籍の跡ならんとは。

之に依て思ふに社會は個人を養成するものなり、ナポレオンが佛人の面前に立つに至りしは社會の風潮之を助けしなり、已に氏が其地步を占めしの時と雖ども、佛人にして持重の風あり德義に厚く道理に明らかならしめば、彼れをして空しくセントヘレナの寒夢を結ぶ

に至らざらしめしものを。嗚呼佛國社會はナポレオンを玩弄せり。彼れ惡むべくんは是れ又惡むべく彼れ悲しむべくんは是れ又悲しむべきなり。

社會と個人との關係を論ずるに以上一片史上の所説を以てすれば何人も能く不同意を表せざるべし。然し此不同意を表せざるの人にして往々異樣の言を爲すものあり、實際異樣の行爲を爲すもの多し。彼等己れあるを知りて社會あるを知らず、時に曰く「我が身だに富み、我家だに安全ならば、其他の事我れ豈に關せんや」と。斯の如きは啻に其不德を公言せるのみならず、併せて其無智を公言せるものなり。俚言に云ふ「隣り近所に事なかれ」と。是れ己れと隣りとの關係より來りたるの語にして其れに相違なきなり。己に隣りと己れとは密接の關係なるもの故何事も其の影響を分たさるを得ず、隣人病めり、我れ訪はすんば心安からさるなり。隣人苦めり、我れ慰めされば心安からさるなり。已に然り、然らは隣人の健康は我か物の快樂にして隣人の富有は我が爲めの利益に非らずや。隣人盜を爲す我れ大に恐れさるを得ず、隣人身を愼まず我れ爲に戒めさるを得ず。故に隣人の間に起りたるの事は一より十迄、直接若くは間接に之に與らさるを得ず。如何に身は無關係の狀を裝ひ局外中立の地を保たんと欲するも得べからず、否局外中立を保たんとするの心は已に幾分か其神を勞し其平和を害するものなり。彼の隱君子の四隣の混濁を厭ふて遠く塵外に遊ぶは則ち之れが爲にして、吾人は此世に生存する間は到底隣人の交渉を脫却すると能はさるなり。一國社會は隣り近所の少しく大なるものなり。社會の事物は凡そ其人民に於て分擔せさるを得ず。其社會にして弊害多きか、爾は社會と共に其苦を分ち其責に任ぜさるを得ず、其社會にして善良平和ならんか、始めて爾も快樂と光榮とを受くべきなり。朝鮮にして貧弱なるは朝鮮の耻辱にして此耻辱は朝鮮人民盡く皆分擔せさるを得ず。英國の富强なるは英國の光榮にして、此光榮は英人各自の頭上に輝くなり。試に此二國人をして世界各國の間に週遊せしめよ。之を迎接するの人は上、外交官吏より下、客舍の

主人に至る迄、朝鮮人に對する英人に對するに異ならさるべきか、假令其擧動に於て異なる所なきも其內心に於て異なる所なかるべきか、又假令或る國に於ては朝鮮人を親み英人を疎んするの形跡ありとするも世界全躰の間に於て英人は朝鮮人に比して蔑視さるゝ虞あるべきか、是れ余輩の答を要せさるべきなり。

我れは外國に旅行せじ、內地に於て王公の地位を占め以て萬衆を駕御せば則ち足れり」と言ふ者あらば余輩は之に對して一言すべし。爾は假令能く爾の目的を達するとも決して快樂と光榮とを爾の心に得ると能はさるなり。露國の王公は果して英國の王公の如く安全なるか、社會に貧富懸隔著しくして、幾萬の人衆其生を聊せず、國內不平の徒多くして動もすれば身を以て事に代へんとを期し、殺氣紛々として外人をして尙且つ戰慄せしめ、將に破裂せんとするダイナマイトの前に立つか如きは其人の爲に賀すべきとなるか、如何に智識あり技倆あり富豪顯達の地位に立つと雖ども四隣同胞の飢餓に泣き疾病に苦しむを見ば、恰も物の化の崇を受けしてふ苦嘶と一般、毫も其心の快樂を保つ能はず、否寧ろ其心に言ふべからさるの苦惱を與ふべきなり。

余輩は玆に個人と社會との關係を說けり。今や一步を進めて其關係が如何なる有樣を以てするかを明示すべし。

夫れ一點の火も之を忽にせば數千の家屋を類燒するに足り一掬の毒も之を忽にせば遂に百萬の生命を奪ふに足る。今又一個の小石を取りて之を空中に投ぜんに、其石は直に地上に落ち來るとも、一度空中に與へたる動力は、學說上宇宙天界を震動して已まざるが如く、人類社會に弊害の生出するや假令尋常人の見て以て一小事と爲すものと雖ども、忽ち社會の間に傳播して一國人民を魔睡せしむるに足るものあり。玆に十人の朋友中に一人放蕩無賴の徒ありとせよ。九人の朋友にして互に相盟約し断然彼れを拒絕し去るか、將た彼れをして全く改心せしむるかの所爲に出でず、彼れをして時に來り時に談ずるを得せしめば、彼れの勢力は次第

に九人の上に加はりて、今迄撲直謹愼なりしものも、春氷の茲に融解するが如く、漸くにして妄言迷語自ら快を取るに至り、昔日の決心にして今日に存せしめば身自ら身を裂かさるを得ざる程の耻羞の行爲をも、今は耻羞と認むるの力なく、始めは私かに、後には公に、到る處汚穢の街に出入して以て其技倆を誇るに終り、斯くして一人十人を化し十人千人を化し千人萬人を化するに至る、

之に反して一鄕中に一人德を重んずる者あらんか。所謂君子の德は風なり。温風一度渉つて百草之に從ふが如く、諸人をして能く之に倣はしむ。人は惡に走るの性情あると同時に義に勇むの精神あるなり。一人先に立つて良能を發揮し道理を明にするとあれば懦夫も廉に怯者も勇に、共に與に此道を歩せんとを欲する者なり。斯くして一人十人を感化し、十人百人を感化し、百人千人萬人を感化するに至らば一國國民をして新鮮清淨の空氣中に生息せしむると爲し難きに非るなり。

以上の道理を知るものにして世間尚ほ漫に己れの行爲を愼まさるものあり。彼れは常に自大自豪英雄を以て自ら任ずるにも拘はらず、時に情慾の中に其面を蓋ふて「山鳥の頭隱くして、臀隱くさず」を學び、己れ、己れを棄てゝ曰く「人は實に大なるが如きも又實に小なるものなり、社會の大勢は一人一個の如何ともすべきものに非らず、我れは是れ滄海の一粟、此事を愼むは至難にして、苦痛に堪ゆべからず、之を爲すも敢て社會を害するに至らじ、飲むべし、喰ふべし、爲さんと欲する所を爲すべし」と斯の如きの徒は己れの行爲は社會に左程の關係を有せじと考ふ、何となれば己れ一人にて人は斯く爲すまじと思へばなり。故に人に對すれば則ち曰く「我れは斯かる習慣の中に育ちしを以て止むを得ず併し君等は之を愼むべし」と。此言は果して能く効力を與ふべきか、聽くものは愼んで之に從ふべきか、知らず彼れの行爲は已に業に、彼の言の如何に拘らず、周圍の人々に向つて誘惑を爲せるものに非らずや。或る人は又謂へらく「我れは斯く〳〵の技倆あり斯く〳〵の才能あり（人毎に一つの癖はある者を我れ

には許せ敷島の道」じや、假令此事を爲すとても秘密にせば何の悪しきこともあるまじ」と、玆に於てか私かに良心に背くの行爲を爲す。其結果は二樣の點に向つて墜落すべし、一は始めは私かに之を爲すを得るも、追々心の制裁は其力を失ふて公に爲すに至るべく、又一方に於ては私に之を爲すも公に之を爲すも、其社會を害するの毒左程異ならざるべきなり。一度空中に飛散したる毒は如何なる手段に出づるも人々の健康を害せざるを得ず、公然之を行ふも隱然之を行ふも其害毒は自然に社會に流傳して之を止むるに道なきなり。

一國四千萬の同胞を以て構成するとせば、此四千萬人は各自皆其の社會全躰の空氣に向つて關係を有するなり。一人の善行は一國社會の上に馨香を加へ一人の惡行又必ず臭氣を送り、斯くて善人多ければ其社會の空氣は馨香臭氣を壓し、惡人多ければ其空氣は臭氣馨香を蓋ふ。此事實は爭はれぬものなり。余輩今足を支那の地に容るれば必ず支那風の空氣に感じ、身を英國の地に置けば又必ず英國風の空氣に感ず。更に此感覺の著しからんことを欲せば米國桑港に到り米英佛獨人の空氣を呼吸すると同時に、黑人支那人の街に入れ、必ずや能く各國空氣の異同あるを知り、而して其空氣中に馨香臭氣の量多寡あるを感じ而して又其一人一個の行爲に就て仔細に看察を下せば、果して其一國空氣の特色は一人一個の行爲の合成せしものたることを了知し得べきなり。

人は何人と雖ども、其身、一家と一鄕とに關するが如く、一國社會の上に關し併せて又世界全般の上に關するものなり。十九世期の天地に身を處するの人は今日世界全般の空氣は如何なる色を帶び如何なる香を含むかを知らざるべからず、知つて而して己れの行爲は以て之を如何に變ずるを得るの勢力を有するかを悟らざるべからず。天界若し別世界あり此世界の空氣の蒸發を受けて之を鼻にするものあらば十九世期文明の空氣は今尚混濁不健全にして、端なく彼の顏を背けしめ、彼れにして若し之を分析するの術を有するとせば此混

濁なる空氣中の殊に汚穢なる部分は東洋某國の上流若しくは中流若しくは下流社會より蒸發するものなりとの斷定を下すやも知るべからず。知れ、白地の墨は消ゆるの期なく、一度行ひしの行跡は社會全般に渉り數千萬年を經て尙ほ滅すへきのものに非らざることを。

ペルリコ道義要論

在大學　宮本平九郎譯

伊太利有名の文學者たり愛國者たるペルリコは名をシルヴイオと云ふ、ピエモンテの人。千七百八十九年即ち佛國大革命の年を以て生る、人となり岐嶷夙成、稍長じて佛國の文學を愛讀し大に得る所あり、其作爲する所の戯曲詩文の斬新奇警なるを以て夙に名を文學界に博し、殊に其悲壯劇曲フランチェスカ、ダ、リミニ(Francesca da Rimini)の如きは非常の喝采を博し此の曲の出てし當時(千八百二十年の頃)は伊太利の諸劇場到る處として之を演ぜざるはなかりきと云ふ、

然れどもペルリコは世の骫骳纖弱の文學者流と負に其選を異にし、常に心を國事に注き廣く交を當時の志士仁人に結べり、是の時に當り伊太利は墺太利の羈軛の下に在り、秕政百出、人民怨苦して奮て獨立の旗幟を樹てんと欲し、四方の有志皆奮然袂を掲けて起てり、ペルリコ是に於て當時知名の士シスモンヂ、ロマニヨーヂ、ヂオイア、マンゾニ、ベルケ、等の人々と相謀りて「イル、コンチリアトーレ」(Il conciliatore)と云へる新紙を發行し、卓犖の見、激越の語、之れを行るに縱横の筆、雄健の文を以てし以て天下の士氣を鼓舞振作し、又當時有名の政治家の組織せる「カルボナーリ」(伊太利興復を目的とせる徒黨)に加盟し日夜國事に奔走しければ、遂に與國政府の嫌疑を蒙り、「コンチリアトーレ」の記者は悉く逮捕せられペルリコも亦遂に獄裡に呻吟するの身となれり時に一千八百二十年なり、ペルリコ獄に在ること十年、具さに艱楚を閲し辛酸を嘗め、慷慨の氣は霽雲の語を壓し、清節の志は蘇武の跡を追ひ

ければ四方の志士其風を聞いて起つ者幾何なるを知らず、嗚呼伊太利建國の大業は元よりカザール、ガリバルヂ等の諸豪傑の手に待つありしと雖もペルリコ等の鞠躬盡力亦與りて大に力ありと云ふべし、

今日世界各國の語に飜譯せられ、好んで各國人士のために愛讀せらるゝ幽囚手記（Le mie prigioni）はペルリコが獄舍に在るの日の手錄に係り、萬斛の感慨を雄健の筆に寓し、悲壯慘憺の情境を勁拔の文に托し、讀む者をして乍にして感奮興起、乍にして悽惋酸鼻せしむるものあり、余輩は異日閑を得て之を我國人に紹介するの機あらむ、

ペルリコ既に許されて國に歸り名望益す隆起し國人の瞻仰を受け、是より退いて閑に餘生を送らんと欲し、後進子弟を提撕誘掖するを以て其任とし樂みとし是に於て（"I doveri dell' uomo,,）を著し以て後學に資す、今余か譯するところの道義要論則ち是なり、蓋しペルリコ資性純潔にして思慮高朗、邊幅を修めず、故に其道義を論ずるに於ても務めて躬行實踐を主とし、至理を卑近の語に寓し、要道を和平の裡に寄せ、其人生日常の行動を把りて敢て高遠の哲理に馳せず以て道義を論ずる所は、元より後進子弟の爲にするに因ると雖も其大歸趣に至つては大に孔夫子の論述する所と其軌を同し東洋の國風民俗と能く相容るゝ所あるを見る、ペルリコの自序に云へるあり、

「此編もと渺然たる小冊子、理を推し序を立てゝ論述するところの科學的の著述に非らす、又本務の深理を研究討索するものにあらず、蓋し正人君子たるの義務は必ずしも機巧の論證の助を待つ必要なきものゝ如し、故に人、自己の良心に於て自ら鍛錬する所以を發見せざる者は亦到底書籍の中に於ても之を發見するを得ざるべし、人の世に在るや、生涯の中諸種の本務を行はざるべからず、而して書籍は單に此等の義務の種類を列擧して人をして能く本務の何たるを考察せしめ、寬容忍耐以て之を踐行せしむるの媒介たるに過ぎざるのみ、余は徒に思想を粉飾し詞躰を華美にするを避けたり、蓋し此の編、論すると

ころの如きは余の見る所を以てすれば極めて朴素なるを欲すればなり」以て氏が論旨の在る所を諒知すべし

第一章　本務の必要及び其價値

譯者識

譯者曰く、茲に本務と譯するは原語 Dovere にして、佛語 "Devoir"、英語 "Duty" にして法律上用ゆる所の Obligatin(義務)と異なり、所謂人生本然之務の意義なるを以て、今義務と譯さずして本務と譯す、

人は本務の觀念を脱する能はず、また此の觀念の重大なるを認めざる能はず、本務は必然我れ〳〵人類の生存と相密着して離れざるものなり、何となれば吾人が稍く道理を辨ずるに至るときより既に吾人の良心は吾人に敎ふるに本務の一日も離るべからざるを以てし、吾人の辨識力の發展するに從ひ、良心の告戒は層一層丁寧懇切となるを以てなり。且人類を圍繞する萬般の事物も亦吾人に敎ふる所ある猶ほ良心に同じ、何となれば世界の事物は皆「調諧、永劫の法則」に支配せられ、而して造化(Ente)は萬物の本原亦終極にして、世界の萬有は皆造化の智識を表現し造化の意志を實行すべき運命を有するものなればなり。

人も亦他の世界の萬有と同じく其固有の運命と本性とを有す。人は以て人たらざるべからず、然らずんば徒に他人の尊敬を受けざるのみならず、亦自敬自尊の意なきものにして、此の如き人は實に幸福を有せざるものと云ふべし。人の本性は幸福を望むに在り、幸福の域に躋らんと欲せば、唯天の意と宇内の大則とに則り、自家の利害の指敎する所に從ひて德義を循守し、以て僅に能く之に達するを知り且之を證するに在り。人、時として己が情慾に惑はされ人類の善事と秩序とに反對し以て幸福を求めんと欲することあるも、人は自ら心に之を屑しとせざるべし、何となれば良心の吾人に命する所は其反對に出づればなり。情慾にして一たび抑制せらるれば、吾人をして人類の幸福と秩序とに背反せる一切の事物は常に之を嫌忌するに至らしむ。剛毅にして艱厄を忍び、且つ人類を救護し天意に循ふの意志を有し、死を見ること歸するが如き人の心に取りては、悲哀死亡の如き痛苦も反て喜悦の感をなす如く、本務を踐履することも之を當然の事と觀念すると

きは敢て煩累を覺えざるのみならず、反て吾人の幸福を得るに必要なるものなり。故に人以て人たらざるべからずとは人類に取りては本務と幸福との定義たり。宗敎家は、人は神の形躰に像とりて作られたりと云ひ、人此の眞理を説明するに高遠の方法を以てせり。人の本務と幸福とは神意（道學の所謂天意）を奉行するに在り、神意に遠ざかるを欲せざるに在り、善人たるを欲するに在り、何となれば神は善にして且人に與ふるに峻德に達する運命と、神に配すべき運命とを以てしたればなり。

第二章　誠（ヴエリタ）を論ず

吾人の本務の第一は誠（Verita）を愛し之を信ずるに在り。誠は則ち神なり、神を愛すると誠を愛するとはもと同一事なり。

嗚呼天下の愛友よ、予等は敢て萬事に對して失望的怪訝の念を抱くに汲々たる彼の狂暴殺風景なる詭激家の詭辯に惑はさるゝことなく、唯一に誠を求めよ。

世の所謂道理と稱するものにして、漫りに誠を攻撃し、漫りに誠を排斥し、且漫りに價値なき臆説を支持するものなるときは、其道理は獨り無用なるに止まらず又有害なり。或は一部の人の一生不幸に纒綿せらるゝを見て失望的の論結をなし、生存を以て善事となさゞる如き、或は皮相の見を以て僅に宇内の無秩序なる二三例を擧け來り、速了にも之を以て總て他の秩序齊正たる事あるを認むるを欲せざる如き、或は唯目前に腐朽すべき躰軀の存在することのみを見て我に存する靈妙不死（魂靈）の事を賤む如き、或は正邪の區別を以て一の幻夢と呼び、人は一の蠢爾たる動物たるのみにして毫も神受の所なしと云ふ如き、皆是れ無用有害の推論となす。若し人生れながらにして此の如く賤むべく此の如く憫むべき者ならんには、何を以て人は古來孜々として哲學上の研究の時日を費せしか、論者の所謂道理より之を推論するときは人は唯自殺すべしと云ふの外、其道理の命ずる所は一も之なかるべし。

良心は吾人人類に敎ふるに總て生存すべきを以てするが故に、吾人は幸福を欲するがために生存するが故に、

亦吾人は、人の幸福は自暴自棄に在るに非ず、亦蠢々たる昆虫と相伍するに在るに非ず、唯神に向て其身心を高尙にし榮貴にするに在りと思ふが故に、吾人の行住坐臥心に銘すべき事は、人として高尙莊嚴の觀念を抱くに至らしむる習慣の外他に之あらざるは明白の事なり。而して此の觀念こそは實に人の奮て到達すべき點にぞある。

右述ぶる所を以て善なりとせば人は奮て懷疑主義(セツチスモー)、腐儒敎(シニスモー)及び他の下賤なる哲學は盡く之を排斥し、以て眞、善、美を信するに至る所以を講せざるべからず、誠を信ぜんとせば固く誠を確信するを欲せざるべからず、又固く誠を愛せざるべからず、誠を愛するの一事獨り氣力を人の精神に與ふるを得。怪訝疑惑の中に醉生夢死するを愛するは遂に精神を萎靡するの原なり。人は總て眞正なる主義を固信するか上に、言ふ所必ず眞實、行ふ所亦必す眞實、一言一行常に自ら誠を表出するの意志を以て世に處せ。

人の眞心は唯誠に因て以て恬靜なるを得るのみ。虛言せしとき又は其虛言の未だ呈露せざるときは、人自ら其尤を引き、以て其本務を缺き且自暴自棄せし所あるを曉るべし。虛言をなす如き卑陋に慣習を絕たんとせば唯斷じて虛誕せざるに決心する外一の方法なし。人一たび此の决心に外づるゝことあれば之かために其過を二たびせず三たびせず又絕えて之を爲さゞらんとするも得べからず、此れ人、輙もすれば漸次墮落して遂に虛誕、誇言、譏謗、等諸種の惡德を行ふの意向を來す所以なり。

最も澆季なる時代は則ち虛言者多き時代なり。此の時に當りては天下到る處猜忌の空氣を以て充溢し、所親相疑ひ、遂に爭論、毀刺、不實の如き恐るべき諸惡因の發生すると幾何なるを知らず。而して政治上、宗敎上の意見より其他純粹潔白なるべき文學上の意見に至るまて、各其意向を異にするに當りては、盛名を有する者と雖も猶且常に百方對手の名譽を失墮せしむべき方法を講ずるの傾向あるも亦此の時代に在り、又百方對手を失敗せしむべき意想と對手に對する反證を探求す

るの熱情との跋扈するも亦此の時代に在り。加之、一たび他の失錯虚僞の明白なるを撿出せしときは則ち一層之を鍛錬羅織し以て人をして其事の實際なるを信ぜしめんとするに汲々たり。夫れ心の潔白ならざる人は常に他人を見て欺騙心を抱くとなす、是れ所謂小人の心を以て君子の心を忖度するものなり。故に其意に充たざる人、一たび言を接すれば直に其言を採つて不良の目的を含むものと見做し、其人若し慈悲を求むるか又は慈惠を爲すとあるときは則ち反て之を嘲り、己は天を仰いて彼の如く僞善家ならざるを謝すると是れ小人の常なり。當時の子弟は實に虚誕(メンチーレ)と疑訝(チツフロダーレ)との一般に流行する時代に生れたり、(是れベルリコが當時の弊風に激して發せし語なり)然れども諸子は宜しく超然身を潔くして此の二悪事の外に立つべし。諸子は宜しく自ら持する寛厚にして他人の誠なるを信すべし、他人汝の誠を信せざるも汝は決して恐るなかれ、汝の誠にして能く萬事に照臨せる人(神)の眼に照映すれば則ち足れり。

《未完》

教育と宗教(承前)

《井上博士の説を評す》

土谷忠治

吾人が前號來の評論を續けんとするに際し井上博士よりの一警報を手にせり曰く、

若し讀者か唯ゝ是れ迄記載せる部分のみによりて判斷を下さは或は甚しき誤謬を免れざるとある可し余は該文の末に詳に佛教東漸耶蘇教の傳播と大に相異なるものあるを辯明せんとするものなり是等のとは單に個人の思意する而已にては確實ならず必ず歷史的事實によりて証明するを要するなり抑々歷史的事實は古今相類するとはあり然れども同一のとを繰返すとは無きものなり佛教東漸の時は我邦に佛教より高尚なる教なく又儒教は已に之あれども出世間上の教殆んど之れなきが故に佛教は其之に抵抗するものあるに拘はらず駸々乎として入り來れり然れども今日にありては已に佛教のあるあり耶蘇教如何に我邦に傳播せんとするも決して當時佛教の東漸と相比すべきにあらず、又佛教には詳密なる忠孝の教あり忠孝を論するは大乘本生心地觀經を以て最も切なりとす單に孝道を論するものは佛說孝子經、佛說父母恩難報經、佛說父母恩重經并に契嵩の孝論等ありて甚だ備はれり其外維摩經法華經正法念處經等にも忠孝の事散見し決して耶蘇教の比にあらず耶蘇か

多く忠孝を說かざるは其之れを重んぜざるが爲めに出づるなり、余は詳細に是等の事を該文の末に論ずべきなり又近來科學の著しく進步するに從ひ迷信を打破し耶蘇教は之れが爲めに消滅の途に就けり已に科學を講ずる我邦には耶蘇を誘引すると極めて難く決して佛教の始めて我邦に入るときの比にあらざるなり佛教は本と萬有神教なれども後世に及んでは多神教の姿をなせり然るに我邦古代の宗教も多神教にして兩者の中互に相類似したるもの多かりしゆゑ兩部習合も起り本地垂迹の說も出で佛教は漸次に同化するとを得たり然れども耶蘇教は是等の性質を缺くが故に我邦に同化すると最も困難なり然れども我邦に同化して忠孝の教を養ひ取らんとするの傾向あるは余の甚だ奬勵せんとする所なり

佛教神道等亦迷信なきにあらず然れども余は今單に耶蘇教に關する問題を解釋せんとを要するが故に他を言はず若し佛教神道をも併せて之れを論ぜば盡し亦際限なかるべきなり

余は耶蘇經文中に高尙なる敎あるとを否定せず又耶蘇教徒中に有德の人あることをも又決して否定せず然れども余が曾て教育時論の記者に耶蘇教と勅語の旨意と大に相同じからざるものあるを言ひしに耶蘇教徒中に兩者少しも相異なるとなきが如くに論辯し往々人身攻擊をなすものありしが故に遂に大に余が意見を詳述せざるを得ざる場合となれり余の目的は勅語の旨意と耶蘇教は其歷史的發達を異にせるを證明せんとするにあり其間時ありて迷信を排斥するは是れ余が褊狹なる迷信界を脫却して自由思想界にあるに由るなり余は釋迦も耶蘇も孔子もソクラートも皆古の聖人として均しく之れを尙ぶ然れども我邦の耶蘇教徒が強辯以て歷史的事實を蔽はんとするは余の非とする所なり是故に余は學者の義務として之れを辯明するに至れるなり耶蘇教徒或は云ふ余が新聞雜誌より引用せる不敬事件の類は虛聞に屬するもの多しと是れ亦憑證なくして言ふべきとにあらず然れども他の例によりて之れを考ふれば新聞雜誌の報道或は虛聞に屬する事あるが故に余が引用せる例證中一二の虛聞之れなしとも斷言し難し然れども夥多の例證盡く根據なきものにあらざるなり且つ又耶蘇教徒の數佛教徒より逈に少きに不敬事件は逈に多きとにも注意せざるべからざるなり何づれにしても未だ余が文の全篇を讀了せずして大早計に判斷を下だせば龜の頭を見て直ちに蛇なりと誤認するが如きとなしとせざるべきなり。

眞に然り其一部を見て直に全躰を評せんとせば吾人が博士の一二教徒の所作を見て直に其教義を否認せるを評せると同筆法を以て評せらる可きも吾人が此案を草する意は全然博士の說を評するに出でたるものに非ず博士の說なきも猶吾人は此論を草す可かりしに恰も博士の意見の發表に際せるを以て兼ねて評論を下せる耳敢て其大早計に非ざるを信ず且つ吾人の評論は強ち『教育と宗教の衝突』てふ一論文よりの觀察に非らずし

て博士が曾て教育時論記者に談話せる所とを參照し是に出でたる也今讀者の爲めに教育時論二七二號所載博士の談話全部を左に轉載す

夫の勅語と申し奉る者は、全く日本固有の道德を文章にしたるものにて、其道德の立て方は一家の中に行ふべき孝悌の道に始まり。之を廣めて、一鄕一郡に及ひ、遂に忠君愛國と云ふを以て、最後の德と爲せし者にて、一言に之を名つくれは、全く國家主義なり。故に勅語の精神に從へは、一身を修むるも、國家の爲なり。父母に孝を盡すも、國家の爲なり。我か身は國の爲に生れ、君の爲に死すへきやうに、此世に出て來れるなり。されは勅語の道德は、多くの個人か、歷史上の關係に依り、結ひつきて國を爲し、以て國家的の生活を爲す、其の國家內に於ての道德なり。即ち世間門の道德なれども、耶蘇教は云ふまでもなく、一派の宗教にして、其宗門に於て說く所の道德も、亦純然たる出世間の道德なり。左れば耶蘇教に於ては、其道德中に更に國家の區別を認定せず、新約全書を通覽して、首より尾に至るも、一も耶蘇が國家の事を論じたるを見ず。唯一ヶ所、シーザーの事を說きたる所あれども、是は唯シーザーに納むべき租稅は、滯なく納めざるべからざることを說きたるまでにて、是を以て、耶蘇が國家的の思想を有したることの證となすべからず。耶蘇の眼を以て見れば、人類は悉く同等にて、神の子なり、人種の區別もなければ、國家の區別もなし、立教の躰既に此の如くなるが故に、耶蘇教の道德なる者は、又從て無國家的ならざるを得ず。是れ勅語の道德と、耶蘇教の道德と互に趣きを異にする一個條なり

又耶蘇教は、固より出世間の事を主とすれば、常に重きを未來に置き未來を以て、永遠無究の世界とし、現世を以て無常の一塲となし、現世は僅に未來の世界に入るの門口たるに過ぎずとするが故に、現世を見ること甚輕く、從て現世の事物を賤み輕ずるの情を生ぜしむれども。勅語の精神は、孔孟の主義と同じく、重きを現世に置き、未來の事は一切問はざる所なれば、此點に於ても、勅語の精神と、耶蘇教の精神とは、頗る趣きを異にせざることを得ず。

又耶蘇教に於ても愛を說き、勅語にも博愛と云ふ字面あれども、耶蘇教の愛と、勅語の博愛との間には、自ら別あり。耶蘇教に於て汝の隣を愛せよと云ふは、其主義全く墨子が兼愛の說に同しく、人の父母を愛するは、猶己の父母を愛するが如く、人の國君を愛するは、猶己の國君を愛するが如くにして、實に自他、親疎、遠近の差別なく、愛するにあれども。勅語の博愛と云ふは、儒者の謂ふ所の、己の父を敬せずして人の父を敬するを悖德と云ふが如く、先己の父を敬して、然る後に、人の父に及び、我が親を親として、然るのち、人の親に及ふが如き、差別的の愛なり。昔し孟子が畢生の力を極めて、楊子、墨翟の言を排擊したるは、要するに無差別的の愛と、差別的の愛との衝突したる者なり。而して勅語の精神と、現在の儘の耶蘇教との間には、是と

同一の撞突を生ずることを免れざるべし。

又耶蘇教の大に欠典とすべき點は、其忠孝と云ふ二徳を説かざるに在り。此忠孝の二者は、實に勅語の道德の骨髓にして、從來支那、日本の道德は、全く此二德を以て、最高と立てたる者なれども、不幸にして、耶蘇教には、此二德を說きたる點なし。耶蘇自身さへ、其兩親などに對しては、頗る冷淡なりしものゝ如し。一例を擧ぐれば、マシュウ傳の八章に、左の如き一節あり。

21. And another of his disciples said unto him, Lord, suffer me to go and bury my father.

22. But Jesus said unto him, Follow me; let the dead bury their dead

即ち其弟子が父の遺骸を葬りたきゆゑ、暫時御暇を下されと云ふに耶蘇は夫は棄て置きて、我に從ひ來れと云へり。若し孔孟をして之を聞かしめば、何と云ふべきや。孔孟の主義に從へば、死は人の大禮なり、親の屍は殊に禮を重くして、之を葬らざるべからず。是れ畢竟忠孝の大義より出でたるなり。然るに耶蘇は親の死骸を棄て置きても、我に從へと云へり。尤もモーゼスの十誡の中には、“Honour thy father and thy mother” 即ち父母を敬せよと云ふ如きことはあれど其精神は決して孔孟が忠孝を以て道德、の根本としたるが如くにはあらず。例へば新約全書リューク傳の第二章に、耶蘇の兩親が、耶蘇十二歲の時に、耶蘇を連れて、ジェルサレムに赴きて、祭に會し、祭終りて、歸り來れるとき耶蘇の道に後れて、共に歸らざりしを心着かず、何れ其內後より歸り來るべしと思ひしに、日を經れども、歸らざるゆゑ、如何なる故かと氣遣ひて、所々を搜せども、見當らざりしが、三日の後に至り、耶蘇が一殿堂の中にて、多くの博士と、講習討論し居るを見たり。依て母は左の如く尋ねたり。

And his mother said, unto him, Son, why hast thou thus dealt with us? behold, thy father and I have sought thee sorrowing.

我々兩親が、斯く案じ切りて、搜して居るに、此始末は何事ぞと云ふ。此至情より出でたる問に對し、耶蘇は冷淡にも、

And he said unto her, How is it that ye sought me! Wist ye not that I must be about my Father's business?

即ち父母が我を搜すこそ心得ね、我は我が天父に事ふるの務あることは、豫て御存知なるべきにと答へたり。之を孔子が父母在せば、遠く遊ばずと云ひ。出づるときは、必ず往く所を告ぐと云ふ精神に比すれば、其善惡如何ぞや。

重きを未來に置きて、現世の道德を輕ずるは、一般出世間的の教の常なれば、忠孝と云ふ如きことを、第一に置かざるは、佛門の教に於ても、又其誹を免れざれども、佛門に於ては、現に心地觀音經にもある如く、世に四恩あり、第一を國王の恩とし、第二を父母の恩とし、第三を衆生の恩とし、第四を三寶の恩とすと云ふこともありて、忠孝の大義を重ずるは、決して耶蘇教の比にあらず。

博士の今般の書簡と右の談話及び既出の論文とを比較

せば幾分の相違を見る即ち大に軟化せりと見ふるは吾人の僻眼耶敢て深く言ふに足らず兎に角博士の意見は非基督敎徒‖反基督敎者と見て可なる可し若し然らずして軟化は軟化にあらず博士の意見は眞意に然りとせば更に一段を進めて基督敎根本の主義に融和せんことを希望する也且つ博士が今日までに發表せるの意見は假設には非ざる可し既に其眞心より出てたるものとせば如何に責任嫌なればとて避くるに由なからん

而して吾人が本論の起點は決して從來の基督敎の如何に非ずして吾人は吾人の信ずる基督敎‖自由基督敎より視察する者にて敢て辯護をなさんとの意に非ず」其基督敎たり佛敎儒敎神道たるとを問はず妄に舊惡を發き來りて之を攻擊せんずる者にも非ず若し世に然かせんとする者あらば吾人は口を極めて其怯を責めずんば非ず此種の儕輩恰も人の棄却せる襤褸を拾ひ來て其の破綻汚穢を評すると何んぞ撰ばん人既に用に堪へざるを見て以て棄つ敢て辯護の要あらん吾人は既にエホバの神を棄却し固信派の三位一躰説を棄てたり既に棄却せるの吾人自由派及び同意見の或基督敎徒（今日の基督敎は固信派も猶自由派と同一思想の下に運動すとは吾人が本誌第十六號明治二十五年てふ一篇に論ぜり）に向て之れ人性的の神を崇拜するは偶像崇拜と同一也（人性的にも種々なる意味あり）と譏り耶蘇は超自然的の神子なりと云ふを嘲り佛敎徒が木偶を眞に如來なりとし佛なりと信じて崇拜せるを見佛敎を否議するあらば却つて其譏る者の誤たるを知る可き也故に若し其評論の公平無私を欲せば宜しく審に變遷の態を察し可及其論旨を他人視せず恰も自己の意見を視る如く注意周到なる可し換言せば公平と友愛とは批評家の二大德として最も重ず可き也若し世の批評家にして既に此二大德若しくは其一を缺く見るに足らざる也彼の過去の罪惡缺點を算へ來りて之を責め過去然りければ現在も然る可く又未來も然る可しと論斷する如きは決して吾人の與せざる所也。

井上博士が『敎育と宗敎の衝突』てふ一篇は近頃一小冊子として出版せらるゝと吾人は其全篇を通讀する上に

於て更に詳論せざる可からざるに至るともやあらん故に今は其大體に付て論下せんとす吾人は自由派を以て任ずる者實に其精神に於て基督敎徒たり此自由基督敎徒の考へこそ尤も耶蘇の精神に近き者と信ずる也讀者若し吾人の主義を知らんと欲せば宜しく本紙主義之宣言及び其他の敎義書に就て見る可し（敎義書等を望まるゝ讀者には申越次第進呈す可し）。若し博士及び其一派にして基督敎徒中斯々の者あり云々と言はゞ吾人敢て之を拒まず然れども基督敎は然り基督敎徒は皆然りと云はゞ吾人は決して默視す可からざる也博士及び其一派は如何に之を意味せしめんとする乎。以下進で本論に入らん。

第三　國家主義と世界主義

博士及び其一派が勅語を以て國家主義なりと云ひ基督敎を非國家主義なりと云ふ其國家主義とは如何非國家主義とは如何なる義なる乎之れ最も攻究を要す可き問題にして其一を論ずるも猶數百頁の大部をなさゞる可からざるに今や僅々數行の文字を以て論下せんとす其不完全素より言を俟たざるなり讀者幸に此意を諒せよ

抑も國家主義とは如何なる義乎之を要するに廣狹の二義あるが如し一は狹き意に於てせる鎖國主義是れ國家主義の弊にして其眞相を得たる者と云ふ可からず故に深く論ずるの要なし一は廣き意義に於てせる非鎖國主義にして世界主義と相背馳せざる者是れ眞に其眞相を得たるもの也」今右の義を明にせんとせば勢其成立に論及せざる可らず夫れ國家なる者は何れの時代何れの處に索むるも之れあらざるはなし（名は異なる可きも）而して是等之を逆りて其の團體の起原を察するに歸する所各人の安寧幸福を企圖する一の機關に外ならざりしなり既に其成立交互の平和を維持し社交的動物たるの目的を達せしめんとする方便に外ならずとせば國家なる者は個人の團體にして個人を離れて決して存在せざる者也故に交互國民の安寧幸福を維持せんが爲には甲の國家を革め乙の國家に歸せざる可からざるとなしとも斷言し能はざる所なり

人類は一家族の一員たると共に一鄕一郡の一員たり又

一國家の住民たり之を廣めては世界の人類即ち人類中の一人類也換言せば人類として此土に生を稟く家族の關係國家世界の關係は誰人も避く可からざることにして之れ自然の理數也而して一家と一國との關係は恰も一國と世界との關係に異ならざる也即ち世界は一の大國家也大大家族也家族としての人類の統合は一國となり一國民としての人類の統合は宇宙の人類たる一抱大名稱となるなり故に或場合に於ては妻子眷族の小を棄てゝ國家に盡さゞる可からざるあり或は國家の小を棄てゝ人類の本分たる大を盡さゞる可からざることは博士の哲眼知らざるには非ざる可し是等の關係素より先後の差あり誰か其眷族を愛せずして隣人を愛する者ぞ誰か特種の關係ある祖國而かも山水明媚土地豐饒なる日本國の如きを棄てゝ他國に漂流する者ぞ若し之ありとせば一種の狂人たるを免れず狂人は不具者也敢て不具者を以て人類一斑の標準となす可からさるや明けし而して其國家主義の結果たる忠孝と世界主義の必然の顯象たる博愛とは如何に關係す可きかは後段論ずる處を見て知る可し兎に角人類の本分は其父母の愛に始まり國家に誠忠に中し博愛に終るものなるとは敢て覩難きの理に非ざる也

若し人あり一家あるを知りて國家あるを知らずんば人誰か完全と稱ふ可き又國家あるを知りて四海あるを知らずんば偏僻の譏免れざらん之に反して四海あるを知りて國家を忘れ國家あるを知りて家族あるを知らずんば是又完全なる人類と稱す可けんや是等兩極に走るあらば既に眞理に遠ざかる數百歩眞正の國家主義世界主義は豈斯の邊に存せんや

又人あり吾人の一言一行一も二もなく國家の爲にして一家あらざる也四海あらざる也と言はゞ之れ鎖國主義の甚だしきもの今日四海交通の盛なる敢て之を論ずるに足らず吾人は此義に於て國家主義を唱ふ者あらば一疑問を與へて之を問はん曰く我身は國家の爲めに供する也君の爲めには死をだも辭す可からずと吾人としても敢て之に反對せんとするに非ず吾人も或意味或場合に於て正に然る可きを知る然れども其良心に背き理性に乖らふも猶然る可しと斷し得るや否博士及博士一派の人は如何に之に答へんとする

是に至りて吾人は論斷せんとす家族主義と云ひ國家主義世界主義と云ふ交互相反する者に非ずして唯其視察

の點異なるのみ此三主義は自然の階級にして決して勝敗す可からざるの眞理也素より國家主義を鎖國主義と解せば或は兩者の衝突免れ難しと雖とも果して眞正に解する者たらば衝突す可くも非ずヨシ衝突したりとて恐るゝに足らざる也彼の重盛をして家族と國家との關係の撰擇に窘ましめたるも遂に小を去つて大者に歸したるは正に能く其本分を盡せる者と云ふ可く敢て此故を以て不孝の奴たりと譏る可らず故に吾人は或場合に於て國家の利害を第二位に置き世界の爲めに盡すとあるも決して不忠不孝の奴となすを知らざる也吾人は信ず人々の眞心理性の命ずる處には家族なく國家なきも吾人は其全く家族なく國家なきの民あらざるを信じ又あらしむるの不可なるとを即ち近きを愛し遠きを疎ずるは自然の天性にして如何に博愛主義の全盛なればとて此自然の性は到底拄ぐ可からず而かも世界主義が此性を撲滅せんと謀る者にも非ざるに於てをや今一例を設けて此義を明にせん即ち太郎次郎は之を概括して日本人と云ひ更に世界各國の人民を總括して人類なりと歸納す敢て此三階級に衝突なきのみならず離る可からざる密接の關係あるとは少くも概括的觀念の存する者あらば多言を用ゐずして知る可き也然るに之を社會のとに應用す往々學者賢人をして迷はしむるものは何ぞ要するに家族國家世界の三階級は無定限の通有性が發して特種の定限に進むの事情也

博士及び其一派は如何に解せらるゝか世界主義なるが故に國家主義に反するとし國家主義を說かざるを以て直に反對なりとせるか世界主義決して國家を無視する者に非ず言はざればとて反ずる者とは云ふ可からず知るや知らずや「無」と「反」とは大に異なるとを故に說かざるをもて世界主義を拒絕す可からざる也博士及び其一派は如何に基督敎を解せられしか基督敎が改過を說き博愛を說けるの故に反するとなすか佛敎も儒敎も博愛を說き改過を說けり然らば共に國家主義に反するとなすか佛敎儒敎には世間個別的の國家を說けり（佛敎の心地觀經の如き儒敎の忠經孝經等）然るに基督敎は之を說かずとして拒絕せんとする乎若し一度聖書を繙き來らば多少こそ存すれ說きたるとは明なる可し（次に列記する處を見よ）

第四　忠孝と博愛　井上博士は勅語を解して忠孝主義なりと云ふ其れ或は然らん然れとも是れ素より博士の私評にして一般普通の解釋なりとはす可からずヨシ然りとするも忠孝主義とは果して如何なる義乎是れ一の學術に屬する解答を要する處にして本論の範圍を超ゆる者なれば深く論せずと雖も歸する處忠孝主義とは則ち忠孝を基本として立てたる道德てふ意味に外ならざる可し然るに忠孝は果して道德上の基本として立つ可き者なるや否は之れ一の大疑問にして大西文學士も既に本誌第十五號に論ぜられたり大意を摘記せば

一　若し忠孝を釋義して君父の命令に從ふの謂なりとし而して之を以て道德の基本となさは君父の命令の及ばざる所には道德は立つ可からざる者ならん、二　若し忠孝が道德の基本ならは一切の德行を悉く忠孝より割出し來らざるを得ざる可し如何に德行は其形を異にするも其根本に於ては皆忠孝なりと云はざるを得ざる可し果して斯ることを言ひ得るか、三　若し忠孝を君父の命令に從ふの謂なりと解し而して之を以て道德の基本となさば君父の命令それ自身は道德の範圍外に在るとならん

由是觀之倫理說上忠孝を道德の大本として立つ可からざるとは瞭々たり博士が勅語を以て日本に行はるゝ所の普通の實踐倫理を文章にしたる者なりと云ふ眞に然りとは日本人民が普通に實踐躬行す可き個々の德行を列擧せる者に外ならず故に或人言をなして「世人は勅語々々と大騷ぎすれども勅語を見て周章狼狽する者はツマリ今日まで是等の德行を缺ける不道德の人間なりしに一朝勅語の出でしを以て東天既に高きを見周章旅裝を整へて發途に上るの路客に異ならず自己の怠慢より旅裝の繁劇なりしを知らず以て他人も然りとなす何ぞ其迷妄の甚だしきや是等の奴の爲めに機械に擔ぎ出さるゝ勅語こそ迷惑至極なり」と此言少しく輕忽に似たりと雖も亦以て大に見る可き也又勅語を以て忠孝的倫理說なりと解するあらば遂に執政者は學說の裁判官たるに至る伊藤博文は政治上に總理大臣なればとて商業界の統領にも非さる也團十は俳優の第一流なりとて總てのことに一流なるに非ず小錦は回向院に大關たれはとて總てに於て然りと云ふ可からず執政者は執政者たり學術界の大王宗教界の法皇たりとは理に於て此事な

きのみならず實際上爲し得可からさるとなり大西氏曰く勅語を以て倫理上の主義の爭をなすは不可なり倫理主義の爭は之を個人間の自由の討究に委ねて可なり若し勅語を楯に着て倫理說塲裡に爭はんとする者あらば予は之を卑怯なりと云はんと實に世に此種の論客あらば之れ勅語濫用の責を免る可らず而して又博士及び其一派は勅語の何れの點より觀察して忠孝主義なりと云ふか勅語に『克ク忠ニ克ク孝ニ』とあるを釋義して言はん乎然らば『博愛衆ニ及ボシ』を博愛主義と解せざる可からず博愛主義は基督教根本の教――世界主義なる者なり(非基督教徒の所謂世界主義とは異也)然るに國家世界兩主義の衝突を說かば勅語それ自身既に矛盾あるに非ずやヨシ勅語の『克ク忠ニ克ク孝ニ』を忠孝主義と解し『博愛衆ニ及ボシ』を博愛日本國民中に及ぼしとの意味に解するを許すも猶矛盾を免れざるなり即ち博愛は無差別的の愛にして忠孝は差別的の愛也（博士の解釋によると）解するに於て遂に勅語には一方に差別的忠孝を說き一方に無差別的非忠孝を說けりとする自家撞着の見に陷らざるを得ず故に勅語の博愛は決して無差別の愛に非ず他に意義の存すること明也基督教の所謂博愛なる者亦勅語の博愛と悖るとなきのみならず博士の言ふ如き無差別的の愛に非ず忠孝を拒み若しくは破壞せんずる者にも非ず却つて忠孝の如き德行を達するの道なりと云ふ可し夫れ基督教の勉むる所は精神上の生命にして以て道德上の元氣を培養せんとするに在り約言せば眞正の忠孝は之れ基督教信仰の結果なりと云ふに歸する也

博愛とは何ぞ審に其義を索めざる可からず然れども今之を言ふ未だ甚だ漠然たる者あり是等の觀念をば分析討究し來らば玉石混交實に意想外に出つるあらんそれ博愛は讀で字の如く博く衆を愛すてふ愛の目的物を或特種の者に限ることなく其特種の者になすが如く一般に及ほさしめんとするに在り一言之を蔽へば或特種限定の愛より進んで一般無限定の愛に至らしめんとすると全く國家主義と世界主義との關係に外ならざる也人生れて數時能く其乳房を慕ふを見る漸く進んで母君に及

び亞で父君に悖む豈此時に及んで倫理の觀念あらんや而して猶能く之を爲す人類自然の傾向にして復枉ぐ可らざるの天性也世に其親を愛せずして他人を愛し其親を敬せずして他人を敬する者あらんや若し之れ有らば之れ悖德悖禮の行爲たるを免れず人性自然の結果として近者を親み遠者を疎ずる偏僻迷妄を打破して一大平和の天國を形造らんと欲する者之れ博愛の要也彼の所謂無差別的の愛と稱する兼愛の如きは博愛の弊なる者にして眞の博愛豈如此者ならんや其期する處の精神は父母兄弟に對する愛てふ（世人の謂ふ愛なる語も甚だ漠然たる者なりと雖も敢て本論に要なければ唯其人の爲にすてふ意義に見て可なる可し）心をもて一般人類に普及せしめんとするに在る也彼の無差別的愛差別的愛てふとも眞理に於て相距ると未だ甚だ相遠からざるのみならず相合する者也素より兩極の弊を以て之を比す何物か能く相離れ相背かざらん要之博愛のとたる其弊を捜し出すに於て敢て難しとなさんや然れども其流弊を禦ぎ之を除くは吾子共に期する處にして一二の弊害より排斥し去らんとするが如きは吾人の採らざる所總て利の有る所には必ず害の潜むもの也其害を去り利に就かしむるは眞に識者賢人の務ならずや敢て其弊害を指摘するを之れ務め利を見ざるが如きは豈眞の識者知者の職分ならんや

博士の馬太傳五〇卅九、四十四を以て此の如き敎旨を信ずる者は如何なる敵に對しても劍を拔くとも發砲するとも出來ざるは勿論なりと云ひ馬太傳八〇廿一、廿二及び路可傳二〇四十八、四十九を以て不孝の敎となす何ぞ甚だ其見の淺薄なるや『報ㇾ怨以ㇾ德』（老子）と云ひ或は『仁者無ㇾ敵』（孟子）『博愛謂之仁』（韓退子）と云ふか如きは皆基督敎の所謂『若有ㇾ人批ニ爾右頬一則轉ニ左頬一向ㇾ之』とあるに異ならざる也又時に妻子眷族を顧みざるは『大義滅ㇾ親』と云ひ或は荀子の『入孝出悌人之小行也從ㇾ道不ㇾ從ㇾ君從ㇾ義不ㇾ從ㇾ父人之大行也』とあるが如き而已敢て此故をもて忠孝ならずとし或は軍人たるに足らずとなす可けんや

結論——勅語と基督敎

以上四項に評論せる處

素より極概に止まり不滿足の憾なきに非ざれども紙幅に限りあり且つ讀者嫌惡の恐あれば後日機を得て詳論するあらんとす要之吾人前項論じ來れる處(一)基督教は其教義より風俗習慣を取るに憚らず故に同化するを批難して基督教を拒絶す可からざるを論じ、(二)教義と教徒とは自ら異にして教徒の所作より教義を批評せんとするは偏執の譏を免れず、(三)國家主義と社會主義とは唯觀察の方向異なるの致す所決して衝突する者に非ず、(四)博愛と忠孝とは相反せざるのみならず博愛は眞の忠孝なりと論じたり既に然らば勅語と相反すると稱へて基督教の布教を批難するの口實なかる可し論者或は勅語は世間的の教にして基督教は出世間的なり故に相反すと云はん然れとも宗教として何者か出世間的(來世と云ふ程の意味)の語氣なからざらん此故を以て宗教を拒絶せんとせは我國には遂に宗教の存在す可からざるを見る也然れとも宗教の必要は何れの國何れの處を問はず之れ有らざるはなく實に其必要を感ずる也故に出世間的世間的の口實は遂に基督教を排斥するに價値なき者となる而かも其出世間的なる義は現世を厭ひ來世の生活を欲求するの義に非ずして唯進化の理により來世の企望を抱有し益現世の德行を貫行せしめんとする者なるをや換言せば吾人基督教徒として未來世を說く者現在の爲めに外ならざる也又勅語を以て極端なる國家主義と解し基督教を以て極端なる無差別の教とせは兩者の衝突免れざる可しと雖も上來記する如くんば其相反せざるを知る可き也或は兩者の主義相反せざる者とせば殊更に基督教布教の要なからんと辨する者あらん(博士は明に之を言へり)之れ甚だしき迷妄の見敢て再び論ずるの要なしそれ勅語は敢て宗教に非ず宗教は歸する所勅語の精神を完行せしめんとする者也敢て　陛下は勅語を下して倫理學場裡に戰ひ宗教界裡に勝敗を決せんとするに非ず博士の所謂各人普通の實踐躬行す可き大道を文章にせるもの故に『之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ』と云ふ所以にして其宗教の無神凡神多神一神たるとを問はず倫理說の實利巧利快樂直覺主義たるとを問はず總て勅語に示

せるが如き人類普通に實踐す可き大道を説けるのみ若し勅語が忠孝主義倫理説なりとし忠孝的宗敎なりとせば今日哲學神學上の攻究を止めざる可からざる也又博士が『勅語の主意は國家主義にして耶蘇敎は非國家主義也若し非國家主義にして古今不變東西一貫ならば國家主義は其反對ならさるを得ず然るに吾人日本臣民は勅語の主意に從ひ共同愛國を期せざる可からざる者也果して然らば耶蘇敎の古今不變東西一貫は焉かある」と論斷せる何ぞ其三百代言的の口調に似たるの甚だしきや以て俗者を瞞す可きも苟も眼ある者を昧ますに足らさる也假之人は動物に非ず楠正成は人なり故に楠正成は動物に非ずと云ふ是れ形式論理上謬らさる可きも既に前提に於て虛妄なるを如何是れ實に博士の論法と一ならずや又博士が「耶蘇敎が毫も勅語に戻るが如き元素を有せざるとならば耶蘇敎徒は何故勅語の出てゝより以來種々なる不敬事件を演じ我邦人の國家的感情を害せしか」と吾人は之に對するに一例を以てせん即ち池沼堀溝等の汚水を見て水は濁れりとの歸結を得たりと喜ぶ論客也と又博士は「牧師は世の學者に就て學ぶ可きこと多きも世の學者は牧師より學ぶべきことなし」と云ふ素より牧師は敎育家若しくは學者に非ざる也故に之れなきは深く謹む可きに非ず又宗敎思想は不自由なる者なりと云ひ或は科學に抗抵する者なりと云ふ或者は然らん然れども今日自由派の敎義を見よ「吾人は速に宗敎と學術とは讐敵なりと迷へる妄想より全く醒めざる可からず此誤想は宗敎の偏屈に失し學術の餘り自慢に過ぎたるの結果なり」と云へるグラッドストーン氏の見と着々符號するものにして如此の見解豈吾自由派にのみ限らんや是等陳套の口實を以て基督敎を拒絕し得べけんや其他博士は非基督敎徒たる學者の言を引き來りて基督敎抗撃の材料とせるも是又一斑を以て全豹を評するの愚に陷らざらんや而して吾人は左に基督敎聖書中載する所と勅語とは如何に合するかを比較せんと欲するも本文及び解釋を掲ぐるの餘白なし唯讀者の參照に列記するのみ

『克ク忠ニ』に該當す可き者

羅馬書十三〇一ー七、提多書三〇一、彼得前書二〇十三ー十八、馬太福音書廿二〇十五ー廿二、馬可福音書十二〇十三ー十七、路加福音書廿〇廿一ー廿六、提摩太前書二〇一、以弗所書六〇五ー八、提多書二〇九、十、

『克ク孝ニ』に該當す可き者

馬太福音書十五〇三ー九、以弗所書六〇一ー三、哥羅西書三〇廿、提摩太前書五〇八、出埃及廿〇十二（耶蘇は此戒を引用して敎を布ける所馬太福音書十九〇十九、馬可福音書十〇十九、路加福音書十八〇廿）利未記十九〇三、箴言廿三〇廿二、申命記五〇十六

以上は唯是れ今日衝突の中點たる忠孝に關する言のみ登載せるもの吾人の捜索未だ疎漏を免れざる可きも兎に角基督敎中之を說けることを證して餘りあり

吾人は前號來斯く論じ來れども惡意を以て徹頭徹尾博士の意見を否認する者に非ず如此ことこれ今日我國多數の見解にして博士一人の言と見るは不可博士は唯此を明さまに言外せるを以て攻撃の燒點となりたるは眞に御氣の毒とや云はん御傷はしとや申さん故に博士の論を評せんとする者先つ心す可き也博士の見全然迷妄と云ふ可からず吾人は大に博士に感謝せざる可からざることありそは總て事物の發達進歩は平和なるの處に非ずして常に衝突中に胚胎すること歷史の明示する所なれば今日非基督徒の刺擊强ち排斥す可きに非ず却つて基督敎社會の奮勵心を惹起すること大なり博士が言へる如き傾向は從來基督敎社會に往々顯はれし所の弊害なりき今日以後の基督敎徒たる者大に戒愼す可き也而して博士の意蓋し是等の弊害を驅らんとの好意に出てたる可かりしに遂に基督敎排斥論に陷りけるは博士の爲めに惜まざるを得ざる也

兎に角國粹家と基督敎徒との衝突は豈今日に始まりしに非ず其淵源する所は遠く傳來の當時に在りき然れども世に黑白の二善あるなく表裏の二眞理あるなし必ず其一は眞にして他の一は僞ならざる可からず而して衝突は能く是等の黑白眞理非眞理を分析開發して遺す所

なし是故に吾人は今日にして平和を得んより寧ろ衝突の益急激にして迫害の益激發せんとを望む者、言ふ所以は正者必興、歪者必滅は自然の理數殉教者（マーテイル）一滴の鮮血は以て千萬人の改悔に値す可ければ也と大書して筆を擱しぬ。

《完了》

精神は精神を整理す

岩井正次郎

吾人の精神は吾人の精神を整理し、教導する無上の資格を有するものなり。世人或は云ふ萬靈の蠢々たる草木の芸々たる、皆是れ神の造る所にして悉く其管理に屬すと、然れとも余は未だ信ずる能はざるなり、其神ありと稱へたる者神に非ずして人なればなり、果して然らば神は人に因りて造られ否な人の意想に由りて立てられたる者なり、故に人の心を離れ特異靈妙の神ありと稱ふるは不可なり、釋迦は人を善に導かんが爲めに如來を造り、孔子は人を仁に導かんが爲めに堯舜を造ると云ふ、人間の德性を正則に發達せしめ高尙優美ならしめんとするには、必す先つ人間の德性を正則に發達し高尙優美となりたる羨望すべき地位を示すを要す、此地位佛敎にては極樂、耶蘇敎にては天國、神道にては高天原の如し、人間快樂の終極點にして而して、此地位に達したる者は皆神と云ふを得るなり、故に人たる者は此地位を知覺し到達するの資格を有す。見よ神は吾人の造る所なるを、思へ神は吾人靈魂の發達したる美果なるを、然るに世人動もすれば神を以て天と名け、吾人の意思を左右し、吾人の言動を指揮するものなりと云ふ、果して然らは君を弑し人を殺し財を盜む之をして尙ほ神の指揮と云ふを得るか、神は全知全能完全無缺なりと豈斯の如き事あらんや、己れの及ばざる所を稱して神と唱へ天と呼ぶは是れ野蠻未開の事のみ。余已に人の精妙なる心を以て神なりと云ふ、之れに命令し之れを左右するもの他にあらざるや明なり。

人は萬物の靈長にして三才の最靈なりと雖ども、其幼

時敎育の如何に因り、賢愚相分れ、敏庸相別る、或は不時の災に由り全く不具者となり、其心も又狂亂する者あり、然れども之れ天の命にあらずして自から招きたる罰なり、然り而して是等の災を以て天の命令なりと云ふは、謬見の甚だしきものにして、世俗の所謂「天罰如何でのがすべき天網恢恢疎不漏」等の語より胚胎せしものならん、余は信ず天は余を罰せざるを否な余の心を離れ余の上に位して余を敎導及整理すると云ふ天或は神なるものあらざるを。吾人瘋癲白癡となるは其の因吾人に有りしが故なり、決して天命及び神罰にあらざるなり、惟ふに彼の謠曲に於て「今日は如何なる悪日ぞ重ね重ねの不幸の數々神も佛もなき世か」など云ふは素より戯本小説の語にして深く咎るに足らずと云へども、暫時茲に借りて難せん、悪日なるに非ず、神佛なきに非らず、己れに不幸を招くの因ありて災厄を崇りたるものにして、唯己れを責むれば即ち足る、古語に罪人縛者を悪むと、世人の不幸を喞ちて天を恨むもの蓋し是と異ならず、己れに出て丶己れに歸る何の怨む所かある。

人或は云ふ父は子を造れりと、余以爲へらく父母子を造りたるに非ず子となる者一つの因縁ありて以て父母の胎に宿し而して生れたるなり、若し父母の造りたる子なりと云はゞ蓋し誤謬を免れず、何となれば父母にして自由に子を造りたりと云はんか、之れを傷け、之れを害ひ、之れを殺すを得るなり、然れども法律及ひ道德は斯の如きを許さゝるなり、今一歩を讓り父母子を求めて造りたりと假定せんか、子たる者父母に迫り美衣を貪り佳食を求て我儘勝手を云ふの權利あるなり「古諺に不孝兒あり父母之れを戒めて頗る酷なり兒遂に父母に向て曰く何故此不孝兒を造るや父母曰く汝來りて我胎に宿したるのみ我求めて造らんや兒言の出つる所を知らず後孝を盡すと云ふ」見よ父子の間に於て一種劃然たる區別なる者常に存するを、子成人の時に至つては父母と云へども子を壓制する事なきのみならず、却て是れに從ふの傾向あるは蓋し子たる者は自から社會に生るゝの因を有し而して母胎を借りて現出

したるのみなれば、父母と云へども妄りに之れを覊束するを得さるなり。夫れ如斯人間は自生し、自活し、決して妄りに他物の制裁を受け若くは命令を受くる事あるなし。

近時文明開化の時代に於て、漸くにして知識の進歩は、天刑、神罰、の謬見を脱し禍福門なし唯人の招く所、天は自から助くる人を助く、などの趣旨を論ずる者あるに至る、是れ少しく自尊の基を養ひ他に神或は天などの頼むべからざるを説くものにして、殊更に己より上位なる命令指揮者を己れの心以外に求むるの野習陋慣を除くに足らんか。心さへ實の道に叶ひなは祈らすとても神やまもらん

近頃往復文に御安心を御安神と書くは、大に余の心を得たり、吾人の雄抜高尚正直なる心は即ち神なればなり、果して然らば吾人は神を稱ふる能はざるか、神を崇拜する能はざるか、曰く否な、曰く否な、神は之れを立つるを要す、神は之れを崇拜するを要するなり。而して之れを立て之れを崇拜するを必要とする理由に至ては、全然別問題に屬するを以て今之れを詳論せず。

以上に由り讀者は業已に吾人の精神を離れ之れを關係外に天或は神と稱ふる吾人精神の制裁者なき事を知了せられしならん、語に曰へり『人は成敗得失を使命し己れの意に從はしむるの權なし然れども勉强して止まざれば天賞として成就の賜を受く可し』之れ口を天に借ると云へども、自業自得を表白したるものにして、他力(所謂天力或は神力)に依頼すべからざるを示したるものなり。吾人が吾人の德性を最も高尚に發達し最も優美に成長せしむるを得たる時已に神なり佛なり、故に佛敎に於て正覺とて正に覺りたるの時を云ふなり、又古來人の死するを成佛(佛に成る)と云ふもの佛徒の死するに專用したる者にして故ありと云ふ可し、然らは即ち諸士は諸士の心を以て、神となり、佛となり、惡魔となり、鬼人となるを得るなり何ぞ他物の命令保護を待んや。以上は余か世人の所謂我心を整理するは我心以外に在る天帝若しくはゴットと稱する者なりその迷心を駁破するに過きす。

前號來井上博士の論文を掲載し來りしが這回博士より「該篇は豫想外の長文となり諸雜誌の紙幅を塡充すると甚しく他人の言論の路を杜絶するの恐れあるを以て尚ほまだ一半を終へざれども別に全篇を纒め一册子となして世に公にするに至る可ければ以下は諸雜誌に投載せざるとに決せり」と申來りたれば掲載方を見合せたり

本欄掲載の論文に關し種々なる質疑を申込む人あれども本欄及び投書欄掲載の文には記者其責に任せざるとなれば右樣承知せられんとを乞ふ

傳記

處士大宰春臺

理財學士　林　和太郎

吾此頃我國經濟學者の傳を物せんとの微志あり、數々の著書を閲する中に春臺先生の經濟錄及紫芝園漫筆に行き當りぬ、今其書を閲するに炯々たる先生の眼光凛乎たる先生の風采面當(まのあたり)にちらつきて今日の如き俗臭紛々德風頽廢の時に當り此の人ありせば如何ならんと、そぞろに慕はしくなりければ遂に先生の性行概略を世に紹介せんとは決したり、

先生人となり嚴毅端正敢て俗に阿らず權貴に屈せず、挺然己の正しとする所を信し己の信する所を述へて一世を睥睨せり、其世の學者が徒らに程朱の心學に醉ひて經術治道に暗きを罵るや筆端風生能く千載の下腐儒を起たしむるに定る、又先生は徂徠の一家言を成すを聞きて之に師事したるとあれとも、中々に其步趨に從はざるのみか大に其性行に不滿を抱き口を極めて攻擊を始めさすが剛愎の徂徠を閉口せしめたるとあり、即ち曰く惟其行其知る所に及はず殆んど所謂行掩はざるものか、蓋し先生の志は進取にあり、故に其人を取るに才を以てして德行を以てせず、二三門生亦其說を習聞し德行を屑とせず唯文學是れ稱す、是を以て徂徠の門跡弛の士多し、其才を成すや特に文人に過ぎざるのみ、其敎然り、外人既に是を以て先生を譏る、純亦曾て竊に先生に滿たず、此れ先生の純を雞肋視する所以なり、書に曰く非知之艱、行之惟艱先生ありと、嗟千

雜錄

○萬國宗教大會に就て佛教有志家の告白

這回米國に開設せらるゝ萬國宗教大會に就て佛教家より左の如く申來りたれば全文を掲載して讀者に紹介す

吾人は佛教の現勢に鑑み將來に偉大の計畫を要すへきを察し本年米國シカゴ府に開設せらる可き萬國宗教大會議と日本の佛教とは重要なる關係ある所以を陳述して各宗協會へ申告せり此際各地方有志の諸君に告白して吾人の意見に贊成を乞はんか爲め「宗教」を假りて之を茲に公にす　（首唱者）

萬國宗教大會議に就て各宗協會に望む

本年米國シカゴ府に於て開設せらるへき万國宗教大會議に向て日本佛教代表者を派遣すへきの議は昨年夏期の各宗協會定期總會に提出せられたるも不幸にして協會の否決する所となり其后各宗各派の中一個人の資格を以て臨席せんとを欲するの有志者ありて私かに其計畫を試むるものなきにあらずと雖とも已に一旦各宗協會に於て否決せられたるの故を以て自然運動上に活氣を減殺し未た一人として渡米の方針を確定したるものあらす然るに世界諸種の宗教者を一堂に會合し各異宗教の比較研究を企つるか如きは固と容易の業にあらす從て其結果も亦た尠少にあらさるへし而して今此大會議の目的とする所を見るに大要左の如し

第一　世界諸大宗教の代表者を招集して古來未曾有の會議を開く事、第二　世人をして諸宗教か通有せる眞理の重要なる者は何なりや又幾何ありやを知らしむる事、第三　冷淡の念を抱くことなく又形式上の一致を爲すとなく親話懇談相互の情意を斟酌して以て異宗教徒間に同胞友愛の情誼を厚深ならしむる事、第四　達辯の人をして各宗教か教ゆる所の緊要特色なる眞理を演述せしむる事、第五　有神論の動す可らさる論據を示し不生不死の理躰を信仰するの理由を明にして物質的哲學に反對する勢力を一致せしめ強固ならしむる事、第六　婆羅門教、佛陀教、孔孟教、波斯教、回々教、猶太教、基督教及ひ其他の宗教を代表する學者をして各宗教か其の人民の文學、技藝、商業、政躰、及家庭社交の生活に及せる精神上の効果等を充分精密に述へしむる事、第七　各宗教か如何なる光明を與へ又他宗教に與へ得る乎

を査究する事、第八　地球上首要の國民間に於ける宗敎の現狀を精密に確實に調査して之を記錄に上せ以て永久の保存を期する事、第九　宗敎か現時の大問題殊に節慾勞働敎育貧富等に關せる重要なる質問に如何なる光明を放射す可き乎を究明する事、第十　万國間の平和を永久に維持せんか爲地球上各國民をして益々友愛の情誼を結はしむる事

余輩は代表者派遣に就ては頗る困難なる事情の存するものあるを知らさるにあらす然りと雖とも此空前絕後の機會に遭遇しなから深く其利害を極めすして唯た困難の一事を以て輙ち之を否决するか如きは余輩佛敎の爲に深く之を悲まさるを得さるなり

佛敎は數千百年の間東洋の一隅に僻在して未た曾て泰西の文明世界に知らるゝに至らす偶々東西交通の便開けてより錫蘭に現存せる小乘の佛敎のみは漸次泰西人の注意を惹くに至りたるも日本に傳來せる大乘の佛敎に至ては歐米人の耳朶にたも達すると殆んと稀なり今や万國宗敎大會議開設の擧に遭ふ是れ吾徒か一擧して万國の學者宗敎者に佛陀の妙音を傳へ佛敎特占の眞理を世界に發表するの機會にあらすして何そや我國の佛者敎たるもの豈に輕々の看を爲すを得へけんや

從來我邦人の業を外國に企つるもの大概失敗を免かれす遂に有爲の士有志の輩をして事に外國交涉の業に從ふに躊躇せしむるに至る佛敎者の此大會議に於けるも亦た多少此種の恐怖を免かれさるもの丶如しと雖とも彼と此とは事情の自から同からさるものあり困難は則ち困難なりと雖とも若し其道を以てせは未た必すしも之を除くに難からす盍んそ羹に懲りて膾を吹き自から怯れて進ます或は箸を下すの勞に懶く怠慢にして爲さゝるか如き迂愚を學ふ可けんや縱令滿堂の聽衆を感服せしむるの辯舌一世を聳動するの文章あるも其大會議場一回の演說一篇の論文能く功を一時に奏し道を萬國に傳ふるか如きは終に望む可らさる事勿論なりと雖とも請ふ試みに外敎徒か爲す所に鑑みよ彼徒か數十年間幾千萬金を抛て學校を興し病院を開き或は赤誠を表して感情に訴へ或は眞理を說て知識に質し其人心を籠絡するの計に於て纎毫も遺忘する所なし而して其今日に現はれたる結果を見れは其成績果して幾千萬金の失費を償ふものありや幾十年間の功勞に酬ふるものありや斷として之なきなり然り然りと雖とも有形上に於ては其結果の微々として見るに足らさるにも係はらす實際に於ては隱然として社會の下層に雌伏する一大潛勢力

を形成したるは事實なり今や又吾佛敎か宗敎大會議に一二の代表者を派遣して遽かに其功を收めんとを期するか如きは到底望外の事に屬す又宗敎其物の性質上より云へは斯の如き急劇の變化を期すへきものにあらす又之あるを欲せさるなり要は唯、今に於て他時異日大經綸を行ひ大結果を收むるの地步を爲すに外ならさるなり今之時は消極の方針に依りて嬰守すへきの時にあらす宜しく積極の手段に依りて運動すへきの時なり即ち退て外敎の侵入を防禦するに汲々たらんよりは寧ろ自ら進んで佛敎の弘宣を計畫せさる可らさるなり若し今日の如く保守的に傾斜するの意向を以て今後十年間を經過し去らん歟佛敎の前途甚た憂ふへきものあるを思はさる可らす而して此會議は佛敎に外發の機會と手段を與ふ何そ奮起一番大に佛敎擴張の奇策を試みさる

優勝劣敗は社會の通勢なり適者生存は人生の通規なり社會は此の通勢の下に起滅し人生は此通規の下に存亡す是に於て乎人文の進捗共に生存競爭の勢運を馴致し今や全世界擧て人種競爭の大旋風裏に埋沒し去らる而して其所謂人種競爭なるもの果して幾人種の間に行はるへき乎曰く白晳人種と黃色人種の間即ち西歐人種と東洋人種の競爭にして正に是れ歐亞兩國民の成敗存亡を決すへきの秋なり而して其競爭の一部なる宗敎に就て之を觀る時は世界各種の宗敎中眞理の戰塲に龍嘯虎號すへき勇者は佛敎耶蘇敎及ひ「マホメツト」敎の三大敎あるのみ而して三大敎中「マホメツト」敎は固と耶蘇敎と其源を一にして其派を異にし其主義を齊しくして其手段を變したるもの宗敎の大原理上よりして之を見る時は全く其性質組織、主義、方便を異にするものは則ち佛敎と耶蘇敎のみ然らは則ち人種の成敗は黃白の兩種に係り宗敎の存亡は佛耶の兩敎に關す彼の大會議趣意書第六條に有神論の動かす可からさる論據を示し云云と云へるもの是れ佛者の宜く殊に注意すへきの項なり願ふに佛敎者諸君は深く三寶に皈し厚く正法を信するの人にして之れを直言すれは佛敎を以て世界最上の宗敎なりと信するの人なり即ち佛敎を以て眞實の敎法と爲し他敎を以て邪妄の敎法と爲すの人なり然らは則ち此大會議は諸君の爲には眞理を發表し邪義を排斥するの好機會を與ふる者、眞理の論戰に志あるの諸君何そ奮て平生信する所の敎義を布演して敵の膽氣を奪ふの壯擧に出てさる

頃日傳ふる所に依れは一二の高僧將さに自ら身を挺して一個人の資格を以て此大會議に臨まんとする者あり

と云へり余輩は此大奮發此大美擧を賛成すると同時に佛敎の爲に大に各宗協會々員諸君の高見を叩かんと欲するものあり他なし協會は已に代表者派遣の事を否決す而して若し果して一個人として之に臨席するの人あらは協會は尙ほ之を不問に附し去り彼は一個人の資格を以て之に臨めり協會固と關せすと謂ふを得へきや否や若し此個人有志家にして同會に臨まん乎同會は認めて以て日本佛敎の代表者なりとして之を歡迎するや必せり縱令我は一個人なり代表者にあらすと謂ふとも大會議は聽て以て謙遜の辭と爲し一個半個たりとも苟も日本僧侶の名稱を帶ふる以上は其人の一言一行は以て悉く日本佛敎の主義なりとして之を記錄に留め之を雜誌に刊行して以て大に全世界に發布すへし此時に至りて此一個人の言ふ所行ふ所にして萬々一にも本邦各宗各派の希望に副はさる所あるを發見するも之を取消すと能はす亦訂正する事能はす一個人の爲に佛敎全躰に取りて不利益なる報告を爲し或は利益ある報告を遺るゝか如き事あらは諸君は抑も之を如何せんと欲する乎各宗協會縱令特に代表者を派遣するを欲せさるも個人有志の自から奮つて得々此大會に臨む者あるに當て尙ほ冷々淡々猶ほ秦人の越人の肥瘠を見るが如くせんと欲する乎協會の主意目的よりするも又會員個々の資格よりするも各宗協會は遂に斯の如く對岸の火災視する能はす必や之に賛成の意を表し之に相當の力を假さゝるを得す各宗協會の地位已に斯の如し今や果して個人有志の奮つて事に當る者ありとせは協會は之に向て相當の希望なかる可けんや即ち其一個人たると代表者たるとを問はす日本の佛敎家に依て發表せられたる佛敎の旨義は是れ即ち日本の佛敎なりと知らは何ぞ此人の爲に大會に發表し若くは報告すへき必須の材料を備へて以て之を公にすへき意見を托せさる何そ又此人に向て大會議場臨機の處置を施し得へき權利を與へさる若し協會の目的にして各宗協同して佛法の興隆を謀るに在りとせは此等の事業は協會の應さに爲すへきの事業なり且協會の規則中には非常の事故あるにあらされは協會は一切有形の業を企てさるの項あり今回大會議の擧は則ち千歲唯一遇の良期にして佛敎の爲には非常の大事なり余輩か臨時總會を開て今一應商議せられんとを要むる所以實に茲に在り世間の識者中佛敎者が此大會議に對して甚た冷淡なるを見て窃に訝かるものあるは往々新聞雜誌の上に之を見る其甚しきに至ては佛敎徒か懇切なる招狀を受けなから斯の如く冷淡に過き去

るは大會議に對して禮を知らさるものなりと迄極言するに至る世間の俗論取るに足らすと謂はゝ余輩復た何をか言はんや唯佛教の爲に一滴の熱涙あるのみ

又聞くか如きは近頃米國より齎らしたる同會議の報告中同會々長の演説筆記に「此會を開設するに至りたるは一に基督教徒の盡力に基く者なりとして耶蘇教を稱揚したる言辭ありて爲に大に吾か各宗諸先輩の感情を傷け未た他事を問ふに遑あらすして先つ此一事を以て他宗教は耶蘇教の機關に利用せらるゝものなりと臆測したる人々も少からすと云へり余輩は寛容なる吾か佛教各派の大德中に斯る狭隘なる見識を懷抱せらるゝ人なきを信して疑はす寧ろ齊東野人の語と爲して毫も意に介せさるなり全躰感情の上よりして之を謂へは耶蘇教徒の發起に係り耶蘇教徒の會長たるへき此大會議に臨席するは多少意に慊如たる所なきにあらさるへしと雖とも苟くも其結果にして佛教に裨益する所あらん乎何そ其會の何人の開設に係り何人の會長たるを問ふの必用あらんや唯期する所は佛教遠大の利益にあり若し瑣々たる感情の爲に佛教前途の大計偉策を遺るゝか如きは斯道の爲に親切なる擧動と謂ふ可からず

以上列記する所の理由に依り余輩は玆に各宗管長に訴へて此重要なる問題の爲に殊に各宗協會の臨時總會議を開き今一應鄭寧細密の審査を遂け『第一　各宗協會は萬國宗教大會議に對して佛教の爲に如何なる計畫を爲さゝる可からさる乎、第二　現今日本宗教社會の實勢は果して那邊迄計畫運動するを許す可き乎、第三　右二項を稽査したる結果として今回の事は如何に處すへき哉』、を議定せられんことを希望す而して余輩は此總會議の一日も速かに開會せられんことを望む何となれは其決議の如何に由ては直ちに大會議場に發表すへき材料として少なくとも左の諸項目の研究を要し研究一了すれは之れか起草若くは反譯に從事せさる可からす然るに代表者出發已前僅々百數十日を餘すのみ今にして日子を徒了せは時に臨んで臍を噬むの悔あるを致し佛教は一敗地に塗るゝの不幸を見るに至らん若し果して然らんには佛教は啻に傳播の機會を海外に失ふのみならす其結果は耶蘇教徒に氣焔を與へて遂には内地の根據をも奪はるゝに至らん豈畏れて懼れさる可けんや今日の至要は時機を誤らさるに在り敢て各宗長者の一考を煩はす

大會議に向て特に發表すへき項目は概左の如くなるへし

第一　佛教之旨義(甲)佛教之原理(乙)佛教の唯心說と哲學上の唯心說との異同及其範圍の廣狹(丙)靈魂不死に關する一般の說明及證據(丁)輪廻(戊)因果之理法(巳)涅槃(庚)聖淨二門の辨

第二　佛教之歷史(甲)佛教の起原及沿革(乙)佛教東漸の槪略(丙)日本各宗の起原及沿革(丁)日本各宗開始當時の世態民情及風俗幷に新宗派の開始を促せし特別の情況(戊)王政時代幷に北條足利德川の各時代に於ける佛教上特殊の現象(巳)日本佛教盛衰史

第三　佛教之勢力(甲)佛教の感化力(乙)佛教の道德(丙)佛教旨義の敎育上に及ぼす効果(丁)佛教と日本の國体(戊)佛教と日本の國性(巳)佛教と日本文明の關係(庚)佛教と文學技藝、殖產工業等諸般の關係

第四　佛教之現狀(甲)南方の佛教(乙)北方の佛教(丙)支那、朝鮮、印度、暹羅、西藏、日本等諸國の現況(丁)佛陀伽耶摩訶菩提會、印度佛蹟興復會、海外宣教會、各宗協會、神智協會、其他諸教會の組織、目的、方針、運動、等諸般の報告(戊)英、米、獨佛其他各國の佛教現況、(巳)世界各國佛教徒の統計、人種職業生活、文明等の調査表

第五　佛教之將來(結論)

明治廿六年三月

主唱者　外山義文、佐藤茂信、堀內靜宇、伊達靈堅、岩堀智道、

贊成者　南條文雄、釋宗演、島地黙雷、在田彥龍、土宜法龍、蘆津實全、大內青巒、朝日琇宏、森永宗教、坂上宗詮、藤田祐眞、岡村學順、金子常全、越岡俊悃、丹靈源、松本順乘、淺井天祭、林彥明、茅根學順(位次不順)

○說教家の要

吾人曾て聞く、府下某校の敎師、常に生徒を導くに總て消極的の方針により、能く惡の爲す可からざるを諭す、幼童相率ゐて其の爲す可からざる處を試む、其の試む所の一言一行一として彼れ等の耳目を嬉ましめざるなく、遂に復た停む可からざるに至れりと、是れ豈獨り幼童に於てのみ然らんや。怖い物見たさとは穿ち得たるの名言也、人の見る勿れ、爲す勿れと云ふ所、却つて見聞し、言行に顯はし度きは人情也、ヨシ人情然らざるも惡事惡行の見聞屢〻屢〻ならば、遂に邪惡も邪惡とせざるに至るは自然の傾向也。故に世の勸善懲惡を以て其の任とする僧侶、牧師、傳道師の如き、先つ最も注意す可きは即ち這邊に在り。人あり吾人に說敎の要を問ふ、吾人應ふるに積極的なる可しとの一言を以てして既に其の要を盡したりきと信ぜり。然るに今の敎を施き法を說く者、多くは消極的に流れ、其の餘弊延いて日本今日の風俗壞亂、道德衰頽遂に復た濟ふ可からざるに至る。特に是れ等の言行、佛者若しくは佛者一味の者に於て多きを見る、若し吾人の言を疑はゞ佛敎雜誌に就いて見よ、人情小說と云ひ、懲惡的漫筆と稱して掲ぐる所、汚穢實に見るに忍びざるものあり、其の社會の思想を代表する雜誌に於いて既に然り、其の他は敢て言ふに足らざる而已。

○宗教界の紛擾政治家の仲裁

こはこれ當時佛敎界に於ける一顯象なり、其の內務大臣井上馨君の仲裁は、恰も慈母の赤子に對するが如し、而して紛々擾々猶停まず、遂に宗敎家は政治家の厄介物に成り了せざる乎、俗界の敎導を要するに至らざる乎。そは讀賣の報ずる左の一項也

曰く「此程井上內務大臣は曹洞能越兩貫主並に事務取扱員等を其官邸に招き一個人の資格を以て懇に誠諭を加へ方今吾邦の形勢上佛敎を以て國家の政化を翼贊せざる可からざる時なれば双方協議を整へ宗內の平和を謀るこそ利益なる可し此際倘ほ之を聞き入れざる時は政府は其宗門自身の處置に任せ身滅に至るまで打捨て置く可しとの事を述べたれば一同大に慚愧の思をなし爾來芝愛宕下青松寺に於て相談會を開き協議中なるか未だ充分和解の運に至らざる由」と、是に於て始めて知る、佛敎の國敎となりて政府の庇蔭を得んとするの理由を、然れども是れ果して非乎。

○日清の比較

一西人あり、清國北京より書を倫敦タイムスに寄せて曰く、旅行して朝鮮より清國に入れば、何人も第一に見る所の者は鄙吝なる、堅固に團結せる、親怩し難き、嫌悪す可き人種即ち頑固にも自尊の精神に富み、嚴格なる宗敎及び道德上の訓誨を尊守し、一も二もなく海外の文物に抵抗し、拒絕するの風あり。日本を去りて清國を踏むの旅客は、何人も樂土より苦界に移り、淨土より穢土に遷り、文明の鄕より野蠻の野に轉じ、厚情火の如く暖かなる所より冷情氷の如く寒かなるの處に到るの感懷を生す可し。予は此の清人の氣質と習慣を以て、之れと相反する日本人の外物採取に巧みなる性質に勝れる者となすを得るや否、未だ確然裁斷する能はずと雖とも、寧ろ前者を以て優れりとせんと云々。タイムス記者其の末に附言して曰く、日清兩國の民、比隣兩々相競爭し、日人鋭敏伶俐機智に富むと雖とも、自尊自制の性質を有する清人の方、寧ろ一日の長たりと謂ふ可し云々。是れ等の言悉く正鵠を得るに非ずと雖とも、亦吾が同胞の一顧に値せずとなさずと」日本新聞の記したる所、最も宗敎家の注意す可き所ならん。

近刊雜誌

東京市本鄕區六丁目五番地哲學雜誌社發行

哲學雜誌

これを好まぬ者としては最も馬鹿らしく最も頭痛の種子たるはそれ哲學

なりこれを好める者としては最も面白く最も興味多きはそれ哲學なり、本誌は帝國大學哲學會の機關として發行せるものにて現今我邦に於ける雜誌尠きに非ざれどもその科の哲學に關するものに至りては未だ見る可きも多しとなさず唯獨り本誌は此の學徒の指針となり教導者たるに足る可けんその第八卷七十三號載する所吳醫學士は精神機能の衰弱及び發育制止、本元の精神病症よりして特に放火の傾向多きとは疑ふ可からずと論じ英國詩人の天地山川に對する觀念論は夏目金之助氏の手になり井上博士は例の筆法を以て田口卯吉氏が史海第十五、十六號所揭の「最澄及び空海論」を駁せる所瑜伽論等を讀みて彌勒菩薩と友たるが如く或時は釋迦牟尼佛と交りて法華涅槃の道を聞くが如く或時は彌次馬連爛醉漢の爭論を聞くが如し大西文學士の堅固なる腦髓と該博なる見識とを以て畫き出せるソクラス前の希臘哲學史は考證の確實なる批判の周到なる未だ曾て我邦に見ざる所その他ドクトル、ウード氏の詩伯テニソン傳。雜錄のショツペンハワー氏の女子論の如きは未だ偏見を免れずと雖とも女子崇拜の歐洲人にして彼の論を爲す正に一讀の價値ある可し。

眞理

東京神田三崎町三丁目
一番地世光社發行

眞理は宗教雜誌中の哲學雜誌にしてその第四拾一號には丸山通一氏の雄健なる筆に出てし「厭世哲學の論據」は三ケ章に分論し說き去り說き來りて厭世哲學は唯世界の消極面を視察して專ら醜汚痛苦を唱ふる者と論結しスピンチル氏の「佛陀出世後の印度教」キリストリープ氏の「無前提智識論」は前號を承けて實在を三項に分ち一思索は形式原理なり二思索は法則正しきものなり三思索及び實在を論ぜり其の他「有利の原因」(樫田鎚一郎氏)「心情の腦養」(ボルヤーン氏)及び丸山氏の日本現今倫理文學一斑の批評は周到なりとも評す可し

六合雜誌

東京市本鄉區東竹町
卅五番地警醒社發行

その第百四十七號には「衝突恐るゝに足らず」と題し衝突は進步の一側面にして決して恐るゝに足らず强いて衝突を釀しその機會に乘じ野心を逞ふせんとするが如きは素より惡むべしと雖も人文進步に伴ふて自然に生じ來るの衝突に至りては吾人甘んじて之を忍ばざる可からずとて今日基督教主義と非基督教主義との衝突は或る教育家と或る宗教家との衝突に外ならず基督教が國家的ならずして人類的なる所こそ却つて該教が益全世界に歡迎せらるゝ所以にて敢へて衝突恐るゝに足らずと論結せるは橫井時雄氏にして「國家主義と個人の博愛」は內村達三郎氏の手になりものにて時節柄一讀の價値ある可く「文學管見」は坪內文學士の演說筆記にして文學熱の狂盛なる今日而かも早稻田文學と共に其の名を忘れられざる坪內氏の口より出てたるものなれば文學家たるもの一讀せればならぬと云ふ可き也其の他「世界唯一神教の發達」(デフオレスト)「國詩論」「磯貝雲峯」「日本獨立教會創立の私議に就きて」(デヴイス)等を載せたり

自由基督教

東京市麴町區飯田町四丁目
五番地自由基督教社發行

自由基督教は日本宇宙神教々會の機關にして合理的神學及び哲學の辯護者として基督教の自由討究を許し迷信を排斥するを以て其任とするとのことその第二卷第七號載する所社說に井上博士の說を許し併せて俗論を駁し寄書にはシー、イー、ライス氏の「愛の理」雜錄には「買ふ可からざる人」(スマイルス氏)「傳道の神經」「經濟上より慈善を論ず」(土子文學士)傳紀「史家マコーレーの傳」(中野正武)其他說教の菜片々教報諸雜誌摘要等を載せたり

青年會月報

東京神田區仲猿樂町七番地
東京基督教徒青年會發行

社會の勢力は常に其の表面に在らずして裏面に存するなり老成人に在ら

ずして青年者の手中に在り故に今日社會改良を口にし道德頽敗を慨する者先つ立つて青年の境遇を觀察するに如くはなし本誌は正にその基督教徒中の青年を代表する者世の識者就て得る所尠からざらん同誌第五號には社說「青年會と共勵會の別を論ず」（ゼ、チ、スウイフト氏）論說「社會と宗教界に於けるピーチヤル」（松介石氏）「詩人管見」（戸田生）等を載すその特に注意を要す可きは會報東西大勢一班等の欄內に在る可し

早稻田文學

牛込早稻田東京專門學校發行

第三十六號（三月廿五日發兌）に坪內逍遙氏の「美辭論稿第八情の文―（第一）情緒」はサリー氏の分類を基として感情中の情欲を甲乙丙に分ち丙の再現的情緒を更に細分して第一種形而下情の本體を同情とし第二種形而上情のうち（第一）理の感情は主に智の文の素となり（第二）美の感情は專ら情の文の素となり（第三）道の感情は主に意の文の素となる即ちこれ文章の要素なりと詳論せるも前後に連續する者なれば未だ全く其の旨趣奈何を知る可からず其の他文界現象雜錄名著梗概等例により斬新奇拔高妙優美なる材料決して少からず又附錄には三島中洲氏の莊子畠山健氏の萬葉集釋義あり逍遙氏が我が國青年文學界の指針たらんとするの意氣見る可し

文學界

東京麴町區下六番町六番地
女學雜誌社發行

第三號には「醉孤洞謾言」（禿木）「觀音夢」（天爲居士）「蝸牛」（無聲）「女文傑イリチツト」（棲月）「雪の日、小說」（一葉女）「琵琶法師、悲曲」（古藤庵）附錄「女歌仙家集」（大和田建樹氏）等主に若者の手に成りし如し其の若きが故に文亦若し文亦若きが故に勇壯なり活潑なりと雖とも着實ならず穩審なり兎に角一雨毎に青年有爲多望の文學家を出す今後の文學界大に見る可きなりその他本紙には彙報群書一斑等あり

女學雜誌改題

同所發行

白表女學雜誌は從來男性雜誌として女學雜誌より岐れ出てたるものなりき然るに來る八日を期し『評論』と改題して打て出づると其の爲す所果して如何吾人未だ之を知らずと雖とも記者は云へり『年來の主義精神を以て社會政治道德教育のことを評論せんとす』云々又『吾黨は政治上革新の根本を穿ち社會的改良の本道に歸り人心の秘奧と世路の歸趣とに則りて堂々論明する所あらん』と抱負の大なる斯くの如しと雖とも抱負の大なるもの必ずしも實際大なるものに非ず然れども記者平素の機敏と識見とを以てせば或は此の抱負虛僞の抱負たらざる可し兎に角早く四月八日の迎へられんことを望むなり。

彙報

◉**救療會**　本鄉下谷兩區に於ける基督教會の有志者協同して救療會なるものを興し其治療委員長に醫學士高田耕安氏理事委員長に横井時雄氏を推し貧患者を救療するに盡力せりと云ふ、若し慈善家にしてこの會に入會せんとし金五圓を寄附する者には貧困なる患者に施療券を與へ該會診察所に紹介するの特權を有するを得と云ふ

◉**第一敎會**　ユニテリアン第一協會にては去月二十六日大會を開き牧師、幹事及び其他の諸役員を推撰せりと云ふ同會には從來牧師等あらざりしに今回特に之を得たれば同會の前途見る可きあらん

◉**米國に於けるユニテリアンの勢力**　數週前米國キヤリフオルニヤ州に於ける牧師五名ユニテリアン敎に轉宗し中四名はユ敎の牧

さして依然其任に當り他の一名は從來己の率ゐし教會を舉げて轉宗せり其人は彼の有名なる故の監督(ビショップ)イー、オー、ヘブン氏の實子にしてシラキユーズ、ソヂスト大學の委員たるセオドル、ヘブン氏なり此事に關し他の有名なる牧師言あり曰く斯る出來事は全く西方諸州に於けるユニテリアン教の盛なる所以也と、又オハイオ州官立大學校長博士スコツト氏は從來メソヂスト教會員なりしが這回退會せんことを要求し其理由として唯曰く余輩はユニテリアン教に同意を表するに過ぎずと、チカゴ市の博士タムス氏の言によればメソヂスト教師中少くも百名以上はユニテリアン教に連合せんことを希望し居れば彼等の轉宗も亦近きに在らんとニユーヨルクサン(新聞)は記せり

◉藥研堀教會紀念會　同教會は昨年三月十日日本橋區藥研堀に創設せられたるものにして閱月未だ多からざるも爾來會員次第に增加し基礎も漸々鞏固に成り來りたるは世人の夙に知る所なるが去月十日は一週年に該當するを以て紀念會を開く筈なりしも折しも意外の故障ありたるが爲め同十五日點燈刻より改めて盛大なる祝筵を同區日本橋俱樂部に擧行せり來會者は會員の外三十三名定刻に至りて前川太郎氏先づ嚴肅なる禮拜の式を行ひ次て前理事賓田剛橋氏其任期間に於ける諸般の報告に兼て摯實なる演說あり終て會員信夫淳平次で同横山富次郎其の他數氏の祝詞演說あり前川太郎氏は既往に對する所感及び將來の決心を演述し、最後に同氏再び感謝の祈禱を捧げて玆に紀年會舉典の式を終はりぬ、夫より數番の餘興あり、皆斬新なる趣向にして冠して文學的遊戲といふ淸快潔樂其散會を告けしは將に十一時、(通信)

◉東京コンフエレンスの役員改撰　東京に在留の外國宣教師諸氏が組織せる東京コンフエレンスにては此の頃其の役員を改撰し組合教會の博士ヂ、シー、グリイン氏を會長にユニテリアン教のウイリアム、アイ、ローレンス氏を副會長にジー、ダブリユー、タフト氏を書記にダブリユ、ゼー、ホワイト氏を會計に普及福音のマツクス、クリストリーブ氏及びジーイー、ヂーンスト、ピ、ミ、デピソンの三氏を評議員に舉けたりと聞く

◉協議俱樂部　は在東京基督教徒たる有志者を以て組織し其趣意は我國の一大勢力たる基督教徒の一大團結を圖り相互の懇親を結び凡そ社會に對する施設を講ずるに在りて井深岩本原田綱島松村木村其他數名の主唱にかゝり府下に於て知名の基督教徒及び牧師等は殆ど其の會員たり會場は京橋區日吉町七番地なり但地方在住の同教徒にして會員たらんとする者は會員二名以上の紹介を要する規定なりと

◉唯一館建築　唯一館は從來京橋區加賀町八番地に設けありしに追々隆盛に趣くに從ひ狹隘を告げしを以て今回新に芝公園外芝園橋畔に建築し來十月移轉するの運びなり又同時にユニテリアン第一協會及びユニテリアン弘道會も同構内に移すことに確定せり

◉東京基督教青年會館　昨年來三萬餘圓の豫算にて建築に取掛られたる神田區美土代町の東京基督教青年會館は工事次第に進み去月廿三日午后二時より定礎式を執行せられたりと云ふ

◉實行教管長渡米の準備　本年八月廿五日より同九月三日迄十日間米國シカゴに開會すべき宗教大會議の評議員に撰まれたる神道實行教管長柴田禮一氏は愈々渡米の決心にて此よしを信徒に語りたるに何れも喜んで多少の金を出し既に三千圓計りの醵金を得たりと云ふ

◉米國ユニテリアン同盟會年報　中左の一節あり今玆に譯載す

本會(米國ユニテリアン同盟會)の年報を閱するに當て第一人をして一種

特別なる感覺を起こさしむるものは、本會聯合者の名簿なりとす誰れしも吾人の諸教會は是非ともユニテリアン教會と稱ふるものならんとの推測を下すは必然なるへしと雖も此の一事に限り全く普通一般の原則と異なれり勿論四百五十六教會の異種異樣の名目を盡く玆に列擧するは時と紙面とを消費するの恐れあるを以て余は只だ本會報告中其の名簿の第一頁を閲見するに五十四教會の名を記載するに當り十九の異名を以てせり、例之は、第一ユニテリアン協會、組合ユニテリアン協會自由協會人民教會凡べての精靈の教會、第一寺院第一教會、ユニテリアン聯合會第一組合吾人の父の教會キリスト教會第一獨立會獨立組合會自由組合會自由キリスト教會獨立キリスト教會第三宗教會其他は各地名を冠するもあり又た創立者或は有力家の名義を冠するもあり、例之はボストン第一教會ドオチエスター第一寺院チャーレストン街ハーヴァド教會、及びホースユニテリアン組合教會等の如きもの是れなり

其の他の頁に在ては猶ほ更らに異種の名義を發見すべしと雖も前條第一頁を見れば如何に吾人の同盟は自由を尊重するかを窺ひ知るに足るべし今日より六十有餘年前、米國一般獨立の氣風盛んなるに及んでや何れも其の潮勢に隨伴せしものにして彼の獨立教會又は獨立組合教會の如きは、其の當時に在て發生せし諸教會と知るへし、而してボストン市のキングスチヤペルと稱する監督教會の如きは百年前已にユニテリアンの運動に同盟し熱心に自主自由を保護せり云々、

特別廣告

日本現今之基督教
并に將來之基督教

金森通倫氏著

右は曾て金森氏が決然從來の耶蘇教内に行はるゝ處の迷信を覺破せん爲め著述せられしものにて當時基督教徒社界を警醒せし新鮮の著述なり今般本會發行の宗教を六ヶ月間以上御購讀被成候御仁へ右金森氏の著書一部づゝ無代價にて進呈可仕候間陸續御注文の程本願上候也

禮拜提要

美麗寸珍本　二百卅ページ
正價　金十五錢
特別美製本　金廿五錢

敬宇中村先生本書ニ序シテ曰クこの書宗派に偏らず國土に隔限せず宇宙唯一の神を禮拜祈禱することに關し古來各國聖哲の精言要語を纂輯し以て世の采擇者に供せんとす云々ト若シ眞心ニ祈禱禮拜シ以テ身心國家ノ福祉安寧ヲ求メント欲スルノ人アランニハ特ニ坐右ニ欠クベカラザルノ一書ナリ

宗教發行所　東京市京橋區加賀町八番地
日本ユニテリアン弘道會

明治廿六年四月十八日印刷
全　年四月二十日出版

定價二十五錢

發行兼印刷人　前川太郎
編輯人　神田佐一郎

發行所　東京京橋區加賀町八番地
日本ゆにてりあん弘道會

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
秀英舍

宗教定價表

一冊		六錢
六冊	（半年分）	三十錢
十二冊	（一年分）	五十錢

凡べて郵税を要せず

廣告料	
一行五號活字廿四字詰	一頁六十二行
一行以上	一回八錢

（注意）

送本幷ニ廣告料ノ代金御拂込ノ節郵券代用ハ御斷ハリ申上候不得止地方ハ五厘券一割増ノ了
郵便爲替ハ東京芝口郵便局ヘ向ケユニテリアン弘道會宛振込ノ了
前金切レタル節ハ包紙ヲ朱書キニ致シ置候間早速御送金願上候
送本幷ニ廣告共一切前金ニテ申受候事本誌幷ニ廣告